المملكة العربية السعودية

1253

وزارة الشؤون الإسلامية والدعوة والإرشاد

新ムスリムの手引き



著者

ジャマール　アッディーン　ザラボーゾ

訳者

ファーリス　シハーブ

وكالة المطبوعات والبحث العلمي

uspr@moia.gov.sa

新ムスリムの手引き

著者
ジャマール　アッディーン　ザラボーゾ

訳者
ファーリス　シハーブ

印刷・出版
海外ダアワ啓発援助オフィス組織
サウジアラビア王国

海外ダアワ啓発援助イスラーム関係省出版
サウジアラビア王国

新ムスリムの手引き

著者
ジャマール　アッディーン　ザラボーゾ

監修
キングサウード大学翻訳センター
推進：イスラーム関係省/研究・出版セクション
イスラーム暦 1439 年（西暦 2018 年）

まえがき

慈悲あまねく慈愛深きアッラーの御名において

　アッラーに感謝し、救いと赦しを求め、導きを願います。我々が精神的にも実際の行いでも悪くならないようにアッラーに救済を願います。アッラーに導かれる者は、常に道に迷うことはありません。それとは反対に、迷い続ける者に対しては、導きはありません。

　アッラーの他に神はなく、ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）はアッラーのしもべであり、使徒であることを証言します。

　この場を借りて、このような重要な本を書く機会を与えて下さったアッラーに感謝し、そのアッラーの宗教を紹介する私の試みの中での誤りや失敗があったとすれば、そのことについてアッラーにお赦しを乞い願います。
　また、イスラームについて執筆する機会を与えて下さったことに、この場をお借りして、多くの方々に感謝したいと思います。
　宗教上のシャイフ　ムハンマド　アットルキー師の支援に対して、特に感謝の意を表したいと思います。アハマド　バルシード氏の継続的な協力に対しても、感謝申し上げます。お二人は、このプロジェクトの原動力となられた方でもあります。
　感謝は、他の方々にも捧げなくてはなりません。
　何より私に対しての支援の源であった妻に感謝します。

アブドゥルカリーム博士には、特別の感謝を捧げます。また、ナハール　アッラシード氏とムハンマド　アルオセーミー博士、アハマド　アッタリーキー博士、ジャラール　アブドゥッラー氏、それぞれの方に現世と来世のアッラーからの恩恵がありますように。

本著には、筆者が過去に書いた本で取り上げた同じ問題を再び述べた箇所があることをお断りしなければなりません。私はそれらを引用し借用しました。例えば、『宗教を教えるためにやってきた』と『精神の浄化―思考・過程・手段』の各本からです。それから『イスラームとは何か』『４０のハディースの解釈』の本からも少々引用しています。

最後にアッラーに、この仕事を受け入れて下さることをお願いし、これがアッラーのご満悦につながることを心から願います。この仕事に過ちがあった場合は、全て著者の責任です。

アッラーが私の過ちを赦し、正しい道に導いて下さるように祈ります。

著者　ジャマール　アッディーン　ザラボーゾ

（Jamaal Al Din ZARABOZO）

２００７年１月　ボルダーにて

新しくムスリムになった皆さんへ

—お祝い申し上げます—

今日では、イスラームに対するマイナスの情報が多く、直面している様々な問題に対しての解決が難しい時代です。それでもそこにイスラームの光と真実を見ることができる人々には、アッラーからの恵みがあることでしょう。新ムスリムの皆さんはこの人生で、イスラームの視点や理解力を授かったことに感謝しなければなりません。それと同時にこのように重要な宗教的知識を得たことについても、他のムスリムと同じように、感謝しなければならないでしょう。

イスラームに入信し新しい世界に入ったことで、新ムスリムの皆さんの世界観、あるいは人生へのイメージは、過去のイメージとは全く違ったものになっていることでしょう。イスラームを通して皆さんを受け入れてくださるアッラーからの手引きを得ることができたこと、また、あなた方自身もアッラーへの帰依に対しての充足感を得ることができたことが、何よりも重要なことではないでしょうか。

イスラームの世界で過ごす中で、皆さんの知識と信仰が深くなればなるほど、イスラームの素晴らしさや美しさを感じる力を獲得できるようになります。それと同時に、アッラーやイスラーム、そして預言者への愛情も増していきます。その結果、信仰深い人々しか知らない精神的で特別な人生を送ることができるようになります。この豊かで実りの多い人生を多くの人々が望んでいます。それに至る第一のステップは、イスラームに入信することです。皆さんの知識と信仰が深くなるに従って、人生はより豊かで深いものとなっていくことでしょう。そして、次の高

みへと進むステップがはっきりと見えてくるであろうことを信じております。インシャーアッラー。

序文のことば

本書の目的と動機

本書の目的は、新ムスリム・ムスリマに対して基本的なガイダンスを紹介することです。それによりイスラームへの理解と実践の助けになることです。『お祝い』の頁で書きましたように、イスラームに新しく入信された方は、今まで歩んでこられた道とは違う道を選んだのです。新ムスリムの方は、イスラームが真理の宗教であることを理解する力を持っておられますが、ご自身の日常生活の中では、アッラーへと実際にガイドしてくれる細かい情報が不足していることでしょう。

筆者は、新ムスリムの方々がイスラームの許で新しい経験をされることを望んでいます。まず正しく理解すること、次に弛まず実践することが重要であると考えます。イスラームに入信された直後は、どうしたらいいか、迷いと混乱に陥ることが多いのではないでしょうか。残念ながら、現在のムスリムの全てが模範的なイスラーム教徒とは言えないということもあります。宗教について全てを理解しているとはいえないのです。そのことが、かなりの混乱をもたらすこともあると思います。なぜなら、新ムスリムの方の中には、本で得た知識と現実のイスラームを区別して考えられない場合もあるからです。この著作は、クルアーンとスンナに基づいており、自分の生き方を模索している新ムスリムの方々への、最初のささやかな手助けをする書物になることを期待したいと思います。

本書の特徴

イスラームについての著作は数多くありますが、他の著作と本著の違いは、以下のようなものであると考えます。

第一　これは新ムスリムに向けられた数少ない著作の１つです。本書は、イスラームの正しさを認めた人々を対象としています。イスラームが正しいかどうかを説得するための議論には言及しておりません。イスラームに入信した人は、まずはどうしたらよいのかという知識がすぐに必要となってくるでしょう。まず自分の新しい宗教について、正しく知る必要があるのではないでしょうか。また日常的に行われる宗教的な行為についてのガイドも必要です。それにはムスリムとして避けなければならない行為も含まれています。

第二　筆者自身も、かつてイスラームに導かれた者の一人です。そういう意味では、私の辿ってきた新ムスリムとしての最初の経験を役立てることができると考えています。そしてここ数年の体験を振り返ってみることによって、新ムスリムが必要としていることや避けなければならないことについての視点を述べることができると思います。本書は、私がイスラームに入信したときに、このような本があったら良いと望んでいた本の１つでもあります。この数年来、イスラームに入ったばかりの多くの方々との交流がありました。新ムスリムが直面する実践上の問題や教義の理解についての問題も、よく理解しているつもりです。

第三　筆者は、本書の正しさを確認するための努力を惜しみませんでした。特に預言者ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）に

関わるハディースの教典『預言者言行録』についての確認の作業に念を入れて取り組みました。残念ながら、イスラームについて書かれた著作に対して、誰もがそういった注意を向けるとは限りません。そうなると、間違いを容認したまま出版することにもなります。

実は、筆者が入信した理由の最も大きなものは、イスラームの教えが純粋なまま継承された宗教であるということでした。誰でもクルアーンを読むことで、アッラーの言葉であることを理解し、ハディースに接すれば、預言者ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）の話であると明快に分かります。この宗教は、現代に至るまで純粋なまま保存され守られてきました。どんな方法を使っても、訂正や新たな解釈が加えられてはいけないと信じます。そして、イスラームについて書くときには、アッラーや預言者のお言葉であるかどうか、全ての著作者は確認のための努力を怠ってはならないと考えております。

本書の利用方法と参考資料について

イスラームについて本を著す場合は、その資料は必ずクルアーンから引用されなければなりません[1]。なぜならば、クルアーンこそがイスラームの全ての教えの基本であるからです[2]。本書で書かれた論旨の元になっているのは、もちろんクルアーンの他にはありません。しかし、聖クルアーンは誰が読んでもすぐに分かるといった簡単なものではないのも確かです。

アッラーは、啓示を授けるに際して預言者ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）を選び、クルアーンを下されました。クルアーンを生活の基本とするよう、預言者をムスリムの模範としてアッラーの命に従うよう、アッラーは教えて下さっています。預言者は、この命に従って周りの人々を啓蒙していきました[3]。預言者の生き方をスンナ（預言者の慣行）といい、よく知られたハディースの本に記録されています。正しいとされるハディース[4]は、本書の柱にもなっています。

クルアーンとスンナは、イスラームを理解するための最も基本的で重要な源です。その他のものは末節であり、言い換えれば、クルアーンとスンナに一致していなければ、イスラームの一部とは言えないのです。

預言者ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）は、自分の指導の下で、次世代の人々を養成していきました。周りの教友たちも皆

---

[1] クルアーンを引用する場合は、章（スーラ）、節（アーヤ）の 順に掲載している。

[2] イスラームについて書かれた本の中に著者の意見を裏付けるクルアーンのアーヤがなければ、読者はその説に疑問を投げかけるべきであろう。

[3] スンナの重要性については、クルアーンの４０箇所以上に記述されている。詳細は筆者による以下の文献を参照のこと。ジャマール　ザラボーゾ著『フジャトゥ　アハンミーヤトゥ　アッスンナ「スンナの権威とその重要性」：訳者注）』アルバシール出版社、2000 年。

[4] ハディースは、預言者の行為や語った言葉によって成り立っている。１つのハディースをまとめる際に、どれが正しくどれが誤っているかを判断する学者もおり、非常に細かい学問であると言える。

普通の人間であったので、他の人々と同じように誤ることも考えられました。しかし彼らのイスラームに対する理解と実践は、預言者の信頼を得ました。筆者もまた、イスラームの正しい理解のために、彼らの生き方を尊重しそれに従っています。

筆者は、有名な学者がイスラームについて書いた多くの著作を、時代に沿いつつ参考にしてきました。また、イスラームについて紹介された数々の本にも当たりました。最後になりましたが、そのどれもが非常に有益な参考となりましたことを感謝したいと思います。

❖❖訳者まえがき❖❖

慈悲あまねく慈愛深きアッラーの御名において

キングサウード大学の翻訳センターより本書『新ムスリムの手引き』の日本語翻訳の依頼を頂きましたことを心から光栄に存じます。本書が、著名なイスラーム学者であるジャマール　アッディーン　ザラボーゾ師であったことも歓びの１つでした。ザラボーゾ師は非ムスリムの国で生まれ育ちましたが、若くしてイスラームに出会い、ムスリムとしてその後の人生を歩んでこられた経歴があります。本書にも出てきますが、この本のテーマと同じような悩みや問題に突き当たったことでしょう。そういう意味で本書は、単なるイスラームの入門書に留まらず、ザラボーゾ師の人生経験に裏打ちされた現実味のある魅力にあふれた宗教入門書となっています。

本書は新しく入信したムスリムを対象にした手引き書の形をとっておりますが、話の内容に合わせて数多くのクルアーンが引用され、有名なハディースや珍しいハディースも随所に出てきます。また、イスラームについて欠かせない基本的な知識にも言及しており、新ムスリムを初め全てのムスリム・ムスリマのみならず、非ムスリムの方々にも非常に興味深く有益な本となっています。ここにはイスラーム関連の言葉の意味といった基本的なことから、イスラームの特徴や六信五行の行い、ムスリム社会のあるべきマナーまで、分かりやすく紹介されています。日本語で書かれたこのようなタイプの本は少ないだけに、拙訳書が多少なりとも新ムスリムの方々の手引きとなり、イスラームへの理解をより深めることにささやかながら貢献できることを祈っております。またムスリ

ムではない方々にとっても、イスラームへの正しい理解に繋がる一助となるならば、訳者としてこれに勝る歓びはありません。

本書はアラビア語の翻訳本を訳したものですが、随時英語の原書を参考にしました。ただ惜しむべきは、こういった英語、アラビア語、日本語と様々な言語を通しての翻訳書の性質上、言葉の意味や内容に分かりにくい箇所があるのは否めませんでした。

日本語に翻訳する際には、アラビア語のみならず英文も読み進めつつ、日本語として読みやすくするために、次にあげるようにいくつかのことに留意しました。

1.　本書の元のアラビア語の翻訳書は、章立てがなく段落ごとにまとまった文章が続くという形式でした。日本語に翻訳する際には、全体の流れをつかみやすくするため、内容に合わせて章と文節を立て、番号や章題をつけました。

2.　注釈には、著者が指摘した箇所のクルアーンの節を載せ、また本文に引用された預言者のハディースについては出典を確かめて補足し、（：訳者注）として加えました。筆者引用の文献のタイトルは日本語に訳し、カタカナでアラビア語の読みも併記しています。

3.　本書に出てくるイスラーム関係の語句には、ムスリムではない方々には分かりにくいところもあります。しかし、できるだけ一般の方々にも手にとって頂けるよう、説明を加えるようにしました。アラビア語は日本語に対応する音が少なく発音しにくいのですが、アラビア語の発音も味わって頂けるよう、カタカナやローマ字で表記を工夫しています。

4.　クルアーンの日本語訳は、『日亜対訳・注解　聖クルアーン』（宗教法人日本ムスリム協会）からの引用です。本書に引用されたハディースについては、訳者が初めて見聞きする珍しい話もありました。中には内容とその文章の意図が読み取りにくい箇所もありましたが、アラビア語訳書から日本語に忠実に訳しています。

5.　読者、特に研究者の方が文献を探しやすいように、巻末には参考文献のアラビア語リストとそのカタカナ表記リスト、ローマ字表記リストをつけています。詳しく調べたい方は、それらを参考にして頂きたいと思います。

6.　本書の凡例は、まえがきの末尾にまとめています。

本書の翻訳から作成・出版に至るまで、様々な方々にお世話になりました。キングサウード大学国際交流基金派遣日本語専門家の佐藤修氏には、全体に目を通して頂き、分かりにくい箇所についてのご指摘を頂き、全体の校正もお願いしました。また妻には、より分かりやすい自然な日本語になるよう目を通してもらいました。この場をお借りし、この本に関わって下さった皆様方に感謝の意を表したいと思います。

最後になりましたが、この『新ムスリムの手引き』が、皆さまの実り豊かな人生の礎の１つの小さな石となりますよう、心から祈念しております。インシャーアッラー。

訳者　ファーリス　シハーブ(Prof.Dr. Shihab FARIS)
キングサウード大学近代言語翻訳学科
日本語専攻課程教授
２０１８年9月４日　リヤドにて

❖❖【凡例】❖❖

○章や節としてまとめた折に、各内容によってはボリュームがかなり違っているが、段落も順番も本書のままで訳している。また章・節などの表題については、内容から訳者がつけたものであることをご留意願いたい。

○クルアーンとハディースは、ゴシック体で引用した。クルアーンの引用の際には一行開けているが、同じ章が続く場合は【同章】としてそのまま続けて引用した。また預言者ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）のハディースの引用の際には、できるだけ改行したが、日本語の文章の流れ上、不自然な場合はそのまま本文の中にゴシック体で入れた箇所もある。

○イスラーム関連の言葉について、カタカナでの表記では分かりにくいところもあるが、できるだけ元のアラビア語発音に忠実に直した。また同音異義語の間違いを避けるために、アラビア語または英語を挿入した単語もある。また既に日本語として通用するものは、クルアーン、ムハンマド、マッカなど、一般に使われている語句を用いた単語も多い。

○人名にはできるだけ敬称をつけるようにした。（〜伝承）の人名の場合は、割愛している。

○本文の注釈に出てくる参考文献について、出版社や印刷の年、引用箇所のページが記載されていない書もあるが、原典での確認ができないため、アラビア語翻訳文をそのまま日本語に翻訳している。

〇本文にはなく訳者の注釈として挿入した部分は全て（　）で括り、著者の注釈と区別した。

❖❖ 目 次 ❖❖

新ムスリムの手引き

دليل المسلم الجديد

第１章　イスラームという宗教

１．イスラームの意味

「イスラーム」の語源は、動詞アスラマ（aslama　أسلم）の派生形で、「諦める　（イスタスラマ　استسلم）」「自分自身を委ねる（サッラマ　ナフサフ سلّم نفسه）」という意味である[1]。アッラーに対して使う場合には、「アッラーに帰依する、つまり自分自身を委ねる」となる。イスラームとは、人間が自分の神は誰かということを把握した上で、自分を創造して下さった主に対して礼拝し帰依するという行為を伴わなければならない。別の表現をすれば、アッラーの唯一性と創造主の存在を認めるというだけでなく、さらに重要な意味もイスラームは含有している。人間は唯一のアッラーに対して、自分自身を帰依するという意識的な決意を表すことである。

「イスラーム」を直訳すれば、「降伏（イステスラーム　ザーティ استسلام ذاتي）」、つまり自分自身を相手に投げ出し、その権威を受け入れ認め「身を任せる」ということである。アッラーが下した宗教は、預言者たちを通して世界に広まった「イスラーム」というべきである。人間が自分をアッラーの権威に完全に服従させ、従順な態度をとることが、基本的な信条

[1] E.W レーン著『アラビア語英語辞典』ケンブリッジ、イギリス、1984 年、 Vol.1、p. 1413.

なのである。それがイスラームの教義の枠、コンセプトである[1]。

ここで言うべきことは、「イスラーム إسلام」の意味は、「平和（アッサラーム السلام）」の意味にはならないということである。アラビア語の「アッサラーム」はイスラームと同じ派生形であるが、本当の平和は、対外的にも内的にもイスラームを正しく実行することによって実現化されると明言できる。同時にムスリムの心と頭で、自分がイスラームであるということ、つまりアッラーのみに服従し修業していくという意志をはっきりと認識しなければならない。

イスラームと他宗教との関係を説明する前に、イスラームの宗教的な言葉の意味を、改めて明確に把握する必要がある。イスラームは、前述したように神に帰依するという意味であるので、誰でも純粋にアッラーに帰依する気持ちがあれば、誰でもがムスリムと言える。そういう意味で考えれば、今までの全ての預言者が唱えた宗教を大きく解釈して考えると全てがイスラームと言ってよいであろう。つまり、全ての預言者をムスリムと呼んでもいいのかもしれない。ヌーフ（ノア）、イブラーヒーム（アブラハム）、ムーサー（モーゼ）、イーサー（イエス）の全て（彼らにアッラーからの平安あれ）がイスラームであり、ムスリムということにもなるのである。アッラーは、預言者ム

---

[1] ムハンマド　イブン・マンズール　ヌウマーニー著『マアナー　ワ　リサーラトゥ　アルアハディース　（「ハディースの意味とメッセージ」：訳者注）』イスラーム研究アカデミー、インド、1975 年、p.54。

ハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）に次のように告げている。

　かれがあなたに定められる教えは、ヌーフに命じられたものと同じものである。
われはそれをあなたに啓示し、またそれを、イブラーヒーム、ムーサー、イーサーに対しても（同様に）命じた。・・・
【第４２章　相談章〔アッ・シューラー〕１３節】

　イブラーヒーム（彼にアッラーからの平安あれ）は、アッラーに仕（つか）えアッラーのしもべであった。言い換えれば、彼はユダヤ教徒ではなく、キリスト教徒でもなく、ムスリムであったと言ってもよいのである。彼に従っていた人々もまたそうである。続く、ムーサーやイーサー（彼らにアッラーからの平安あれ）も、同じく従っていた信者たちも、同様にムスリムであったということができる。アッラーは、これについて雌牛章の１２７節から１４１節で次のように告げている。

　それからイブラーヒームとイスマーイールが、その家の礎（いしずえ）を定めた時のこと。（その時二人は言った。）
「主よ、わたしたちから（この奉仕を）受け入れて下さい。
本当にあなたは全聴にして全知であられる。
【第２章　雌牛章〔アル・バカラ〕１２７節】

　主よ、わたしたち両人を、あなたに服従、帰依（きえ）する者〔ムスリム〕にして下さい。
またわたしたちの子孫をも、あなたに服従、帰依する民〔ウンマ〕にして下さい。
わたしたちに祭儀を示し、哀れみを与えて下さい。**あなた**は度々許される方、慈悲深い方（かた）であられる。

【同章　１２８節】

　主よ、かれらの間（あいだ）に使徒として、かれらの１人を遣わし、**あなた**の印（しるし）をかれらに読誦させ、啓典と英知を教え、かれらを御浄（おきよ）めして下さい。本当に**あなた**は偉大にして英明な方（かた）であられる。」

【同章　１２９節】

　愚（おろ）か者でもない限（かぎ）り、誰がイブラーヒームの教えを避けるであろうか。
まさに**われ**は、現世においてかれを選んだ。
来世においても、かれはきっと正義の徒の１人である。

【同章　１３０節】

　主がかれに向かって、「服従、帰依（きえ）しなさい。」と仰せられた時を思い起せ。かれは、「わたしは、万有の主に服従、帰依（きえ）します。」と申し上げた。

【同章　１３１節】

イブラーヒームは、このことをその子孫に伝え、ヤアコーブもまた（それにならった）。「わたしの子孫よ、**アッラー**はあなたがたのために、この教えを選ばれた。

だから必ずムスリム（服従、帰依（きえ）者）となって死なねばならない。」

【同章　１３２節】

ヤアコーブが臨終の時、あなたがたは立ち会ったか。かれがその子孫に向かって、「わたしが亡き後、あなたがたは何に仕えるのか。」と言うと、かれらは、「わたしたちはあなたの神、イブラーヒーム、イスマーイール、イスハークの神、唯一（ゆいいつ）の神（**アッラー**）に仕えます。**かれ**に、わたしたちは服従、帰依（きえ）します。」と言った。

【同章　１３３節】

これは過ぎ去った民〔ウンマ〕のことである。かれらにはその稼いだことに対し、またあなたがたにもその稼いだことに対し（応報があろう）。

かれらの行（おこな）ったことに就（つ）いて、あなたがたが問われることはないのである。

【同章　１３４節】

かれらは言う。「あなたがたは正しく導かれたいならば、ユダヤ教徒かキリスト教徒になりなさい。」

言ってやるがいい。

「いや、わたしたちはイブラーヒ―ムの純正の教えを信奉する。かれは、多神教徒の仲間ではなかった。」

【同章　１３５節】

（ムスリムよ祈って）言うがいい。「わたしたちは、**アッラー**とわたしたちに啓示されたものを信じます。

またイブラーヒーム、イスマーイール、イスハーク、ヤアコーブと諸支部族に啓示されたもの、

とムーサーとイーサーに与えられたもの、

と主から預言者たちに下されたものを信じます。

かれらの間のどちらにも、差別をつけません。**かれ**にわたしたちは服従、帰依（きえ）します。」

【同章　１３６節】

それでもしかれらが、あなたがたのように信仰するならば、かれらは確かに正しい導きの中にいる。

だがもし背き去るならばかれらはと背教者（はいきょうしゃ）である。

かれらのことは**アッラー**に御任（おまか）せしておけ。

かれは全聴（ぜんちょう）にして全知（ぜんち）であられる。

【同章　１３７節】

アッラーの色染めというが、誰が**アッラー**よりも良く色染め出来ようか。わたしたちが仕えるのは**かれ**である。

【同章　１３８節】

（ユダヤ教徒やキリスト教徒たちに）言ってやるがいい。

「あなたがたは、**アッラー**に就（つ）いてわたしたちと論議するのか、**かれ**はわたしたちの主であり、またあなたがたの主であられる。わたしたちにはわたしたちの行いがあり、あなたがたにはあなたがたの行いがある。わたしたちは、**かれ**に誠を尽（つ）くします。

【同章　１３９節】

またあなたがたは、『イブラーヒーム、イスマーイール、イスハーク、ヤアコーブ、

とその諸支部族が、ユダヤ教徒またはキリスト教徒であった。』

と言うのか。

言ってやるがいい。『最もよく知る者は、あなたがたなのか、それとも**アッラー**であられるのか。**アッラー**から下された証拠を持ちながら、それを隠すよりも酷（ひど）い不正があろうか。』

アッラーは、あなたがたの行うことに無頓着な方ではない。」

【同章　１４０節】

かれらは過ぎ去った共同体〔ウンマ〕である。かれらにはその稼ぎがあり、またあなたがたには、その稼ぎがある。かれらの行いに就（つ）いて、あなたがたが問われることはないのである。

【同章　１４１節】

これらクルアーンのアーヤ（節）が示すように、イスラームは全ての預言者とその預言者に従っていた信者たちの宗教でもあった。アーダム（彼にアッラーからの平安あれ）の時代から

最後の使者以前までそれぞれの時代の信者は、イスラームの教えに従っており、全てがムスリムであるということができる。アッラーは人類に入信するよう命じた。つまり、アッラーが唯一認め受け入れた宗教がイスラームなのである。アッラーは次のように告げている。

本当にアッラーの御許（みもと）の教えは、イスラーム（主の意志に服従、帰依すること）である。

・・・

【第３章　イムラーン家章［アーリ・イムラーン］１９節】

イスラーム以外の教えを追求する者は、決して受け入れられない。

また、来世においては、これらの者は失敗者の類（たぐい）である。

【同章　８５節】

これまで述べてきたように、イスラームの博愛と信仰の絆は、アーダム（彼にアッラーからの平安あれ）の時代から全ての国々を覆い民族を繋ぎ絶えることなく永久に続いてきた。信者たちはお互いに愛し合い、励まし合い、実にユニークで、祝福された兄弟愛に恵まれた特別な関係にある。さらに説明を加えれば、ムスリムたちは、全ての時代の全ての預言者たちを信じている。信者たちは預言者たちを支持し、彼らの名誉を守っている。それゆえ本当のムスリムならば、イブラーヒーム、イスハーク（イサク）、ムーサー、イーサーなど全ての預言者たち

（彼らにアッラーからの平安あれ）に対して彼らを悪しく言うことはないであろう。ムスリムの全ての人々は、全ての預言者たちに対して愛情と尊敬の念を胸に抱いているからである。

２．イスラームのメッセージ

　我々は、アッラーの使徒ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）が啓示を伝えた後の、イスラームの教えに関する特質を把握しなければならない。預言者ムハンマド（彼にアッラー からの祝福と平安あれ）の時代前より、イスラームは多くの色彩[1]に彩られていた。それぞれの民族には各々の預言者がおり、人々は彼らに従っていた。つまり皆ムスリムであったといっても良いのである。新しい使徒[2]が啓示を受けたならば、人は直ちにそれに従った。アッラーが遣わされた新しい預言者を拒むものは、アッラーに帰依することを拒否することを意味し、それによってイスラームから離脱することになった。

　預言者ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）と、彼以前に遣わされた預言者との間には、重要な２点の相違点がある。第一は、預言者が啓示を受けたシャリーアは、それまでのシャリーアの土台の上に立っていることである。第二は、それまでの預言者たちの教えはアッラーの思し召しによるもので

---

[1] （色彩とは、いろいろな使徒のこと。：訳者注）
[2] （ムーサーはユダヤ教の、イーサーはキリスト教の使徒である。：訳者注）

あるのだが、下記に引用したクルアーンにもあるように、様々な理由でその純粋さが守られて来なかったのである。

われは真理によって、あなた方に啓典を下した。それは以前にある啓典を確証し、守るためである。
それでアッラーが下さるものによって、かれらの間を裁け。
あなたに与えられた真実に基づき、かれらの私欲に従ってはならない。
・・・
【第５章　食卓章［アル・マーイダ］４８節】

このように、クルアーンは真理によって下され、以前からの啓典を踏まえている。クルアーンはそれ以前の啓典に記された真実を守り、確証している。同時に、前の啓典が書き換えられた間違いを正そうとしているアーヤもある。どのような聖典もクルアーンに一致した説は真実であり、一致していない説は無効である。なぜなら、クルアーンこそがそれまでのいくつかの啓典の内容を確証し、書き誤った説を訂正するために下された啓典だからである。

それについての明らかな例として、イーサー（彼にアッラーからの平安あれ）の十字架の問題がある。この出来事が、彼の神格化の１つの核になっているが、それについて、クルアーンでは次のように取り上げられている。

「わたしたちはアッラーの使徒、マルヤムの子マシィーフ（メシヤ）[1]、イーサーを殺したぞ。」と言った。
だがかれらがかれ（イーサー）を殺したのでもなく、またかれを十字架にかけたのでもない。只（ただ）かれらにそう見えたまでである。
本当にこのことに就（つ）いて議論する者は、それに疑問を抱いている。
かれらはそれに就（つ）いて（確かな）知識はなく、只憶測（ただおくそく）するだけである。
かれらは、実際かれを殺さなかった。
【第４章　婦人章［アン・ニサーア］１５７節】

以前の教典にあった記し間違いに至るプロセスについては、クルアーンにも何箇所か触れられている。例えば、三大宗教の信者たちについて、アッラーは次のように指している。

災（わざわ）いあれ、自分の手で啓典を書き、
僅（わず）かな代償を得（え）るために、「これをアッラーから下ったものだ。」と言う者に。
かれらに災いあれ、その手が記（しる）したもののために。

---

1 （マルヤムはマリア。：訳者注）

かれらに災いあれ、それによって利益を得(え)たために。

【第２章　雌牛章［アル・バカラ］７９節】

　またアッラーは、イムラーン家章で次のように告げた。

　かれらの中(うち)には、自分の舌で啓典をゆがめ、
啓典にないことを啓典の一部であるかのように、あなたがたに
思わせようとする一派がある。
またかれらは、アッラーの御許(みもと)からではないものを、
「それはアッラーから来たものだ。」と言う。
かれらは故意にアッラーに就(つ)いて虚偽を語る者である。

【第３章　イムラーン家章［アーリ・イムラーン］７８節】

　このことについて、預言者ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）は次のように述べている。
「啓典のある宗教の人々を信じ込まないように。また彼らが嘘つきであるとは思わないように。『我々はアッラーを信じ、あなた方に下された啓典も、我々に下された啓典も真実であり、あなた方の神も我々の神も同一で、我々はムスリムである。』と言いなさい。」

　興味深いことに「アッラーに帰依する」または「イスラーム」という言葉を守ったのは、唯一預言者ムハンマド（彼にアッラ

ー からの祝福と平安あれ）が啓示を受けたイスラームの教えだけである。一方、他の宗教は、場所や民族や人々から宗教名がつけられている。『マイクロソフト　エンカルタ総合大百科事典』によれば、ユダヤ教という名前は、新しく近代ヘブライ語ができる前までは存在していなかった。そして、ユダを指しているという。キリスト教は、イーサー（イエス）からきている。仏教もまたブッダからの命名である。ヒンドゥー教は、ヒンドゥスタンという場所の名前をとって名付けられている。アッラーの智慧と慈悲のお陰により、真理の宗教イスラームは、完全にアッラーに帰依する宗教であり、全ての預言者の宗教でもあり、完璧に守護されているのである。

　クルアーンは、人々に下された最後の使徒であるムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）のメッセージを指している[1]。彼のメッセージは以前の預言者たちのメッセージの延長線上にあり、アッラーからの最後のメッセージであることを再度確認しておこう。しかし、ユダヤ教徒やキリスト教徒が、イスラーム教に入信することを強制されることはない。それはクルアーンで戒められているからである。

[1] １８世紀から１９世紀の初めに宣教師たちとオリエンタリストたちとの間で、イスラームはムハンマド教として広まっていた。彼らが信じる宗教と同じような命名をしたのである。これはイスラームでは受け入れられないことであり、この名称が普及しないように尽力した人々の努力が実ったのである。この命名方法はムスリムにとっては誤謬である。ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）を崇めることに繋がるからである。

宗教には強制があってはならない。正に正しい道は迷悟から明らかに（分別）されている。
それで邪神を退けてアッラーを信仰する者は、決して壊れることのない、堅固な取っ手を握った者である。
・・・
【第２章　雌牛章〔アル・バカラ〕２５６節】

宗教への強制はあってはならないが、イスラームの本当の真実を人々に伝え、預言者ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）の教えに従うよう人々に勧めた方がいいということは、この章の最後でも述べておきたい。

第１章の終わりに

長い時代を経る中で、アッラーは数多くの預言者を遣わされた。全ての人間に審判の日が訪れるまで、最後のメッセージとして下されたのは、使徒ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）を通してのクルアーンである。すなわち、彼の後には新しいメッセージはなく、また新しい使徒も遣わされることはないという意味でもある。つまり最後の啓典として、クルアーンが書き直されたり、付け加えられたりすることはないのである。その点において、最後のメッセージであるクルアーンの重要性は、今までのメッセージと大きく異なっている。その４つの理由を挙げよう。

第一の理由

最後のメッセージとしてのクルアーンは、啓典の訂正のための次の預言者が来ないのであるから、もとの純粋なまま継承されなければならないであろう。

第二の理由

最後の預言者の印であるクルアーンのアーヤは、特別なものである。これは当時の時代だけに通用するものではなく、次の時代にも続く画期的で普遍的なメッセージとなるからである。

第三の理由

最後の預言者は特定の民族だけに遣わされたものではない。最後の預言者は全ての人々に対する預言者とならなければならない。最後のメッセージは、全ての人々にとって有効となるように遣わされた。

第四の理由

そのメッセージの教えは、人類が必要としている問題解決の助けとならなければならない。来世が訪れるまで、また全ての人類のため、柔軟性のある教えである必要があった。

以上のポイントを踏まえると、預言者ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）のメッセージはそういった条件を

全てクリアしている。クルアーンとスンナ（慣行）は、詳しく細部に至るまで守られており、彼の預言者の印でもあるクルアーンは、現在でも通用する奇跡なのである。[1]

第三番目の理由については、もう少し詳しく述べてみよう。預言者が宣言したのは、このメッセージは全ての人々のためのものであるということである。例えばユダヤ人は、自分たちがアッラーから選ばれた民族であると信じている。そして自分たちの宗教メッセージは、彼等だけに与えられた宗教であると考えられている。そのため、ユダヤ教の原理主義者たちは、この宗教を他の人々に勧める必要はないと見ている。新約聖書には、「イーサーのメッセージは、イスラエルの民のためにある。」とある。マテオによる福音書の第１０章の５から６[2]には、次のような記述がある。イーサー（彼にアッラーからの平安あれ）は使徒１２人を遣わすにあたり次のように戒められた、「あなたたちには異邦人の国に行ってはならぬ。サマリア人の町にも入るな。むしろイスラエルの家の滅びた羊のところへ行け。」また、彼の語った話によると、カナンの女が彼に助けを求めに行った時、「私はイスラエルの迷った羊のために来た。」と答えた[3]。

---

[1] この件に関してはここでは深入りせず、筆者の著作を参照のこと。ジャマールザラボーゾ著『マ　フワ　アルイスラーム（「イスラームとは何か」：訳者注）』イスラーム省発行、リヤド、サウジアラビア 2006 年。

[2] （『聖書』講談社、p.18：訳者注）

[3] （『聖書』講談社、マテオによる福音書の第１５章、pp.24～28：訳者注）

イーサー（彼にアッラーからの平安あれ）のメッセージが特別であることは、【第６１章　戦列章〔アッサッフ〕６節】で述べられている[1]。

しかし、預言者ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）に関しては、アッラーは次のように告げている。

言ってやるがいい。「人びとよ、わたしはアッラーの使徒として、あなたがた凡てに遣わされた者である。
・・・
【第７章　高壁章〔アル・アアラーフ〕１５８節】

それに関しては、もう一箇所クルアーンには、次のようにある。

われは、全人類への吉報の伝達者または警告者として、あなたを遣わした。
だが人々の多くは、それが分（わか）らない。
【第３４章　サバア章　２８節】

---

[1] マルヤムの子イーサーが、こう言った時を思い起こせ。「イスラエルの子孫たちよ、
本当にわたしは、あなたがたに（遣わされた。）アッラーの使徒で、わたしより以前に、（下されている）律法を確証し、またわたしの後に来る使徒の吉報を与える。その名前は、アハマドである。」
だがかれが明証をもって現れた時、かれらは、「これは明らかに魔術である」と言った。
【第６１章　戦列章〔アッ・サッフ〕６節】
（本書には引用がないが参考として引用した：訳者注）

これと同じ意味の内容を別の節で見てみよう。預言者ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）は、それまでの預言者とは５つの点で相違[1]しており、第５番目としての違いは、全ての民族に遣わされた点である。

「今までの預言者は特定の民族に遣わされ、私ムハンマドは全ての人々のために遣わされました[2]。」と彼自身が述べている。アッラーは、預言者ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）が最後の預言者であると定められた。アッラーは次のアーヤで明確に告げている。

ムハンマドは、あなたがたの誰の父親でもない。
しかし、アッラーの使徒であり、
また預言者たちの封緘（ふうかん）である。
本当にアッラーは全知であられる。
【第３３章　部族連合章〔アル・アハザーブ〕４０節】

預言者自身も

[1] （５つの相違についての記述はない。：訳者注）
[2] ブハーリーとムスリムの伝承による。
（以下：訳者注）ブハーリー（H.194～256 年、西暦 810～870 年位）、ムスリム（H.202～261 年、818～875 年位）、２つのサヒーフはどちらも最も権威あるハディースの教典である。ニサール　アハマド編『クルアーンとハディースの根本教義《巻１》』イスラミックセンタージャパン、1977 年。

「私は全ての人類に遣わされた最後の使徒です[1]。」と語り、また、

「イスラエルの民は、ある預言者に率いられるが、彼が亡くなれば、次の預言者が出てきました[2]。」と語ってもいる。

預言者ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）を拒み、他の預言者だけを受け入れる人はいないであろう。そして彼は誠実な人ではあるけれど、私はイーサーやムーサー（彼らにアッラーからの平安あれ）だけに従うといって他の預言者のみを選ぶ人もいないであろう。論理的に考えれば、このことがアッラーに受け入れられるとは考えられないからである。なぜならば、アッラーは、人々がアッラーへの信仰に至るために最後の預言者を遣わし、同時に今までの預言者のメッセージを踏まえて修正を加えたからである。これについて、聖クルアーンでアッラーは次のように告げている。

かれらに向かって、「あなたがたは、アッラーが下されたものを信じなさい。」と言われると、
かれらは、「わたしたち（ユダヤ人）は、わたしたちに下されたものを信じる。」と言う。
それ以外のものは、たとえかれらが所持するものを確証する真理でさえも信じない。

---

[1] ムスリムの伝承による。
[2] ブハーリーとムスリムの伝承による。

言ってやるがいい。「あなたがたがもし信者ならば、何故以前アッラーに遣わされた預言者たちを殺害したのか。」

【第２章　雌牛章〔アル・バカラ〕９１節】

アッラーとかれの使徒たちを信じないで、

アッラーとかれの使徒たちの間を、分けようと欲して、

「わたしたちはあるものを信じるが、あるものは信じない。」

と言い、

その中間に、一つの路を得ようと欲する者がある。

【第４章　婦人章〔アル・ニサーア〕１５０節】

　これらの者こそは、本当に不信者である。

われは不信者のために恥ずべき懲罰を備えている。

【同章　１５１節】

　アッラーはこのような振る舞いをした人々に対して、信仰を拒否していると判断し、次のように告げている。

　だがアッラーとその使徒たちを信じ、かれらの間の誰にも差別をしない者には、

われはやがて報奨を与えよう。

アッラーは寛容にして慈悲深くあられる。

【同章　１５２節】

預言者ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）も、次のように教友に語ったと言われる。

「我が身を御手に委ねられたお方に誓って、このウンマ（共同体）の一人として、ユダヤ教徒であろうとキリスト教徒であろうと、私に遣わされた啓示を信じず、私のことも聞いたにも拘わらず（話を信じず）、そのまま死んでしまった者は、ナール（業火）の徒となること以外にはないでしょう[1]。」
「ムーサーが生きていたならば、私に従ったはずです[2]。」

[1] ムスリムの伝承による。
[2] アハマドとダーリミーの伝承による。アルバーニー師は以下の文献の中で「良いハディースである。」と述べている。アルバーニー著『エルワーア　アルガリール　フィー　タフリージ　アハディース　マナール　アッサビール（「灯台の明かりのようなハディースの導き」：訳者注）』

第２章　イスラームの普遍性

１．イスラームの普遍性とそれぞれの時代への有効性

　ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）は最後の預言者であり、慈悲深きアッラーは、歩むべき道から外れていく人類を導かずにはいられないであろう。言い換えると、最後の預言者に下された啓典は、彼に続く人類全てに有効なものでなければならない。まず、預言者は根本的なことに触れている。

「あなた方には、２つのことを残します。これを守り続ければ、道を迷うことはありません。それはクルアーンと預言者のスンナです。[1]」

　彼は、最後の預言者であるからこそ、アッラーはクルアーンの食卓章で次のように告げている。

・・・

今日われはあなたがたのために、あなたがたの宗教を完成し、またあなたがたに対するわれの恩恵を全うし、あなたがたのための教えとして、イスラームを選んだのである。

しかし罪を犯す意図なく、飢えに迫られた者には、

本当にアッラーは寛容にして慈悲深くあられる。

【第５章　食卓章〔アル・マーイダ〕３節】

---

[1] ブハーリーとムスリムの伝承による。

またアッラーは、預言者ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）が全人類に遣わされた者であることを明言した次のクルアーンを下された。

言ってやるがいい。「人びとよ、わたしはアッラーの使徒として、あなたがた凡（すべ）てに遣わされた者である。
天と地の大権は、われの有（もの）である。
かれの外に神はなく、かれは生を授け死を与える御（お）方である。
だからアッラーの御言葉を信奉する文字を知らない使徒[1]を信頼しかれに従え。そうすればきっとあなたがたは導かれるであろう。」
【第７章　高壁章〔アル・アアラーフ〕１５８節】

預言者ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）以前の預言者には与えられなかった５つのことを彼は授かっており、第１章で述べたように、彼は全ての人類に遣わされた使徒である[2]。イスラームは完成された宗教として下され、クルアーンは変更や訂正を必要としない啓典である。アッラーが下されたメッセージは、最後の審判の日が来るまで十分に機能し有効であろう。預言者は全ての人類のために遣わされたため、預言者と彼のスンナは全人類に有効であるとされている。彼の人生

---

[1] （**「文字を知らない使徒」**とは預言者ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）のことで、彼は教育を受けていなかった。：訳者注）
[2] ムスリムの伝承による。

からの範例は多くあり、彼の教えは、彼が生きていた時代のアラブ人のためだけでなく、今生きているそれぞれのムスリムのためにも、マレーシアの出身であれ、ニューヨーク生まれであれ、どの人々にも有効なのである。

ここでひとつの疑問が出てくる。このようなそれぞれの教えは、審判の日が訪れるまで、全人類の要請に応えることができるかという疑問である。答えは、その教えの内容の美しさの中にも、宝石のように散りばめられている。その法制を研究すれば、預言者の時代と同じように必ずどの時代にも通用する柔軟性を持つことに気付かされるであろう。

そう考える理由の第一は、人類の気質は時代によって変わることはないからである。人間の行動の基本になる宗教的な教えは、審判の日が訪れるまで固定した法制で変わることはないと考える。第二の理由は、人間に害を与えるものが存在するが、人はそれを避けなければならないからである。それは宗教上、禁止されたものである。それ以外に、自分が生きていくための基準、信念などが必要になってくる。それはイスラームのシャリーアがカバーしてくれる。

結論として、イスラームは人間が必要としている基本的な信念や基準は決まっているが、それぞれの時代や場所に合わせられる柔軟性も持っている。こういったイスラームのやり方は、神的な導きの方法である。例えば、ビジネス上の取引では、リバー（利息）は禁止された。それに加えて一般的な商業の決まりがある。現在の近代的な商取引もシャリーアに合致している

かどうか分かる。こう考えると、イスラームのシャリーアは、１４００年前から審判の日が訪れるまで、ムスリムたちが信じているように有効であるといえる。

何でも決まっているということは、それは宗教が完成しているという意味でもある。これによってムスリムは、来世でも現世でも幸せになる方法を手に入れたということになるだろう。このようなイスラームの決まりは、訂正されたり変更されたり削除されたりすることはない。預言者ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）は、迷信・ビドゥア（ بدعة bid'ah 新しい習慣）に注意を払い、ムスリムにはそれは必要ないと考えていた。これに関し、預言者は次のように言ったと伝えられている。

「新たな作り事には、気をつけなければならない。新しい作り事は異端者の勝手な考えであり、それはみな道を踏み迷わせるものです。[1]」

これに加えて**「・・・またあらゆる誤謬（ごびゅう）は地獄の業火であるから。[2]」**と言っている。また別のハディースには、次の話がある。

「クルアーンとスンナにはない行動[3]、それは受け容れられないことです。[1]」

---

[1] ムスリムの伝承による。
[2] ナサーイーの伝承による。
[3]（ある行動がクルアーンとスンナにあってイスラームの教えであると誰かが言うものの、実際にはクルアーンにもスンナにもない行動もまたビドゥアの１つであるという意味。：訳者注）

２．イスラーム　シャリーアの源

　イスラームの目標は、アッラーのしもべとなることである。自分の行動の規範は、アッラーから下された教えに基づくべきである。その視点から、学者たちはイスラームのシャリーアの源であるクルアーンとスンナの２点について研究している。

　クルアーンは、預言者ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）を介して、大天使ジブリールから下されたアッラーの言葉である。クルアーンがアッラーからのものではないと疑っている人々は、『クルアーンの源』を読めば答えが導き出されるだろう[2]。クルアーンのアーヤは２３年間にわたり少しずつ下されたもので、イスラーム社会へと人々を少しずつ方向付け、新しい信者たちの世代を形成していった。この過程は、現在に至るまで同じような問題に直面している次の世代に対しても模範となるものであった。当時文明の片隅にあったアラブ人を、現代まで続く残光の残る、素晴らしい時代の先駆者に変えることができたのは、クルアーンのおかげである。イスラームを理解し実行すれば、今日でも個人も社会もよりよい段階へ変えていけるであろう。またアッラーにもより近づくことができるのである。

---

[1] ブハーリーとムスリムの伝承による。
[2] ハムザ　ムスタファ　ナジュージー著『マサーディル　アルクルアーン（「クルアーンの源」：訳者注）』イスラーム青年国際シンポジウム、1991 年。

預言者ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）は啓示を受けた時、自分の周りの人々に直接伝え、教友たちに記録するよう伝えた。そして聖クルアーンについて、次のように言った。

「どの預言者にも人類が信じるようなアヤート（奇跡）が下されました。私に下されたのもアッラーからの啓示であり、審判の日に私が一番の下僕（しもべ）であることを願っています。[1]」

クルアーンには、第２章の雌牛章［アル・バカラ］２３節に、次のような啓示がある。

もしあなたがたが、わがしもべ（ムハンマド）に下した啓示を疑うならば、

それに類（るい）する１章〔スーラ〕でも作ってみなさい。もしあなたがたが正しければ、アッラー以外のあなたがたの証人（しょうにん）を呼（よ）んでみなさい。

今日まで、クルアーンのスーラを作るという挑戦に成功した人は誰もいない。そういう意味で、預言者ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）の奇跡は、クルアーンであるとされている。聖なるクルアーンは、どの側面から考えても、本当の奇跡とされている。例えば預言者の時代、アラブはとても言葉の堪能な時代であった。預言者に敵対意識を持っていたア

[1] ブハーリーとムスリムの伝承による。

ラブ人たちでさえ、クルアーンのフスハー文体（アラビア語の文語）の素晴らしさに匹敵する文章は作れなかった[1]。クルアーンは、単なる文学的な奇跡だけでなく、そこに出てきた予言という意味でも奇跡であるといえる。予言は実際に起こった。２３年間という長い期間において下されたが、クルアーンの中のアーヤ（節）における終始一貫性のある均整のとれた美しさは保たれている。そこには歴史的、科学的な知識の正確さが存在する。また人間の行動を善に変えていける力のある教えが入っている。

クルアーンに加えて、スンナ（慣行）として知られている預言者ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）の言行録がある。それも、啓示の一種であるとも言える。預言者は、

「私にはクルアーンが下されたが、同様のものも下されました。[2]」

と述べている。

スンナの正当性は預言者ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）が神的なキャラクターであったからではない。彼は他の使徒と同じように普通の人間であった。ただ、彼の権威はアッラーに帰依するというただ１つの要件に関わっている。

---

[1] 英語で書かれたクルアーンについての良い文献がある。ムハンマド　アブドゥッラー　ダラーズ著『クルアーン―永遠の奇跡―』イスラミック　ファンデーション、レスター、イギリス 2001 年、pp.65～179。

[2] アブー・ダーウードの伝承による。アルバーニー師もこれは正しいと述べている。ムハンマド　ナーセル　アッディーン　アルバーニー著『サヒーフ　アルジャーミア　アッサギール（「正しいハディースの蒐集－抜粋－）」：訳者注）』アルマクタブ　アルイスラミーヤ、ベイルート、レバノン、1986 年。ハディース No.2643。

クルアーンの奇跡は、預言者の正当性について確証しており、預言者のスンナに従うことは、アッラーに帰依することと同様である。

第４章　婦人章［アル・ニサーア］８０節でも次のように述べられている。

使徒に従う者は、まさにアッラーに従う者である。
誰(だれ)でも背き去る者のために、
われはあなたを見張り人として遣わしたのではない。

アッラーが好きな者は、またアッラーの愛情を望むのであれば、その鍵は預言者ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）の行動に従うことである。アッラーは、次のように告げる。

言ってやるがいい。「あなたがたがもしアッラーを敬愛するならば、私に従え。そうすればアッラーもあなたがたを愛(め)でられ、あなたがたの罪を許される。
アッラーは寛容にして慈悲深くあられる。」
【第３章　イムラーン家章［アーリ・イムラーン］３１節】

加えて預言者については、第３３章　部族連合章［アル・アハザーブ］２１節で次のように述べている。

本当にアッラーの使徒（しと）は、アッラーと終末（しゅうまつ）の日（ひ）を熱望する者、アッラーを多く唱念（しょうねん）する者にとって、立派な模範（もはん）であった。

預言者は歩くクルアーンであったという。彼の妻であるアーイシャ（彼女にアッラーのご満悦あれ）が預言者の人となり、その道徳について聞かれた際に、こう答えたという。

「彼の道徳はクルアーンでした。[1]」

クルアーンとスンナの関係は、切っても切れない関係にある。スンナはクルアーンの教えの実際的な解釈を意味するので、スンナはクルアーンの実践方法とも言える。スンナはクルアーンにはっきりと出てきたシャリーアやマナーを体現している。クルアーンの実践的な教えはムスリムにとって、とても有難いテーマでもある。全ての人にとってアッラーの導きが分かりやすくなっている。クルアーンとスンナは、教えの基本を表す１つのユニットになっているといってもいいだろう。

クルアーンは２００頁を超える冊子に収められている。スンナは預言者ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）の慣行の記録のため、形態は違っている。スンナの記録は全て、ハディースを収めた本に集められた。ハディースは、預言者が

[1] ムスリムの伝承による。

行ったこと、また語ったことの伝承記録である[1]。イスラーム学者は、後世まで伝わった預言者ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）に関わるハディースの中には間違いの部分もあると、宗教を正しく守るために敢えて進言している。そのため、預言者のハディースを細かく研究し、その中で正しいものと間違っているものを峻別する努力が続けられている。イスラームのシャリーアは、全てに正当性があるとは限らない。正しいと確証されたハディースだけに正当性があると考えられており、「ハディース　サヒーフ」または「ハディース　ハサン　サヒーフ」と呼ばれる。一方受け入れられないハディースは、「ダイーフ（弱い）」と呼ばれ、根拠が弱いとされる。またあるものは「ダイーフ　ジッダン（とても弱い）」と呼ばれて、正しくはないとされている。また誰かがわざと作ったと考えられているものは「マウドゥーワ（作られているもの）」と呼ばれている。

クルアーンとハディースのオリジナルと言われるものは数多く残っている。アラビア語話者ではない人々には、翻訳書が必要である。クルアーンとしては２つの翻訳が推奨できる。１つは英語で書かれたクルアーンの意味の翻訳書であり、注釈がつけられている。著者はアルヒラーリ師とハーン師の『聖クルア

---

[1] 実は、ハディースには預言者ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）のマナーの特徴まで語られることもある。彼の人生の生活の細部まで書かれている。

ーンの意味の翻訳』である[1]。またもう１つはアラビア語のテキストに合わせそれにあたる英語の翻訳をつけた本で、タイトルは『クルアーン-アラビックテキスト-』である[2]。２つの翻訳書は、クルアーンの原始の正しい理解に基づいているため、推奨できると思われる。

クルアーンを深く理解するには、解釈書も読む必要がある。残念なことには、他の言語での良い翻訳書はたくさんあるが、英語での優れた解釈書は少ない。英語でお勧めできるクルアーンの解釈書は、『イブン・カスィール解釈書』（短縮版）である[3]。それはイブン・カスィール師（ヒジュラ暦 1301 年～1372 年）のクルアーンの略解釈の翻訳書である。そして、アッザハビー師は、彼の書いたクルアーンの解釈研究書の中で、この書は解釈書としては最良のものであると評価している[4]。イブン・カスィール師のクルアーンの解釈は、彼の師イマーム　イブン・タイミーヤ師の解釈に基づいている[5]。この解釈の弱点は、

---

[1] ムハンマド　アルヒラーリとムハンマド　ハサン　ハーン著『タルジャマトゥ　マアーニー　アルクルアーン　アルカリーム「聖クルアーンの意味の翻訳」：訳者注）』キング　ファハド　クルアーン出版センター、マディーナ、サウジアラビア。センター以外の出版物もあり、またネット上でも閲覧が可能である。

[2] サヒーフ　インターナショナル編『アルクルアーン-アラビア語と英語の対訳-』、アブー・アルカースィム出版、ロンドン、イギリス、1997 年。

[3] イブン・カスィール著『タフスィール　イブン　カスィール「イブン・カスィール解釈書（短縮版）」』ダールッサラーム出版社、リヤド、サウジアラビア、2000 年。

[4] ムハンマド　ホセイン　アッザハビー著『アッタフスィール　ワ　ムファッスィルーン「解釈と解釈者」：訳者注）』ダール　アルクトブ　アルハディーサ、1976 年、p.247。

[5] クルアーンの解釈の注意事項については、次の論文を参照すること。ロイ　ヨング　ムハンマド　カーティス著『古いイスラーム文書購読の正しい分析―イブ

現代の人にとって難しい文体で書かれ伝統的手法を用いたところである。

マウドゥーディー師は 1979 年に亡くなられ、多くの著作を世に出したが、その多くが英語に訳されている。中でも『クルアーンの理解に向けて』は、英語で書かれた総合的なクルアーン解釈書である[1]。元の著作の目的は、パキスタンやインドのウルドゥー語話者のためのクルアーンの解釈書であり、一般の人々のために分かりやすく記述されている。彼の業績には様々な評価がされており批判もされたが[2]、依然として総合的な本として評価されている。

知識を求めている人のためにもう１つの良い本がある。それは『意味の解釈』で著者はイクバール　ズヘール師である。彼は現在も活躍している客観的な視点を持つ研究者である。

ハディースたる預言者ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）の言行録は、英語で書かれた２つの記録に収めら

ン・カスィールのクルアーン解釈書の序文分析を中心に—』ミシガン大学の博士論文、1989 年。

[1] アブー・アルアーラー　アルマウドゥーディー著『マアーニー　アルクルアーン「クルアーンの意味」：訳者注）』イスラーム印刷所、ラホール、パキスタン、1982 年。

[2] マウドウーディー師はクルアーンを理解するために、預言者ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）を重要視している。しかし、彼の論証は、ハディースに基づいていないために批判された。そして、論証に使われたハディースも「サヒーフ（正しい」」のレベルではなかった。珍しいことに預言者の教友の解釈を中心に出している。特徴は、原始イスラームの理解に合わない解釈をしている点である。

れている。『サヒーフ　アルブハーリー[1]』、『サヒーフ　ムスリム』の２つである[2]。

最後の審判の日が訪れるまで、イスラームの教えは人々の要請に応えることができるということをすでに述べた。しかし、アッラーはクルアーンとスンナに全てのことを明確に表したわけではない。アッラーは、ムスリムたちが自分でその行間から教えを見つけるように、理解の余地を残した。クルアーンにははっきりと示された文章ばかりではない。そのため、ムスリムは自分自身で学び考え、答えを見つける努力が必要である。ムスリムはクルアーンとスンナについて学ばなければならない。それには、イジュティハード（اجتهاد　結果に到達するまで努力すること）が必要となる。

もちろん、イジュティハードには必ずしも問題がないわけではない。真理は同じであるが、それぞれの学者たちが到達した結果が異なってくることもあるからである。なぜならば、それぞれの学者は、次のハディースにあるように、アッラーからの恩恵を授かるであろう。ハディースによれば預言者は次のような言葉を残している。

「支配（指導）する者は、一生懸命努力しなければならないが、良い結果が得られた場合には、２つの恩恵があるだろう。努力

[1] アブドゥルハミード　シッディーキー著『タルジャマトゥ　サヒーフ　ムスリム（「サヒーフ　ムスリムの翻訳」：訳者注）』アッシャイフ　ムハンマド　アシュラフ出版社、ラホール、パキスタン。これはよく知られた本である。
[2] ブハーリーとムスリムの伝承による。

したこととその結果に対してである。努力したけれども間違った結果に終った場合には、１つだけの恩恵となる。[1]」

ここでの支配（指導）を学者に置き換えれば、これまでの学者の努力の結果が絶対的に正しいことである必要はないとも言える。個人のイジュティハードは、クルアーンとスンナに依拠してどこまで合致しているか、熟考する必要がある。重要なことは、ムスリムは常に自分の目標をクルアーンとスンナに置き、それに合った真理に従うことである[2]。

時代の変遷の中で、学者たちはクルアーンとスンナに基づいて、規則や決まりを記録していった。またその決まりを吟味し、クルアーンとスンナに出てきてはいない個人的なイジュティハードを厳選したり研究したりした。学者たちの努力は続き、彼らのイジュティハードによって、各学派ができてきた。これら学派の意見がイスラームのシャリーアの源泉になるとは言えないけれども、ムスリムがそれらの内容について把握することは大事である。なぜならば、それぞれ各学派の見解に触れることができるからである。

最も有名な学派には、４つあり、その設立者の名前を冠している。

---

[1] サヒーフ　アルブハーリの伝承による。ハディース No.7352。

[2] もう１つの重要な源泉がある。イジュマー（多くの人々が一致すること）である。これを裏付けるハディースがある。
「私のウンマ（国、民族、連帯）は、間違ったことに対しては同意しません。」
これはティルミズィーの伝承によるアルバーニー師が訂正したハディースである。１つの問題についてウンマの学者が一致した場合、そのイジュマーには正当性があると考えられる。

●ハナフィー学派

アブー・ハニーファ師（H.[1] 80～150 年、西暦 699～767 年位）は、イラクで暮らし、ハナフィー学派と呼ばれる学派の基礎を築いた。今日、ハナフィー学派はトルコ、パキスタン、インド、アフガニスタン、旧ソ連の国々、中近東のムスリムの間に広がっている。

●マーリキー学派

マーリク・イブン・アナス師（H.95～179 年、714～795 年位）は、預言者の街であるマディーナ・アルムナウワラで一生を暮らし、マーリキー学派を形成した。今日、北アフリカ、サハラ地帯に広がっている。またスペインのアンダルスのムスリムの間にも広まった。

●シャーフィイー学派

ムハンマド・イブン・イドリース・アッシャーフィイー師（H.150～204 年、767～819 年位）は、預言者と同じクライシュ部族出身で、各地で暮らした後にエジプトに定住し、アッシャーフィイー学派の基礎を築いた。今日、マレーシア、インドネシア、中東の一部に広がっている。

●ハンバリー学派

アハマド・イブン・ハンバル師（H.164～241 年、781～855 年位）は、バクダードで暮らしハディース学問を発展させた

[1] （H.はヒジュラ暦を指している。ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）がマッカからマディーナへ遷都した日をヒジュラ暦元年（西暦 622 年９月）としている。：訳者注）

有名な学者として影響力を持っていた。ハンバリー学派は、サウジアラビア及びアラビア半島東部に広がっている。

ここで重要なのは、それぞれの派の違いから見解の相違も生じてくると理解する必要があるということだ。見解の相違には、重要な以下のポイントがあり、ムスリムはそれを認識しなければならない。

第一のポイントは、ムスリムの本来の目標は真理の把握であるから、どのような場合においても、その真理を探りそれに従う努力をする必要があることである。クルアーンとハディースに書かれたことを元に真理を求め、アッラーに仕（つか）える力を得ることである。人間は、真実や正しい見解に従うかどうか、そこで試されるわけである。

第二は、学派により相違があることは必然的なことである。人間は一生懸命アッラーの恩恵を受けようと誠実に努力はするが、受け入れられない結果で終わることもある。しかし、一生懸命努力した人は、クルアーンとスンナから完全に逸脱したわけでなく、ある程度の裏付けがあるならば、その人の努力を尊重しその人も評価されるべきである。アッラーのために努力するというニーヤ（意志表明）がある限り、報いられると考えるべきなのである。それによって、その研究者と違う見解を持ったり、ある人の見解と違うと反駁したりする必要のある場合にも、イスラームの博愛の精神に基づいて、行動するべきである。それによって皆が分離するようなしこりを残してはいけない。

クルアーンとスンナとイジュティハードは、今日の法律の源ではない。法律とは関係のない価値観、道徳観とは違う要素も入るからである。すなわち、イスラームのシャリーアの源は、単なる法律の基礎になるのではなく、ムスリムの人生の隅々における行動や振る舞いの源泉なのである。例えば、クルアーンやスンナでも触れられている両親と隣人のコミュニケーションの問題は本書でも取り上げたが、今日の法律に関して言えばこういったことは取り上げられるテーマではないであろう。つまり、学者がイスラーム法の源泉としているクルアーンとスンナは、現世の人生の全ての場面におけるマナーをガイドするための総合的な源泉であると言うことができるのである。

３．イスラームのいくつかの目的

イスラームの教えは、調和と思考を欠いた単なる祭祀と奥義ではない。啓示は明らかな目標を指し示している。イスラームの目標は、以下のことである。番号にそって述べていこう[1]。

（１）神の唯一性

（２）物質崇拝からの解放

（３）地上の人生をいかに正しく豊かにするか

（４）正義、抑圧を禁ずること

（５）真の平和

（６）イスラームの目的について　終わりの一言

[1] （本書は番号ごとに記述されていない。：訳者注）

（１）神の唯一性

イスラームの最も偉大な目標と人類のための貢献の１つは、他に比べるもののないアッラーを純粋に崇拝することである[1]。それは根本的な目的で、人間の最終的な目標でもある。アッラーは告げている。

ジンと人間を創ったのはわれに仕えさせるため。

【第５１章　撒（ま）き散（ち）らすもの章〔アッ・ザーリヤート〕５６節　】

唯一の神を崇拝する以外に、人間にとってこれ以上高貴なことはない。人間を迷わせる疑問、私はどこから来て、どこへ行くのか、また私はなぜ存在し生きているのかという問いに対する答えは、唯一の神を信じることにあり、また唯一神を信じる純粋な考えにこそある。私はどこから来たのか、との問いに対して、イスラームでは人間はアッラーの創造されたものの１つであるとしている。アッラーは人間を最高の存在となるようにし、高い階層としての自由も与え、一方一番下の階層へと堕ちる選択の自由も与えている。

本当にわれは、人間を最も美しい姿に創った。

【第９５章　無花果章　〔アッ・ティーン〕４節】

---

[1] イスラームの本旨は唯一神アッラーを信じることで、本書では様々な箇所で触れている。

　それからわれは、かれを最も低く下(さ)げた。

【同章　５節】

　信仰して善行に勤(いそ)しむものは別である。かれらに対しては果(は)てしない報奨があろう。

【同章　６節】

　我々はどこへ行くのかという問いに対する答えとしては、人間は創造者である神の許に向かって行き、神に出会うと言えるであろう。人間が自分自身の人生と別れてからのことであるが、それは逃げ場のない出会いである。その際に、人間は公平に裁かれる。自分の人生で行った全てのことが秤にかけられる。それに関してアッラーはクルアーンにて告げている。

　その日、人びとは分別された集団となって（地中から）進み出て、

かれらの行(おこな)ったことが示されるであろう。

【第９９章　地震章〔アッ・ザルザラ〕６節】

　一微塵(みじん)の重さでも、善を行った者はそれを見る。

【同章　７節】

　一微塵(みじん)の重さでも、悪を行った者はそれを見る。

【同章　８節】

我々を創造し導いて下さったアッラーに背き、真理を拒否し裁かれると警告された人々に対し、また真理に服従し感謝し良い報奨を約束された人々に対し、慈愛深く慈悲深いアッラーの審判が行われる。

第三の質問（私の存在）に対しては、人間は唯一神を信じ崇拝するため創造されたと言える。言い換えれば、人間の存在する目的はアッラーの誠実なしもべになることである。人は、この世界において人々が望んでいる多くの目的を思いつくことができる。全ての病気をなくすこと、世界平和の実現などである。しかしそのような正統性のある目的は、最も高貴な目的ではない。その目的を実現しようとしている人々の中には、個人的な目的である場合もあるからである。例えば人々からの尊敬を受けたいなどの目的で望んでいる場合もある。そういった目的は、アッラーから離れた自分勝手な目的であるかもしれないのである。こういった目的は、真の目的である来世での永久の幸福につながる行動や精神の階層を上げることに比べると、主な目的にはならないのである。この世の中のどんなに高貴な目的も、アッラーへの純粋な崇拝の一部として行われなければならない。

人間本来の目的の実現は、来世でアッラーに出会ったとき、純粋に正しく神を信じたか、どこまで神の教えを守ったかどうかによって決められる。それがイスラームが唱えているタウヒードの意味である。多くの人々は、１つの神を信じている。しかし、時にはいろんな側面からあやふやな場面も出てくるであろう。前の時代には、子供はアッラーに属していると人々は考

えた。残念ながらタウヒードに矛盾している考え方がキリスト教によって、現在も引き継がれてしまった。キリスト教徒は、イーサー（彼にアッラーからの平安あれ）を賛美し感謝し、祈りさえするし、彼らが考えられているその父である神を忘れてしまうときすらある。キリスト教徒はそこに論理的な言い訳を作り、アッラーへの信仰の範疇を出ていないというが、実はそれは正しいタウヒードとは言えない。三位一体を唱えている人々のほとんどは、イーサー（彼にアッラーからの平安あれ）自身もその父の神と同じで、特別な存在であると唱えている。彼等は純粋なタウヒードを無くしてしまったといえるのではないか。

新ムスリムは、正しい神の唯一性の把握に時間がかかると同時に、シルク（多神崇拝）のいろいろな形があることを知るのに時間がかかるであろう。イスラームに改宗した元キリスト教徒は、三位一体の信条には多神教の一部が見え隠れするということを簡単に理解することができる。しかし、教会の神父たちの宗教上の権威を受け入れることもシルクの一種であるとは、気が付きにくいのかもしれない。なぜなら神父には法を定めることも、法を無効にする権利もないからである。それは純粋なタウヒードと矛盾するからである。

かれは、アッラーをおいて律法学者や修道士を自分の主となし、

またマルヤムの子マスィーフ[1]を（主としている）。
しかしかれらは、唯一なる神に仕える以外の命令を受けてはならない。
かれの外（ほか）に神はないのである。かれらが配するものから離れてかれを讃（たた）える。
【第９章　悔悟章〔アッ・タウバ〕３１節】

イスラームというのは、完全な神への唯一性に基づく宗教である。明らかなところから細部に渡るまで、また全てのシルクの要素をなくすということでもある。新ムスリムが、その教えについて学べば学ぶほど、神の唯一性が見えてきて、精神力はますます強くなる。

（２）物質崇拝からの解放

物質崇拝からの人間の解放は、第一の目的である神の唯一性の当然の結果になるのは明らかであるが、それでもここで言及するに値する。なぜならば例えば、他の者に征服され討伐されることは、人にとって悲惨な出来事であるが、特に人がそれを受け入れて、自らの意志で服従するときは尚更のこと悲惨である。もし人間が彼と同じような人間を崇拝する立場になれば、人間の価値を落とすことになる。なぜなら、人類は人間としての同じような特性を持っているからである。それは、独裁者も

[1] （マスィーフはイーサー＝イエスのこと。：訳者注）

聖職者の場合も、同じ意味を持つといえるだろう。それはアッラーが下された教えに一致しているかどうかは別としてである。この高貴な目的について、初期のムスリムたちの二人は明確に語っている。昔のペルシャの国王が、二人に聞いた。「どうしてムスリムたちは、ペルシャにやって来たのか。」、預言者ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）の教友は次のように応えた。「アッラーは、我々ムスリムをペルシャへ送った。人間への崇拝からアッラーへの崇拝へ、狭い世界から広い世界へ、様々な宗教の不公平からイスラームの公平へ、人々を導いていく世界に変えるために。[1]」

人は他者による征服の悪を知っているはずだが、例えば学者や教養のある人からの征服にはその関係に気が付かない場合もある。教育的な征服のやり方に、自分からひざまずくこともある。このようなケースでは、表面上は偽の民主主義の形を採ることもあるのである。これらの形態の征服は悪である。そしてそれらから逃れる解決法は、アッラーは唯一絶対者であると受け入れることである。この件については後述するが、アッラーだけが正義としての法律や法令を定める者であり、アッラーだけが欲望と不公平から除外されている存在だからである。

人間が服従または崇拝したがる物質は、個人の欲望、国家、権威、または貴重な物質的な物などたくさん存在する。アッラ

[1] イスマイール　イブン・カシィール著『アルビダーヤ　ワ　アンニハーヤ（「初めと終わり」：訳者注）』ダール　クトブ　アルイスラミーヤ出版、ベイルート、レバノン、Vol.7、p.39～40。

一は、人間が好きな物を神のように崇めたりすることについて、次のように告げている。

　あなたがたは自分の虚しい願望を、神様として崇めている者を見ないか。アッラーは御承知のうえでかれを迷うに任せ、耳や心を封じ、目を覆われた。
アッラーに見放された後、誰がかれを導けよう。あなたがたは、これでも訓戒を受け入れないのか。
【第４５章　跪く時章〔アル・ジャーシヤ〕２３節】

　預言者ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）は、こうも言っている。
「ディルハムやディナール（お金）の奴隷は、なんと愚かな者でしょう。そして、ハミーサ（豪華な服）の奴隷もまた。人間は、なにかもらった場合は感謝します、もらえなかった場合は不満になります。・・・[1]」
　実は、こういったことは、物質主義の一種である。イブン・タイミーヤ師は言う。「手に入れると満足し、手に入らない場合は不満になる。こういった人間は自分の欲望の奴隷である。なぜなら、これは心が物質主義に侵されているからである。奴隷の境遇であったとしても満足している場合心は自由である。

[1] ブハーリーの伝承による。

しかし本当に自由な人であったとしても自分の欲望に縛られている限りは、それはまた奴隷のようなものである。[1]」

心を縛る全ての欲望から自由になることで、イスラームは人間を全ての虚偽から解放している。アッラーと人間の強い絆を結ぶことによって、心はそのような物質主義から解放されるのである。（これについては後述する。）即ち、人間はアッラーの受容のために一生懸命努力するべきで、アッラーの意志に反することは、受け入れられないのである。

このようなイスラームの視点は、新ムスリムにもすでに理解されているかもしれない。なぜならイスラーム入信前には、彼等は物質主義に縛られた状態にあったからである。物質主義を信じ込んでいたために、それを得るために何でもしようという気持ちだったのである。その目的が人々の性格を形成している。手に入れた時だけに幸福を感じるような、物の奴隷だったのである。入信することによって、物質主義的な行動が、アッラーの唯一性から離れさせる原因だったのだと気付いたのであろう。

（３）地上の人生をいかに正しく豊かにするか

イスラームは、人間の身体と精神の両面の要求に応える宗教である。人間には、物質面と精神面の両面がある。片方だけに偏ることはない。そのため人間はこの両面についてのガイドを必要としている、２つのバランスが崩れたり、お互いの衝突が

[1] アハマド　イブン・タイミーヤ著『リサーラ　フィー　アルウブーディーヤ「アッラーに仕えることの概念について』：訳者注）』アルヒダーヤ出版社、バーミンガム、イギリス、1999 年、pp.100～101。

起こったりすると、人間は本当の幸福感を得られなくなる。例えば、精神面ばかりに興味を注ぎ、人生における物質的な面を無視している人もいる。人間は自然の一部なので、自分自身で自ら気がつく時がくるかもしれないが、そのような人は、軽視している物質的な欲求から自分を解放することはできないために、自分の中で葛藤が起こる。一方、社会システムや経済的な仕組みが、人間の物質的な要望に応える場合もある。資本主義は、世界に最も良いと言われる金融システムをもたらしたと言われるが、そのようなシステムも、人間にとっては大きなマイナスとなる場合がある。物質的な充足があったとしても、それだけでは精神的な空白も生み出すのである。

　アッラーは、次のアーヤにあるように人間を代理者に決めた。

　またあなたの主が（先に）天使たちに向かって「本当にわれは、地上に代理者を置くであろう。」と仰（おお）せられた時を思い起こせ。

かれらは申し上げた。「あなたは地上で悪を行い、血を流す者を置かれるのですか。」

わたしたちは、あなたを讃（たた）えて唱念（しょうねん）し、またあなたの神聖（しんせい）を讃美（さんび）していますのに。

かれは仰せられた。「本当にわれはあなたがたが知らないことを知っている。」

【第２章　雌牛章［アル・バカラ］３０節】

イスラームの立場から言えば、アッラーは人間を地上での代理者にしており、この人生で豊かな人生を築くために人間は地上の資源を有効に利用しなければならないとされている。そうすることによって、人は来世でもきっと豊かで幸せな人生を生きることができる。次のアーヤは、それについて語っている。

アッラーがあなたに与えられていたもので、来世の住まいを請い求め、この世におけるあなたの（務むべき）部分を忘れてはなりません。
そしてアッラーがあなたに善いものを与えられているように、あなたも善行をなし、地上において悪事に励んではなりません。
本当にアッラーは悪事を行う者を御（お）好みになりません。
【第２８章　物語章〔アル・カサス〕７７節】

イスラームで非常に大切とされている行いの１つである金曜礼拝が終わった後、人間は地上に散らばり、授かりものを求めるようにアッラーは指示している。次のアーヤである。

礼拝が終ったならば、あなたがたは方々に散り、アッラーの恩恵を求めて、アッラーを讃えて多く唱念しなさい。必ずあなたがたは栄えるだろう。
【第６２章　合同礼拝章〔アル・ジュムア〕１０節】

人間は、この世界を維持管理する責務を担っている。人間は自分にふさわしい方法で、その責務を全うする責任があるのである。人間は所有権を持っているからといって、好き放題に振る舞うべきではない。自分の欲望のため、復讐のために、その所有権を乱用してはいけない。地上の資源を浪費してもいけない。アッラーの教えに基づき、次の節にあるように、その責務を果たすべきなのである。

（かれに協力する者とは）もしわれの取り計らいで地上に（支配権）を確立し、礼拝の努めを守り、定めの喜捨をなし、（人びとに）正義を命じ、邪悪を禁ずる者である。
本当に凡（すべ）ての事の結末は、アッラーに属する。
【第２２章　巡礼章〔アル・ハッジ〕４１節】

またもっと明確にイスラームの教えを示すクルアーンのアーヤ（節）がある。そこでも、アッラーは地上での汚職や不正を禁止している。例えば、次のアーヤもそれに触れている。

アッラーがあなたに与えられたもので、来世の住まいを請い求め、この世におけるあなたの（務むべき）部分を忘れてはなりません。
そしてアッラーがあなたに善いものを与えられているように、あなたも善行をなし、地上において悪事に励んではなりません。

本当にアッラーは悪事を行う者を御好みになりません。
【第２８章　物語章〔アル・カサス〕７７節】

　また第７章にも次のようなアーヤがある。

　秩序が定められた後、地上で悪を行なってはならない。恐れと熱情をもってかれに祈れ。
本当にアッラーの慈悲は、（常に）善行をなす者の近くにある。
【第７章　高壁章〔アル・アアラーフ〕５６節】
　またかれは、アードの民の後をあなた方に継がせ、
その地に安住させられた時のことを思いなさい。
あなたがたは平地に宮殿を設け、また（岩）山に家を彫り込んだ。
だからアッラーの御恵を心に銘じて、悪を慎み、地上を乱してはならない。」
【同章　７４節】

　汚職や不正などをしない人生を送った人に、アッラーは良い報奨を約束された。

来世の住まいはこのようなもの。地上において、威張（いば）りたがったり、悪を行（おこな）わない者にこれを授ける。善果は主を畏れる者にある。

【第２８章　物語章〔アル・カサス〕８３節】

アッラーは、審判の日に人々がアッラーの前に立つとき、地上で悪を広めた人と善を広めた人とを同じようには扱わない。

またその外に、スラーイマーンの命令に服さず鎖に繋（つな）がれた者もいた。

【第３８章　サード章　３８節】

最もひどい地上の腐敗・不正は、人間がアッラーから下された啓示に背中を向けることであり、人々が自分の欲望のまま振る舞うことである。アッラーとその導きに対抗することは、人間の精神、家族、社会、全ての創造された世界を破壊することを意味している。そしてアッラーへの真の信仰が人びとの心から抜け落ちた時に、残酷な不公正や悪業がはびこってくる。これはアッラーが警告し定めたことである。人は眠りから目覚め、良い方向に変更していかなければならないという忠告であり、次のように告げている。

人間が稼（かせ）いだことのために、陸に海に荒廃がもう現れている。

これは（アッラーが）、かれらの行ったことの一部を味あわせかれらを（悪から）もどらせるためである。

【第３０章　ビザンチン章〔アッ・ローム〕４１節】

残念ながら、自分の良心が目覚めているのはわずかの人々だけである。悪行が広がっていることを全て他のことになすりつけ、自分たちがアッラーの正しい道から外れたということに、殆どの人は気がついていない。最後に悪いことは、回りまわって戻ってくる。そこでアッラーは、次のアーヤを出した。

（自ら）信じないで、また（人びとを）アッラーの道から妨げた者には、

かれらが災害を広げていたことに対し、われは懲罰の上に懲罰を加えるであろう。

【第１６章　蜜蜂章〔アン・ナフル〕８８節】

またアッラーは、次のようにも告げる。

確約して置きながらアッラーとの約束を破る者、アッラーが結べと命じられたものから離れ、地上で悪を行う者、これらの者は（等しく）失敗者である。

【第２章　雌牛章〔アル・バカラ〕２７節】

（４）正義、抑圧を禁ずること

地上での人生は、正義なしには繁栄しない。正義の奨励は、イスラームの最も重要な要素となっている。クルアーンでは、アッラーはムスリムに個人の欲望や利益に反するとしても正義を行うことを勧めている。このことに関し、クルアーンにはいくつかの節で次のように書かれている。

誠にアッラーは、あなたがたが信託されたものを、元の所有者に返還することを命じられる。
またあなたがたが人の間を裁く時は、公正に裁くことを命じられる。アッラーがあなたがたに訓戒されることは、何と善美なことよ。
誠にアッラーは全てを聴き凡てのことに通暁なされる。
【第４章　婦人章〔アン・ニサーア〕５８節】

あなたがた信仰する者よ、証言にあたってアッラーのため公正を堅持しなさい。
仮令あなたがた自身のため、または両親や近親のため（に不利な場合）でも、
また富者でも、貧者であっても（公正であれ）。
アッラーは（あなたがたよりも）双方にもっと近いのである。
だから私欲に従って、（公正から）逸れてはならない。

あなたがたが仮令（証言を）曲げ、または背いても、アッラーはあなたがたの行うことを熟知なされる。

【同章　１３５節】

　あなたがた信仰する者よ、アッラーのために堅固に立つ者として、正義に基いた証人であれ。人びとを憎悪するあまり、あなたがたは（仲間にも敵にも）正義に反してはならない。正義を行いなさい。それは最も篤信に近いのである。

・・・

【第５章　食卓章〔アル・マーイダ〕８節】

　また預言者ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）のハディースでも次のように証言したという話がある。

「自分の行いの中で、イスラームにおける正義と法律を超える者はいません。」例えば、ウサーマ（彼にアッラーのご満悦あれ）は預言者にも愛されていたが、ある日彼はアッラーの決まりに対して、預言者に仲介役を頼んだ。その返答はこうであった。

「ウサーマよ。アッラーの判決に対して、あなたはシャファーア（取り成し）するのですか。我が身を御手に委ねられたお方に誓って言いますが、ムハンマドの娘のファーティマが何か盗んだとしても、彼女の手を切るのです。[1]」

　正義を成すことはどのような人にも求められる行いである。金持ちも貧しい人も子供も大人も、そして味方も敵も、ムスリ

[1] ブハーリーの伝承による。

ムも非ムスリムも。もちろん、実際に物事に向かう際にダブルスタンダードで対応するならば、本当の正義はない。ムスリムもまた皆と同じく公正な行いをするよう明示されている。それは自分自身に対しても公正であるということなのである。反対に自分自身を傷つけ害することも赦されない。それは自由の一部ではないからだ。残酷な仕打ちや不正の行為よりもひどいことだと考えられているのである。イスラームは、人間が公正のみならず、辛抱強く慈悲深く生きるよう諭している。これに関し、クルアーンには次の一節（アーヤ）がある。

本当にアッラーは公正と善行、そして近親に対する付与を命じ、
また凡（すべ）ての醜（みにく）い行（おこな）いと邪悪、そして違反を禁じられる。かれは勧告している。必ずあなたがたは訓戒を心に留（と）めるであろう。
【第１６章　蜜蜂章〔アン・ナフル〕９０節】

正義を行うこと、正義のための努力もまたイスラーム社会全体が背負う立派な任務である。それにより、ムスリムはイスラームが真理の宗教であることを証明するのである。これに関して、クルアーンには次の節がある。そこでは、次のように告げられている。

このようにわれは、あなたがたを中正の共同体〔ウンマ〕とする。それであなたがたは、人びとに対し証人であり、また使徒は、あなたがたに対し証人である。

われがあなたがたの守っていたものに対し、この方向〔キブラ〕を定めたのは、只、

踵を返す者と使徒に従う者とを見分けるためである。

これは容易ではない事であるが、アッラーが導かれる者にとっては何でもない。

だがアッラーは、あなたがたの信仰を決して虚しくなされない。

本当にアッラーは人間に対し、限りなく優しく慈悲深い方であられる。

【第２章　雌牛章〔アル・バカラ〕１４３節】

　中正（ワサト）には、正義という意味もある。また均衡のとれた行動をとり、残酷で不公正な行為を伴う極端なことを常に避けることでもある[1]。

　要するに、正義とアッラーから下された啓示の関係はとても重要であり、アッラーは偏りのない唯一の存在であり、それを正義と呼ぶのである。アッラーは、弱いものの上に強いものを特に優先するとか、ある人々の上にある人々を位置づけるというような戒律を創ったりはしない。アッラーだけは、公正な判決を下す総合的な力を持つ存在である。人間は、良心的な側面もあるが、自分の全知識を傾けても不足するところがあり、不公平な決まりを定めるということも起こるであろう。人間が真に正義を望むならば、アッラーが下された決まりに従うしかな

[1] コルトビー著　前掲書、Vol.2、p.153 参照。

い。そこで、イブン・カイイム師は、こう述べている。「アッラーは預言者を遣わされ、空と大地の土台になっている正義を実現するための聖典を下し、正義が必要な場面では、人々はアッラーのシャリーアに頼るしかないのである。[1]」

幸いに、人間の思惑とは関係なく、銀河の動きもまたアッラーからの正義と真理の下にある。

もし真理が、かれらの欲張（よくば）りに相応しいものなら、天地とその間の凡（すべ）てのものは、（混乱し）退廃してしまったであろう。・・・

【第２３章　信者たち章〔アル・ムーミヌウン〕７１節】

イスラームが唱えている正義は、現世から来世までの全てをカバーしている。アッラーは、しもべたちを公正な方法で裁き、一微塵の重さでも人を抑圧しない。人間は、自分の兄弟であろうとも、彼らが残した重荷を受け継がない。そしてまたアッラーは、人間に無理な重荷を課すことはない。これはアッラーの正義でもある。アッラーは、クルアーンで何度も重ねて告げている。

[1] イブン・アルカイイム　アルジャウジィーヤ著『（アットルク　アルヒカミーヤ　フィー　アッスィヤーサ　アッシャライーヤ「シャリーア法における判決法」：訳者注）』ダール　アルクトブ　アルイルミーヤ出版社、ベイルート、レバノン、p.14。

　言ってやるがいい。「アッラーは凡てのものの主であられる。わたしがかれ以外に主を求めようか。」
各人はその行いに対する以外に、報酬はないのである。重荷を負う者は、外の者の重荷を負わない。やがてあなたがたは、主の御許に帰るのである、
その時かれはあなたがたの争ったことに就いて、告げ知らせられる。
【第６章　家畜章〔アル・アンアーム〕１６４節】

　誰でも導かれる者は、只自分の魂を益するために導かれ、また誰でも迷う者は、只自分を損うために迷う。
重荷を負う者は、他人の重荷を負うことは出来ない。
われは（警告のため）一人の使徒を遣わさない限り決して懲罰を下さない。
【第１７章　夜の旅章〔アル・イスラーゥ〕１５節】

　アッラーは誰にも、その能力以上のものを負わせられない。（人びとは）自分の稼いだもので（自分を）益し、その稼いだもので（自分を）損う。
・・・
【第２章　雌牛章〔アル・バカラ〕２８６節】

・・・

アッラーは、誰にもかれが与えられた以上のものを課されない。アッラーは、困難の後に安易を授けられる。

【第６５章　離婚章〔アッ・タラーク〕７節】

　正義は、奪われた権利を取り戻すというようなポジティブな面だけに当てはまることではなく、マイナスの面にも当てはまり、他人に対する抑圧を禁止している。なぜかといえば、イスラームは他人に対する抑圧については、非常に重要視しているからである。そのため、預言者ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）はハディースの中で、アッラーはこう告げられたと言っている。

「しもべたちよ。不正行為は自分に対しても禁止しており、あなたがたに対してもしてはいけない。[1]」

　イブン・タイミーヤ師は、「それは恐らく宗教の全ての教えに含まれている。アッラーが禁止したものには、全ての不正行為が含まれている。一方、禁止されない場合は、全て正義である。」と述べている[2]。アッラーは、クルアーンの中でこう告げている。

**　実にわれは明証を授けて使徒たちを遣わし、またかれらと一緒に、啓典と（正邪の）秤（はかり）を下した。**

---

[1] ムスリムの伝承による。

[2] イブン・タイミーヤ著『アルマジュムーア（「蒐集」：訳者注）』Vol.18、p.166。

それは人びとが正義を行うためである。

またわれは鉄を下した。それには偉大な力があり、

また人間のために種々の便益を供する。

それはアッラーが、密（ひそか）にかれを助ける者、また使徒たちを助ける者を、知っておられるためである。

本当にアッラーは強大にして偉力ならびなき方であられる。

【第５７章　鉄章〔アル・ハディード〕２５節】

そのために、アッラーは使徒を遣わされ、聖典を下され、人々が正義を行うための基準を設け、その灯火（ともしび）の元で暮らしていけるようにした。正義と真実を行うために鉄槌（てっつい）を下され、聖典は正義へ導き、鉄や刀はその実現のために使うこととなる。

正義とイスラームの間には、重要な関係がある。人間は正義に基づいて生きていくためには、正しい行為をするための内的な原動力が必要となる。なぜならば、人間は、自分の財産、家族、民族、地位が危ない場面に遭遇すれば、簡単に真理から外れかねないものだからである。

多くの人々は、他人が起こした不正行為には簡単に気付くが、自分が行った不正行為には、なかなか気付かないものである。このような場合、欲望が真理を知ることを妨げている。しかし、人間の心に正しい信仰があれば、この状況は違ってくるであろう。人は、アッラーが彼に望んでいることが正義だと気付くからであり、アッラーは、人間のニーヤ（意志）やあらゆる細か

い行動を把握しているということを意識するからである。アッラーは、正義を命じ、そして全ての不正行為を禁止する。本当の信者は、自分の欲望や財産、家族、国など、アッラーが望むことよりそれらを優先することはないだろう。アッラーこそが正義そのものである。人間（ムスリム）はいつかアッラーに出会うことを承知している。そして、純粋な良心でアッラーにまみえるということも知っている。そのために、正義への努力をするわけである。

今日、多くの入信した新ムスリムは、エゴイズムの精神が圧倒的に支配する社会に住んでいる。その中で正義は、人間の欲望によって損なわれてしまった。イスラームにはそういった側面はなく、ムスリムには真実と正義を行うために、勇気と自信を持つことが要求されている。

（５）真の平和

アッラーから下された光と導きは、真の平和への道であると、クルアーンには次のように告げられている。

啓典の民（ユダヤ、キリスト教徒）よ、われの使徒（ムハンマド）が正（まさ）にあなたがたの処（ところ）へ来た。
あなたがたが啓典（律法（りっぽう）、福音（ふくいん））の中の隠してきた多くのことをあなたがたに解明し、また多くのこと（必要ではないもの）を解明しないままに。

アッラーからの御光と、明瞭な啓典が今正にあなたがたに下ったのである。

【第５章　食卓章［アル・マーイダ］１５節】

これによってアッラーは、御好みになるものを平安の道に導き、

・・・

【同章　１６節】

アッラーは人類を、永久の幸福の家に招待している。それに関しての（アーヤ）節が次である。

本当にアッラーは、人を平安の家に招き、また御好みになられた者を正しい道に導かれる。

【第１０章　ユーヌス章　２５節】

完全な平和と真理は、それぞれの人が内面の平和を獲得する時に、実現される。それは、アッラーに完全に正しく帰依することによって、成就する。それが本当の人生、本当の生き方であり、人間社会の気質に合致する生き方である。アッラーは次の章でこう告げている。

信仰するものよ、アッラーとその使徒が、

生命を授けるため、あなたがたを呼ばれる時は、打ち解けて答えなさい。

・・・

【第８章　戦利品章〔アル・アンファール〕２４節】

アッラーをよく知ることによって、心に満足感が生まれ根付く。人間はもし自分の創造者である神を知らなければ、自分が生きている間中、自分の魂が本来あるべきところを求めて、捜しても見つからない所でそれを探し求めることになる。心と魂には、信仰が根付くまで、人間は真の満足感を知らないであろう。世の全ての宝であっても、人間に真の満足を与えられないであろう。預言者ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）は、

「豊かであるということは、財産がたくさんあるからではなく、それは精神が豊かであるということです。[1]」

と言っており、別のハディースにおいても次のように教えている。

「豊かという意味は、心が豊かであるということで、貧しさとは心の貧しさです。[2]」

人間は内面の平和を獲得し、精神が内面の葛藤から解放された時、正に他の人（家族、親族、隣人、社会）と健全なコミュニケーションをとることができる。これは全人類にも広がるようなイスラームの社会的な基礎である。人間はお互いに、平和的な共存が保たれるような方法で、義務と権利の関係に基づき

[1] ブハーリーとムスリムの伝承による。
[2] イブン・ヒッバーンの伝承による。アルバーニー師は、正しいハディースであると述べている。アルバーニー著　前掲書『サヒーフ　アルジャーミャー　アッサギール』ハディース No.7816。

コミュニケーションをとる[1]。例えば、子供たちは親に対する義務について、両親は子供に対する義務について知るべきである。夫婦も競争相手ではなく、伴侶として愛情や平和があふれる家を築くために、お互いに協力するべきである。アッラーはこう告げる。

またかれがあなたがた自身から、あなたがたのために配偶を創られたのは、かれの印（しるし）の一つである。
あなたがたはかの女によってやすらぎを得るよう（取り計らわれ）、・・・
【第３０章　ビザンチン章〔アッ・ローム〕２１節】

そのためにアッラーは、家族の尊厳を守るための厳しい規則を定めている。例えば、姦通、密通、中傷などの犯罪に対しての厳しい決まりがある。家は社会全体を築くための基礎であり、その家が平和でなければ社会に役立つような人の育成には無理があると言える。

イスラームの教えは、シャリーアに限るのではなく、道徳やマナーを磨くことまで続く。すなわちイスラームは、社会の人々の行動や振る舞いを律する正しく詳しい基準を示しているのである。また、お互いのコミュニケーションのルールを決め、社会の中で、お互いを尊重することも重視している。その中で、人間は、義務と権利を守る世界の要素の一部であると認識する

[1] 家族関係や夫婦関係については、詳しく後述する。

ことができる。互いの調和の気持ちによって、平和で穏やかな社会となり、人は社会の他の人々のことも配慮することになる。

イスラームの本当の教えが実施されれば、人間は、まず内面と、社会全体の平和を必ず獲得できる。正義が行われない限り、世界平和も実現しない。最近、多くの人々がその事実を認識し、正義がなければ平和もないということを確信するようになった。正義は戦争を始める口実のスローガンに使われがちである。政治や経済、民族の利益、国の利益を超える人間の精神が高貴にならない限り、正義と平和な社会は無理であろう。正しい正義は、人間がアッラーのシャリーアを行う時や、決定の際に欲望とエゴイズムから解き放たれた時にしか、実施されない。アッラーを信仰し、シャリーアに従うことによって永遠の平和が実現される。アッラーは告げている。

本当にアッラーは、平安の家に招き、また御好（おこの）みになられた者を正しい道に導かれる。

【第１０章　ユーヌス章　２５節】

（６）イスラームの目的について　終わりの一言

人間は、イスラームの目的は人間が互いに密接な関係があることに気が付くであろう。これは論理的なことである。なぜならば、真理の唯一性には根本的なルーツがあるからだ。人間は、イスラームの唯一性の教えに帰依するならば、物質的な崇拝や偶像崇拝からも解放される。それはこの世の中で、人類の文明

や社会の利益のために生きることになる。正義を実現するために努力し、自分にも他者にも不正をしないよう心がけるからである。そうすることにより、真の平和が見つかる。他の人にも真の平和を届けることができるのである。しかし、それは正しいタウヒード（神の唯一性）に基づく内面の心情からスタートしなければならない。人間はアッラーのみに仕え服従し、この自分の人生で宗教に関する行為を誠実にし、全てがアッラーのために純粋な行いでなければならない。

人間は、イスラームのタウヒードをまず理解し受け入れて実施すれば、自分の人生における全ての目的が実現することとなる。反対に正しいタウヒードなしでは、どの目的も表層上ですら実現されないであろう。聖クルアーンは、全部が正しいタウヒードに依拠している。イスラーム信条について書いたある著者は、「クルアーンは全て正しいタウヒードについて記している。」と書いている。「クルアーンのほとんどの章は、タウヒードの２つの要素を含んでいる[1]。ほとんどというよりは、各章にも含まれていると言ってもよいであろう。例えばある章には、唯一神アッラーについての話、その別称、その属性について記されている。またある章には、唯一の神への崇拝を勧めたり、アッラー以外の崇拝物を排除したりする部分もある。アッラーが命じたこと、禁じたこと、それを守ることによってタウヒードの話にもなる。またはタウヒードを信じている人の現世と来

[1] タウヒードとは、信者が信じている神の唯一性である。人が自分の人生において、礼拝と行為を誠実に行うことを意味している。

世の報奨の箇所もある。またアッラーに加えてシルク（多神崇拝）も信じている人に対しての現世と来世での懲罰について書いている。この懲罰については、タウヒードから外れた人々に対して行われるとも書いている。[1]」

[1] サドル　アッディーン　アビー・アルイズ著『シャルフ　アッタハウィーヤ　フィー　アルアキーダティ　アッサラフィーヤ（「原始信条におけるタハウィー師の注釈」：訳者注）』アメリカ科学イスラーム学院、p.35、出版に向けて校正中。（タハウィー師が考えた信条をタハウィーヤと読んでいる。：訳者注）

第３章　イスラームの素晴らしい特徴

１．純粋なタウヒード（唯一神を信じること）

　今まで述べてきたように、純粋なタウヒードはイスラームの素晴らしい特徴である。イスラームは、生き物や事物を神として崇めることから遠く離れている。人間には唯一の神だけがあり、１つの導きだけがあるので、人間には迷いがなく人生は明快である。

　クルアーンで、アッラーは正しい教義とその影響、またその反対のことに触れている。正しい信仰の結果実る果実と、正しくない信条の結果により起こることの違いについて、次のように記述している。

　あなたはアッラーが如何に善い御言葉に就いて比喩を上げられているかを考えないのか。
それは良い木のようなもので、その根は固く安定し、その幹は天に（聳え）、

【第１４章　イブラーヒーム章　２４節】

　（それは）主の命により凡ての季節に実を結ぶ。
アッラーは人々のために比喩を上げられる。それはかれらに反省させるためである。

【同章　２５節】

悪い言葉を譬えれば、悪い木のようなもので、地面から根が抜けて、それに安定性がない。

【同章　２６節】

アッラーは、現世の生活においてもまた来世でも、堅固な（地面に立つ）御言葉で、信仰する者たちを立たせられる。だがアッラーは悪を行う者を迷うに任せ、かれは御心のままになされる。

【同章　２７節】

イブン・アッバースの伝承によると、最も良い言葉とは「アッラーの他に神がなく」と唱えることである[1]。先に上げた説は、純粋なタウヒード、または健全な信条は、全ての善の土台に成ることを示している。それは正しい信仰の実態であり、現世においても来世においても、その人にとって実りがあるということである。しっかりしたルーツがあれば、結果も良いものとなる。一方、正しくない信条、例えばシルク（多神崇拝）は、しっかりした土台を持っていないということである。間違った教義は、蜃気楼に過ぎず、そこから信者たちには良い収穫は得られないからである。

そのため、預言者ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）の初期第一の啓示では、教義を精選することを重視し

[1] イブン・カスィール著『タフスィール　イブン　カスィール（「イブン・カスィールのクルアーン解釈書」：訳者注）』ダール　アッタイバ出版社、Vol.4、p.491。

たこと、つまりマッカからの啓示に忠実に従ったのは、不思議でもなく秘密でもない。第一の段階では、無知、間違った信条や迷信など、問題のあるいろいろな要素を取り除く必要があった。なぜならば、人間の魂がいろいろな方向に散らばって向かっていくならば、定まることができないからである。それらの不安定な魂を持った人間について、アッラーは説明している。

・・・アッラーに讃(たた)えあれ。だが、かれらの多くは分からないのである。

【第３９章　集団章［アッ・ズマル］２９節】

イスラームのある視点から考えると、イスラームの概念で考えられている神がたくさんいたとしたら、その全てを満足させる方法はないだろう。重要な１つの神だけに受け入れてくれるよう望むのが自然で容易(たやす)いのではないだろうか。実際、人は１つの明らかな目的しかないならば、それが自分の精神に深く影響を与えるだろう。人間は、目的の実現性がない場合は、きりのないたくさんの目的を求める努力をする必要はないと考えてしまうだろう。（実は人々の多くの目的は矛盾し重複していることもあり、全て実現することは不可能である。）そして、より多くの目的のために人は力を尽くす必要もない。１つの目的だけの場合は、自分自身も目的実現の可能性を簡単に測ることができる。人は、自分が望んでいる１つの目的の為に、集中し

て力を注ぐことができる。自分の道が明確で、目的も確認しやすい。そうすれば、混乱や疑問を生じさせる余地がない。本質に近づけば近づくほど、本当の安定と幸福を感じることができる。人間は本当の唯一のタウヒードを受け入れ認識した時、完全な美と恩恵の一部を感じるであろう。アッラーに創造された人間の気質に合う、信仰システムの完成の美と恩恵もまた感じるのである。

２．アッラーの宗教

イスラームは、人間が作った哲学的システムでもなく、個人が創りだした宗教でもない。なぜならば、その教えは創造者から直接啓示されたものであるからだ。イスラームは、慈悲深い神が全人類に下された指針である。崇められるに値するかどうかは、アッラーだけが承知している。哲学者たちは、アッラーの好みに合うような生き方はどのようなものかを考えることがあるが、しかし、その方法の詳細は、人間の経験や思考を超えたところにある。アッラーからの啓示がなければ、ある人間が「これはアッラーを崇拝する最高の方法である。」と言ったとしても、アッラーはその方法を受け入れられないであろう。その方法を作った人の満足はあるかもしれないが、アッラーだけが人間がしなければならない正しい崇拝の仕方を知っておられる。

イスラームだけが、アッラーが満足するような人生の正しい唯一の生き方である以上、アッラーが最終的に受け入れるような人生の唯一の方法となる。前の章でも述べてきたが、その考え方を裏付けるクルアーンの節（アーヤ）を２つ示した。

本当にアッラーの御許（みもと）の教えは、イスラーム（主の意志に服従、帰依すること）である。

・・・

【第３章　イムラーン家章［アーリ・イムラーン］１９節】

イスラーム以外の教えを追求する者は、決して受け入れられない。

また来世においては、これらの者は失敗者の類（たぐい）である。

【同章　８５節】

この視点を強調することは大げさなことではなく、本質的な課題はアッラーが受け入れるものとは何かということである。アッラーが指針を与えた以外のルートを辿る人はいないであろうし、アッラーが受け入れてくれると証明できる人もいないである。それは、証拠もなく非常識な話であろう。

３．総合性

イスラームは、様々な面で総合的な性格を持っている。ここでいうところの総合性とは、時間、場所を選ばず、例外なく全ての人に当てはまり、全ての人が実施することができるという意味である。イスラーム、またアッラーに帰依することは、地上の初期の人間アーダム（彼にアッラーからの平安あれ）から最後の人間まで、人生の本当の救いの道でもある[1]。その上に、イスラームは全ての人々、民族のためであり、最も有名な学者のためでもあり、文盲のベドウィンのためでもある。アッラーは、それに関して次のように告げている。

---

[1] 正にイスラームの総合性とは、アッラーに帰依することで、人間をも含めての全ての生物（動植物）、物質を含むのである。

本当に天にあり地にある凡ての生きものも、
また天使たちも（アッラーにサジダし）、かれらは（主の御(み)前で）高慢ではない。
【第１６章　蜜蜂章〔アン・ナフル〕４９節】

あなたは見ないのか、天にある凡(すべ)てのものが、アッラーに、サジダするのを。
また地にある凡(すべ)てのものも、太陽も月も、群星も山々も、木々も獣類も、また人間の多くの者がサジダするのを見ないのか。
だが多くは懲罰を受けるのが当然な者たちである。
またアッラーが見下げられた者を、誰も尊敬することは出来ない。
本当にアッラーは御(お)望みのことを行(おこな)われる。
【第２２章　巡礼章〔アル・ハッジ〕１８節】

７つの天と大地、またその間にある凡てのものは、**かれ**を讃(たた)える。
何ものも、**かれ**を讃(たた)えて唱(しょう)念しないものはない。
だがあなたがたは、それらが如何(いか)に唱念しているかを理解しない。
本当に**かれ**は忍耐強く寛容であられる。
【第１７章　夜の旅章〔アル・イスラーゥ〕４４節】

言ってやるがいい。「人びとよ、わたしはアッラーの使徒として、あなたがた凡（すべ）てに遣わされた者である。

・・・

【第７章　高壁章［アル・アアラーフ］１５８節】

また別の章では、次のように告げている。

われは、全人類への吉報の伝達者また警告者としてあなたを遣わした。

だが人々の多くは、それが分（わか）からない。

【第３４章　サバア章　２８節】

預言者に従っていた人たちの中には、金持ちも貧しい人も、貴族も地位的には弱き者も、知識のある者も読み書きすらできない者もいた。皆イスラームを実践する意欲があることで、アッラーに受け入れられたのである。

イスラームは、現世のことも来世のことも含んでいる。つまり、来世のことを重視するだけでなく、この世の生活を営む指針も含んでいる。前にも触れたように、イスラームの１つの目的は世界に相応しい健全な社会を設立することである。しかし、来世に関しては完全にイスラームに任せて、来世のためにこの世の正しい道を歩むしか方法はないのである。アッラーが望むならば、この世でも人々は特別な恵みを得ることもあるだろう。

しかし来世の善は、信じ深い人々のためだけにある。それに関して、アッラーは次のように告げている。

　現世の生活とその栄華を望む者には、われは現世のかれらの行いに対し十分に報いるであろう。
かれらは少しも減らされることはないのである。
【第１１章　フード章　１５節】
　これらの者は、来世の火獄の外に何もない者たちである。現世でかれらの成し遂げたことは実を結ばず、その行っていたことは、虚しいものになる。
【同章　１６節】
　誰でも束の間（のこの世の事物）を望む者には、
われも急いでかれのために、
われの欲する物をわれが望む者に与える。
それからかれのために地獄を準備する。
かれはそこで焼かれ、恥辱を被り、（慈悲を）拒否されるであろう。
【第１７章　夜の旅章〔アル・イスラーゥ〕１８節】
　しかし誰でも来世を望み、それに向かい精出し努力し、信仰する者、
これらの者の努力は嘉納される。
【同章　１９節】

われは凡（すべ）ての者に、これらの者にもまたかれらにも、あなたの主の賜物を広く授ける。
あなたの主の賜物には限界はないのである。
【同章　２０節】

イスラームは人間を構成している全ての要素に留意している。人間の魂、脳、身体、心情、行為、道徳、マナー、などである。なぜならば、人間を心の病からも、身体の病からも、社会全体の病からも、保護する目的があるからである。即ち、イスラームでは、例えば人間の心を迷わす自惚れや面子に対しても相応しい指針を与えることができる。また、食べ物や飲み物を無駄にせずに摂取するという指導もある。ズィナー（姦淫）や社会にはびこる不正から人々を遠ざける指針も授けてくれる。イスラームは本質的に、人類にバランスのとれた生活を示し、いかなる要素も無視し軽視することはない。それぞれの要素は、聞くに値する忠告に満ちている。

イスラームにおけるもう１つの総合性というのは、全ての個人的な面に及ぶことである。礼拝に始まり、道徳、マナー、行政、経済までカバーしており、軽視される要件はない。人間は気持ちを迷わすことなく、自分自身を救う指針を見つけることができる。

新ムスリムは、イスラームを受け入れることで、イスラームを特徴付けている総合性も受け入れなければならない。なぜならば、イスラームの教えには、ある箇所には従い、ある箇所に

は従わないという選択の自由はないからである。これについては、クルアーンの雌牛章では次のように告げられている。

それにも拘（かかわ）らず、その後互いに殺し合ったのはあなたがたであり、
また一部の者を生れた土地から追い出し、
罪と憎しみとをもって対立し（敵に）味方した。
またかれらが捕虜となった時、身代金（みのしろきん）を取っている。
かれらを追放したこと（自体）が、違法であるのに。
あなたがたは啓典の一部分を信じて、一部分を拒否するのか。
凡（およ）そあなたがたの中（うち）こんなことをする者の報いは、現世における屈辱でなくてなんであろう。
また審判の日には、最も重い懲罰に処せられよう。
アッラーはあなたがたの行うことを見逃されない。
【第２章　雌牛章［アル・バカラ］８５節】

これらの人びとは、来世の代りに、現世の生活を購（あがな）った者である。
結局かれらの懲罰は軽減されず、また助けも得（え）られないであろう。
【同章　８６節】

例えば、人はイスラームの教えのなかで礼拝や心情だけに限定し、結婚やビジネスの取引に対して教えを拒否するということはできない。人が一朝一夕で完全なムスリムになるというこ

とは期待するのは無理がある。それでも、最終の目的はその人自身が真のムスリムとなり、イスラームの本質を身に付けることである。イスラームの総合性は、人間の生活全てを網羅するアッラーから下された宗教であるという印（しるし）を示している。人間は、多くのいろいろなグループの一員だったとしても、この創造された世界全部を把握することはできない。また人生のあらゆる局面において、総合的な指針が出せるまでの能力はない。

サイイド　クトブ師は、次のように述べている。「人間は自ら何かのイメージを浮かべる時、または実生活のやり方を考える際に、部分的な思考をするものである。彼が考えたことは、ある時代に当てはまるとしても、他の時代には当てはまらない。またある場所には有効でも、他の場所には使えない。１つのケースには応じられても、別のケースには合わない。あるレベルには有効でも、別のレベルには無効である。その上に物事を取り扱ったときに、１つの物事を全ての側面から考えるのではない。なぜならば、そのような考えは、時代と場所に縛られており、いろいろな要因も絡んでおり、加えて思考の甘さ・弱さも加わっているからである。この２つは人間的な特徴である。[1]」

人間の考えには、灯台のように人を導いてくれる哲学があっても、全てに亘る総合性があるということは考えられない。やはり部分的で、一時的なものであろう。人間が作った哲学思想

[1] サイイド　クトブ著『ハサーエス　アッタサウリィル　アルイスラーミー　ワムカッフィマーティヒ「イスラームのコンセプトとその特徴」：訳者注）』アメリカントラスト出版、1991 年、pp.85～86。

には、不足するところもあり、変革のための混乱を起こし、矛盾やこじつけも生じるものである。

４．現世と来世の重視

イスラームは以前にも触れたように、来世のみ、あるいは、この人生においての「精神面」だけを重視する宗教ではない[1]。イスラームは何よりも、現世も来世も同様に人間の幸福を望む宗教である。これについては次のアーヤ（節）がある。

誰でも善い行いをし（真の）信者ならば、男とでも女でも、われは必ず幸せな生活を送らせるであろう。
なおわれはかれらが行（おこな）った最も優れたものによって報奨を与えるのである。
【第１６章　蜜蜂章〔アン・ナフル〕９７節】

多くの学者がイスラームのシャリーアの研究をしているが、その決まりはこの現世において、特定の目的を実現するためのものである。（来世の明らかな目的もそうであるが。）人間の現世での「欲望」や「要望」は、３種類に分類できる。１つは人生にとって欠くことのできない必需的な要素である。これな

[1] 創造者と創造された者の間の強い絆について、この関係が現世においても精神面から外れたと見る必要はない。ここでは物質面と精神面を伝統的なやり方で区別しておこう。

くしては、人間は実生活を送ることさえ困難になり、死を望む程の悲惨な状況に陥る。その次は、人間がより良い人生を送るために必要な要素である。最後の贅沢な要素については、これがなくても人生が耐えられるという程のものである。

創造者であるアッラーから下されたイスラームのシャリーアでは、人生のための本当の必需的な要素を規定している。イスラーム法と、その行間に置かれた智慧を勉強していくにつれ、イスラーム法は、必需的な要素を選定するために創られたものであると気付く。これに関して十分な保護を確保した後、人生にとって次に必要な要素に応えるようにする。そして、必需、必要な要素を確保した後、イスラームでは最後にくる贅沢な要素について、人類の生活をよりスムーズにするために、新たな決まりが出て来るのである。３種類の要素全てについては、ここで深入りする紙面もないので、イスラームのシャリーアが決めた人生の５つの必需的な要素について述べることにする。宗教、生命、子孫（家族関係）、脳（思考能力）、お金（財産と所有物）についての次のようなスーラがある。

言ってやるがいい。「さて、わたしは主があなたがたに対し禁じられたことを、読誦しよう。
かれに何ものでも同位者を配してはならない。
両親に孝行であれ。
困窮するのを恐れて、あなたがたの子女を殺してはならない。
われは、あなたがたもかれらをも養うものである。

また公けでも隠れていても、醜い事に近付いてはならない。

また、アッラーが神聖化された生命を、権利のため以外には殺害してはならない。

このようにかれは命じられた。恐らくあなたがたは理解するであろう。

【第６章　家畜章〔アル・アンアーム〕１５１節】

　孤児が成人に達するまでは、最善の管理のための外、あなたがたはその財産に近付いてはならない。

また十分に計量し正しく量れ。

われは誰にもその能力以上のことを負わせない。

またあなたがたが発言する時は、仮令近親（の間柄）でも公正であれ。

そしてアッラーとの約束を果しなさい。

このようにかれは命じられた。恐らくあなたがたは留意するであろう。

【同章　１５２節】

　本当にこれはわれの正しい道である、それに従いなさい。

（外の）道に従ってはならない。それらはかれの道からあなたがたを離れ去らせよう。

このようにかれは命じられる。恐らくあなたがたは主を畏れるであろう。」

【同章　１５３節】

必需的要素の中の最も重要なことは、宗教であるとみなされている。イスラームからすれば、人は正しい宗教を信じ、アッラーと健全な関係がなければ、健全な人生を手に入れることはできないのである。そのため、人間は宗教のために自分の人生を犠牲にしても良いとまで思う覚悟が必要であろう。アッラーは、次のように告げている。

死んでいたものに、われは生命を授け、また光明を与える。
これによって人びとの間を往来する者と、
暗黒の中にあってそれから出られないような者と同じであろうか。
このように不信者には、その行（おこな）っていたことを立派だと思わせるのである。
【同章　１２２節】

イスラーム法あるいはシャリーアの決まりの多くは、まずは宗教信条を守るためのものである。例えば、集団礼拝の決まり、その他の宗教に関してである。第二の要素は、人生の決まり事そのものである。例えば、報復（キサース）の判決も死刑の罰もイスラーム法の一部であるが、その狙いは単なる罰を実施することが目的ではなく、狙いは人間の生命を守るために決められたものである。

この報復（の掟）には、あなたがたへの生命（の救助）がある。思慮ある者たちよ、恐（おそ）らくあなたがたは主を畏れるであろう。

【第２章　雌牛章〔アル・バカラ〕１７９節】

家族関係について、例えば、姦通、密通、中傷などについて、厳しい罰則について触れた箇所がある。お金に関しては、ある決められた状況下では盗人は手を切られるということも行われるなど、規律を破る者に対しては、厳しい罰を定めている。またお金の浪費についても、正しい方法で財産を守ること、またリバー（利息）についての忠告もしている。また人間としての正しい思考力を守るために、頭を麻痺させる全てのものを神は禁止された。

５．シンプルな教え

イスラームのシャリーアの明確な側面の１つには、積極的な成果の達成を指向しつつ、人々が困難を避けて安らかな人生を送る方法も同時に示されている。全ての目的がここにつながっているともいえる。また、バランスのとれた正義や慈悲なども含めて、数え切れない目的もある。そのような目的を実現する中で、慈悲深く全能のアッラーは、人間のために穏やかな人生を送るためのシャリーアの決まりを定めて下さった。多くのク

ルアーンのアーヤ（節）は、困難な時の重要な点について触れている[1]。次のようなアーヤがある。

アッラーは誰にも、その能力以上の物を負わせられない。（人びとは）自分の稼いだもので（自分を）益し、その稼いだもので（自分を）損なう。

・・・

【第２章　雌牛章〔アル・バカラ〕２８６節】

これがアッラーの広い慈悲の１つである。なぜならば、人間が肩に重荷を背負った場合、それは自分の成した結果であり、アッラーに責任を転嫁することはできないのである。アッラーはまた次のように告げる。

・・・

アッラーはあなたがたに易きを求め、困難を求めない。

・・・

【同章１８５節】

---

[1] ここで困難の言葉を使用するのはふさわしくないかもしれない。どうしてかといえば、しなければならない行為には、少しの苦がつきものである。ある人にとっては、５回の礼拝が負担と困難であると言う人もいる。他の仕事や目的に向かう場合と同じで、人間は目的を実現するために、努力しなければならない。そうなると、困難はつきもので、その困難もまたためになるものである。ここでは、その意味での困難の意味ではない。人生に苦がなければ、人生は成り立たない。ここで私が言いたいのは、イスラームは意味のない益のない困難を避けているということである。

アッラーは別の各章で次のようにも告げている。

・・・・
アッラーは困難を、あなたがたに課すことを望まれない。ただし、あなたがたを清めることを望み、
またあなたがたへの恩恵を果される。恐らくあなたがたは感謝するであろう。
【第５章　食卓章〔アル・マーイダ〕６節】

アッラーの（道の）ために、限りを尽くして奮闘努力しなさい。
かれはあなたがたを選ばれる。この教えは、あなたがたに苦行を押しつけない。
・・・
【第２２章　巡礼章〔アル・ハッジ〕７８節】

アッラーは、人類への慈悲として、預言者ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）を遣わされた。彼の任務は、それまでの野蛮な人々の慣習から人々を解放するためであった。それは同時に、学者や宗教関係者による邪宗からの解放からでもあった。そのために、アッラーは預言者を次のような言葉で労っている。

　かれらは文字を知らない預言者、使徒に追従する者たちである。

かれはかれらのもっている（啓典）律法と福音の中に、記され見い出される者である。

かれは正義をかれらに命じ、邪悪をかれらに禁じる。

また一切の善い（清い）ものを合法（ハラール）となし、悪い（汚れた）ものを禁忌（ハラーム）とする。またかれらの重荷を除き、かれらの上の束縛を解く。

それでかれ（使徒）を信じる者は、かれを尊敬し、かれを助けて、かれと共に下された御光に従う。

これらの人びとこそは成功する者たちである。」

【第７章　高壁章〔アル・アアラーフ〕１５７節】

　預言者ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）はこう述べている。

「私はユダヤ教やキリスト教には遣わされず、寛容なイスラーム教に遣わされました。[1]」

　困難を避け穏やかで安らかな人生を実現するための原理は、イスラーム法たるシャリーアの全ての分野に当てはまる。イスラームに入信するために、特別な儀式的な教化を必要としない。他の人間の指導や許可も必要としない。人間は、アッラーの崇拝に対して、イスラームの原理を示す多くの規則を見つけるこ

[1] アハマドの伝承による。

とができる[1]。例えば、マッカへ行く能力を持っていなければ、あるいは他の人に経済的な負担をかけるのであれば、ハッジという行いの義務を行う必要はない。旅人には礼拝の略型が許され、また負担を避けるために、礼拝を集中させること（ズフルとアスル[2]）も許される。また断食についても、旅人や病人は断食の月が終わってから、時期をずらして行うことも許されている。飢饉に直面している人びとは、本来禁止されている豚肉すら食べても良いのである。悔悟は、イスラームにとって重要なことであるが、神父の所で赦しを求める必要はなく、アッラーの許に戻り、犯した罪を贖うことによって懺悔となるのである。

新ムスリムにとって重要なことは、特定の状況によっては法令を緩くする場合もあるが、イスラームがそのように易き宗教であるからといって、勝手に法令を軽くしていいというものではないという点である。知識のある学者には、法令がクルアーンと正しいスンナに一致しているかどうかが分かっている。その上に、これまで書いてきたように、１日５回の礼拝や、１ヶ月の断食、喜捨、巡礼などは、人間が耐えられる困難さの範囲内にあり、宗教的成果を得るために、それは困難に値する行いであると言っても良いであろう。

[1] 人間に害を与えないための人権と同じように、崇拝に関しては「アッラーの権利」と名付けるよう学者は言っている。崇拝の決まりについては、他人の権利に対しての決まりよりも緩い。

[2] （特別な場合には、正午過ぎの礼拝ズフルと午後の礼拝アスルは同じ時間に行うことが許されている。日没の礼拝マグリブと夜の礼拝イシャーも同様である。：訳者注）

６．創造者と創造された者（人間）の強い絆

イスラームとその教えの目指すところのものは、この世における法律を超えている。なぜかといえば、イスラームはアッラーと人間の個の関係であり、アッラーと強い絆で結ばれた健全な人間を作るという目標があるからだ。その視点については、以下の重要なポイントがある。第一、イスラームでは、ムスリムはアッラーとの直接的な関係を持つことを特徴としている。雌牛章にはこうある。

われのしもべたちが、われに就(つ)いてあなたに問う時、（言え）われは本当に（しもべたちの）近くにいる。
かれがわれに祈る時はその嘆願の祈りに答える。
それでわれ（の呼びかけ）に答えさせ、われを信仰させなさい、恐(おそ)らくかれらは正しく導かれるであろう。
【第２章　雌牛章〔アル・バカラ〕１８６節】

そして別の章では、次のアーヤがある。

それであなたの主は、仰(おお)せられる。「われに祈れ。われはあなたがたに答えるであろう。

だがわれに仕（つか）えるのに高慢な者たちは、必ず面目潰（めんもくつぶ）れの中に地獄に陥（おちい）るであろう。

【第４０章　ガーフィル章　６０節】

上にあるように、イスラームには聖職者としての階層を設けていない。人間は一個人として、仲介者なしで直接アッラーに呼びかけるのである。そして赦しを求めるときにも、直接アッラーに向かうのである。その場合もその人間の悔悟が十分であったかどうか、アッラーに受け入れられたかどうかを確認してくれる権威のある別の人間を全く必要とはしない。そして、ムスリム自身に何か願いがある場合にも、別の人に頼ることをせず、直接アッラーに祈る。ムスリムが、アッラーから下された啓示や指針を読みたいと望み、自分で読める能力があれば、直接クルアーンとスンナに当たることができる[1]。そしてまた半神半人はいない。イスラームでは、神か神ではないか、どちらかである。また聖職者もいない。全て、アッラーと個人の人間の関係である。アッラーとの直接的な関係は、人間に力と落ち着きを与える。なぜならば、人間にはアッラー以外に仕えるものはないからだ。そしてアッラーに仕える時には、それを干渉する者は誰もいない。どんな状況においても、人はアッラーに向

[1] かつてキリスト教圏では何百年かにわたって、一般の人々が直接、聖書を読むことは禁止されていた。その時代に聖書を読むことができるのは、聖職者に限られていた。

かうことができ、どんな時にも赦しと導きと助けを直接求めることが可能である。

アッラーとの直接の結びつきは、全ての個人の行為を含むということがいえる。ムスリムは、アッラーがムスリム自身の表面的な振る舞いや行動だけを見ているのではなく、心にあるニーヤ（意志）も知っているということを、確信している。アッラーとの直接の結びつきがあるからこそ、ムスリムは、一生懸命アッラーに受け入れられる行為につながる努力をするのである。それにより、それぞれの状況において正しいニーヤを伴う世俗的な行為もまた、アッラーを満足させるような行為に変わっていく。もちろん、正しい状況で、良いニーヤが伴っている場合や、本当に人を助ける場合においてである。真のムスリムの１日は、アッラーとの関係を認識しながら始まる。そしてアッラーの恩恵が授かるような行為ができるよう、常に心がけるようになる。それが本来の目標とニーヤである。それが強くなればなるほど、簡単な単なる行為もまたアッラーに受け入れられるのである。そのため、預言者ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）は、こう言ったといわれる。

「主人が、妻の口に食べ物をちょっと入れるといった些細なことさえ、１つのサダカ（施し）にもなるのである。[1]」

アッラーとの直接的な関係のコンセプトを理解し咀嚼し、些細な現世的な行為もアッラーが受け入れてくれるようになったとしたら、人間の全人格的な行動も変わってくるだろう。人は、

[1] ブハーリーの伝承による。

アッラーの恩恵をもらえるように常に考えて、自分の行為を行うようになるであろう。残念ながら、この世の中の多くの人が、このポイントには気付いていない。イブン・カイイム師は『マダーレジ　アッサーリキーン』の中で、次のように述べている。「アッラーに最も近く特別な人というのは、生活の中の些細な行為も、アッラーに仕える行為に変える人達のことである。アッラーをよく知っている人々の世俗的な行為は、まるで礼拝のようなものである。一方、多くに見受けられるのは、礼拝といった崇拝の行いも、習慣化された世俗的な行為になってしまう場合もあるということである。[1]」この言葉は、正しいであろう。しかし残念ながら、一般の多くのムスリムたちは、礼拝や断食などの五行も、しなければならない習慣だと思い込んでいるのである。それらが自分の生活の一部となっているからである。そういった行為をする場合は、自分の気持ちが深くアッラーに向いていないのに気が付かない、上すべりなものになっている。その行為の質については思い及ばない。その行為を何回繰り返したかとか、この行為がいつ終わるか、その時を待っている場合もある。そのような礼拝は、重要な行すらも、習慣化された行為に変わってしまい、深い意味のある行動ではなくなってしまいがちである。一方、アッラーを真に信じている人は、世俗的な行為の中にいっぱいのニーヤが溢れているので、その行為もまるごとアッラーの恩恵を頂ける行為に変わっていくのであ

[1] サーリフ　アルアラウィー著『マバーヒス　フィー　アンニーヤ（「意志表明の考察」：訳者注）』p.15。

る。極端にいえば、寝る前の時間に明日の仕事に備えてしっかりリフレッシュしようとアッラーに祈ることも、これもまた崇拝行為の１つと言っても良いのである。

こういった内容について討論すべき余地はあるだろうが、クルアーンには次のような節がある。

・・・

日毎(ひごと)にかれは、（新たな）御業(みわざ)で処理なされる。

【第５５章　慈悲あまねく御方章〔アッ・ラハマーン〕２９節】

言い換えると、一瞬毎にアッラーはあらゆるものを創造し、授かりものを分け与え、そして、人は生まれ死に逝くのであるが、人間はそういった出来事の中に、アッラーの存在を感じない時もあるだろう。ある人間は鈍感になって、そういったこと全てが自然現象の中で行われていると思い込んでいることもある。それは真実とは全く異なるのである。この「自然現象」も、一瞬毎のアッラーの意志を超えたものではない。クルアーンの多くのアーヤの中で、アッラーは人間に周りの宇宙をよく観察するよう勧めている。例えばアッラーは、クルアーンの読者に、小さな蜜蜂や影の動きにも注意するよう、呼びかけているのである[1]。

---

[1] 主は如何(いか)に影を広げられたか、あなたは見なかったのか。もし**かれ**が御(お)望みならば、それを静止した儘(まま)にされよう。
それから**われ**は、太陽をその案内役とした。

ムハンマド　クトブ師は、指摘する。「アッラーがさまざまなアーヤでそういった例を出したのは、科学的な証拠を表すためではなく、人間の周りにあるアッラーの存在に気が付くようにである。それによって、人間の心と日常生活の出来事は、アッラーと結び付けられるのである。」また彼は、次のようにも述べている。「人間は、外的な現象に囚われてしまい、至高の真実が見えなくなることがある。自然現象と決め付けて必然的な現象であると受け取り、アッラーの意志であることを忘れてしまう。そのようにして創造者アッラーから心が離れていくのである。[1]」

引き続き、師は次のように述べている。「学問は我々に教えてくれる。例えば、影の動きは観察結果によって、太陽の存在、地球の動きで決まってくる。しかし、クルアーンではアッラーの意志がその影を動かしたという表現になる。太陽は、影を表す証拠として現れる。[2]」蜜蜂と影の２つの関連について人間が知っている情報は、クルアーンの節を読んでも変わることはないと言う。人間の知識が変わったのではなく、その人自身が変わったのであると、彼は指摘する。そしてクトブ師は問いかける。「クルアーンを読んで、影についてのあなたの知識は変わりましたか。また蜜蜂の知識についても。」「いいえ、知識自

【第２５章　識別章［アル・フルカーン］４５節】

[1] ムハンマド　クトブ著『ディラーサトゥ　アルクルアーニーヤ（「クルアーン研究」：訳者注）』ダール　アルシュルーク出版、ベイルート、レバノン、1982 年、p.42。

[2] 同上書、pp.42～43。

体は新しくはありません。前から知っています。しかし、知識はまるで動きのない停滞した冷たい学問のようでした。しかし、クルアーンでその知識を示めされた時に、それは生き生きと息を吹き返したように感じました。[1]」

新ムスリムにとっては、これは世界を見る場合の、新しい視点のようなもので今までの見方の修正も必要であろう。多くの非ムスリムは、この世界にアッラーの影響や存在を認めていない。そして、アッラーとは直接の関係もないと考えている。新ムスリムは、クルアーンをよく読みそれについてよく考えることによって、周りの出来事にアッラーの存在を見ることができるようになる。そうなると、入信する前と違い、アッラーに対する義務を怠けることがなく、入信前の生活と違った日々を送ることができるのである。インシャーアッラー。

7．善いものを合法とし、悪しきものを禁戒とする

イスラームでは、他の人間を無視して、自分自身だけ浄化を願うことはない。本書ではこれについての議論にも言及しているが、イスラームは社会の中のメンバーの健全な関係を重視する。その１つの対応として、善いことを奨励したり、同時に悪しきものを良くないことと禁止したりする。人の善行を手伝うのも、イスラームの純粋な博愛の１つである。例えば、他の人

[1] 同上書、p.45。

の行為がアッラーの不満を買うと思った場合は、その人に助言することもそれである。つまり、１つは助け合い・友好・博愛の精神と、２つ目は、正しいことを勧め、邪悪な行為をしないよう勧めることの２つのことを意味し、２つのことには繋がりがあるのである。アッラーは、こう告げている。

　男の信者も女の信者も、互いに仲間である。
かれらは正しいことをすすめ、邪悪を禁じる。
・・・
【第９章　悔悟章〔アッ・タウバ〕７１節】

・・・
寧（むし）ろ正義と篤信のために助けあって、信仰を深めなさい。
罪と恨みのために助けあってはならない。アッラーを畏れなさい。
・・・
【第５章　食卓章〔アル・マーイダ〕２節】

　このアーヤで、正しい行為の奨めと逆に邪悪なことを禁止することは、イスラーム共同体全ての人々をカバーする一般的な属性となるべきであり、アッラーは、次のように告げている。

あなたがたは、人類に残された最良の共同体である。あなたがたは正しいことを命じ、邪悪なことを禁じ、アッラーを信奉する。

・・・

【第３章　イムラーン家章〔アーリ・イムラーン〕１１０節】

この属性は、選択の余地のない信仰の一部である。また社会への忠誠の一部でもある。なぜならば、それぞれの人には他人に対してするべき義務を負っている。彼らを助け配慮するのは、人への義務とも言える。中でも、権威のある人々や影響力のある人々には、特にその義務が大きいのである。預言者ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）は、ムスリムたちにこう言っている。

「我が身を御手に委ねられたお方に誓って、あなたがたは正しい事を勧め、悪いことを戒めなければ、アッラーからの懲罰があり、またアッラーは赦しを乞うてもそれには耳を貸されないのです。[1]」

またブハーリーの伝承には、「社会レベルでの属性の重要性」について、預言者の少し面白いハディースを引いている箇所がある。

「アッラーの決まりを果たしている人と果たしていない人について、次のような喩（たとえ）があります。船に乗った上層の人々と下

[1] アハマドとティルミズィーの伝承による。そしてアルバーニー師は「良いハディースであろう。」と言っている。アルバーニー著　前掲書『サヒーフ　アルジャーミャー　アッサギール』Vol.2、p.1189。

層にいる人々との関係です。上層には水があり、下層の人が水を求める時は、上層の人々の所を横切らなければ飲めないのです。上層の人々が通させないということもあります。下層の人々は、上層の人に迷惑をかけないために、船の床に穴を空けて水を飲んだらいいのでしょうか。穴を空ければ、船は沈んでしまうでしょう。上層の人は、下層の人に穴を開けないように言い、上の水を飲むのを許可すれば、みんなが救われます。」

人々は、悪行から遠ざかりたいと思っている。それには手助けを必要とする。彼ら自身をサポートし助けてくれる本当の友人を必要としている。ある人は、するべきことを怠けていたり、動機すらも持っていなかったりする。しかし、純粋な人々の助けがあれば、偽りの生活から逃れることもできるのである。

一方、人間の私利私欲が優先し、他の人を助ける気持ちがなければ、社会は悲劇的な結果をもたらしてしまう。悪いことをしている人は頑強でもあるので、他の人の人生を征服した場合、傷つけられた人は悲惨な人生を送ることになってしまう。アメリカ合衆国でもさまざまな州で、多くの人がそういうことを認識するようになり、近隣の人々は協力して悪徳なものを取り除き、善を勧める行動をしようと意識するようになった。傲岸で無頼な人からの被害を受けないことと同様に、ムスリムの信者たちは、良い事を勧め、悪の道に入らないように警戒すべきである。

道徳や宗教上の罪、過ちを絶対に起こさないことから、全く自由であるという人は誰もいない。誤りは誰にでもあるのだか

ら、こういった信念が完璧に近い善人からの助言である必要はない。善い事を勧めるという行為は、まずは自分からスタートさせなければならないだろう。人は、善の行為に慣れるようにしなければならない。そのうちに自分が手本となるよう努力しつつ、他の人に忠告することができれば、その助言は自然に受け入れられるであろう。同時に、完全ではない人もまた、助言ができないということもないのである。

宗教的な信念のもとでの修行としての説としては、助言する人には条件が付随する。まずクルアーンとスンナに沿って、何が善で何が悪かをしっかりと知る必要がある。ある人は無知なため、ある人がしていることを見て禁止したとしても、スンナでは間違っていないということもあり得る。新ムスリムは、しなければならないとか、してはいけないとか、他のムスリムから助言を受ける場面によく遭遇するであろう。多くの場合は、新ムスリムに対しての熱情があるだけの人もいる。新ムスリムの人々に対する話し方も分かっていない人も多い。言葉が大きな障害になることもあるし、それが状況をなお複雑にすることもありうる。ここで重要なことは、そのムスリムたちには、悪意も屈辱的な行動をしているという意識もないのである。イスラームについて教え、真理を教えたいという単純な動機でやっているだけなのである。彼らは愛情と情で私に助言をしてくれているのだという気持ちを持って接して欲しいと願っている。

８．人間を本当に重んじること

アッラーがこの世界を設計し運営する際には、それなりの論理があったに違いない。他の生きものから特別な存在になるように、多くの技能や才能を人間に与えた。

われはアーダムの子孫を重んじて海陸にかれらを運び、また種々の良（よ）い（暮らし向きのための）ものを支給し、
またわれが創造した多くの優（すぐ）れたものの上に、かれらを優越させたのである。
【第１７章　夜の旅章〔アル・イスラーゥ〕７０節】

人間を特別な存在にしたのは、進化の結果ではなく、もともとアッラーの決定意志であった。アッラーの軌跡を通して見ていくと、人間を重んじていることが分かる。アッラーの啓示であるクルアーンを通して考えれば、人間は自然に打ち勝つ必要はあるが、自然といつも戦うわけにはいかないと知るだろう。また人間は、目標のない猿たちの単なる親戚ではない。この創造された世界は、悪意に覆われてはいない。人間も、他の生き物を犠牲にして取り除けないほどの原罪を持っているわけではない。クルアーンを読むとそう信じることができる。実際には現代という時代に、人間の値打ちが最低の線まで落ちているのは、原罪があると考えれば不思議ではないようにも感じられる。経済的な理由から、他人をその道具にしてしまうということも、

不思議ではなく、資源を得るために何千人の人を犠牲にするということも不思議ではなくなる。啓示に従うことによってのみ、本来の人間の値打ちを再認識することができるのである。またどのようにしたら、他の人を尊重するかが分かるようにもなる。

アッラーは、人間に大きな責任を負わせた。それは人間がアッラーのしもべになることであり、それによって大きな恩恵を受けることが可能である。アッラーは人間を重んじている。それは、人間をガイドするための啓示を下されたこと、また人間の中から　アッラーのメッセージを伝えるための預言者と使徒を選んだことでも明らかであろう。そして、アッラーは空と大地を人間のために使えるようにした。

またかれは、天にあり地にある凡(すべ)てのものを、（賜物として）あなたがたの用に服させる。
本当にこの中には、反省(はんせい)する者への印(しるし)がある。

【第４５章　跪(ひざまず)く時章〔アル・ジャーシャ〕１３節】

アッラーは人間が純粋なしもべになること、アッラーのために殉教者となること、また宗教学者となることへのチャンスも与え、その名誉も与えた。これは男女を問わず、平等に与えられた。アッラーは、次のように告げている。

主はかれら（の祈り）を聞き入れられ、（仰せられた）。

「本当にわれは、あなたがたの誰の働いた働きもむだにしないであろう。男でも女でも、あなたがたは互いに同士である。

【第３章　イムラーン章〔アーリー・イムラーン〕１９５節】

またアッラーは蜜蜂章で、約束された。

誰でも善い行いをし（真の）信者ならば、男でも女でも、われは必ず幸せな生活を送らせるであろう。

なおわれはかれらが行（おこな）った最も優れたものによって報奨を与えるのである。

【第１６章　蜜蜂章〔アン・ナフル〕９７節】

人と人との違いは、男女の性別の違いではなく、民族の違いでもなく、財産のあるなしでもなく、階層の違いによるものでもない。人間を評価するためのこのような基準は間違っている。これらは、人間の価値を貶めるものに過ぎない。実際の人間の評価は、アッラーとの関係によるべきである。アッラーは次のようにも告げている。

人びとよ、われは一人の男と一人の女の間からあなたを創（つく）り、種族と部族に分けた。これはあなたがたをよく知り合うようにさせるためにである。

アッラーの御許（みもと）で最も貴き者は、あなたがたの中（うち）最も主を畏れる者である。
本当にアッラーは、全知にして凡（あら）ゆることに通暁なさる。

【第４９章　部屋（へや）章〔アル・フジュラート〕１３節】

近頃人権問題についての話がよく耳に入る。これは、最も尊重されるような方法で人間を論じようという試みである。そのような呼びかけには、落とし穴がある。そこにはアッラーが人間を重んじているという思想が抜け落ちている。人間至上主義となり、アッラーのことさえ忘れ去られようとするのである。人権問題についてのほとんどの話は、アッラーに仕えることと人間を分けようとしているように思われる[1]。

人間を重んずる目的の方法としては、人権問題論議はふさわしくはないであろう。それは極端な行動にもつながる。義務や権利を超えた行動があれば、これは逆効果になるのである。人間は１つの階層にあるが、自分に有利になるように全てを決定し、他の権利を乱用するのは行き過ぎた権利である。全知のアッラーでなく、人間が全てを決めるということは、非常に危ないことである。人間が必要としている権利が全て与えられたこ

[1] 考えるに、社会が個人であれ集団であれ、実際に正しくあるべくアッラーに仕えようと決定すれば、邪悪な行為を警戒しようとするだろう。しかし現代では、例えばホモセクシュアルに反対すれば、人権問題を侵したと反対に非難されるだろう。アッラーに帰依し、彼らを避けると明言したとすれば、また人権問題となる。今日ではアッラーに帰依するよりも、まるで人間には全てが許されていると考えられているかのようだ。

とは、アッラーの慈悲の１つであろう。なぜならば、アッラーだけは自身の正義・智慧の中で決めることができるのである。人間は豊かな暮らしをするための権利をアッラーから授かり、同時にアッラーから課せられた義務もある。権利と義務は、並行して考えていかなければ、取り扱いは難しくなる。

人権問題をサポートしている人びとの一番の弱点は、この世界と関係ある物理的な権利だけを中心に置いているからである。この方法によって、最も重要な権利を忘れがちである。それは人類の経験を超えた権利なのである。この権利について、次のハディースがある。

ムアーズ・イブン・ジャバル（彼にアッラーのご満悦あれ）によれば、預言者ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）は彼にこう呼びかけた。

「ムアーズよ。」「はい、承ります。」と彼はすぐに答え１時間一緒に道を歩いた。預言者が「ムアーズよ。」とまた呼びかけたので「はい、承ります。」と応え、また１時間歩いた。３回目も同じようにした。預言者ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）は聞いた。

「しもべたちに対するアッラーの権利とは何か知っていますか。」彼は答えて「私はアッラーと預言者の方が良く知っていると思います。」と言った。

「それ（アッラーの権利）は、人びとがアッラーを崇拝し、他の神もなく、アッラーに仕えることです。」と預言者は言い、

「ムアーズよ。」と呼びかけ、彼はまた「はい、承ります。」と答えた。また二人が１時間歩いた後に、預言者は尋ねた。

「アッラーを礼拝するしもべたちのアッラーへの権利を知っていますか。」彼は答えて、「私はアッラーと預言者がより良く知っていると思います。」と答えた。預言者は、

「アッラーは、しもべたちには懲罰を与えません。」と答えたという。[1]

[1] ブハーリーとムスリムの伝承による。

第４章　イスラームに入信すること

　アッラーのお陰により、イスラームに入りたい人は誰でも入信することができる。イスラームの道には、何の障害もない。イスラームには、聖職者もおらず、洗礼のための行事・特別な儀式は全く行われていない。ムスリムになるのに必要なのは、ただ１つのことだけである。

「アッラーの他に神はなく、ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）はアッラーの使徒である。」

　これを認め、信仰告白（シャハーダ）することだけである。この２句を口にするだけで、アーダム生誕から審判の日が訪れるまで、イスラームの博愛の傘の許に入ることができる。
　この章では、信仰告白の言葉に関して触れ、加えてイスラームに入信する際の他の決まりや論議されていることについて述べたい。また、個々人がムスリムになる前の状況についても述べることにする。

１．「アッラーの他に神はなく・・・」というシャハーダの言葉

　アッラー以外に仕えるに値するものがなく、ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）はその使徒であるという、この語句を正しいと信じて唱えることによって、人はムスリム

になる。この事実を承認していることを表すため、イスラーム入信のために、他の人の前でこの言葉を表明しなければならない、その表明についてどのように考えるのか、という質問が出てくる[1]。イブン・アビー・アルイズ師によれば、使徒ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）はこう述べたと言われている。

「人は信仰があるというのであれば、告白できる状況で、はっきりと口にしないのでは信者とは言えないです[2]。」

この言葉を口にすることで、３つの役割を果たしたことになる。１つは、この表明が正しいと認めること。それはその事実を自分が信じているとまさに裁判所の前で認めているようなものである。２つ目は、この言葉の内容を守るということを確約するという決意を表すこと。３つ目は表明した以上、それに基づく義務と権利を認めたことになる。

ムスリムたちは、信仰告白の言葉が、天国に入るための鍵であると確信している。それどころか、唱えるだけでいろいろな

---

[1] もしその人が告白すれば危険な目にあうという例外的な状況下以外の場合は、告白するべきである。少しの反対や多少の困難なことがあっても、告白をするというのが、預言者ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）とサハーバ（教友）たちのスンナ（慣行）であった。

[2] イブン・アビー・アルイズ著『シャルフル　アルアキーダ　アッタハウィーヤ「タハウィー師信条の説明」：訳者注）』Vol.2、p.471。しかし、ここで私が使ったのは文献からの直接の引用ではない。それは、ムハンマド　アブドゥルハック　アンサーリー師の翻訳本（サウジ高等教育省出版、リヤド、サウジアラビア、2000 年）からである。

ことから守られており、天国に入れると思い込んでしまう人すらいる。しかし、その言葉を口に出すだけで救われるというのは、十分ではないのではないか。なぜならば偽善者たちもまた、他の人と同様にそうすることもあるからである。クルアーンの６３章でアッラーは、彼ら偽善者たちは、嘘つきで地獄の最下層に入るであろうと、明言している[1]。

また特に、信仰告白には条件があるとされる[2]。なぜかといえば、シャハーダによって、アッラーはその人間を受け入れることになるからである。そのため、人はその条件を大切にしなければならないであろう。

タービウーン（教友の次の世代）のイブン・ムナッビフ師は、ある人から次のような質問をされた。「『アッラーの他に神がなく・・・』と信じることは、天国に入るための鍵ですか。」「はい。しかし、それぞれの鍵には凹凸があり、その形が合えば天国の扉が開くが、合わない場合は開かないでしょう。その

---

[1] （嘘付きの言葉については、次のクルアーンがある。：訳者注）

偽（にせ）信者たちがあなたの許にやって来ると、「わたしたちはあなたが、本当にアッラーの使徒であることを証言する。」と言う。
アッラーは、あなたが確かに使徒であることを知っておられる。
またアッラーは、偽信者たちが真に嘘言の徒であることを証言なされる。
【第６３章　偽（にせ）信者たち章〔アル・ムナーフィクーン〕１節】

（最下層の言葉については、次のクルアーンがある。：訳者注）

本当に偽（にせ）信者たちは、火獄の最下の奈落（ならく）に（陥（おちい）ろう）。
あなたはかれらのために、援助する者を見いだせない。
【第４章　婦人章〔アン・ニサーア〕１４５節】

[2] シャハーダ（信仰告白）の言葉は、広く知られている。いくつかの本でも紹介されている。筆者もこの情報は次の書にまとめている。『サラートゥ　アルジュムア（金曜礼拝用）』第２巻　スピーチ１、pp.4～119、及び第３巻、スピーチ２、pp.35～42。

ため、毎日何度もシャハーダを唱えたとしても、その言葉が役に立つのか立たないのかは、その鍵の形が合うかどうかで決まるのであって、唱えた数で決まるのではないのです。」と彼は答えた。

クルアーンの説と預言者ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）のハディースを研究すれば、シャハーダが正しい信仰告白となるかどうか、条件が存在するということが分かる。もちろんその条件を満たすことが重要で、新ムスリムもイスラームに入信する前後で、意識しなければならないことであろう（もちろん、入信以前には必要ではないのであるが。）

条件（９条件）についてまとめると次のようになる。

第一条件は、知識である。シャハーダの基本的な知識を知らなければならない。これはどの証明にしても必要であるが、一般的に考えても、証明している内容を人が正しく認識していなければ、受け入れられていないのと同じ意味であろう。アッラーはクルアーンでこう告げている。

もしあなたがかれらに、「誰がかれらを創（つく）ったのですか。」と問（と）えば、必ず「アッラー。」と言う。それなのに、かれらはどうして（真理から）迷い去るのか。

【第４３章　金の装飾章〔アル・ズフルフ〕８７節】

個の人間は、シャハーダの時に、アッラーこそ唯一仕えに値するものであり、その他の崇められているものは無効であると

いうことを認識しなければ、信仰告白の意味が無いであろうし、そのような場合は正しい信仰告白とは言えないのである。

第二の条件は、確実性である。その反対の概念はシャハーダを疑うことである。クルアーンや正しいスンナに対して疑えば、信仰を拒むことになる[1]。人間の心に、**「アッラーの他に神はなく・・・」**に関しての疑いが全くないということが重要なのである。クルアーンの一節を引用しよう。

本当に信者とは、一途にアッラーとその使徒を信じる者だちで、
疑いを持つことなく、アッラーの道のために、財産と生命を捧げて奮闘努力する者である。
これらの者こそ真の信者である。」

【第４９章　部屋（へや）章〔アル・フジュラート〕１５節】

ハディースでは預言者もこう言っている。

「アッラーの他に神はなく、私はアッラーの使徒である。その言葉を疑わずにアッラーに迎えられた者は、天国に入ります。[2]」

疑いの心を持つ偽善者たちについては、クルアーンでは次のような説明がされている。

---

[1] 例外は、それについて無知な場合である。クルアーンやスンナに確証されているのにそれを知らず、何かについて疑っている場合である。確証されたことを理解したならば、疑うための言い訳はできない。

[2] ムスリムの伝承による。

アッラーと終末の日を信じない者だけ、あなたに（免れようと）求める。
かれらは心に疑っており、それでかれらは疑いの中にさ迷っている。
【第９章　悔悟章〔アッ・タウバ〕４５節】

第三の条件は受け入れである。上記の２条件を満たすならば、その信仰告白が含んでいる内容全てを受け入れ、言行一致で行うことになる。この信仰告白を拒否した者は、信仰を拒否したことになる。受け入れない理由としては、認めたくないという心があるからである。条件を満たすためには、クルアーンとスンナに書かれたことを全て受け入れ認めることしか選択の道はない。そしてこれについては、次のように告げられている。

それにも拘らず、その後互いに殺しあったのはあなたがたであり、また一部のものを生まれた土地から追い出し、
罪と憎しみとをもって対立し（敵に）味方した。
またかれらが捕虜となった時、身代金（みのしろきん）を取っている。かれらを追放したこと（自体）が違法であるのに。あなたがたは啓典の一部を信じて、一部を拒否するのか。凡（およ）そあなたがたの中（うち）こんなことをする者の報いは、現世における屈辱でなくてなんであろう。
また審判の日には、最も重い懲罰に処せられよう。

アッラーはあなたがたの行うことを見逃されない。

【第２章　雌牛章〔アル・バカラ〕８５節】

信仰する男も女も、アッラーとその使徒が、何（なに）かを決（き）められた時、勝手に選択（せんたく）すべきではない。

アッラーとその使徒に背くものは、明（あき）らかに迷って（横道に）逸（そ）れた者である。

【第３３章　部族連合章〔アル・アハザーブ〕３６節】

第四の条件は、服従することである。体を使って行動することが、イスラームの重要な意味でもある。つまり、アッラーの意志・命令に帰依するという意味でもある。アッラーは次のように告げられた。

あなたがたは懲罰が来る前に、主に悔悟して帰り、かれに服従、帰依しなさい。

その（懲罰がやってきた）後では、あなたがたは助からない。

【第３９章　集団章〔アッ・ズマル〕５４節】

そしてアッラーは、イーマーン（信仰）の条件としては、アッラーに従うことであると告げている。

だがあなたがたの主に誓（か）けてそうではないのである。かれらは信じないであろう。

かれらの間の紛争に就いてあなたの裁定を仰ぎ、あなたの判決したことに、かれら自身不満を感じず、心から納得（なっとく）して心服（しんぷく）するまでは。

【第４章　婦人章〔アル・ニサーア〕６５節】

信者たちは常に間違いを起こさないとは限らない。もちろん間違うこともあるだろうが、自分が犯した罪を認め、それがアッラーに帰依するという義務に対して違反しているということを認めれば、シャハーダには問題がない。

第五の条件は、誠実であること。これは偽善や騙しに対してである。人間はシャハーダを唱えるときに、誠実に唱えなければならない。嘘をつかず人も騙さずに、唱えることである。預言者ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）は、こう言っている。

「アッラーの他に神はなく、ムハンマドはアッラーの使徒であるということを、心から誠実な気持ちで唱えたならば、地獄には入らないでしょう。[1]」

第六の条件は、純粋であること。人間はアッラーに対して純粋にシャハーダを唱えるという意味であり、他の理由によるものでもなく、他の人のためでもない。純粋という意味は、シルク（多神崇拝）を否定するということで、アッラーの懲罰を避け、アッラーの慈悲や恩恵を受けることができるのである。

[1] ブハーリーの伝承による。

本当にわれは真理によって、あなたにこの啓典を下した。
それでアッラーに仕え、信心の誠をつくせ。
【第３９章　集団章〔アル・ズマル〕２節】

「アッラーを望み、シャハーダを唱えたならば、アッラーは彼を地獄に突き落とさないしょう。[1]」

第七の条件は、敬愛である。この信仰告白の言葉が好きで、内容も好ましく思い、唱えている人にも敬愛を持っているという意味でもある。これはシャハーダを信じる必要な条件である。シャハーダを唱えても、敬愛を感じられない人は、真の信者の心情ではない。本当の信者は、アッラーと同じ敬愛の気持ちを他の神に感じることはない。クルアーンには次のように書かれている。

だが人びとの中にはアッラーの外に同位の者を設けて、アッラーを愛するようにそれらを愛する者もある。
だが信仰する者たちは、アッラーを激しく熱愛する。これら悪を行う者が、その懲罰を見る時思い知るがいい。一切の権能がアッラーに属し、またアッラーが厳しい懲罰を加えられることを。
【第２章　雌牛章〔アル・バカラ〕１６５節】

また、別のスーラには次のように告げられている。

[1] ムスリムの伝承による。

言ってやるがいい。「あなたがたの父、子、兄弟、あなたがたの妻、近親、あなたがたの手に入れた財産、
あなたがたが不景気になることを恐れる商売、意にかなった住まいが、
アッラーと使徒とかれの道のために奮闘努力するよりもあなたがたにとり好ましいならば、
アッラーが命令を下されるまで待て。
アッラーは掟に背いた民を導かれない。
【第９章　悔悟章〔アッ・タウバ〕２４節】

第八の条件は、アッラー以外のものを拒否した上で唱えることである。これはシャハーダの文章の構成から明らかであるのに、これに気付かぬ人もいるので、ここで少し触れておく。シャハーダの重要な点をアッラーもクルアーン第２章で告げている。アッラーの確証と他のものへの否定は、同時に提示されており、片方なしでは（シャハーダは）成り立たない。

宗教には強制があってはならない。正（まさ）に正（ただ）しい道は迷悟から明らかに（分別）されている。
それで邪神を退（しりぞ）けてアッラーを信仰する者は、決して壊（こわ）れることのない、堅固な取っ手を握った者である。
【第２章　雌牛章〔アル・バカラ〕２５６節】

第九の条件は、信者は死ぬまでシャハーダを守り続けること。すなわち、守り続けなければ、肝心な審判の日にその意味がなくなるため、自分がずっと行ってきた行為だけに頼らず、死ぬまでシャハーダを自分のスローガンにしなければならないということである。

あなたがた信仰する者よ。十分な畏敬の念でアッラーを畏れなさい。
あなたがたはムスリムにならずに死んではならない。
【第３章　イムラーン家章〔アーリ・イムラーン〕１０２節】

シャハーダはアラビア語でなければならないとか、声に出して唱えなければならないとか、特別な表現をしなければならないということはない。ただし、唱えている内容を理解するしっかりした意識がありさえすれば問題はない。[1]

２．「・・・ムハンマドは使徒である」というシャハーダの言葉

シャハーダの語句の後半のこの意味を理解することが重要である。この言葉を理解しなければ、これもまたイスラームから離れてしまうことになる。ムハンマド（彼にアッラーからの祝

[1] いくつかのハディースの話である。かつて、ある人たちが「サバァーナ（Sabaana、改宗した）」と言うことで、「サービィイーンたちの宗教に私は入った。」という意味であった。これは、イスラームに入ったムスリムたちを指す言葉として、イスラームの時代になる前に使われた言葉である。

福と平安あれ）はアッラーの使徒であると認めることは、アッラーが人類へのメッセージのために「かれ」を選ばれたのだと信じることである。アッラーは、こう告げている。

　（主から）一つの印（しるし）がかれらにやって来れば、
「アッラーの使徒たちに与えられたようなものが、わたしたちに下るまでは信じないであろう。」と言う。
アッラーは何処（どこ）で（また如何（いか）に）かれの使命を果たすべきかを、最も良く知っておられる。
やがて罪深い者は、その（しでかした）凡（すべ）ての策謀に対して、アッラーの御許（みもと）で屈辱と痛烈な刑を受けるであろう。
【第６章　家畜章〔アル・アンアーム〕１２４節】

　預言者ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）の人徳を示している節やスーラは次の理由からきていると考えられる。
１）しもべ達の中でするべきことをせず、ずるく嘘を付く人や、良いチャンスを自分の利益だけに利用する人を、アッラーが、預言者として選ぶはずはない。アッラーのその使命のために、最も適任者であるムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）を選んだわけである。そうすると、メッセージを十分に伝えられていないと言う人は、まるでアッラーは使命を背負う

ための適任者を選ぶことはできなかったという意味にもなり、これは信仰を拒否したようなものである。

２）シャハーダを唱えることは、ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）が全ての人のために遣わされたということを信じるという意味になる。次のクルアーンの節にある通りである。

言ってやるがいい。「人びとよ、わたしはアッラーの使徒として、あなたがた凡（すべ）てに遣わされた者である。
天と地の大権は、われの有（もの）である。
かれの外（ほか）に神はなく、かれは生を授け死を与える御（お）方である。
だからアッラーと御言葉（みことば）を信奉する文字を知らない使徒を信頼しかれに従え。そうすればきっとあなたがたは導かれるであろう。」

【第７章　高壁章〔アル・アアラーフ〕１５８節】

ここでも明らかなように、皆、預言者を、その時代から審判の日まで信じ従わなければならない。そしてまた、預言者のスンナと教えに最期の日まで従うのである。ある人々が預言者に従い続けることを拒んだとすれば、それは彼らの唱えたシャハーダと矛盾していると知るべきである。

３）シャハーダの後半を唱えることで、預言者ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）が、全てのメッセージを伝えたことを確信したことになる。

・・・

使徒に課せられることは、只(ただ)明瞭に（啓示）を伝えるだけである。」

【第２４章　御光章〔アン・ヌール〕５４節】

　預言者は、以下のように言ったという。

「わたしは、落伍者以外は迷わないような真っ白な道にあなたがたを残しておきます。その道は、夜もまるで昼間のように明瞭です。[1]」

　預言者ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）は、このようにメッセージを明確に伝え、そして基本の教え全てを伝え、幹と枝も全て伝えており、人間にはそれを認めればよいだけの道が示されている。このように明瞭な導きがあるのであるから、他に導きを求めてはいけないのである。例えば、ユダヤ教の啓典やキリスト教の聖書などにも導きを求めたいと思う気持ちは必要ではない。教友のウマル（彼にアッラーのご満悦あれ）が、ユダヤ教の啓典を読んでいた時に、預言者は言ったという。

「ムーサーも、もし生きていれば私に従うしかなかったでしょう。[1]」

---

[1] アハマドとバイハキーの伝承による。アルバーニー師も良いハディースであると述べている。アルバーニー著　前掲書『サヒーフ　アルジャーミャー　アッサギール』Vol.2、p.805。

クルアーンとスンナに全ての教えがあるのだから、例えばギリシャ神話やその他の哲学にも信仰を求めるなど、イスラーム以外の教えを他に求めてはならないだろう。預言者のシャハーダは、次のクルアーンにある通り、預言者ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）が最後の使徒であるということを信じることである。

ムハンマドは、あなたがたの誰の父親でもない。
しかしアッラーの使徒であり、
また預言者たちの封緘（ふうかん）[2]である。
本当にアッラーは全知であられる。
【第３３章部族連合章〔アル・アハザーブ〕４０節】

預言者ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ））の後には、新しい預言者が出てくることはない。また新しいメッセージも下されない。後から誰かがやってきて「私は預言者である。」と言ったならばそれは大きな間違いである[3]。ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）の後の預言者を受け入れることは、シャハーダと矛盾することである。

シャハーダを唱えることは、いくつかのことを信じるということに留まるだけではない。それの結果として、人は責任を負

[1] （ムーサーも従うと言っているのに、あなたはまだそれを読んで導きを求めようとしているのかという意味の言葉である：訳者注）」
[2] （封緘＝結びの意味で、最後の預言者であるとされている。）
[3] イーサーが再び蘇ることは正しいが、預言者としてではない。

うことになる。例えば「アッラーの他に神はなく」という前半部は、アッラー以外に仕えるものはないということの責任であり、「ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）は最後の使徒である。」と唱えた時には、預言者に従うことに対しての責任を負うことになる。これから逃れるのならば、責任を果たさないことになる。人々にとって大切な存在である預言者ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）に対する敬愛の気持ちを持つことも、責任の１つである。クルアーンでは、前にも引用した節であるが、次のように告げている。

　言ってやるがいい。
「あなたがたの父、子、兄弟、あなたがたの妻、近親、あなたがたの手に入れた財産、
あなたがたが不景気になることを恐れる商売、意にかなった住まいが、
アッラーと使徒とかれの道のために奮闘努力するよりもあなたがたにとり好ましいならば、
アッラーが命令を下されるまで待て。
アッラーは掟に背いた民を導かれない。」
【第９章　悔悟章〔アッ・タウバ〕２４節】

　シャハーダを唱える意味の１つには、預言者が人々の模範であることを受け入れるということがある。アッラーはこう告げている。

本当にアッラーの使徒は、アッラーと終末の日を熱する者、アッラーを多く唱念する者にとって、立派な模範であった。

【第３３章　部族連合章〔アル・アハザーブ〕２１節】

また【第３章　イムラーン家章〔アーリ・イムラーン〕３１節】にも、次のアーヤがある。

言ってやるがいい。

「あなたがたがもしアッラーを敬愛するならば、わたしに従え。そうすればアッラーもあなたがたを愛（め）でられ、あなたがたの罪を赦される。

アッラーは寛容にして慈悲深くあられる。」

ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）が預言者であることを認めているのにもかかわらず、理由は分からないものの、模範にしない人もいる。もっとおかしなことに、預言者を模範とする人に反対する人もいる。それは、預言者についての後半のシャハーダを事実として理解していないということである。預言者は次のように言っている。

「わたしは、あなたがたの誰よりもアッラーを畏れており、信心深くあります。私は断食し、食べ、祈り、眠り、そして女性

と結婚する。わたしの慣行を好まない人は、わたしには従っていないということです。[1]」

預言者はアッラーを最も畏れていると述べている。信者が彼を模範にできないという言い訳はできない。また次のハディースでも同様に告げられているのである。

「預言者を信じ受け入れるならば、同時に、わたしの行動を認めないということは考えられません。[2]」

３．イスラームに入信する際に行うこと

イスラームに入信するとき、いくつかの行為について取り沙汰される。きれいに身体を洗うこと（グスル）、体毛を剃ること、割礼[3]など、こういった行為の有無は、信仰告白を遅らせる理由にはならない。多くの人の前でシャハーダすることを優先し、シャハーダを延期することはないのである。人がイスラームに入ると決心した場合は、何よりも先にシャハーダを唱える必要がある。なぜならば、人はいつ死ぬか分からないからである。

[1] ブハーリーの伝承による。
[2] 同上。
[3] （著者も最後で書いているが、割礼は義務ではないという意見が多い。：訳者注）

〇グスル（ニーヤ〔意志〕を立てて水で身体を清めること）

　これについては、学者は新ムスリムが入信する場合に、４つの説がある。簡単にまとめると[1]、入信する人にとってこれが義務であるというのは、マーリキー学派とハンバリー学派でもよく知られている説である。義務ではないというのは、ハンバリー学派の一部である。望ましいとしているのは、ハナフィー学派、マーリキー学派、ハンバリー学派のそれぞれの一部である。そしてジュヌブあるいはジャナーバ（不浄）、つまり夢精あるいは性行為によって精液が出たような状態の場合には、男女ともにグスルをすることが望ましい。女性の場合はハイド（月経）やニファース（分娩）、すなわち出産後の出血があれば、清める必要がある。つまり、礼拝をするつもりで、身体を清めるということである。

　これらの見解の相違の理由としては、あるハディースで預言者が身体を洗うよう命じたということもあり、それは弱いハディースであると考えられているからである[2]。その上で多くの学者たちは、こう考えている。預言者の時代には多くの人びとがイスラームに入信したが、預言者がグスルを命じたという確たる証拠はない。しかし預言者が命じたという弱いハディースも

---

[1] 詳細を見るには、以下の文献を参照。ディバーン　アッディバーン著『グスル（「清めることの決まり」：訳者注）』pp.113～128、もう１つの文献は、ヤフヤー　アンナワウィー著『マジュムーア　シャルフ　アルムハッザブ（大体の意味は「全体の説明」：訳者注）』Vol.2、pp.153～154。後１つは、イブン・クダーマ著『アルムグニー（意訳「助けるもの」：訳者注）』Vol.1、p.350。

[2] アルバーニー師は「このハディースは正しい。」と言っている。アルバーニー著『ミシカート　アルマサビーハ（「塔の窪み」：訳者注）』Vol.1、p.118。

検討すれば、グスルは義務としてではなかったが望ましい行為であるということはできるのではないか。どちらにしろ、ムスリムは礼拝をしなければならず、礼拝の前には身体を清める必要があるので望ましいと考えられるのである[1]。

グスルには、身体を清めるというニーヤつまり意志表明が必要である。（ジャナーバの時も、単に身体を洗うだけでなく意志表明が必要である。）これについて学者のいろいろな論議がある。なぜならジャナーバの状態の場合、また女性の場合月経や出産後の出血の際には、礼拝をするにはグスルをして清める必要があるために、結局のところ身体を清めることになるからである。

以上のことから結論を出すと、グスルはイスラームの望ましい行為ではあるが、入信する際の義務ではないと言ってもよい。しかし、グスルを重要ではないと見做すのは良くないのではないか。イスラーム世界に入った人は、まるで新しく生まれ変わり、これまでの人生とは違う人生に移ったようだと、多くのイスラームに入信した人々が話している。なぜなら、入信の際には身体的にも精神的にも思考的にも、準備が必要であるからである。グスルはある意味で、些末なことでもかつて悪い行いをした自分の汚れを落とすという比喩もあるであろう。

[1] 女性の場合は、生理の時、出産後の出血の時には、出血が止まるまで礼拝はしない。

〇体毛を剃ること

　これは、次の「弱いハディース」に基づいていると言われている。

預言者ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）のところにある人がやってきて、「私はムスリムになった」と言った。そのとき預言者は、彼に

「伸ばしていた毛を剃るように。」と命じたという。[1]

　このハディースが正しかったとしても、預言者の時代でもその後でも、この習慣は広がっていない。そのため何人かの学者たちは、上のハディースはイスラームに入る前に宗教上の目的で体毛を伸ばしていた人々のために言われたのではないかと見ている。その場合は、毛を剃る必要があった。[2]　例えば、今の時代でも、ヒンドゥー教徒の一部の人びとは全ての体毛を剃らずに、宗教上の博愛のサインでもあるとみなしている。上のハディースが正しいかどうかは別にして、以上のことから考える

[1] アハマド、アブドゥルラッザーク、アブー・ダーウード、アルハーキム、バイハキーその他の伝承による。「弱いハディースである。」と言っているのは次の人びとである。アンナワウィー、イブン・ハジャル、アッザハビー、アルミナーウィー、アルムンザリー、アルシューカーニー、アルビンバーディー、アルムバーラクフーリー、アルリビアーニィー（の各師）。しかし、アルバーニー師は「これは良いハディースである。」と言っている。前掲書『サヒーフ　アルジャーミャー』Vol.6、p.476。

[2] このハディースは次の２冊に掲載されている。
ムハンマド　シャムスルハック著『アウヌ　アルマアブードゥ　シャルフ　スナニ　アビーダーウード（「人間の助け－アブーダーウードの解釈」：訳者注）』ダール　アルクトブ　アルアーラミーヤ出版、ベイルート、レバノン、1995 年、p.15。
ムハンマド　アブドゥッラハマーン　アルムバーラクフーリー著『トッファウ　アルアハワズィー（「ティルミズィー伝承の説明の一つの本」：訳者注）』ダール　アルクトブ　アルアーラミーヤ出版、ベイルート、レバノン、Vol.3、p.183。

と、これは義務ではないが、イスラーム以前の人生に区切りをつけるという意味では望ましい、ということが分かるであろう。

〇割礼について

あるハディースによれば、預言者が割礼を命じたというのもある[1]。また、もう１つの伝承によれば、預言者ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）は、相手が年齢が上の者であったとしても、割礼を命じたというハディースもある。しかし、これらは「弱いハディース」であり、預言者が言ったとは考えられないのではないか。

割礼については、義務なのか、もしくは確証されたスンナによるのか、といった議論がされている[2]。そのため、入信する際に割礼が義務であるということには、はっきりした根拠が必要であろう。昔、何人かの人がイスラームに入った際に、学者たちは割礼を押し付けなかったという話も伝わっている[3]。近代の医学でも、積極的に勧めてはいない。また別の国ではかなりの費用もかかり、ムスリムになるための費用が嵩むために、それを強制するべきではないとも言われている。こういったことを考え合わせれば、割礼は義務ではないと言うべきだろう。

---

[1] アハマド、アブドゥルラッザーク、アブー・ダーウード、バイハキー、アルタバラーニーの伝承による。でも多くの学者は、ハディースとしては弱いと言っている。アルバーニー師は「マクブール（いいでしょう。：訳者注）」と言っている。

[2] ディバーン　アルディバーン著『アハカーム　アッタハーラ（「浄化の決まり」：訳者注）』pp.91～110。

[3] 同前掲書、p.137。

４．新ムスリムにおける入信前の恩恵

いくつかのハディースの中には、新ムスリムに対する恩恵がある。一般的には、入信する前の自分自身の過去は、大きく分ければ善い行為と悪い行為で満ちていたであろう。預言者ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）は、入信前の行為の報いについて示している。ブハーリー師によれば、ハキーム　イブン・ハザーム（彼にアッラーのご満悦あれ）に預言者が言ったと言われるハディースがある。

彼は預言者に聞いた。「私は、ジャーヒリーヤ（イスラーム以前）の時代に、親族を大切にした。また奴隷も解放した。そして喜捨も施した。これは恩恵が加算されるのであろうか。」預言者は答えた。

「あなたが前の行いのままイスラームに入ったのであれば、それは報われるでしょう。[1]」

上記のハディースは、イスラームに入る前の行いに対し報われるという意味である。しかし、預言者は全てのイスラーム以前の善行に対して報われるとは、はっきりとは言っていない。なぜならばその行為には、アッラーの教えに従った純粋な意志表明があったかどうかが条件となるからである。このハディー

[1] このコメントについては、イブン・ハジャル著『ファトフ　ルバーリー（「サヒーフ　ブハーリの明瞭な解釈」：訳者注）』ダール　アルマリーダ出版、ベイルート、レバノン、pp.302～303 と、バドルッディーン　アルアイニー著『オムダットゥ　アルカーリー（意訳「ブハーリの正しい解釈」：訳者注）』ダール　イヒヤー　アルトラーフ出版、ベルート、レバノン、p.303。

スには、いろいろな解釈がある。その１つは、善いことを行うのは善い人であり、またムスリムになっても同じように善い行いをするであろうから報われるという説である。善い行いの結果が、イスラームに向かわせたとも言えるのである。もう１つの解釈は、アッラーは善い行いに関して必ず報われると信じられているからである。預言者ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）は、ハディースにてこう言っている。

「信仰を拒否する人も、善い行いをすればこの現世で報われます。[1]」

信仰を拒否している人が、入信してイスラームに従って良い生き方をすれば、イスラーム入信前の行いに対して報われ、そして悪いことも取り除かれることであろう。善い行為に対しては、アッラーは１０倍から７００倍に至るまで報われるといわれ

る。１つの悪に対しては１倍の報いである。アッラーは悪に対しても赦しを与えることもあり、これはアッラーの恩恵の一部である[2]。

上のハディースは、イスラーム以前の善に対して報われ、悪も取り除かれるということを意味するものである。しかしそれは、イスラームに入ってからは完全に悪行から離れることが１つの条件となる。これを確証するハディースは、次の通りであ

[1] ムスリムの伝承による。
[2] マーリク、ナサーイーの伝承による。アルバーニー師は「正しいハディースである。」と言っている。前掲書『サヒーフ　アルジャーミャー　アッサギール』Vol.1、p.122。

る。イブン・マスウード（彼にアッラーのご満悦あれ）のハディースによると、ある人が預言者ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）に聞いた。

「アッラーの使徒よ。イスラーム入信前にやった悪はどう裁かれるのですか。」預言者は「イスラームに入って善い行いをする人は、それ以前の悪に対しては、裁かれないでしょう。イスラームに入ってから悪い行いをした場合は、以前と今の悪に対して裁かれます。」と答えた。

アハマドのハディースによれば、預言者ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）は、アムル・イブン・アルアース（彼にアッラーのご満悦あれ）に次のように話をした。

「アムルよ。イスラーム入信後はイスラーム以前の罪は除かれるとは知らないのですか。[1]」

このハディースに従えば、イスラームに入れば、人からは悪が取り除かれ、イスラームに入ったとしても悪業が続いていれば、悪は取り除かれないということである。ただし、これはあくまでもアッラーと人間の間だけの関係であって、他の人びとに対しての行為ではない。例えば、借金を返済しないなど、現世で罰せられることに対しては別である。アッラーは次のように告げている。

[1] アハマドの伝承による。『サヒーフ　ムスリム伝承』にも掲載されている。

　アッラーとならべて、外のどんな神にも祈らない者、正当な理由がない限(かぎ)り、アッラーが禁じられた殺生を犯すことなく、また姦婬(かんいん)しない者である。

だが凡(およ)そそんなことをする者は、懲罰される。

【第２５章　識別章〔アル・フルカーン〕６８節】

　復活の日には懲罰は（罪に応じ）倍加され、その（地獄で）屈辱の中(うち)に永遠に住むであろう。

【同章　６９節】

　悔悟して信仰し、善行に励(はげ)む者は別である。

アッラーはこれらの者の、いろいろな非行を変えて善行にされる。

アッラーは寛容にして慈悲深くあられる。

【同章　７０節】

　何人かの学者がこのクルアーンのアーヤについて論じている。イスラーム入信によって、ある人のサイーヤート（悪い行い）は、善い方に変わると述べている。現世で人間が善い行いをすると、悪行は審判の日に変わり、以前に犯した罪を懺悔することで恩恵を受けられる、と別の学者は言う。簡単にまとめれば、新ムスリムには、入信するまでの悪を取り除き、善も頂けるという大きなチャンスでもある。ただし、入信してからはイスラームの教えに従い、それ以前に犯した罪や悪行に再び落ちないように、精進しなければならないだろう。

啓典の人々であるユダヤ教徒、キリスト教徒に対して、クルアーンのもう１つのアーヤと、別のハディースを紹介しよう。アッラーが遣わされた使徒の一人を信じ、彼に下された啓典を信じ、そして啓典に告げられている最後の使徒のことを信じた人びとに対し、アッラーは次のように告げている。

今われはかれら（マッカの民）にも言葉（ことば）を届けた。
必ずかれらは訓戒を受け入れるであろう。
【第２８章　物語章〔アル・カサス〕５１節】
われがこれ以前に啓典を授けた者たちはよく信仰している。
【同章　５２節】
それがかれらに読誦されると、かれらは言う。「本当にこれは主から下された真理です。わたしたちはこれを信じます。
わたしたちはこの（下る）以前からムスリムであったのです。」
【同章　５３節】
これらの者は２倍の報奨を与えられよう。かれらは（よく）耐え忍び、善をもって悪を退け、
われが与えたものを施すために。
【同章　５４節】

預言者ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）も次のように言ったといわれる。

「ある啓典を受けた人びとの一人で、彼らの預言者を信じており私がやってきたときに、私のことも信じ従った。この者は、２倍の恩恵をもらうことができます。[1]」

５．新ムスリムにおける入信前に儲けたお金

人がイスラームに入信したら、正当性のない所から儲けたお金があるかもしれないと、気になるだろう。例えば利息や、あるいは酒や麻薬などの販売益などから儲けた場合である。新ムスリムがそれをまだ手にしている時は、どのようにしたら良いのであろうか。イスラーム法を別にして、新ムスリムが入信する前から住んでいた国の法律に違反しないで儲けた場合は、ハラール（合法）であろう。クルアーンにはこう書かれている。

・・・

しかしアッラーは、商売を許し、利息を禁じておられる。それで主から訓戒が下った後、止（や）める者は、過去のことは許（ゆる）されよう。

[1] ある学者たちは、キリスト教徒であってイスラームに入信した人のケースであると言っている。なぜならば、ユダヤ教徒たちは、イーサー（彼にアッラーからの平安あれ）を信じなかった。というのは、自分の預言者のメッセージを本当は信じていなかったということになる。なぜならば、彼はイスラエルに民に遣わされた預言者だからであり、そのメッセージを拒むことは、自分の預言者を拒むことであり、このハディースは、適用されないという意見である。しかし、預言者ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）の話は、一般論であり、そのまま理解すべきである。先のアーヤでも、ユダヤ教徒とキリスト教徒のことは確証されているからである。イブン・ハジャル著　同前書『ファトフ　ルバーリー』Vol.1、pp.190～191 参照。

かれのことは、アッラー（の御手(みて)にの中(うち)）にある。

だが、（その非を）繰り返す者は、業火の住人で、かれらは永遠にその中に住むのである。

【第２章　雌牛章〔アル・バカラ〕２７５節】

このように、アッラーは導かれる前に犯した悪い行いを、大目に見て下さる。預言者の時代には多くの人が入信したが、預言者は彼らにお金について聞いたとはどこにも伝わっていない。（またイスラーム前の結婚についても聞いたという話はない。）人はそれまでは正しいこととして行なっていたからであり、いくつかの説から、イスラームに入ってもそのお金は持ち主にそのまま残されるのであろう。お酒によって儲けるお金がハラーム（禁忌）と知っていながら、ムスリムになってから収入を得たのとは、状況は異なるからである。

決まっていた取引のお金を受け取るのは、その人が入信する前であれば、ハラールである。例えを挙げよう。ある人がお酒の取引をしたとして、彼は７月１日に売り、支払いは１２月１日である場合、それを買った人が彼に９月にお金を渡したとする。この場合の収入について、ある学者はこれはハラールであると言う。なぜかといえば、契約は入信前であるからだ。前述したクルアーンのアーヤにある通り、済んだことは済んだことであると判断しているからである。また、アッラーは同章でも、同じように告げている。

もしあなたがたがそれを（放棄）しないのであれば、
アッラーとその使徒から、戦いが宣告されよう。
だがあなたがたが悔い改めるならば、あなたがたの元金は収得（しゅうとく）出来る。
（人びとを）不当に扱わなければ、あなたがたも不当に扱われない。
【第２章　雌牛章〔アル・バカラ〕２７９節】

何人かの学者は、入信したムスリムは商売の内容次第によっては儲けてはいけないという説も出している。預言者ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）が、最後の巡礼の時に、利息関係の契約を全て無効にしたと伝わっているからである。

様々な議論があるが、ここで結論としてまとめると、人は入信した後には正当性のない収入を得ることはできない。入信する前の契約だったとしても、そのようなお金はハラームと見做して受け取らないほうが無難であろう。近頃は、契約を無効にできない状況の時もある。お金を受け取らざるをえない場合は、それをサダカとして寄付するのが良いのではないか。例えば、モスクにはそのお金のための基金を作り、学識者の指示によって、恵まれない人のために分配したり使用したりする仕組みがある。

６．入信前の結婚（ジャーヒリーヤ時代の結婚）

イスラームでは、それ以前（ジャーヒリーヤ時代）の結婚も認証している。その根拠はたくさん挙げることができる。クルアーンでは、イスラーム以前に結婚した夫婦も結婚として認めている。預言者を迫害したアブー・ラハブの妻も奥さんとして紹介し、ファラオの妻にも触れている。教友たちは、イスラーム以前の結婚で生まれた者が多いので、それもまた正当性のある結婚として認められている。預言者は、結婚届をイスラーム法に従って、再度出すようにも言ってはいないし、結婚の証人もいたかどうかも聞いてはいない。しかし、ジャーヒリーヤ時代に禁止されている関係はハラームのままイスラームにも残り、従ってその結婚で生まれた子供たちも正当性はないとされる。ジャーヒリーヤ前の正当な結婚で生まれた子供たちは、イスラーム時代にも正当性があると認められている。

しかし、例外はある。イスラーム法から逸脱した結婚は無効である。例えば、昔のペルシャでは、妹と兄の結婚が許されていた。しかしイスラームでは許されない結婚である。また複数の人と結婚した場合、男は４人以上の妻がいる場合も多かった。イスラームに入信した場合は、４人までにしなければならなくなる。

結婚に関しては、多くの問題があった。男が妻と同時に入信した場合は、問題がない。また男が、キリスト教徒あるいはユダヤ教徒の女性と結婚している場合にもそのまま認められてい

る。しかし、問題となるのは以下のケースである。キリスト教徒でもなくユダヤ教徒でもない女性と結婚している場合、男は入信しても彼女は入信しなかった場合には、ある問題が生じる。妻は入信したが、夫はムスリムではない場合の結婚も同様である[1]。それについては、クルアーンでは次のように記されている。

あなたがた信仰する者よ、婦人の信者が、あなたがたの許(もと)に逃げて来た時は、かの女らを試問しなさい。
かの女らの信仰に就いては、アッラーが最もよく知っておられる。
もしかの女らが信者であることがあなたがたに分(わか)ったならば、不信心者の許(もと)に帰してはならない。
かの女は、かれら（不信心者）には合法（の妻）ではなく、またかれら（不信心者）も、かの女らにとっては合法（の夫）ではない。
しかしかれら（不信心者）が（マハルとして）贈ったものは返してやれ。あなたがたが、かの女らにマハルを与えるならば、かの女を娶(めと)っても、あなたがたに罪はない。
だが不信心な女との絆を、固持していてはならない。
あなたが（マハルとして）贈ったものの返還を（不信心者のかの女の夫から）求めてもよい。またかれら（不信者）が贈った

[1] この件についての見解には、大きな相違がある。筆者はイブン・カイイム師が達した結論に従っている。イブン・アルカイイム著『アハカーム　アハル　アッズィンマ（「啓典を受けた人の決まり：訳者注）」』Vol.2、pp.640～695。

ものについては、その返還の要求を（あなたがたに対して求めさせればよい）。

これはアッラーの御裁である。

かれはあなたがたの間を（公正に）裁決なされる。

本当にアッラーは全知にして英明であられる。

【第６０章　試問される女章〔アル・モンタヒナ〕１０節】

　多神教の女とは、かの女が信者になるまでは結婚してはならない。

仮令あなたがたが気に入っていても、多神教の女よりは信仰のある女奴隷が勝る。

また多神教の男が信者になるまでは、あなたがたの女子をかれらに嫁がせてはならない。

仮令あなたがたが気に入っていても、多神教の男よりは信仰ある奴隷の方が勝っている。

これらの者は、信者を業火に誘う。

だがアッラーは寛容に罪を許され、楽園に呼び入れられる。

また人びとに、かれの印を明示される。恐らくかれらは反省するであろう。

【第２章　雌牛章〔アル・バカラ〕２２１節】

イブン・カイイム師の見解では、女性が入信して、夫はムスリムではない場合は、この結婚は保留とし、彼も妻の経費について責任を持たない[1]。しかし、妻の女性には結婚解約の選択（二人が離婚した場合、彼女は３ヶ月のイッダの期間が過ぎれば、また結婚することが可能）もできるのであり、またその結婚を夫が入信するまで保留しておくという選択もできる。後者の場合は、年月が経っていても、新しい契約を結ぶ必要はない。その根拠の元とされるケースは、預言者の娘のザイナブ（彼女にアッラーのご満悦あれ）の結婚である。彼女は入信したが、夫であるアブー・アルアース・イブン・アッラビーウ（彼にアッラーのご満悦あれ）は入信を拒否した。彼が６年後に入信した時マディーナを訪れたが、預言者ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）は、新しい契約やマハルなしで、娘を夫に会わせたといわれているのである[2]。

男が入信し、妻はユダヤ教徒でもなくキリスト教徒でもなく、入信しない場合、その間の夫婦生活はできないので、彼女が入信することを拒否した時には、結婚は解約となる。アッラーは、クルアーンで次のように告げている。

---

[1] もし彼が生活費について責任を持ったとしても、彼女は入信という選択をしたからである。男には、義務がない。同時に彼女も、妻の役割を果たさない。

[2] イブン・アルカイイム著『アハカーム　アハル　アッズィンマ（「啓典を受けた人の決まり：訳者注）」』Vol.1、p.650。この中で、次の話がある。ザイナブの夫が、マディーナに来た時に、預言者に聞いた。「夫はうちに泊まってもいいのですか。」預言者はこう答えた。「夫なので泊まってはいいが、但し触れてはいけません。」つまり、夫婦ではあるが、完全に保留になっていたという。しかし、結婚が解約されたのではない。残念ながら筆者は、この話を外の出典から確認することはできなかった。

・・・

だが不信心な女との絆を、固辞してはならない。

あなたが（マハルとして）贈った物の返還を（不信心者の彼女の夫から）求めてもよい。またかれら（不信心者）が贈ったものについては、その変換の要求を（あなたがたに対して求めさせればよい）。

これはアッラーの御（お）裁である。

かれはあなたがたの間を（公平に）裁決なされる。

本当にアッラーは全知にして英明であられる。

【第６０章　試問される女章〔アル・モンタヒナ〕１０節】

７．ムスリムになって名前を変えるか変えないか

　ムスリムになったときに名前を変えるのは、多くの地で、普通に行われるようになった。新ムスリムが、自分が新しく属する社会と馴染むために、名前が変わることが重要な意味を持つこともある。名前を変えることが必要なのか、望ましいのか、間違いはないのかといった質問について、アブドゥルアジーズ・イブン・バーズ師は、次のように答えている。「イスラーム法には、アッラーの導きを頂いてムスリムになった時に、名前を変えなければならないという根拠はない。もし正当性のある理由があれば例外である。例えばアッラーを信じるに反する意味を持っている、アブドゥルマシィーフ「キリストのしもべ」

などは変更するのが良いのであろう。ともかく、アッラー以外のものを崇拝することを連想させるような名前は、変えることができる。

また、良い名前があるのに、相応しくない名前が付けられている場合もである。例えば、アルフズヌ（悲しみ）。それを優しさと言う意味のアッルトフに変えることもできる。英語の場合は、ジュリファアス（悲愴）は、マイルド（和やか）に変えるということも考えられる。人が嫌な感じを持つ名前は、変えなければならないことはないが、変えた方が良いであろう。また名前でキリスト教徒とすぐに分かるような名前も変えた方がいいと思われる[1]。

ビラール　フィリップス師はなお説明して、次のように言っている。新ムスリムたちはイスラームの命名の仕組み[2]を知らず、例えばヨーロッパの混沌とした名前の付け方のスタイルの中で、適当にアラビア語の名をつけた例もある。アメリカ在住のアフリカ系の新ムスリムたちは、自分の姓を取り除いてしまうこともある。奴隷制の時代に押し付けられた名前であるからというのがその理由である。奴隷たちの名には、その持ち主の名前が姓に使われることが多かった。同じように家族にも奴隷主の姓が使われ、子孫にわたって次の世代に受け継がれていった。Clive Baron Williams の場合、父は George Herbert Williams で、イ

---

[1] アリー　アブー・ラウズ蒐集『アジュウィーバ　アラー　アスイラティ　ミン　ムスリミーン　ジャッダドゥ「新ムスリムの質問の答え」：訳者注)』pp.22～23。

[2] ここで仕組みと言うのは、命名の仕方のことであり、つまり誰が誰（父）の子で、その後で部族名か苗字がくることである。

スラーム名を Faisal Umar Nkruma Mahdi にするということもある。イスラームの命名方法ならば、Faisal Bin George Bin Williams　ということになろう。Williams がその人の先祖の農場所有者の名前だったとしてもである。改名や改姓は、ムスリムではない家族の悲しみや怒りを買うこともある。これは、もし新ムスリムが本当のイスラームの命名の仕組み（特に変える必要はない）に従っていたならば、簡単に避けられた問題であったろう。

実のところ、新しく入信したムスリムの場合、男性でも女性でも名前を変える義務はないのである。例えば、キリスト教徒の場合は、それがイスラームの教えに違反しない名前ならば、特に変更する必要はないのは承知の通りである。そのため、先の例に出した Clive 氏の場合も、この名は「移住民」という意味なのでイスラームには違反はしておらず、変更の必要性はなかったといえるのである。一方、Dennis[1]のような名前は、変えなければならない。なぜならば、この名の由来はギリシャで崇拝されていた多くの神の一人の名前に由来するからである。しかし、ムスリムは古くからのムスリムであろうと、新ムスリムであろうと、姓名ではなく氏名の下の名前を変えるのは可能である。預言者ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）のスンナによれば、その名前が大げさな意味合いを持つとか、イスラーム的ではないとか、一般的にマイナスの意味の場合は、変えてもいいとされている。例えば、預言者の妻の一人であっ

1　（Dennis は、酒と演劇の神デュオニソスの名前が元になっている。：訳者注）

たバッラ（Barrah）は「敬虔な」という意味なので、預言者は彼女の名前をザイナブに変えた。なぜならば、アッラーがこう告げているからである。

・・・あなたがたは自分で清浄ぶってはならない。
かれは主を畏れる者を最もよく知っておられる。
【第５３章　星章〔アン・ナジュム〕３２節】

しかし預言者は、父親の名前についてはそれがイスラームにどんなに違反しても変えることをしなかった。家族の苗字や父親の名前を削ることは、イスラームの教えに違反することでもある。イスラームでは、父親自身の名前と最後の名前（苗字）は残さなければならない。その上にムスリムの彼自身の名前を加える。父親が分からない場合は、母親の名前と最後の苗字をつけることになる。

８．イスラームに入ったことで得られる実り

イスラームの特徴については前にも述べたが、ここではイスラームに入ったことで得られる実りに焦点を当てて紹介したい。イスラームの利益は、人間社会全体のためにある。人間の崇拝のあるなしに関わらず、アッラーはこの導きを人類世界に下されたのである。アッラーに受け入れられるような道徳・マナーはどうあれば良いのかを教えることが導きである。

誰でも導かれる者は、只自分の魂を益するために導かれ、また誰でも迷う者は、只自分を損うために迷う。
重荷を負う者は、他人の重荷を負うことは出来ない。
われは（警告のため）一人の使徒を遣わさない限り決して懲罰を下さない。
【第１７章　夜の旅章〔アル・イスラーゥ〕１５節】

イスラームを拒否するものは、結局人にというよりも自分自身にとって害となる。それは次のクルアーンにある。

本当にアッラーは決して人間を害されない。だが人間は自らを害する。
【第１０章　ユーヌス章　４４節】

（1）しもべの主、創造者アッラーの道に辿り着くこと

ムスリムにとって一番は、まずアッラーの存在をよく知ることである。アッラーの属性や名前、アッラーが下したクルアーンを通しての教え、預言者ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）のスンナなどから、信者はアッラーについて理解するようになる。アッラーのそれぞれの名前を知るだけで、人間はアッラーに対する敬愛の気持ちを持つことができるだろう。そして、アッラーを畏れる気持ちも同時に持つことになる。

人間は善い行いをすることによって、アッラーの特性[1]に沿った行動を取ることで、アッラーにより近づくことになる。[2]

イブン・タイミーヤ師は、次のように言う。「アッラーの名前とその意味を信じるものは、意味を理解せずただ信じている人よりも、信仰の念が深くなる。[3]」またイブン・サーディー師は、こう述べている。「アッラーの名前（特性）を知れば知るほど、アッラーへの信仰と確証の気持ちが増すのである。[4]」人間はアッラーの名前と特性についての十分な知識があれば、宇宙を理解する入り口を見つけたようなものである。この考えをイブン・カイイム師は、次の美しい文章で説明している。「アッラーを知っていれば、アッラー以外のことも分かり、アッラーを知らなければ、アッラー以外のことも無知である[5]。」

こういった知識の影響は、それなりの影響力がなければ、人間は御名（みな）の意味に合ったような生き方ができないだろう。善い生き方をすれば、アッラーの恩恵と天国を獲得できるのである。

---

[1] （特性とは、正義、慈悲、優美、親切のことである。：訳者注）

[2] イブン・カイイム師は次のように指摘している。アッラーのそれぞれの特性や名前に相応しい行が問われている。ムハンマド　イブン・アルカイイム著『ミフターフ　ダール　アッサアーダ（「幸福の家への鍵」：訳者注）』Vol.2、p.90。

[3] イブン・タイミーヤ著『マジュムーア　アルファターワー（「イスラーム法に従った判決」訳者注：）』（未出版）Vol.7、p.234。アブドゥルラハマーン　カーシムとその息子ムハンマドが蒐集した。フォーズ　ビント　アブドゥルラティーフ　アルクルディー著『タハキーク　アルウブーディーヤ　ビマアリファトゥ　アルアスマー　ワ　アッスィファート（「特性と名前を知ることによるアッラーへの崇拝」：訳者注）』Vol.7。

[4] フォーズ　ビント　アブドゥルラティーフ　アルクルディー著　同前書、Vol.7、p.167。

[5] イブン・アルカイイム著『マダーリジ　アッサーリキーン』Vol.3、p.351

預言者ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）は、ウンマ（イスラーム共同体）に言ったという。

「アッラーには９９の名前があり、それを把握すれば天国に入ることが出来ます。[1]」

預言者ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）は、人間がアッラーをよく知ることで信仰の醍醐味を味わうことができたこと、それによる変化を次の心地よさで説明している。

「信仰の心地よさを感じるには、３つの要件があります。１つは、アッラーと預言者以上に敬愛するものはないと信じること。２つ目は、人びとへの博愛はアッラーへの敬愛のためにあること。３つ目は、人が宗教を持たない時代に戻ることは、地獄に落とされることと同じくらい厭うということです。[2]」

アッラーを知ることによって得られることには、もう１つの素晴らしい側面があり、アッラーはクルアーンの多くのアーヤ（節）で告げているにもかかわらず、多くの人はそれに気付いていない。それは、イスラームという宗教には、アッラーと人間との特別な関係があることである。それによって、人間はアッラーに満足し、アッラーも人間に満足される。言い換えると、アッラーに単に服従し帰依するだけではなく、アッラーの教え

[1] このハディースは、ほとんどの人が同意している。ムハンマド　ハサン　ハーンの翻訳書『サヒーフ　アルブハーリー』Vol.9、p.296 に掲載。
　アッラーの名前を把握するということは、その名前から考えられる意味と特性を信じることである。人間はこれを暗記するだけでは天国に入れず、アッラーの御名の意味を犯せばこれも入ることはできないとある。このハディースは、ほとんどの人が同意している。

[2] これも、ほとんどの人が同意しているハディースである。

やアッラーが命じたことをよく知った上で、人間がそれに従えば、アッラーに受け入れられて、恩恵も授かることが出来る。アッラーは、クルアーンで次のように告げている。

（イスラームの）先達は、第１は（マッカからの）遷移者と、（遷移者を迎え助けたマディーナの）援助者と、善い行いをなし、かれらに従った者たちである。アッラーはかれらを愛でられ、かれらもまたかれに満悦する。
かれは川が下を永遠に流れる楽園を、かれらのために備え、そこに永遠に住まわせられる。それは至上の幸福の成就である。
【第９章　悔悟章〔アッ・タウバ〕１００節】

別の章では、重ねてこう告げている。

アッラーは仰せられよう。「これはかれら正直者が、正直ゆえに得（とく）をする日である。
かれらには川が下を流れる楽園があり、永遠にその中に住むであろう。」
アッラーはかれらを喜ばれ、かれらもまたかれに満悦する。それは大願の成就である。
【第５章　食卓章〔アル・マーイダ〕１１９節】

ここでは、他にも参照するクルアーンを注に挙げている。

【第５８章　抗弁する女章〔アル・ムジャーダラ〕２２節】や【第９８章　明証章〔アル・バイイナ〕８節】でもアッラーと信者の特別な関係を様々な節で思い起こさせているのである。[1]

（２）真の幸福

アッラーは、仰せられた。

・・・

われは「あなたがたは落ちて行け。あなた方は、互いに敵である。

・・・

【第２章　雌牛章〔アル・バカラ〕３６節】

---

[1] あなたは、アッラーと終末の日を信じる民が、
アッラーと使徒に反抗するような者と親交を結ぶところを見ないであろう。仮令かれらがかれらの父や、子、兄弟や親族であっても。
かれはこれらの者の心の中に信仰を書き留められ、親しく聖霊によって強められる。
また川が下を流れる楽園に入らせ、永遠にその中に住ませられるのである。
アッラーはかれらを愛でられ、かれらも**かれ**に満悦する。
これらは、アッラーの一党（信者）の者である。
本当に、アッラーの一党の者こそ、非常な幸福を成就する者である。

【第５８章　抗弁する女章〔アル・ムジャーダラ〕２２節】
　かれらへの報奨は、主の御許の、川が下を流れる永遠の園である。
永遠にその中に住むであろう。
アッラーはかれらを喜ばれ、かれらもかれに満悦する。
それは主を畏れる者（への報奨）である。
【第９８章　明証章〔アル・バイイナ〕８節】

アッラーは別の章で再び確認している。

かれは仰せられた。「あなたがた両人は一緒にここから下がれ。あなたたちは互いに敵である。

・・・

【第２０章　ター・ハー章　１２３節】

人間の創造者がアッラーであるなら、人間の精神は常にアッラーとの関係を求めるのは自然なことである。この関係がなくなれば人は不幸になるであろう。アッラーとの正しい関係を築くことで、人としての本当の幸せを感じるのである。

これまでの歴史上、学者及びアッラーを信じる人びとは、アッラーをよく知ることによって、心の中の満足感と幸福感を表現しようと試みている。例えば、イブン・タイミーヤ師は次のように言っている。「人生の現世にも天国があり、それに入らなければ、来世の天国にも入れないだろう。私の敵は、私に何が出来るというのか。私の楽園は、私の胸の中にある。[1]」

イブン・カイイム師は、イブン・タイミーヤ師に最も近い弟子であった。彼は師が投獄されている牢屋を何度も訪ねて来た。ある時、師にこう言った。「イブン・タイミーヤ師は牢屋に入られており苦しい生活であろうのに、良い人生を送っているよ

[1]イブン・アルカイイム著『アルワービル　アルサイエブ　ミン　アルカリム　アッタイイブ（「ハディースの解釈と生活の唱念の言葉」：訳者注）』ダール　アルビハール出版、ベイルート、レバノン、1986 年、p.73。

うに見えます、くつろいで、精神力も満ち溢れ、顔には喜びしか見えません。そして、私たちが恐れを感じて苦しい状況になれば、師に会って話を聞けば、その苦しみも怖さも消えて、落ち着いてきます。どうして、アッラーに出会う前にも、こうも自分の天国が見えたかのように、現世も生きていけるのでしょうか。[1]」

このように純粋で美しい気持ちで生きることができる人は、イブン・タイミーヤ師だけに限られるのではない。イブン・カイイム師は、敬虔なムスリムで、別の例を紹介している。その中の一人は「王たちとその息子たちでさえ、我々がどこまで幸せかを知れば、刀を持ってそれを奪おうとしたでしょう。」別の人は、次のように表現した。「現世に生きたほとんどの人は気の毒であろう。その人生で一番良いものを味わわず、他界してしまったからです。では、『一番良いものは何か。』と人に聞かれたら、『それは至高のアッラーへの敬愛、アッラーを知ること、アッラーへの唱念である。』と答えるでしょう。」三人目の例では、「ある人が言うには、時折私には幸せな時間が訪れますが、私が今感じている程の幸せの時を、天国の人々も感じているのであれば、彼らもまた幸せな暮らしの中にいると言えるでしょう。[2]」とまで言っているのである。また別の著者

---

[1] イブン・カイイム著　同上書、p.73。
[2] 同前書、p.73。
イブン・カイイム師は、イブン・タイミーヤ師がこう言ったと伝えている。「善い行いをして、心に落ち着きと醍醐味がなければ、あなたの心の中を疑いなさい。アッラーは、この現世で善い事をした場合には、人生の醍醐味を与えるで

は「精神の清浄の結果は常に実る果実であり、しもべ（人間）が味わえば甘味があり、その幸福の中で、精神の清浄化が深まれば深まるほどに、その甘味も増すのである。[1]」と述べている。また、アッラーは、８２章の１３節と１４節でこう告げている。

敬虔な者は、必ず至福の中にいる。

【第８２章　裂ける章〔アン・インフィタール〕１３節】

罪あるものは、きっと火の中にいて、

【同章　１４節】

イブン・カイイム師は、ここでアッラーの言われる至福とは、現世だけのものではなく、来世での至福でもあり、またその反対の場合には、地獄でもあると解説している。そして、人間がいるべき３つの場所も指している。現世の居場所である今ここの世界、アルバルザフ（墓中）つまり死んでから復活するまでの場所、そしてダール・アルカラール（永住地）の３つの場所である。至福というのは心からの幸福というものではないだろうか。そして苦痛や懲罰とは、心の苦しみのことであろう。アッラーを拒んでいるということは、胸の苦しみや悩み恐れがあるということで、それ以上の苦痛があるであろうか。

あろう。目に落ち着きと喜びがあるように、見えるよりはもっと大きな愉悦が、心に湧いてくるのである。」イブン・カイイム著　同前書『マダーリジ　アッサーリキーン（「天国への道」：訳者注）』p.68。

[1] アナス　カルゾーン著『ミンハージュ　アルイスラーム　フィー　タズキヤトゥ　アンナフス（「精神の清浄に関するイスラームの手順」：訳者注）』ダール　アンヌール　アルマクタバーツ、1997 年、p.753。

（３）自分自身に正義を

　他の神をアッラーと対等とみなすのは、大きな罪である。

　人間が使う他の生き物に仕えようとするのは、屈辱的な行為である。アッラーは、次のように告げている。

　さてルクマーンが、自分の息子を戒（いまし）めてこう言った時を思い起しなさい。「息子よ、アッラーに（外の神を）同等に配してはならない。それを配するのは、大変な不義（ふぎ）である。」

【第３１章　ルクマーン章　１３節】

　悔悟章でも、次のように告げている。

　あなたがた信仰する者よ、多神教徒は本当に不浄である。だからかれらのこの年以後、かれらを聖なるマスジドに近づけてはならぬ。

・・・

【第９章　悔悟章〔アッ・タウバ〕２８節】

　上のクルアーンにあるように、それは精神的な不浄であり、自分自身を軽視することを意味している。タウヒード（神の唯一性）を正しく理解することによって、高貴な気持ちでアッラーに帰依すること以外にはないと知るのである。アッラー以外のものに、赦しを求めることはない。そして偶像に頼ったり、

崇めている像を満足させるために、動物を屠ったり、何か捧げ物を備えたりすることもない。人間は、仕えるに値する唯一の神が存在しているという信念に基づいて、生きていくべきである。このような偶像崇拝の行為は、一神教のコンセプトにはなく、許されないことで禁止されている。アッラーがそういった偶像崇拝を目ざすために、彼を創ったのではないことを理解しなければならない。そもそも正しい真理を知っている者は、そういった行動には走らないだろう。人間は自分と同じように食べたり飲んだりしている人間に礼拝するだろうか。そしてまた人間は、アッラーと対等する人間がいると思うのか。そしてその人間に礼拝することができるのか。

（4）アッラーの懲罰から救われる道

【第３章　イムラーン家章〔アーリ・イムラーン〕１８５節】にこうある。

誰でも皆死を味わうのである。
だが復活の日には、あなたがたは十分に報いられよう。
（またこの日）業火から遠ざけられた者は、楽園に入れられ、確実に本望を成就する。
この世の生活は、偽（いつわ）りの快楽に過（す）ぎない。

人間は、どんな人も死から逃れることはできない。そして、死後アッラーの前に立ち、自分が行った行為に対して裁かれる。

多くの人々の思想や行為は、アッラーの必然的な道に引き出されて、アッラーの裁きを受ける対象となる。そこで救われるか否かは人間にとって非常に重要な要件となる。審判の日に、信者と信仰を拒む者との差は、明瞭になる。

人びとよ、あなたがたの主を畏れなさい。
（審判の）時の震動は、全く一重大事である
【第２２章　巡礼章〔アル・ハッジ〕１節】

その日あなたがたは見るだろう。凡（すべ）ての哺乳（ほにゅう）する者は、哺乳することを忘れ、
凡（すべ）ての妊婦はその胎児を流し、
また人びとは酔わないのに、酔いしれたように見えよう。
思うに、アッラーの懲罰が厳しいからである。
【同章　２節】

そしてまた、アッラーは次のようにも告げる。【第７４章包（くるま）る者章〔アル・ムッダッスィル〕８節～１１節】である。

ラッパが吹かれる時、
【同章　８節】
その日は苦難の日。
【同章　９節】
不信者たちにとり、安らぎのない（日である）。
【同章　１０節】

われが創った者を、われ一人に任せなさい。

【同章　１１節】

無神論者は、この世では自分の生きたいように生きていくので、審判の日にはアッラーからの恩恵は頂けず、アッラーは彼らを顧みられることはない。これについては、クルアーンの多くのアーヤで触れられている。例えば、次はその１つである。

アッラーの約束と自分の誓いを売って僅（わず）かな利益を贖（あがな）う者は、来世において得分はないであろう。

・・・

【第３章　イムラーン家章〔アーリ・イムラーン〕７７節】

（５）アッラーの恵みと天国

来世での信者の幸福とアッラーからの恩恵は、ムスリムにとって最も素晴らしい収穫である。人間が求めなければならない本当の生活は、来世である。そうであるとしても、アッラーの恩恵を求め、些細な欲望を超えて生きていかなければ、この現世での幸せもないのである。そのために、預言者ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）は次のように言っている。

「天国は、信者しか入れません。」

言い換えれば、イスラームに帰依し信じる者だけが、アッラーの恵みと素晴らしい人生が約束されるのである。アッラーか

らの恩恵を頂いて、来世での天国に入るまで、自分自身を清浄に保たなければならない。アッラーの導きに背を向け、この世で悪行を犯した者にはよい運命は訪れない。アッラーは次のように思い出させてくれる。

来世の住まいとはこのようなもの。われは地上において威張りたがったり、悪を行わない者にこれを授ける。善果は、主を畏れる者にある。

【第２８章　物語章〔アル・カサス〕８３節】

審判の日に、信者に対するアッラーの慈悲は、業火から救い清めるだけにとどまらず、天国に入らないような行為も浄化し、全てのものから彼らを救う。現世で善い行いをし、正しく信仰し清らかに生きた人にとっては、大きな恵みである。

ムスリムの正しい信者は、人生の全てのステージで幸福感を感じることができるであろう。前にも触れたように、信者たちは、この人生でも本当の幸福の体験をしている。一方それ以外の人びとは、空想上の蜃気楼のような幸福を求めている。そして、死に望む信者の魂は落ち着き、素晴らしい香りに満ち、来世で待つ至福の時に向かっていく。天使は使者に来世で待つ悦楽を告げる。アッラーはその様子を次のように告げている。

本当に、「わたしたちの主は、アッラーであられる。」と言って、その後正しくしっかりと立つ者、かれらには、（次から

次に）天使が下り、「恐れてはならない。また憂（うれ）いてはならない。

・・・

【第４１章　フッスィラ章　３０節】

　われは現世の生活においても、また来世においても、あなたがたの友である。

そこではあなたがたの魂は望むものを得（え）、

そこではあなたがたの求めるものが得られる。

【同章　３１】

　寛容にして慈悲深い御方からの歓待である。」

【同章　３２】

　そしてまた【第１０章　ユーヌス章　６２～６４節】も参照にして欲しい[1]。

　信者は、墓の中でさえも幸福に包まれる。墓は広がりをもち、天国での自分の席も見えるようになる。不信心な者には、業火に包まれた地獄での自分の居場所が見え、墓は狭く苦しく感じられるようになるという。

　アッラーは審判の日の信者たちを、次のように表している。

---

[1]（クルアーンを参考のため引用した。：訳者注）

　見なさい。アッラーの友には本当に恐れもなく、憂（うれ）いもないであろう。

【第１０章　ユーヌス章　６２節】

　かれらは信仰し、（アッラーを）畏れていた者たち。

【同章　６３節】

　かれらに対しては現世でも、来世においても吉報がある。

アッラーの御言葉（みことば）には変更はない。それこそは偉大な、幸福の成就である。

【同章　６４節】

　われから善行（の記録）を以前に与えられている者は、地獄から遠く離され、

【第２１章　預言者章〔アル・アンビヤーゥ〕１０１節】

　そこの微（かすか）な音も聞こえないであろう。

そしてかれらの魂が念願していた所に永遠に住む。

【同章　１０２節】

　大きな恐れがかれらを悩ますことはなく、天使たちは出（で）迎えて（言うであろう）。

「これが約束された、あなたがたの日です。」

【同章　１０３節】

　そして、またアッラーは次のようにも告げている。

　だがアッラーは、主を畏れた者を安泰な場所に救う。

かれらは災厄に会うこともなく、憂いもない。

【第３９章　集団章〔アッ・ズマル〕６１節】

　審判の日、アッラーは信者をその日の恐怖から救って天国に送ると、次のアーヤでアッラーは約束している。

　（善行を積（つ）んだ魂に言われるであろう。）おお、安心、大悟（たいご）している魂よ、

【第８９章　暁（あかつき）章〔アル・ファジュル〕２７節】

あなたの主に返れ、歓喜し御満悦にあずかって。

【同章　２８節】

あなたは、わがしもべの中(うち)に入れ。

【同章　２９節】

あなたはわが楽園に入れ。

【同章　３０節】

またアッラーは、集団章でも次のように告げる。

またかれらの主を畏れたものは、集団をなして楽園に駆られる。

かれらがそこに到着した時(とき)、楽園の諸門は開かれる。

そしてその門番は、「あなたがたに平安あれ、あなたがたは立派であった。ここに御(お)入りなさい。永遠の住まいです。」と言う。

【第３９章　集団章〔アッ・ズマル〕７３節】

かれらは（感謝して）言う。「アッラーに讃えあれ。かれはわたしたちへの約束を果たし、わたしたちに大地を継がせ、この楽園の中では、好きな処に住まわせて下さいます。」何(なに)と結構なことよ、（善）行に勤(いそ)しんだ者への報奨は。

【同章　７４節】

その上に、信者たちは次のように、アッラーの満足を獲得する。このことに関して、クルアーンには次のように出ている。

アッラーは、男の信者にも女の信者にも、川が永遠に下を流れる楽園に住むことを約束された。
また永遠〔アドン〕の園の中の、立派な館をも。
だが最も偉大なものは、アッラーの御満悦である。
それを得ることは、至上の幸福の成就である。
【第９章　悔悟章〔アッ・タウバ〕７２節】

この世での善い行いと正しい信仰を持ち、自分自身を浄化した者には、最高の報奨と追加のものがあると言う。アッラーは次のように告げている。

善行をした者には（天国へ入るという）素晴らしい報奨があり、また追加もある。
かれらの顔には、暗さや屈辱の影もないであろう。
これらは楽園の住人である。永遠にその中で住むであろう。
【第１０章　ユーヌス章　２６節】

それに関し、ムスリムの伝承による次のようなハディースも伝わっている。
「この節に出ている『追加』とは、アッラーの御顔を拝見できるということです。」

第５章　どのように信者となるか

イーマーン（信仰）の基本の六信五行について入る前に、準備として触れなくてはならない重要な２点がある。この章ではそれらについて説明したい。１つは信仰または信条をイスラームの視点から定義すること、２つ目は人間の信仰の基礎についての話である。

１．イーマーン（信仰）の定義

（1）イーマーン（信仰）の定義について[1]

「イーマーン（信仰）」とは多くの英語話者にとっては、正しいことを認めるということである。そうなると、次の質問を提起することができる。「アッラーの存在を信じますか。」答えは「イエス」であろう。同じく質問しよう。「アッラーへの信仰は、自分の人生、行為、目的に影響がありますか。」しかしこの答えには、「ノー」である。アッラーの存在についてはイエスであった人も、ノーの答えになるというケースは多い。その場合、次の質問をしなければならないだろう。「そのような信仰のあり方は、イスラームが呼びかけている『アッラーに対する信仰』のあるべき姿なのでしょうか。」

---

1 （日本語翻訳では、２項目に分けてまとめる。：訳者注）
（1）イーマーン（信仰）の定義について
（2）イーマーン（信仰）の基礎について

人間のイーマーン（信仰）は、まず心から始まる。イスラームは人間が信じるということを非常に重要視している。同時に、信じているけれども実際の生活ではどうすべきか分からない場合の方法についても重要視している。なぜならば、イーマーン（信仰）を持っている、つまり心で信じていると言っているが、実生活への影響が見えないというのは、イスラームの信仰という側面からいえば不自然なことだからである。信仰は、人間が何かをするときの原動力にならなければいけないとイスラームでは考えられているからである。

本当の信仰と行動には、抽象的なレベルは必要ではない。本当の信仰は、人間の日常生活に見える形で影響を及ぼさなければならないのである。盗難や詐欺といった犯罪も、人間の信仰と直接的に結びつけて考えるのであれば、道徳的に間違った行為であると思うのが普通である。そして公正で全知の神がおられ、その神が全てを知り、その悪行は必ず裁かれると信じているのであれば、人間はそういった行為には走らないであろう。しかし、人間が裁きの日を信じない場合は、彼の決断の如何は、逮捕されるか罰を受けるかの基準で決められるのである。

正しい信仰は、人間が物事の善悪の旗を振るときの単なる判断としての役割をしているだけではない。人間の信仰が進めば進むほど、イーマーン（信仰）は深く強くなる。イーマーンが人間の行動の中心になる。そして物事の好悪に関しては、信仰の深浅で決まる。

　例えば人は何かについて考える時に、アッラーにとって望ましい行動であるならば素晴らしいと思え、自分もそれが好きになってくる。反対に、アッラーが好まないと考えれば、その人はそれを嫌うようになる。

　タバコを例にとってみよう。人はタバコの害の事実を通して、喫煙は体に悪いと認識はしている。しかし、タバコはやめられない。つまり、彼が知った事実は、彼の行動の指針にはならなかったということである。事実は認めながらも、それを実施しなければならないとは考えていない。つまり、タバコの知識は自分の心の底までは届いていないのである。これと同じく事実を認めるだけでは、イーマーンではないということになる。クルアーンが示しているようにイーマーンは、人間が正しく信じることを守りそれを行うことまでを指すのである。正しく強いイーマーンがあれば、考えた瞬間から間違った行動に対して嫌悪を感じるようになる。その感情が、悪から離れさせるのである。同時に、善い行いは心の中で好ましいものとなっていくのである。

・・・

だがアッラーは、あなたがたに信仰を好ましいものとなされ、またあなたがたの心を、それに相応しくして、あなたがたに不信心と邪悪と反逆を嫌うようになされた。

これは正しく導かれた者である。

【第４９章　部屋章〔アル・フジュラート〕７節】

イーマーンは、人間の人生をリードしガイドしていく。もしイーマーンがあれば、外部の圧力がかかり心の中に弱いところが生じたとしても、容易には崩れないであろう。なぜならば、その人は正しいイーマーンに沿って行動しているのであるからである。例えば、信者が天使を信じていると言えば、自分の動きや行動を記録する天使の存在を信じているという意味であり、彼は天使に記録される悪いことをしたくはないと考える。

クルアーンとスンナの深い研究では、イーマーンには構成要素があることが示されている。それについてイスラームの初期の先駆者たちは、次のようにまとめている。「イーマーンは、言行一致である。」この「言」とは、心からの容認・断言として、はっきりと口（声）に出して明言するということである。「行」とは、心からの敬愛や帰依を表しており、また身体的な行為、例えば礼拝などを含んでいる[1]。

言行一致について明解にすれば、時間軸に沿って３つのファクターに分けられる。心のイーマーン、口で言明すること、身体で実践することである。繰り返すが、ここでいうところのイーマーンは、単なる事実を受け入れるだけではない。心のイーマーンだけでは、イスラームが望む真のイーマーンではないと

[1] アハマド　イブン・タイミーヤ著『マジュムーア　ファターワー　シャイフ　アルイスラーム　イブン　タイミーヤ（「イスラームの長老タイミーヤ師のファトワー蒐集―アブドゥルラハマーン　アルカーシムとその息子ムハンマドの蒐集による―」：訳者注）』Vol.7、p.672。（ファトワーとは、イスラーム法の解釈に基づいた判決：訳者注）

いうことである。ウサイミーン師は、「イーマーンとは、認め帰依し服従すること」と述べた。それは、アッラーの受け入れと服従を必要とするはっきりとした容認である。受け入れと服従なしの気持ちで何かを信じるというのは、イーマーンではない。

その根拠として、イスラームの初期の時代、ムシュリキーン（多神教徒たち）の例がある。彼らは、アッラーの存在を信じ、アッラーが創造主であるとも信じていた。アッラーは全てを授け、生死の主であり、この世の中の運命を決めるものと信じ、預言者ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）のメッセージを信じる人もいたにも関わらず、彼らにはイーマーンがなかった。預言者の叔父であったアブー・ターリブは、預言者は正直であり、彼の唱える宗教は真理であると認めていたにも関わらず、入信はしなかったのである。

（２）イーマーン（信仰）の基礎について

英語の「信仰」には、証明できないものも信じるという意味合いが入っている。言い換えると、信仰を人間が受け入れる場合、それは論理的な裏付けを通さない抽象的な「目には見えない信頼」である。この点で、イスラームのイーマーンの意味とは対照的である。イスラームの視点から考えると、イーマーンとは知識に基づくものである。人間の心（精神）と脳（思考）は、信仰を得て納得し落ち着く。アッラーが人々に下された心理的な思考と論理的思考が、イスラームにおいては矛盾するこ

とがない。アッラーは、人間自身のことあるいは人間を取り巻く宇宙を見て、考え思考するよう呼びかけている。アッラーは自分が創造したものをクルアーンで取り上げ、アーヤとして下し、人々に良く考えるよう命じている。人間が自分自身の周りの世界を誠実に考え思考したならば、その明確な結果と結論に到達するであろう。

①この宇宙は、智慧の創造主なしでは、存在しない。

②創造主は、目的なしにこの宇宙を創ったとは考えられない。

主はこう言う。

本当に天と地の創造、

また夜と昼の交替の中(なか)には、思慮ある者への印(しるし)がある。

【第３章　イムラーン家〔アーリー・イムラーン〕１９０節】

または立ち、または座り、または横たわって（不断に）アッラーを唱念し、

天と地の創造に就いて考える者は言う。

「主よ、あなたは徒(いたず)らに、これを御創(おつく)りになったのではないのです。

あなたの栄光を讃(たた)えます。火の懲罰からわたしたちを救って下さい。

【同章　１９１節】

また、こうも告げ知らしている。

　かれらは反省しないのか。アッラーが天と地、そしてその間にある凡（すべ）てのものを創造なされたのは、唯（ただ）真理のため、また定めの時のためであることを。
だが人びとの多くは、主との会見を否認する。
【第３０章　ビザンチン章〔アッ・ローム〕８節】

そしてまた次のようにも告げている。

　あなたがたは、われが戯（たわむ）れにあなたがたを創ったとでも考えていたのか。
またあなたがたは、われに帰されないと考えていたのか。」
【第２３章　信者たち章〔アル・ムウミヌーン〕１１５節】

　人間が論理的に考えたとしても、人間はクルアーンの成果に到達することはないとクルアーンは証明している。人はアッラーが創造主であると信じるのであれば、創造主がこの素晴らしい宇宙を目的なしに創ったという考えが、ふさわしくないものだと分かるであろう。創造者の存在を信じていれば、神が目的なしに創造物を創ったと考えるのは不自然である。この創造された宇宙、自然は、必ず特別な特性を持って創造主の存在を示している。つまり高貴で完璧な特性を持つアッラーが、この世界を適当に創ったとか、気分転換に創ったりしたとは考えられないのである。この世界は、アッラーを必要としている。アッ

ラーの指針や恩恵の下（もと）になければ、物事は何事もうまく運ばないだろう。アッラーはこのように告げている。

もし、その（天地の）間にアッラー以外の神々があったならば、それらはきっと混乱したであろう。
それで玉座の主、かれらが唱えるものの上に（高くいます）アッラーを讃えなさい。
【第２１章　預言者章〔アル・アンビヤーゥ〕２２節】

人間は考えることによって、もう１つの重要な結論に達することができる。主が創造された世界は、再び創るものはいないということである。死んだものを蘇らせることのできる創造主アッラーであればこそ、アッラーの前に全てのものを復活させることもできる。この考え方は、全世界の人々にも影響力があると思われる。クルアーンでは、こう告げている。

かれらは、天と地を創造されたアッラーが、かれらと同じようなものを、
創ることが出来るのが分らないのか。
またかれらのために、かれは一期限を定められた。それに疑いの余地はないのである。
それでも不義の徒は、不信心一筋に（その受け入れを）拒否する。
【第１７章　夜の旅章〔アル・イスラーゥ〕９９節】

また他の章のアーヤでも、次のように告げている。

またかれは、われに準（なぞら）えるものを引合（ひきあ）いに出して、自分の創造を忘れ、言う。

「誰（だれ）が、朽ち果（は）てた骨を生き返らせましょうか。」

【第３６章　ヤー・スィーン章　７８節】

言ってやるがいい。「最初に御（お）創りになった方（かた）が、かれらを生き返らせる。かれは凡（すべ）ての被造物を知り尽くしておられる。

【同章　７９】

緑の木から、あなたがたのために火を造られたのもかれであり、だからこそあなたがたはそれによって燃やす。」

【同章　８０】

天と地を創造なされたかれが、
これに類するものを創り得ないであろうか。
いや、かれは最高の創造者であり、全知であられる。

【同章　８１】

何かを望まれると、かれが「有（あ）れ。」と御命じになれば、即（すなわ）ち有（あ）る。

【同章　８２】

かれにこそ凡（すべ）ての称讃あれ。その御（み）手で万有を統御なされる御方、あなたがたはかれの御許（みもと）に帰されるのである。

【同章　８３】

　復活を否定する者が、アッラーが悪人と善人を同等に扱うことを期待したとしても、それはアッラーに相応しい振る舞いではないだろう。クルアーンでは次のように、こういった考えはあり得ないと告げており、これはアッラーを拒否している人々の考え方であると示している。

　われは天と地、そしてその間にあるものを、戯（いたず）らに創らなかった。
それは信仰のない者の憶測である。だが（いずれ地獄の）火を味わう信仰のない者こそ哀れである。
【第３８章　サード章　２７節】
　われが信仰して善行に勤（いそ）しむ者と、地上で悪を行う者と同じに扱うことがあろうか。
われが（悪魔に対し）身を守る者と、邪悪の者とを同じに扱うであろうか。
【同章　２８節】

　神聖なるイスラームの教義には、善人と悪人が同じ処遇になるという考え方はない。クルアーンは、アッラーからの啓示とそれを信じることは、「目に見えない論証＝ブラインド・ビリーフ」に基づいているのではない。証拠のない信仰心で信じるのではなく、イスラームでは明証で信じるのである。クルアーンには科学の奇跡があり、クルアーンの完璧な美しさとの間に

は矛盾がなく、２つは密接に結びついているからである。それに基づいて預言者ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）のメッセージを信じるのである。彼以前の時代の聖典にも彼のことが書かれて、彼の特性についても前もって紹介されている。預言者が修めた成果は事実であり、アッラーの教えによって１つの世代に変革を起こした。こういった事実の上に立って理解することで、ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）がアッラーの使徒であると確信することができるのである。

イスラームは、人間の自然な思考に一致した知識と理解に基づいている。創造主アッラーを信じ、この世の中が創造された目的を信じ、審判の日、クルアーン、預言者の誠実さを信じることが、イスラームでの重要なポイントである。知識に基づいているからこそ、イスラームの教義が深まるにつれて、イーマーンもまた深くなるのである。イスラームでは、知識とイーマーンの間の矛盾も衝突もない。イスラームでは、ただ神秘的なだけのことやつまらない摩訶不思議なものを信じることを要求されることもない。なぜならば、そのようなものは「目に見えない論証」となるわけで、イスラームとは無縁だからである[1]。

---

[1] もちろん、人間の思考・体験を超えたことはある。しかし、こういったことも公正な理解に基づいて信じるべきであろう。例えば、何人かの人は墓の中での苦しみを受け入れない。なぜならば死者は埋葬されたら分解されていくと考えられるからである。つまり、遺体が苦しむはずはないと考えるのである。しかし、実際に体には現れなくても、人間はもっといろいろなことがらで苦しむということは、誰も否定しないであろう。人間の心でさえ、体と同じような苦しみを持つことも

２．イーマーン（信仰）の六信五行

イーマーンの五行と同じく重要なムスリムが信じるべき六信については、次にあげる話にも出ている。これは「ジブリール[1]のハディース」と呼ばれる有名なハディースである。

大天使ジブリールは預言者ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）に聞いた。

「イーマーンとは何か。」

「アッラーを信じ、天使を信じ、啓典を信じ、そして使徒を信じ、来世を信じ、善悪を含めた定命を信じることです。」と預言者は答えた[2]。

新ムスリムも含めてムスリムには、六信について正しい理解が必要であるため、ここではそれについて説明を加えることにする。

（1）アッラーを信じること

イスラームにおけるイーマーンは、創造主は唯一であることを柱の第一にしており、タウヒード（توحيد）[3]と呼ばれている。

ある。とにかく、いろいろな考え方はアッラーの力を信じる正しい理解に基づいていけば、人間の知識とも調和するというのが重要なポイントである。

[1] （大天使ガブリエル：訳者注）

[2] ムスリムの伝承による。

[3] タウヒードとは、「物事を１つにする」というアラビア語の名詞である。単語（言葉）としてクルアーン、スンナには出てこないが、アッラーを唯一信じることという意味で使われ始めたのは、イブン・アッバース（彼にアッラーのご満悦あれ）のような教友たちの時代に遡る。

この概念を明確にするため、学者たちはタウヒードをいくつかの枝に分けて、それぞれに正しいイーマーンが含まれているとしている。それぞれの枝は、クルアーンとスンナで明瞭に取り扱われている。議論するための正しい方法は、３つのカテゴリーに分けられる。

① タウヒード アッルブービーヤ

توحيد الربوبية （主の唯一性）

② タウヒード アルウルーヒーヤ

توحيد الألوهية （神の唯一性）

③ タウヒード アルアスマー ワッシファートゥ

توحيد الأسماء والصفات （御名と特性）

この３つのカテゴリーについて、ここで説明を加えてみよう。

① タウヒード アッルブービーヤ（主の唯一性）

タウヒードの本質は唯一の神であり、唯一の主である。主の支配の他には誰もいない。唯一の創造者であり、所有者であり、授ける者である。「かれ」だけによって、全てのものが創造されたのである。

ウサイミーン師によれば、頑迷な人以外は、そのタウヒードの概念を認めている。なぜならば、「**かれ**」によって創造された人間は、自然に創造者を信じるように生まれついているからだ。逆のことも真である[1]。多くのクルアーンのアーヤから明ら

[1] ムハンマド イブン・ウサイミーン著『シャルフ ウスール アルイーマーン（「信仰の基本の説明」：訳者注）』イスラーム研究所、H.1410（1989 年位）

かになったように、イスラームの初期の頃、アラブ人の中で信仰を拒否した人々は、創造者が唯一であり、自分たちアラブ人が礼拝していた神々を超えていると認めていた。それについて、アッラーは次のアーヤで告げている。

言ってやるがいい。「大地とそこにある凡（すべ）てのものは、誰（だれ）のものであるか。知っているなら（言ってみなさい）。」

【第２３章　信者たち章〔アル・ムウミヌーン〕８４節】

かれらは必ず、「アッラーの有（もの）である。」と言うであろう。言ってやるがいい。「あなたがたは、まだ気が付かないのか。」

【同章　８５節】

言ってやるがいい。「７つの天の主、栄光に満ちた至高の玉座の主は、誰（だれ）であるのか。」

【同章　８６節】

かれらは必（かなら）ず、「アッラー。」と言うであろう。

言ってやるがいい。「あなたがたはなお畏れないのか。

【同章　８７節】

凡（すべ）ての事物の統御は、誰（だれ）の手にあるのか。

（万有を）守護し、（誰（だれ）からも）守護されない方（は誰（だれ）か）、あなたがたが知っているならば、（言ってみなさい）。」

【同章　８８節】

かれらは必（かなら）ず「アッラー。」と言うであろう。言ってやるがいい。「それならあなたがたは、どうして惑（まど）わされたのか。」

【同章　８９節】

イーマーンとは、次のような全てを信じることである。宇宙で起こっている出来事はアッラーの定めによる。授かるものは、唯一神アッラーからであり、生死も全てアッラーの手の中にある。そして全ての恵み、導き、また迷いすらも、アッラーの意志次第である。アッラーのみ、この世の法を定める権利を持っている。そしてアッラーのみ、人間の目には見えないあらゆることを知っておられる。アッラー自身が行う義務や権利に対して、人間は、アッラーに対して誰も何も要求することはできない。

②　タウヒード　アルウルーヒーヤ（神の唯一性）

アッラーだけが真理の神であり、そのアッラーに向かい、アッラーだけに仕えること。シャハーダ（信仰告白）の前半の文章でもある。このタウヒードのために使徒が遣わされ、啓典も下されたのである。アッラーは次のように告げている。

ジンと人間を創ったのはわれに仕えさせるため。

【第５１章　撒（ま）き散（ち）らすもの章〔アッ・ザーリヤート〕５６節】

あなたの主は命じられる。かれの他何者（ほかなにもの）をも崇拝してはならない。・・・

【第１７章　夜の旅章〔アル・イスラーゥ〕２３節】

このカテゴリー（タウヒード　アルウルーヒーヤ）は、使徒や預言者[1]が遣わされたメッセージの本質である。①タウヒードアッルブービーヤ　（主の唯一性）は基本的で重要な要件であるが、②とは少し違いがある。多くの人がアッラーは創造主であると信じているが、その信仰は第②のカテゴリーに進まなければならない。なぜならば全ての振る舞いが、アッラーの崇拝に向けてでなければならないからである。他のものと対等にしてはいけないと多くの預言者は伝えている。

・・・[2]

「わたしの人びとよ、アッラーに仕（つか）えなさい。かれの他に神はないのである。・・・

【第７章　高壁章〔アル・アアラーフ〕５９節】

上と同じ文章は、同章の６５節と８５節にも出てくる。また１１章のフード章の５０節と６１節と８４節にも、また、第２

---

[1] （使徒と預言者について、啓典を受けて遣わされた人は使徒であり、そうでないのは預言者である。ムーサー、イーサー、ムハンマド（彼らにアッラーからの平安あれ）は使徒であり、預言者でもある。：訳者注）

[2] ・・・には、**「先にわれはヌーフをその民に遣わした。彼は言った。」**がある。

３章　信者たち章〔アル・ムウミヌーン〕の２３節と３２節にも同じ記述がある。

かれは言った。
「わたしの人びとよ、アッラーに仕えなさい。
かれの外（ほか）には、あなたがたには、神はないのである。
あなたがたはかれを畏れないのか。」

この②カテゴリーの定義にはいくつの考え方があるが、まずアルカイスィー師のものをあげてみよう。「全ての創造されたものの上に、アッラーは唯一であることを知り、信じ、把握することであり、それがタウヒード　アルウルーヒーヤ（神の唯一性）である。」と彼は言う。「このタウヒードは、内的も外的にも、言行的にもアッラーだけに仕えるという意味である。そして、アッラー以外のものがどんなに立派でも崇拝の対象とはせず、アッラーと対抗する全ての側面を否定しなければならない。人がするべき崇拝（の対象）は、アッラーが望む全ての言行を含む。純正な意志を表明し、唯一神アッラーに敬愛と、畏怖と願望のある行動をする。それなりの準備をもった上でアッラーに任せ、助けを求めるのである[1]。」続けてアルカイスィー師は言う。「イバーダ（崇拝行為、アッラーに仕えること）」の行為のうち、目に見えるものは礼拝、サジダ（額を床につけ

[1] マルワーン　アルカイスィー著『マァーリム　アッタウヒード（「タウヒードのスポット」：訳者注）』アルマクタブ　アルイスラミー出版、1990 年、pp.61～62。

て伏すこと）、断食、犠牲（羊を屠ること）、巡礼などである。このような行為は、純粋にアッラーのためだけにするものであり、アッラーが定めたシャリーアに従って行うものである。またアッラー以外に受け入れてもらうためにすれば、タウヒードと矛盾することになる。」

一方、アルサーディー師は、「タウヒード　アルウルーヒーヤ」については、仕えるに値するのは唯一神アッラーだけということを知り認めることである。またアッラーの特性は、アッラー以外にはないことを確かに認め、アッラーの創造したものの中に仕えるに値するものはいないことを信じることも含むのである。これらのことを正しく理解すれば、内外的な行為、次のような全ての行為はアッラーのためだけに行うのである。サラー（礼拝）、ジハード（聖戦）、善いものを合法とし、悪しきものを禁戒とすること、親孝行すること、親族との絆を大事にし、アッラーに対しての義務、また創造されたものに対する義務を果たすなどである。何よりクルアーン、スンナに従って振る舞うことである[1]。

タウヒードの側面は、アッラーに正しく仕えるために、内外的な行為を含んでいる。アルサアディー師は「真理に仕えるこ

---

[1] アブドゥッラハマーン　アルサアディー著『アルファターワー　アッサアディーヤ（「サアディーのイスラーム法の解釈」：訳者注）』マンシュラートゥ　アルムアッササ　アッサーディーヤ出版、リヤド、サウジアラビア、pp.10～11。サアディー師が提起したタウヒードには、３つの要素が含まれている。純粋なこと（全ての行為は、アッラーに受け入れてもらうため）、次は誠実さ（しもべは忠実に信じること）、導き（預言者に従って同じ道を歩むこと）である。
ムハンマド　アルハンマード著『タウヒード　アルウルーヒーヤ』ダール　イブン・フザイマ出版、H.1414年（1993年位）、pp.22～24。

とは、アッラーの服従と敬愛に基づいている。２つの要素がなければ、正しい崇拝とはいえない。彼はこれに関しては、繰り返し確認している[1]。

ジャーファル　イドリース師は、正しいイーマーンの結果がどうであるべきか、心をリードすることは、どのようなことか次のように述べている。「タウヒードが心に入り込むと、精神的な状態に変化がおきる。その状態は正しくイーマーンを指している。その変化というのは、アッラーに対してありがたい気持ちが自然に湧いてくる。それが崇拝の本質とされる。」

このありがたい気持ちは非常に重要で、信仰を拒否している人をカーフィル（不信仰者、感謝のない者）と呼んでもいい。なぜなら彼らは、真理を否定する者、また恵みを拒む者を意味するからである。アッラーの存在を否定する理由としては、自惚れがあると、クルアーンを読めば意味を理解することができるだろう。自惚れる人は、自分自身にコンプレックスを持ち、自分よりも上の人にも支配されているのを認めたくはない気持ちがある。その上にありがたみも見せなくてはならないとなると、自惚れの気持ちがそれを妨げるのである。クルアーンにはそれに関して書かれたアーヤがある。

何の権威も授かっていないのにアッラーの啓示に就(つ)いて論(あげつら)う者は、胸の中につかみようのない高慢なだけを抱く者である。

---

[1] ムハンマド　アルハンマード著　同前書、p.26 より引用。

・・・

【第４０章　ガーフィル章　５６節】

ありがたみと一緒に敬愛の気持ちも湧いてくるものである。これについて、アッラーは雌牛章でこう告げている。

だが人びとの中にはアッラーの外(ほか)に同位のものを設けて、アッラーを愛するようにそれらを愛する者もある。
だが信仰する者たちは、アッラーを激しく熱愛する。

・・・

【第２章　雌牛章〔アル・バカラ〕１６５節】

信者は、アッラーの恵みに対して感謝の気持ちを持ち、アッラーを敬愛することである。内外の行動が、アッラーに感謝するレベルまでの行為にはなっていないと感じるならば、感謝の気持ちをもっと大きくしていかなければならない。感謝がなければ、その恵みは差し止められ、来世でも自分の犯した罪で懲罰を受けなければならないのである。こういったことを信じる人は、アッラーを畏れ、服従し、仕えるのである[1]。

つまり、アッラーの讃美と敬愛で心がいっぱいにならなければ、本当の崇拝はないであろう。加えて心の底にはアッラーへの畏れと希望を持ち、それによって基本的な要件も伴ってくる

---

[1]ジャーファル　イドリース著『ダアーイム　アルイーマーン（「イーマーンの柱」：訳者注）』リアーサット　アルブフース　アルイスラミーヤ、1984 年、pp.9～10。

であろう。アッラーに対しての畏れは、人間がアッラーを賛美する時に出てくる[1]。ここでの希望とは、アッラーへの期待であり、アッラーへの敬愛から生まれてくるので、このバランスが良くなければ、歪んだ崇拝になるであろう[2]。アッラーは清浄で誠実な信者について、次のように告げている。

・・・

かれらは互いに競って善行に勤（いそ）しみ、

また希望と畏れをもって、われに祈っていた。

われに対し（常に）謙虚であった。

【第２１章　預言者章〔アル・アンビヤーゥ〕９０節】

イーサー（イエス）やウザイルなどの預言者（彼らにアッラーからの平安あれ）、天使たち、篤信の人たちの崇拝については、クルアーンでこう告げられている。

かれらの祈っている者たちは、主に接近することを願っている。

[1] 時として、人とか物を恐れる気持ちもあるが、そこには敬愛の気持ちは伴わない。敬愛と畏怖は、アッラーに対してだけである。

[2] バランスが非常に重要であるという見解もある。畏れと希望は、まるで鳥の両の翼のようなものである。信者はアッラーへ向かい両の羽で飛ぶが、それが畏れと希望という２つの翼である。バランスがとれていればうまく飛べるが、１つを無くしてはバランスは保てない。両方なくしたら、墜落するのみである。アルハンマード著　前掲書から引用 p.41。

仮令側近にいる者でも、かれの慈悲を待望してその懲罰を恐れている。

・・・

【第１７章　夜の旅章〔アル・イスラーゥ〕５７節】

　このようなタウヒードは、真の人生への鍵となる。イブン・タイミーヤ師は「体が食べ物と飲み物を必要としているように、人間は、他と比べることのできないアッラーを求める。」「本当の人間性は、心と魂にあり、アッラーなしでは健全ではない。人生のあらゆるところで、アッラーを唱えれば落ち着き、いつかまみえる日までその気持に変動がない[1]。人間に喜びの気持ちが湧いてきても、アッラーとの関係がなければずっとは続かない。その喜びは、ある時には人と人の間で楽しめるが、ある時には、そうでないときもある。[2]」

　人間の行いがアッラーに受け入れられるような対象になるためには、②のタウヒードに合致しなければならない。言い換えると、②でのすべきことをすると、他のタウヒードも受け入れ信じることになり、アッラーに受け入れられるのである。[3]　アッラーは次のように告げている。

・・・

[1] なぜならば魂が汚れていなければ、自分の創造者を懐かしく感じるであろう。
[2] イブン・タイミーヤ著　同前書 Vol.1、pp.24～29、参照。
[3] ムハンマド　アルハンマード著　同前書、p.18。

凡（およ）そ誰でも、主との会見を請い願う者は、正しい行いをしなさい。

かれの主を崇（あが）める場合に何（なに）一つ（同位に）配置（はいち）して崇拝してはならない。」

【第１８章　洞窟章〔アル・カハフ〕１１０節】

アッラーのために純粋にやるべき行為の１つには、サラー（礼拝）とドゥアー（祈願）がある。預言者ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）は、

「ドゥアー（祈願）とは、崇拝の頭（あたま）である。[1]」と言ったという。

人間がアッラー以外に礼拝し懇願するというのは、そのものに依存しつつ信頼していることを意味する。またはそのものが、自分自身の要望に応えてくれることでもある。しかし、祈りに対する気持ちはアッラーのみに向けなければならない。預言者ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）は、先ほどのハディースで祈りについて述べたわけである。そのため、アッラー以外に懇願し礼拝するということは、アッラーに対抗する他の神を崇拝するということ（シルクすること）で、タウヒードとイーマーンに矛盾する。

タウヒード①が正しいものならば、タウヒード②は自然に正しいものになるであろう。人間は、アッラー以外に主はないと

---

[1] アブー・ダーウードとティルミズィー、その他の伝承による。アルバーニー師も正しいと言っている。アルバーニー著　前掲書、p.641。

認識すれば、アッラー以外に仕えるに値する神はいないという結果になり、他の神に仕える意味はないであろう。

タウヒード②のカテゴリーについては、ハナフィー学派のイブン・アビー・アルイズ師は、「クルアーンには、②のタウヒードについて、またその例としてたくさん触れられている。そして①のタウヒードを認め、アッラー以外の創造者はいないことを確証している。①は②の根拠となっている。アッラーはそれについて、次の章で告げてる。

言ってやるがいい。「アッラーに讃えあれ。かれが選ばれるしもべたちの上に平安あれ。
アッラーが好ましいか、またはかれらが（かれに）配する神々か。
【第２７章　蟻（あり）章〔アン・ナムル〕５９節】

誰（だれ）が、天と地を創造したのか。また誰（だれ）があなたがたのために、天から雨を降らせるのか。
それで**われ**は、美しい果樹園をおい茂らせる。
そこの樹木を成長させることは、あなたがたには出来ない。
アッラーと共に（それが出来る外の）神があろうか。
いや、かれらは（正しい道から）外（はず）れた民である。
【同章　６０節】

イブン・アビー・アルイズ師は続けて言っている。クルアーンの中の**「アッラーと共に（それが出来る外の神があろうか。）」**のアッラーの言葉は、普通の疑問詞ではここの文脈には合わず、否定疑問詞となっているが、人びとはかつて、アッラーと共に他の神も信じていた。
次のクルアーンを読んでみよう。

・・・
あなたがたは（アッラーの外に）他の神があることを、証言出来るのか。」
【第６章　家畜章〔アル・アンアーム〕１９節】

人々はまた、預言者に反論する。次のように。

かれ[1]は多くの神々を、一つの神にしてしまうのですか。これは全く驚きいったことです。」
【第３８章　サード章　５節】

人びとは、他の神がいるとは言ってはいない。

---

[1] （ここでの「かれ」とは、預言者ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）のことである。：訳者注）
またかれらは、自分たちの中から警告者が出たことに驚き、
不信心者は言う。「これは魔術師です。嘘付きです。
【第３８章　サード章　４節】

誰（だれ）が、大地を不動の地となし、そこに川を設け、
そこに山々を置いて安定させ、２つの海に隔壁を設けたのか。
アッラーと共に（それが出来る外の）神があろうか。いやかれらの多くは、知らないのである。

【第２７章　蟻（あり）章〔アン・ナムル〕６１節】

また、クルアーンの他のアーヤでは次のように告げている。

人びとよ。あなたがた、またあなたがた以前の者を創（つく）られた主に仕えなさい。恐らくあなたがたは（悪魔に対し）その身を守るであろう。

【第２章　雌牛章〔アル・バカラ〕２１節】

また次のようにも記される。

言ってやるがいい。「あなたがたは考えなかったのか。アッラーが、もしあなたがたの視覚や聴覚を奪い、
また心を封じられれば、アッラーの外（ほか）にどの神がそれをあなたがたに返し授けられるかを。」
見なさい**われ**は如何（いか）に印（しるし）を繰り返したか、それでもかれらは背（そむ）き去った。

【第６章　家畜章〔アル・アンアーム〕４６節】

このようなクルアーンのアーヤは多い。[1]

③　タウヒード　アルアスマー　ワッシファートゥ（御名と特性）

この③カテゴリーは、アッラーの御名と特性を信じ容認することである。アッラーだけには完璧な特性があり、他のものに喩えることができない存在であるということを信じなければならない。

イスラームの歴史は時代が下るにつれて、多くの派に分かれた。シュアイブ　アルナウート師は、その宗派の見解の違いを次のように述べている。「信条の特性の問題は、重要である。イスラームの研究者によっていろいろと見解の相違がある。例えば、その内の一派は、アッラーの御名は認めるが属性を否定する。ある一派は、御名と属性を肯定しているが、クルアーンとスンナは肯定し他の一部は否定する。また言葉通りの解釈から離れ、別の解釈をする派もある。また別のグループは、クルアーンとスンナに出ている全ての御名と属性を認め、信じなければならないと考え、言葉のまま受け取る考え方をとる。あるグループは、クルアーンとスンナにある言葉をそのまま狭義に受け取り、行動に反映する。このグループは、アッサラフとアハル　アルスンナと呼ばれている。[2]

---

[1] イブン・アビー・アルイズ著引用、Vol.1、pp.37～38。
[2] シュアイブ　アンナウート著『ムカッディマトゥ　ザイヌッディーン　アルマクディシィ（「アッディーン　アルマクディシィのイントロダクション」：訳者注）』ムアッサッサトゥ　アルリサーラ出版社、ベイルート、レバノン、1985 年。

預言者ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）と教友たちの時代から理解されていることを、アッサアディー師は、次のようにまとめている。「アッラーへのイーマーンとして、クルアーンでアッラー自身が自分の属性について言ったこと、また預言者がハディースでアッラーの属性を述べたこと、この２つについては、書き換えられることもなく信じられている。また信者たちは、アッラーの他に神はなく、アッラーが全知全能であると信じている。アッラーの御名とアーヤを否定されることなく、アッラーの属性が、アッラーが創造した全てのものに借用されることもない。—類いまれな、比べ得るもののない神、アッラーに讃美あれ！—」

アハル　アルスンナ　ワルジャマー（スンナと集団の民）の人々は、預言者たちが下した啓典や啓示から迷走することはない。これらのメッセージは正しい道だからである。クルアーンとスンナに出てくるアッラーの御名と属性と行為は、全て信じられている。その信念の中には、アッラーが**「玉位に鎮座」**することも入り、空には７層あるがアッラーは最も低い空まで降

属性についての意味を説明する際に、１つの例がある。マーリク師が生きていた時代に、ある男が師のところへやって来て言った。「アブー・アブドゥッラーよ（マーリク師を指す）。クルアーンの『玉位に鎮座して』【１０章ユーヌス章】この意味はどのような様子をいうのか。」と聞いた。マーリク師は答えて「その方法は分からないが、信じることが義務である。それを聞くこと自体が遺憾なことである。あなたは異端者なのか。」マーリク師のこの話は多少の誤謬はあるが、様々に取り上げられている。ジャマール　アルバーディ著『アルアサール　アルワーリダ　アン　アインマティ　アッスンナ　フィー　アブワービ　アルイアティカーディ（意訳「信条についての著作：訳者注」）』ダール　アルワタン出版、リヤド、サウジアラビア、H.1416（1995 年位）、pp.226～231。

りて来ることも、信者たちが来世でアッラーを見ることも、全てイーマーンに入るとされている。[1]

　アッラーの属性は他に類はなく、アッラーは見ること聴くこともできる、つまり人間と同じように見ることも聴く事もできるとされている。否定と肯定がアッラーの特性には存在する。アッラーは次のアーヤで、こう告げている。

・・・かれに比べられるものは何もない。

かれは全聴にして凡(すべ)てを見透かされる方である。

【第４２章　相談章〔アッ・シューラー〕１１節】

　ここでは、聞くこと見ることというアッラーの属性を完全に肯定すると共に、他のものに喩えることはできないと確証している[2]。

　このようなタウヒードの側面は非常に重要であり、軽視してはいけない。アハマド　サラーム師が指摘しているように、預言者ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）が遣わ

[1]アブドゥッラー　ジャールッラー著『バハジャットゥ　アンナーゼリーン（「見る人々の喜び」：訳者注）』1984 年、pp.7～8。

[2] イブン・タイミーヤ師とその弟子のイブン・カイイム師の二人の説は「アッラーの属性は、アッラーのみのものである。」であり、アッラーに類はないという考え方である。二人に反駁する人も出ている。しかしその批判は全て無効であり、反論する人の論理は無知と反感から来ている。詳しくは、次の書を参照のこと。サラーハ　アハマド著『ダアワトゥ　アッシャイフ　イブン・タイミーヤ　ワ　アッサーラハ　アラー　アルハラカティ　アルイスラミーヤ　アルムアッスィラ（「タイミーヤの主張と現代イスラーム運動における影響」：訳者注）』ダール　イブン・アルアシィール出版、クウェート、1996 年、pp.375～388。

される前、人々はアッラーが創造主であり、宇宙の計画者であると受け入れていた。にもかかわらず、タウヒードに矛盾するシルク（多神崇拝）に落ちてしまった。そのため、人々に正しい理解を教示するために、イスラームのメッセージは遣わされた。それによって、人々は正しく唯一神アッラーに仕えるようになった。その出発点として、アッラーの御名と属性に対しての理解と知識が必要であった。

　人間にアッラーの御名と属性に対しての理解と知識があれば、他のものに仕えることはない。アッラーの御名と属性に対しての理解と知識は、①から③のタウヒードの基本である。[1]

　アハマド　サラーム師は、「①のタウヒードは、木のようなものであり、その根はアッラーの御名と属性のタウヒードである。言い換えれば、①は③のタウヒードに基づいて、そのルーツがなくなれば、木も弱り枯れる。[2]」と述べている。この例えによれば、③の本当の果実は、②のタウヒードである。なぜならば、アッラーに対する人間の知識が深くなれば深くなるほど、敬愛や畏怖や希望も増してくる。アッラーの御名と属性に対する理解はとても重要であり、アッラーへの道に外れて迷った人は自分自身を傷つけ、明らかに損をしているのである。

[1] アハマド　サラーム著『ムカッディマトゥ　フィー　フィクフ　ウスール　アッダアワ（「アッラーを勧めることの方法における序文」：訳者注）』ダール　イブン・ハズム出版、ベイルート、1990 年、p.97。
[2] 同上、p.100。

（２）天使を信じること

　預言者ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）が述べた五行の第二の柱は天使を信じることである。天使たちはアッラーの創造されたものの１つで、人間の目には見えないものである。彼らは光から創られているが、形と体を持っている。天使はアッラーのしもべであるが、神の特質は持ってはいない。アッラーが命じたことを実施し、逆らうことは決してない。アハマド　サラーム師は「天使たちの存在を否定する者は、預言者が受けた啓示を信じているとは言えない。ジブリールは、大天使の一人で預言者にクルアーンを届けたものである。[1]」と述べている。クルアーンを信じることは、天使も信じることである。特に大天使ジブリールは、預言者に啓示を運んできた天使である。

　ウサイミーン師によると、天使を正しく信じることは、４つの要素を含んでいる。１つは、存在自体を信じること。２つ目は、全体として天使を信じ、クルアーンとスンナに出てくる全ての天使の名前を信じること。例えばジブリールなど。３つ目は、クルアーンとスンナに出てくる彼らの性質を信じること。例えば、預言者ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）のハディースによれば、次のような話が伝わっている。

彼がジブリールを見ると、この天使の翼は視野を塞ぎ覆うくらい大きく、600 もの翼を持っていた。

---

[1] アハマド　サラーム著　同前書、p.104。

天使はとても素晴らしいアッラーの創造であった。また大天使ジブリールは、いろいろな形になることができ、人間の姿にもなれたという。それはアッラーの望みどおりになることを体現し象徴しているともいえる。４つ目は、クルアーンとスンナに出てくるような天使の任務を信じることである。クルアーンでは、天使はアッラーに仕えアッラーを賛美すると述べられている。また同じく、特別な任務を持っていることも述べられている。ジブリールは啓示を担当し、イスラーフィールは裁きの日を示す時に角笛を吹き鳴らす天使である。彼の任務は、審判の後の復活にも関係する天使である。ミーカーイールは、雨と植物の成長を司っている。大地での生命に関わっている天使である。ウサイミーン師によれば、生命と復活に関わる天使としてこの３天使はとても重要である。

預言者ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）は、夜中の礼拝をする前に彼ら天使の名前が出てくるドゥアー（祈願）を唱えたと言われている。それは、こういうドゥアーであった。

「ジブリールとミーカーイールとイスラーフィールが仕える主よ。天と大地の創造者よ。見えない世界の全知よ。しもべである人間が諍いを裁く神よ。私を真理の道へお導き下さい。あなたが正しいと示す道へ人びとを誘うのであるから。[1]」

[1] ムハンマド　イブン・ウサイミーン同前書、Vol.3、pp.160～161。

付け加えて人間は天使たちを心から好きになることである[1]。なぜならば、彼らがアッラーに従って仕えており、信者への愛情も持っているからである。なぜならば天使たちは信者のことを祈り、現世と来世での信者たちのサポートをするからである。

また天使については、まだ重要なことがある。一人の人間には、二人の天使がいて、その人の人生の記録をしていることを信じることが大切であろう。二人の天使については、こう述べられている。

見よ、右側にまた左側に坐って、２人の（守護の天使の）監視者が監視する。

【第５０章　カーフ章　１７節】

かれがまだ一言（ひとこと）も言（い）わないのに、かれの傍（そば）の看守は（記録の）準備を整えている。

【同章　１８節】

天使たちについての正しいイーマーン（信仰）には、人間に実りをもたらす果実がある。天使の知識は、アッラーの素晴らしさを人間が認識することに繋がる。天使という素晴らしい存在は、創造者の素晴らしさの証拠ともなる。そして、アッラーは信者たちを助け、彼らの行動を記録するために創ったので、人間はそれについて感謝しなければならない。これは、人間を大切に考えているということである。

[1] （５番目の要素というべきかもしれないが。：訳者注）

天使は高貴なものであり、信者が正しい選択を行うようにサポートしてくれると知っている。預言者ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）の時代には、天使が信者たちを助けたことがある。これはクルアーンのアーヤ（節）にも示されているように、アッラーからの約束でもあった。

アッラーは、あなたがたがバドルで微弱であったとき、確（たし）かに助けられた。
だからアッラーを畏れなさい。きっとあなたがたに感謝の念が起きるであろう。
【第３章　イムラーン家章〔アーリ・イムラーン〕１２３節】

あなたが信者たちに言ったことを思い起せ。「主が、３千の天使を御下しになってあなたがたを助けられても、まだ充分ではないのか。
【同章　１２４節】

いやそれどころか、あなたがたが耐え忍んで、主を畏（おそ）れるならばもし敵軍が急襲して来ても、主は、５千の天使であなたがたを援助されるであろう。」
【同章１２５節】

天使たちは、人間がアッラーに赦されるように祈ってくれることもある。次の章のように。

かれ[1]こそは、あなたがたを暗黒から光明(こうみょう)に連れ出すために、天使たち共々(ともども)あなたがたを祝福なされる方である。

かれは真(まこと)の信者に、慈悲深くあられる。

【第３３章　部族連合章〔アル・アハザーブ〕４３節】

（３）啓典を信じること

イーマーンの五行の３番目は、啓典である。この経典は、慈悲で人類を導くために下されたものである。来世での喜びと現世での成功の指針とするためである。特に聖クルアーンは、アッラーから啓示された最後の啓典である。

ウサイミーン師は、４つの信じる項目があるという。第一は、この啓典が本当にアッラーからであると信じる。第二は、クルアーンとスンナに出てくるものを全て信じること。例えば預言者ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）に下されたクルアーン、それからムーサー（モーゼ）に下されたタウラー（律法書）、そしてイーサー（イエス）に下されたインジール（福音書）、そしてダーウード（ダビデ）に下されたザブール（詩篇）の全てである。クルアーンは、イブラーヒーム（アブラハム）とムーサーのソホフ（啓示の書）もまた示している（彼ら全てにアッラーからの平安あれ）。ユダヤ教徒やキリスト教徒の持っている旧約と新約聖書は、オリジナルの部分も含んでいるが、書き換えられたり訂正されたところがあるのは間

[1] （この場合の「**かれ**」とは、アッラーである。：訳者注）

違いがない。ムーサー（彼にアッラーからの平安あれ）のタウラーを信じるということは、かならずしも旧約聖書を信じることにはならない。互いに矛盾するところがあるからである。後からできた新約聖書には、タウラーよりもオリジナルの部分は多いかもしれない。第三は、アッラーが下されたものを全て信じなければならない。これは、クルアーンにしても、その前の聖典も信じるということである。クルアーンに示されている全てのことも、信じなければならない。信者には、これについては選択の余地はなく、もし何か一部でも拒否すれば、アッラーの啓典のイーマーン（信仰）を否定することにもなる。クルアーンには、次のように告げられている。

・・・

あなたがたは啓典の一部を信じて、一部分を拒否するのか。凡（およ）そあなたがたの中（うち）こんなことをする者の報いは、現世における屈辱でなくてなんであろう。
また審判の日には、最も重い懲罰に処せられよう。
・・・
【第２章　雌牛章〔アル・バカラ〕８５節】

第四番目に上げられるのは、複写していない啓典つまりクルーンを受け入れて、その命に従うこと。これは義務であり、人間は命令の意味、智慧、目的が分からないとしても、信じることである。クルアーンは、それ以前の聖典を踏まえて下された

ものなので、ムスリムはそれ以前の聖典に向かう必要はないのである。人間が必要となる導きは、クルアーンとスンナに書かれている。

われは真理によって、あなたがたに啓典を下した。それは以前にある啓典を確証し、守るためである。

・・・・

【第５章　食卓章〔アル・マーイダ〕４８節】

ウサイミーン師によれば、このアーヤの意味は、それ以前の聖典を踏まえているので、クルアーンに一致していない場合は、以前の聖典に従うことはないという[1]。アッラーが啓示を下されたことは、人類にとって大きな恵みであった。このメッセージには、アッラーが人間を創った目標を達成するための指導が含まれている。人間が真理を把握するために助ける側面もある。

イドリース師は、次のように言っている。「アッラーは、人間をアッラーに仕えさせるために創った。人間はアッラーのしもべであるので、それが人間の本質の１つでもある。人間は自分が何のために生まれてきたのかを把握しなければ、落ち着いて穏やかな本当の人間性を実現することはできない。しかし、どのように実現するのか。慈悲深く正義の神は、いろいろな側面で人々を救済している。例えば、人間に生まれつきの思考能

---

[1] ムハンマド　イブン・ウサイミーン著『シャルフ　ウスール　アルイーマーン（「信仰の基本の説明」：訳者注）』pp.32～33。

力を与えた。そして、健全で道徳的なセンスを与えた。考える力も与えた。アッラーへの道へとリードする、自然なサインでいっぱいの宇宙を１冊の本のように創りあげた。もっと細かくアッラーへの道を教えるために、詳細な知識を与えるため、多くの預言者を通して口頭でのメッセージを残した。クルアーンでは、それまでのメッセージを紹介している。導き、灯り、印、こういった言葉でリマインドしているのである。[1]」

アッラーは、人類の導きのために啓典を下しただけではなく、時代を通して、人類のニーズに合わせて、様々な啓典も下している。人類のためのアッラーからの慈悲の現れである。このプロセスは、クルアーンが下されるまで続き、預言者ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）から審判の日まで、人間社会のニーズに合わせている。クルアーンは、最後の審判の日まで導きの啓典として下されたので、アッラーはクルアーンに書き換えや誤魔化し、変換、間違いがないようにしている。

本当にわれこそは、その訓戒を下し、必ずそれを守護するのである。

【第１５章　アル・ヒジュル章　９節】

（4）使徒を信じること

５本の柱の１つは、使徒を信じることである。使徒はアッラーから選ばれ人々に啓示を下すために使わされた。最初の使徒

[1] イドリース著　前掲書、pp.18～19。

は、ヌーフ（ノア）である[1]（彼にアッラーからの平安あれ）。アッラーは、それぞれの民族に使徒を遣わされ、その使徒が基本的な教えを伝えた。それに関して、クルアーンで次のように告げている。

本当に**われ**は、各々の民に一人の使徒を遣わして
「アッラーに仕え、邪神を避けなさい。」と（命じた）。
それでかれらの中には、アッラーの導かれた者もあり、
また、迷悟が避けられない者もあった。
それで地上を旅して、（真理を）拒否した者の最後がどんあものであったかを見るがいい。

【第１６章　蜜蜂章〔アン・ナハル〕３６節】

そして、預言者ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）は最後の使徒であることを次の章で告げている。

ムハンマドは、あなたがたの誰の父親ではない。
しかしアッラーの使徒であり、
また預言者たちの封緘である。
本当にアッラーは全知であられる。

【第３３章　部族連合章〔アル・アハザーブ〕４０節】

---

[1] アーダム（彼にアッラーからの平安あれ）は、使徒でなく預言者であった。それぞれの使徒は預言者でもあるが、必ずしも預言者は使徒ではない。この相違についての詳細は、筆者の『質問と解答』冊子アルバシール Vol.2、No.1、1988 年 5 月号・6 月号、pp.5～7 を参照のこと。

ここで特筆すべきは、全ての預言者には神の特性はないということである。どの預言者も全て普通の人間であったということを述べることは非常に重要なことである[1]。彼らが知っている見えない世界の知識は、アッラーが許す程度の範囲だけに限られていた。彼らの最も高い地位として挙げられるのは、普通の人々と同じくアッラーのしもべであるということなのである。預言者ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）もまた同じである。彼の人生における立派な３つの特徴として挙げられる第一番目も、世の他の人と同様にアッラーのしもべであった[2]。

使徒あるいは預言者を正しく信じるには、４つの側面が必要である[3]。

第一には、全ての預言者がアッラーの真理を伝えるために遣わされたことを信じることである。クルアーンやスハディースが確証しているにも関わらず、誰か一人を否定した場合は、全

---

[1] この点は、キリスト教での迷いをもたらした原因でもある。彼らはイーサー（彼にアッラーからの平安あれ）を神格化してしまった。聖書からも分かる通り、彼もまた普通の人間だったということが分かるだろう。

[2] （預言者がしもべであったことを示す章を、クルアーンより引用。：訳者注）

万民への警告者とするために、かれのしもべに識別を下された方に祝福あれ
【第２５章　識別章〔アル・フルカーン〕１節】
かれに栄光あれ。そのしもべを、（マッカの）聖なるマスジトから、われが周囲を祝福した至遠の（エルサレムの）マスジトに、夜間、旅をさせた。
・・・
【第１７章　夜の旅章〔アル・イスラーゥ〕１節】
アッラーのしもべ（ムハンマド）が、かれに祈るために立った時、かれら（マッカの多神教徒）はどっと押し寄せんばかりに、かれを取り巻いた。
【７２章　アル・ジン（幽精）章　１９節】

[3] イブン・ウサイミーン著　同前書『シャルフ　ウスール　アルイーマーン』

ての預言者を否定することになってしまうだろう。アッラーは、ヌーフ（ノア）について次のように告げている。

ヌーフの民も、使徒たちを信じなかった。
【第２６章　詩人たち章〔アッ・シュアラーゥ〕１０５節】

このヌーフの例にあるように、１つのメッセージを信じない場合は、全てのメッセージが同じ源から下されているということを拒否していることにもなるであろう。そのために、預言者ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）は、次のように言っている。

「我が身をみ手に委ねられたお方に誓って、このウンマ（イスラーム共同体）の一人として、ユダヤ教徒であろうとキリスト教徒であろうと、私に遣わされた啓示を信じず、私のことも聞いたにも関わらず（話を信じず。そのまま死んでしまった者は、ナール（業火）の徒となること以外にはないでしょう。[1]」

ムスリムは全ての預言者を信じているが、他の教徒たちは預言者の一部しか信じていない。イエスを拒否しているユダヤ教徒にしろ、預言者ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）を拒否しているキリスト教徒もユダヤ教徒も、同じである。後に出た預言者を拒否する根拠はないにも関わらず、彼ら

[1] ムスリムの伝承による。第５章にも前掲。

は信じない。ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）は、自分が預言者であるという確証を示したが、彼らがその根拠を拒否するというのは、無知で頑迷で、敵対意識を持って真理に反対しているようなものである。

第二番目の側面は、預言者の名前がクルアーンとスンナに出てきた場合は、それを信じなければならないということである。名前が出ない預言者の場合も信じなければならない[1]が、アッラーがクルアーンに書いていない預言者も遣わされたということは信じるべきである。クルアーンに、次のような記述があるからである。

われはあなた以前にも使者を遣わした。その或(あ)る者に就(つ)いてはあなたに語り、また或(あ)る者に就(つ)いては語っていない。・・・

【第４０章　ガーフィル章　７８節】

---

[1] 例えばブッダについては、ブッダが預言者であったことを確証できるものはない。なぜならば、クルアーンとスンナには、そのような記述がないからである。（しかし、これについては訳者には興味深いクルアーンの節がある。
アッラーは次のように告げている。
ある使徒たちに就いては、先に**われ**はあなたに告げたが、未だあなたに告げていない使徒たちもいる。
【第４章　婦人章［アン・ニサーア］１６４節】
（その節についてアブー・ザッル師の解釈によると、告げられていない預言者の人数は１２万４０００人、使徒は３１３人で、アッラーが彼らに大天使ジブリール（ガブリエル）を通して話したとされている。ワフバ　アッズへーリ著『アッタフスィール　アルワギーズ　アラー　ハミシュ　アルクルアーン　アッカリーム（「聖クルアーンの略解釈」：訳者注）』ダール　アルアフェクル出版、シリア、1994 年：訳者注）

第三番目の側面は、全ての預言者を信じなければならないことである。彼らは、アッラーのメッセージを伝えるために遣わされた。メッセージを広めるために尽力を尽くし、純粋で篤信の者たちであった[1]。預言者たちは、アッラーが告げていないことを広めるという過ちから、常に守られている。預言者は、自分自身の意志や欲望に任せて物事を決めるのではない。また預言者たちは、アッラーの教えの内容を増減することも含めて大きな罪に落ちることはない。

第四番目は、ムスリムは皆、人類の導きのために遣わされた預言者ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）に従うことである。アッラーは次のように示している。

われが使徒を遣わしたのは、唯アッラーの御許しの許に服従、帰依させるためである。

・・・

【第４章　婦人章〔アン・ニサーア〕６４節】

だがあなたがたの主に誓けてそうではないのである。かれらは信じないであろう。

[1] アブドゥッラー　アルムスィリフと、サラーフ　アッサーウィ著『マア　ラーヤサーウ　アルムスリム　ジャハルフ　（「ムスリムは無知ではいられない」：訳者注）』イスラミック　ファウンデーション　オブ　アメリカ、1995 年、p.59。

かれらの間の紛争に就いてあなたの裁定を仰ぎ、あなたの判決したことに、かれら自身不満を感じず、心から納得して信服するまでは。
【同章　６５節】

これまで述べてきたように、使徒や預言者が遣わされたのは、信者たちの益になることを示すのと同じく全人類への指針も示しており、これがアッラーからの大きな恵みであると言える。預言者が人類に伝えた知識は、見えない世界も含めて、人間の思考を超えた知識である。実に、人類が必要とする導きについての知識は、体にとっての食べ物以上に人にとって必要なものである。人間は食べ物や飲み物がなくなってしまったら、そのまま現世から離れて亡くなってしまうだろう。もし、預言者たちを経て下された導きを拒否したら、来世での永久の悦楽を永遠に失ってしまうのである。

（５）終末の日（来世）を信じること

この日が終末と呼ばれるのは、この日以降には太陽は登らないからである。天国に入る人は自分の移住地に赴き、一方業火の住人はそのまま住み続けるしかないだろう。終末の日の別名としては、ヤウム　アルバァース（復活の日）、アルハーッカ（真実の日）、アルワーキア（出来事）、ヤウム　アルヒサーブ（裁きの日）、アルカーリィア（恐れ戦く日）などがある。これは人類が通らなけらばならない困難な日であり、皆が恐れ

る日でもある。その日で人間の定めが決まる。これは、新しい魂の出発の日であり、永久の悦楽の中に入るのか、懲罰を受ける住民となるのかが決まるのである。[1]

終末の日を信じるということは、クルアーンや預言者ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）のハディースが伝えていることを信じることである。復活、裁き、恩恵、天国、業火など信じるべきあるいは知るべき一般的な事柄がある。一方、クルアーンと預言者により示された、細かい項目もある。人間はその日の出来事に関する知識が増えれば増えるほど、イーマーン（信仰）は深くなっていくだろう。そのために、それぞれのムスリムが、審判の印や出来事について知ることが大切なのである。審判の日について、ムスリムの伝承によるハディースがある。その中でアッラーは、次のように告げている。

「アッラーは、こう告げます。その日は、イエメン辺りから絹よりも柔らかな風が吹いてきます。人の心に信仰が微塵の重さでもあれば、風はその魂を拾い上げます[2]。一方、一微塵も信仰のない悪人たちは後に残され、必ずや裁かれるでしょう。[3]」

クルアーン、ハディースにあるが、審判の日、太陽は東からではなく、西から昇ると言われている。その時になって、皆は信仰告白をしようとするが、時は既に遅し。大地にあるものは

---

[1] 審判の日の真実については、クルアーンの節には論理的な根拠がある。イドリース著　同前掲書、pp.11～16。

[2] （誰でも死を迎える。この場合の死は、信仰のある者を天国へ導くという意味であろう。：訳者注）

[3] （ムスリムの伝承による。『サヒーフ　ムスリム』：訳者注）

全て死に絶えてしまうという。そして、アッラーは次のように記す。

ラッパが吹かれると、天にあるもの

また地にあるものも、アッラーが御(お)望みになられる者の外は、気絶しよう。

次(つぎ)にラッパが吹かれると、見よ。かれらは起き上がって見まわす。

【第３９章　集団章〔アッ・ズマル〕６８節】

その日は、大地と空の全てのものが滅んでしまうという。そして４０（時間、日、年かどうか特定されていない）の後(のち)に、再びラッパが吹かれると、人々は起き上がって見回すというのである。そしてアッラーは、次のように告げている。

そしてラッパが吹かれると、かれらは墓場から（出て）、主の御許(みもと)に急いで行く。

【第３６章　ヤァ・スィーン章　５１節】

かれらは言う。「ああ、情けない。わたしたちを臥所(ふしど)から呼び起こしたのは誰でしょうか。

これは慈悲深き御方が約束なされた通りではありませんか。使徒たちの言葉は真実であったのですか。」

【同章　５２節】[1]

[1] （参考のため５３章、５４章も引用する。：訳者注）

ウサイミーン師は、来世のイーマーンは、３つの要素を含んでいると述べている[1]。

１つ目は、復活を信じること。２度目の角笛の後、人々は復活しアッラーの前に裸足で裸で異邦人のように並ぶ。アッラーは次のように告げている。

その日われは、書き物を巻くように、諸天を巻き上げる。
われは最初創造したように、再び繰り返す。
これはわれの定めた約束である。われはかならずそれを完遂する。[2]
【第２１章　預言者章〔アル・アンビヤーゥ〕１０４節】

復活の日、体は現世の時のままである。ウサイミーン師は、述べている。「古い体のままというのは、どうしてか考えてみよう。智慧を働かせてしっかり考えてみれば、もし新しい体で復活したのであれば、悪いことをした古い体は、懲罰なしに逃

只一声鳴り響けば、
一斉にかれらは**われ**の前に召し集められる。
【第３６章　ヤァ・スィーン章　５３節】
その日には誰も、少しも不当な扱いを受けず、
あなたがたは、只自分の行ったことに対し報いられる。
【同章　５４節】

[1] イブン・ウサイミーン著　前掲書、pp.40～41。
[2] （本文は一部引用であるが、節全文を引用した。：訳者注）

れられるからである。これは正義に反するだろう。[1]」続けて「アッラーには全て何でも可能なので、切断された体、（動物に）食べられた体、風で吹き飛ばされた体に命令し、元の体に戻すこともできる。しかし、どのように元の体に戻るのか、人間の頭には理解し把握することが難しいであろう。アッラーはそれを確証している。信者はアッラーが述べることは全て真理であり、どんなことも可能であることを知っている。」

　第二の要素は、創造された生き物は、行った全ての行為によって裁かれることである。それに続く恩恵とか懲罰も含まれる。それについては、クルアーンのさまざまなアーヤで確証されている。

本当に*われ*の許（もと）に、かれらは帰り来（く）るのである。

【第８８章　圧倒的事態章〔アル・ガーシャ〕２５節】

かれらの清算は、本当に*われ*の任（にん）である。

【同章　２６節】

　また次の章でも、告げている。

***われ*は審判の日のために、公正な秤（はかり）を設ける。**

１人として仮令（たとえ）芥子（けし）一粒の重さであっても不当に扱われることはない。

---

[1] イブン・ウサイミーン著　前掲書『アルマジュムーア（意訳「ファターワ統合の蒐集」：訳者注』Vol.3、p.174。

われはそれを（計算に）持ち出す。**われ**は清算者として万全である。

【第２１章　預言者章〔アル・アンビヤーゥ〕４７節】

アッラーは、審判の日に人間の行いが計られることを明確に示された。

量(はかり)はその日、真正である。

（善行の）目方(めかた)の重い者は、成功する者である。

【第７章　高壁章〔アル・アアラーフ〕８節】

また目方(めかた)の軽い者は、

わが印(しるし)を軽んじたため自分を損(そこ)なう者である。

【第７章　高壁章〔アル・アアラーフ〕９節】

人間は常に思い出さなければならない。アッラーが慈悲から恩恵を与える場合には、人間が人生でした行いに対して、値する恩恵よりも多くをアッラーは人間に与える。しかし、懲罰の時は、正義のとおりに公平に人間が犯した罪の量と同じだけの懲罰を与える。

第三の要素は、天国と業火を信じることである。

天国は、信者の永久の家である。業火は、不信仰者の定住の懲罰の地である。天国と業火は今も存在し、永久に存在するという強い意見もある。アッラーと預言者は、天国と業火は疑う

余地のないことと説明し、ムスリムは存在を否定したり、部分的な否定もしてはいけない。例えば、次のような節がある。

　だが信仰して善行に勤（いそ）しむ者たち、これらは、衆生の中（うち）最善の者である。

【第９８章　明証章〔アル・バイイナ〕７節】

　かれらへの報奨は、主の御許（みもと）の、川が下を流れる永遠の園である。

永遠にその中に住むであろう。

アッラーはかれらを喜ばれ、かれらも**かれ**に満悦する。

それは主を畏れる者（への報奨）である。

【同章　８節】

　かれらはその行ったことの報奨（ほうしょう）として、喜ばしいものが自分のためにひそかに（用意）されているのを知らない。

【第３２章　アッ・サジダ章　１７節】

　一方、クルアーンでは業火については次のように表されている。

本当に**われ**は、火を不義者のために準備している。その（煙と炎の）覆いは、かれらを取り囲む。

もしかれらが（苦痛の）軽減を求めて叫べば、かれらの顔を焼く、溶(と)けた黄銅のような水が与えられよう。何と悪い飲物、何と悪い臥所(ふしど)であることよ。

【第１８章　洞窟章〔アル・カハフ〕２９節】

本当にアッラーは不信者に激怒され、かれらのために烈火を準備なされ、

【第３３章　部族連合章〔アル・アハザーブ〕６４節】

かれらは永遠にその中に住み、守護者も救護者も見い出せないであろう。

【同章　６５節】

その日、かれらの顔が火の中でひっくり返り、
かれらは、「ああ、わたしたちはアッラーに従い、また使徒に従えばよかった。」と言うだろう。

【同章　６６節】

イブン・タイミーヤ師は「人間は死んだ後に復活し、何が起こるか信じなくてはならない。[1]」と述べている。これは、墓に入ってからの苦難、悦楽か懲罰なども含まれる。

墓の試練については、ティルミズィーの伝承によるハディースにも出ている。

ムンカルとナキールの２天使は、死んだ人のそばに来て聞く。
「その男の人のことを何と言ったか。」

---

[1] これについてのハディースは多くあるので、次を参照のこと。アルバーニー著前掲書『サヒーフ　アルジャーミャー』Vol.1、pp.186～344。

「男はムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）である。」

別のハディースもある。

同じ天使たちは３つの質問をする。

「あなたの神はだれだ。」「あなたの宗教は何か。」「あなたの預言者は誰か。」

審判の日の信仰については、ここでは紙面の都合で深入りできないが、信者が知るべき詳細がある。

- ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）の天国にある川[1]
- 執り成し
- 審判の日に発表される人生の記録
- 地獄の上の橋を渡ること[2]
- 天国に入るか業火か、それに関連すること

このような信仰についての５つのカテゴリー[3]については、注にある書を参考にして欲しい。

第一に、アッラーからの恩恵を望み、率先して善の行いをしようとするであろう。天国の悦楽は人間が見たことよりも想像するよりもずっと素晴らしく、またアッラーの御顔を仰ぐこともできるので、より善行に勤しもうとするであろう。第二は、

---

[1] 次の書を参照のこと。
ムハンマド　アルハサン　アルベルバハーリ著『信仰箇条の説明』：バーミンガム、イギリス 1995 年、p.36。

[2] ムハンマド　アルハサン　アルベルバハーリ著　前掲書、p.38。

[3] 参照するのは、同前掲書、pp.120～145。

来世での懲罰についての警告により、小さな悪いことも来世での懲罰を恐れて控えるようになるだろう。来世での懲罰、それに相当する現世での行為はない。第三の影響は、ウサイミーン師が言ったことから考えてみよう。彼はこう述べている。「アッラーの裁きの日に正義が実現されることを考えることは、人を落ち着かせるだろう。人間は不公平な扱いを受けることを好まないものである。この世は、不公平なことで溢れている。罪を犯したり理不尽な人々が、現世では大きな罰もなく利益だけを得ているように見えることもある。現世は裁きの家ではなく、報奨や懲罰の家でもない。来世は、懲罰から逃れたり、自分がした善い行いが無駄になったりすることは全く一微塵もないのである。必ずいつか、現世での清算が正義のもとで公正に行われる。これが正に審判の日のことである。[1]」と。

（6）天命を信じること

イーマーンの最後の基本の柱は、預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）が言ったように、

「カダル（天命）」を信じることである。」

イドリース師は、カダル（天命）の言葉の意味を次のように述べている。

カダルの由来は、「カッドル قدْر （決まった分量、種類、質にしても決まっている）」からきている。また基本型から別の使い方もできる。「分量や質・状況などを特定する（分量を決

[1] イブン・ウサイミーン著　前掲書『シャルフ　ウスール　アルイーマーン』p.46。

める）」という意味もある。「物事が起こる前に特定する」という意味もある。[1]

　このような意味を踏まえた上で、ここでは天命について検討したい。それぞれのムスリムは、多くのハディースに出てきたように、天命を信じなければならない。それに関しては、天命のイーマーンには４つの要素がある。しもべはそれを信じなければ、自分の信仰が正しく完璧なものにはならないだろう[2]。４つの要素は次の通りである。

第一の要素

　全ての智慧を持つアッラーを信じること。宇宙が創造される前の普遍的なことも含まれる。これに関して、アッラーがなされた、雨を降らせる、生命を与えるといったことも含まれる。しもべたちの成すこと、服従すること、逆らうこと、寿命、全てのことが含まれる。ここでは、次のアーヤを紹介しよう。

**　幽幻界の鍵（かぎ）はかれの御許（みもと）にあり、かれの外（ほか）には誰もこれを知らない。**

かれは陸と海にある凡（すべ）てのものを知っておられる。

一枚の木（こ）の葉（は）でも、かれがそれを知らずに落ちることはなく、

また大地の暗闇の中の一粒の穀物でも、生気（せいき）があるのか、また

[1] イドリース著　前掲書、pp.25～27。
[2] イドリース著　同上。

は枯れているのか、明瞭な天の書の中にないものはないのである。

【第６章　家畜章〔アル・アンアーム〕５９節】

第二の要素

　アッラーは空と大地を作る前に、全てを記録し定めたということを信じること。アッラーの智慧は、昔に何があったのか、これから何が起こるかということに限らず、全てが決まった碑に記録されているという。アッラーは次のように告げている。

**　あなたアッラーが、天にあり地にある一切を知っておられることを知らないのか。**

それは凡（すべ）て記録に載せてある。それはアッラーにおいては容易なことである。

【第２２章　巡礼章〔アル・ハッジ〕７０節】

　またアッラーは、この意味を確証するために、次のアーヤでも触れている。

**　地上において起こる災厄も、またかれらの身（み）の上（うえ）に下（くだ）るものも、**

一つとして<u>われ</u>がそれを授ける前に、書冊の中に記（しる）されないものはない。

それはアッラーにおいては、容易な業(わざ)である。

【第５７章　鉄章〔アル・ハディード〕２２節】

第三の要素

アッラーの意志を信じること。アッラーの望むことは定められている。望まないことは、将来もあり得ない。これはアッラーの成すことも、人間が成すことも含まれる。アッラーが望まない限り、成就しない。例えば、誰かがある人を殺したいと行動を起こしても、アッラーが望まない限り殺すことはできない。殺す道具が使えなくなったり、または殺す人の手が揺れ最後まで完遂できないなど様々なことが起こり、成就できないのである。天命を信じることには、多くの確証がある。アッラーは雌牛章で次のように告げている。

・・・

もしアッラーのおぼしめしがなかったならば、かれらの後継者たちは、明証が下った後
互いに争うことはなかったであろう。
だがかれらは相違した。ある者は信じ、またある者は信仰を拒否した。
アッラーの御(み)心なら、かれらは争わなかったのである。だがアッラーはおぼしめしのことを行われた。

【第２章　雌牛章〔アル・バカラ〕２５３節】

これ（クルアーン）こそは、万人への教訓に外ならない。

【第８１章　包み隠す章〔アッ・タクウィール〕２７節】

それはあなたがたの中、誰でも正しい道を歩みたいと望む者のためのものである。

【同章　２８節】

だが万有の主、アッラーの御望みがない限り、あなたがたはこれを望むことも出来ないのである。

【同章　２９節】

ウサイミーン師は、天命に関し我々人間の思考にも合致した考えを述べている。「アッラーは唯一で、この世の所有者である、計画者でもある。これを信じることは、アッラー自身が所有している世界では、「**かれ**」の望まないことが起こることはないということである。起こることは全てアッラーの意志によってである。そして、アッラーの意志に反して、また「**かれ**」が知らないうちに物事は起こることはない。それは道理に合わないことだからである。[1]」

第四の要素

アッラーが無から全てを創り、生命を与えたことを信じる。次のようにそれを示すクルアーンのアーヤ（節）は多い。

---

[1] ムハンマド　イブン・ウサイミーン著　前掲書『アルマジュムーア』Vol.3、p.195。

万民への警告者とするために、かれのしもべに識別を下された方に祝福あれ。

【第２５章　識別章〔アル・フルカーン〕１節】

天と地の大権はかれの有(もの)であり

かれは子をもうけられず、またその大地に（参与する）協力者もなく、

一切のものを創造して、規則正しく秩序づけられる。

【同章　２節】

アッラーは、凡(すべ)てのものの創造者であり、また凡(すべ)てのものの管理者である。

【第３９章　集団章〔アッ・ズマル〕６２節】

本当はわれは凡(すべ)ての事物を、きちんと計って創造した。

【第５４章　月章〔アル・カマル〕４９節】

ウサイミーン師は、この点について「全てのものは、人間が成すことも含めて人間が選んでしたことさえ、アッラーが創造されたことである。なぜならば、人間が物事を成すまでには２つの要件がある。１つは意志、１つは能力である。

例を出してみよう。あなたの前に２０キログラムの石があるとする。あなたに運びなさいと言えば、あなたは運びたくないと答えるかもしれない。石を運ぶ意志がないからだ。そしてもう一度あなたに聞いたとする。今回はあなたは、『はい、かしこまりました。』と答えたとしよう。そして運ぼうとしたがで

きなかった。あなたが運べなかったのは、その力がないからである。三度目に頼んだとき、あなたは『はい。』と答え、石を頭の上に置いて運ぶことができた。これは意志と能力があったからである。

我々が成す全ての行動は、意志と能力あってのことで、両方を創ったのもアッラーである。アッラーがあなたを麻痺させたとしたら何もできなかったことであろう。そしてアッラーがあなたの意志を逸らしたとしても、できなかったのである。

以上のように、人間が行うことは意志と能力によってであり、アッラーの創造の賜物である。この意志と能力は、アッラーからきたものであるので、人間が成すこともまたアッラーに創造されたと言えるのである。[1]」

実は、カダル（天命）を信じることについては多くの疑問が出されている。ここでは詳細は触れないが、簡単に述べておこう。

ジャーファル　イドリース師は述べている。「アッラーは人間を自由な存在として創った。創る前から人間がどのように振る舞うかを知っている。預言者ムハンマド（彼にアッラー からの祝福と平安あれ）に啓示を与えた時代の人々の反応も知っていた。時にカダルを認めない人たちは、こう言う『我々がアッラーの意志に背くような行動をしたとしたら、アッラーが我々

[1] アブドゥルアジーズ　アッラシード著『アッタンビィハートゥ　アッスンニーヤ　アラー　アルアキーダ　アルワースィティーヤ（「中庸の信条においてのスンナの注意事項」：訳者注）』ダール　アッラシード出版社、p.263。

に選択の自由をくれたということなのであろう。』これは本当ではない。そこでクルアーンは、これについては次のように告げている。アッラーは人間に選択の自由を与えた。そしてそこには与えられた自由をどう使うのかも含まれている。それを裏付けるのは、７６章の２９節と３０節である[1]。これに従えば、我々もカダルを認めない人たちもアッラーに背くことを妨げたであろう。その点について、クルアーンにはこうあるからだ。

もし主の御心なら、地上の凡ての者は凡て信仰に入ったことであろう。
あなたは人々を、強いて信者にしようとするのか。
【第１０章　ユーヌス章　９９節】

アッラーは人間に、信仰か不信仰かの選択の自由を残すことを特に選んだのである。次にある通りである。

言ってやるがいい。「真理はあなたがたの主から来るのである。
だから誰でも望みのままに信仰させ、また（望みのままに）拒否させなさい。」

1　（クルアーンを引用：訳者注）
　本当にこれは一つの訓戒である。
だから誰でも望むものには、かれの主への道をとらせなさい。
【第７６章　人間章〔アル・インサーン〕２９節】
　だがアッラーが御望みにならなければ、あなたがたは欲しないであろう。
アッラーは全知にして英明であられる。
【同章　３０節】

本当にわれは、火を不義者のために準備している。その（煙と炎の）覆いは、かれらを取り囲む。
もしかれらが（苦痛の）軽減を求めて叫べば、かれらの顔を焼く、溶けた黄銅のような水が与えられよう。何と悪い飲物、何と悪い臥所であることよ。

【第１８章　洞窟章〔アル・カハフ〕２９節】

　別の人は、次のように反論するかもしれない。「我々人間の行動が、アッラーの意志によるならば、人間が成すことも全てアッラーに属するということになる。」これは思考の混乱からくる反論であろう。アッラーが望まない限り、人間は望めない。すなわち、アッラーがお望みの選択の余地を与え、実行の能力も与えるのである。なぜならば、実施するための道具もアッラーが創造したからである。しかし、望みはすべて直接アッラーが成すのではない。そうなれば、例えば人間の寝たり、食べたり、飲んだりする行動は、アッラーに全て属することになってしまう。これらもアッラーがしたという論理になる。ここでの意志は、アッラー自身が全てを取り仕切るということではない。これはアッラーが悪が起こることを許しているということへの別の反論でもある。つまり、起こることを許すことと、それに同意する（勧める）こととは別の問題である。[1]

[1] ムハンマド　イブン・ウサイミーン著『シャルフ　アルアキーダ　アルワースィティーヤ（「中庸教義の説明」：訳者注）』Vol.1、ダール　イブン・アルジュー

ハディースによれば、預言者ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）はこういった。

「善と悪も含めてカダル（天命）を信じなければなりません。」

これについて、イブン・カイイム師は次のように説明している。ここでの「悪」はしもべたちに帰するものである。悪というのは無知、間違い、脅迫、罪によって行われる人間の行為である。アッラーはこの行為が起こることを許しているが、悪はアッラーに帰するものではない。なぜならば、アッラーの行為は全て善と知恵に基づいているからである。アッラーの行為は、悪どころか全て善である。預言者ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）はこう言ったといわれる。

「・・・善はアッラーの手元にあり、悪はアッラーに帰するものではありません。・・・[1]」

つまりアッラーの知恵に基づいて行われた行為は全て、悪から無縁である。人間が悪と思ったとしても、結果として悪にはならないのである。常にアッラーが成すことは、全てが益であ

ズィー出版、ダンマーム、サウジアラビア、H.1415 年（1994 年位）、pp.191～192、pp.70～72。

[1] シャイターン（悪魔）を創ったことも純粋に悪だけではない。これについては、ウマル　アルアシュカル著『アルヒクマトゥ　ミン　ハルキィ　アッシャイターン（「悪魔が創造された目的：訳者注」）』Vol.2、No.3、9 月・10 月、アルバシール出版、1998 年、pp.13～22、参照。
（本文には誰の伝承か記載はない。ムスリムの伝承による。：訳者注）

り善につながるのである。[1]　これに関して、ウサイミーン師はクルアーンの次の節を引いている。

人間の手が稼（かせ）いだことのために、陸に海に荒廃がもう現れている。
これは（アッラーが）、かれらの行（おこな）ったことの一部を味わわせかれらを（悪から）戻らせるためである。
【第３０章　ビザンチン章〔アッ・ローム〕４１節】

ここでの悪（荒廃）とは、人間のした原因と結果である。アッラーは悪の全てを悪のままにするのではなく、善い結果ももたらすのである。アッラーが人間に警告したことで、人は悔悟する機会を得たのである。アッラーの知恵は、結果的には悪を善に変えたのだと言っても良い[2]。良い結果が全くない場合、それは本当の悪である。アッラーはこの創造された世界には、全くの悪がないように望まれている[3]。

（７）天命を深く信じることで得られる果実

①人間の全てのことは、アッラーの手に握られている。アッラー次第であるということを認識すると、シルク（多神崇拝）の

[1] 『アルカダル（天命）』の著作を著したムハンマド　アルハンマード師は、pp.31～44 で「天命を信じることには２５の益がある。」と述べている。天命については、いろいろな文献から後で述べる。
[2] ムハンマド　イブン・ウサイミーン著　前掲書『シャルフ　ウスール　アルイーマーン』p.58。
[3] 同上。

過ちから解放される。アッラーは唯一の創造主であり、全ての計画者であり、アッラーの許しなしには何も起こらないということを知るべきである。この気持ちが心にしっかりと根付けば、人間が祈り、願い、助けを求め、頼るものはアッラーしかいないということが自ずから分かるのである。全ての行為が全知全能であるアッラーに向けたものになる。カダルを信じることで、唯一なる神であり主であるアッラーへの信仰が正しく実現できたことになる。

②人間は全てをアッラーに委ねることである。宇宙で見られる現象を認め、この全ての現象の元は、アッラーの意志と無縁ではないことを、認識しなければならない。ムスリムは、自分自身の力だけに頼ったり満悦したりするのではない。つまりその基本を個人の行為や物質的な要素におくのでなく、良い結果をもたらすと信じる手段を選んで一層努力し、全てをアッラーに任せて、良い成果を期待するのである。[1]

③ウサイミーン師は、カダルを正しく信じることは、人間の傲慢な心を防ぐと述べている。もし目的を実現しようとして成就した場合は、アッラーが慈悲で決められたことであり、そうでないときは目的は達成できないのである。人間は傲慢な気持ちを持つよりもカダルをしっかりと信じ、恩恵をくださったアッラーに感謝する気持ちを持つことの方が最良なのである。[2]

---

[1] 同上。
[2] サラーム著　前掲書、p.173。

④カダルを正しく信じることは、精神に落ち着きをもたらす。なぜならば、ムスリムは全てのことはアッラーの意志で起こると確信しているからである。アッラーの全ての行為には、知恵に溢れている。人間が親しい人を亡くしたり、貴重な物を亡くしたときにも、それに悩むあまり狂いそうになったり絶望的になったりするのではなく、これはアッラーの意志があってのことと受け入れなければならない。また全てのことには、それなりの理由があって起こったのである。適当に偶然に起こっているのではないことも認識するべきである。

　地上において起こる災厄も、またかれらの身の上に下るものも、
一つとして**われ**がそれを授ける前に、書冊の中に記されていないものはない。
それはアッラーにおいては、容易な業である。
【第５７章　鉄章〔アル・ハディード〕２２節】
　それはあなたが失ったために悲しまず、
与えられたために、慢心しないためである。
本当にアッラーは、自惚れの強い、高慢な者を御好みになられない。
【同章　２３節】

⑤カダルを信じることは、力と勇気を与える。なぜならばカダルによって自分に授かったものは、アッラーが決められたことである。自分が得たものを誰かに奪われることを恐れる必要はない。

第５章の終わりに

ここではイスラームの信条について解説した。ムスリムになっての第一段階では、何を信じれば良いのかについて知らなければならない。イーマーン（信仰）の六信の知識が増えれば増えるほど、自分の信仰は強くなっていくだろう。

六信の信仰についてもっと詳しく読みたいならば、７冊から成っているウマル　アルアシュカル師の著作を推奨する。これはアッラーを始め天使を信じることなどについて、さまざまな側面を取り扱っている。この本はサウジアラビアのリヤドにあるダール　アルアーラミーヤ　リルキターブ出版から出されており、インターネットでも閲覧が可能である。他に信条の側面を取り上げている本もある。ビラール・フィリップス師の著作や、ムハンマド・ジバーリー師の書もある。これらは、新ムスリムにとって、学ぶに値する本であると思われる。

第６章　イスラームの信仰行為（五行）

１．イスラームの五行とは

預言者ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）は、イスラームは５つの行に基づくと述べている。第一にアッラーを唯一の神と信じ、アッラー以外への崇拝を否定するシャハーダ（信仰告白）をする。サラー（礼拝）を行い、ザカート（喜捨）を施し、ラマダーン月にサウム（断食）し、マッカへハッジ（巡礼）することである[1]。このことを、預言者ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）は、家の５本の柱に例えて説明している。イスラームの五行の柱のうち、第一のシャハーダについては、すでに本書の前の章で述べてきた。この章では、後の４つの行について述べる。

本題に入る前に、準備として触れなければならないことがある。五行には外面的な側面―身体面と内面的な側面―精神面がある。これまでの学者たちは、五行がアッラーに受け入れられるように次の２点について強調している。第一は、アッラーが命じたように、正しく健全な行為をすること。第二は、純粋にアッラーに向けた行為をすることである。

[1] ブハーリーとムスリムの伝承による。

・・・

凡（およ）そ誰でも、主との会見を請い願う者は、正しい行いをしなさい。

かれの主を崇（あが）める場合に何（なに）一つ（同位に）配置（はいち）して崇拝してはならない。」

【第１８章　洞窟章〔アル・カハフ〕１１０節】

この節に関し、イブン・カイイム師はこう述べている。「アッラーが受け入れられる行為とは、預言者ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）のスンナに沿った行為で、同時にアッラーに向けて行う純粋な行為である。この２つの行為には、知識も必要である。アッラーのことをよく知らなければできないし、預言者の教えを学ばなければならないのである。知識は純粋な行為の根拠となり、また手順をも示してくれる。[1]」

アッラーはしもべたちに、心の純粋さを求める。心が純粋であることが行いに反映され、アッラーに受け入れられるための鍵となる。アッラーは創造した生命の中の、誰が最も多くの善行を積んでいるのかを見るためでなく、最も善い行為をしているものは誰かを知るために、純粋な心を求めているのである。それについて、アッラーはこう告げている。

---

[1] アリー　アッサーリヒー著『アラッダウ　ウルムニール　アラー　アッタフスィール（「解釈に明るい光を！」：訳者注）』ムアッサッサトゥ　アンヌール出版、リヤド、1991 年、Vol.1、p.72。

大権を掌握（しょうあく）なされる方に祝福あれ。本当にかれは凡（すべ）てのことに全能であられる。

【第６７章　大権章〔アル・ムルク〕１節】

（かれは）死と生と創られた方である。

それは、あなたがたの中（なか）誰の行いが優れているのかを試みられるためで、

かれは偉力ならびなく寛容であられる。

【同章　２節】

イブン・アイヤード師は、このクルアーンの節から次のように述べている。「この節に出ている〔**優れている**〕とは、最も正しく純粋であるという意味であろう。行為は純粋で正しくなければアッラーには受け入れられない。純粋な行為にするためには、アッラーのみを目指すことであり、正しい行為をするためにはスンナに沿った行為をすることである[1]。」

これらの行為にとって大切な要件は、行いが実生活の中に現れなければ意味がないともいえる。前述したハディースの「イスラームは５本の柱に基づく」にも述べられた５本の柱は、アッラーに帰依する人生（生活）を構成する柱でもある[2]。

---

[1] この話は、彼の著作ではなく、アブドゥルラハマーン　イブン・ラジャブ著『ジャーミャー　アルウルーム　ワ　アルヒカム（「知識と知恵の蒐集」：訳者注）』ムアッサッサトゥ　アルリサーラ出版、ベイルート、1991、Vol.1、p.72。

[2] ５本の柱についての詳しい記述は、筆者による『タズキヤトゥ　アンナフス（「自我の浄化」：訳者注）』に詳しい。

２．サラー（礼拝）

（1）「サラー（礼拝）を行うこと」の意味

　サラーについて、注意しなければならない重要な側面がある。サラーが示してしているのは単なる見せかけではない。アッラーがクルアーンで命じているのは礼拝の形ではなく、気持ちを入れて行う特別な行為である。アッラーと預言者はそれを「イカーマトゥッサラー」と名付けている。正しく行わなければサラーを十分にやったとはいえないのである。十分なサラーをやっている人は少ない。これはイブン・ウマル（彼にアッラーのご満悦あれ）による次のハディースと同じ様相を現しているようである。

「自分の足で巡礼する者たちは少なく、籠に乗っている人が多い。[1]」

ドーサリー師も正しい本当のサラーと形だけのそれとは、大きな違いがあると述べている。アッラーはクルアーンで信者に呼びかける際には、ただサラーしている人びととは言わず「イカーマトゥッサラーを行なっている人びと」という言葉で使い分けた。アッラーがサラーの言葉の違いを示したのは、正しい本当のサラーと形だけのサラーを区別するためである。前者には、

---

[1] アッラーギブ　アルアスファハーニー著『ムアジャム　ムフラダートゥ　アルファーズ　アルクルアーン（「クルアーンの言葉事典」：訳者注）』ダール　アルフィクル出版、ベイルート、p.433。
（この引用は、サラーにおいても自分の足でしっかりとやっている人は少なく、多くの者は気楽にやっている、の意味であろう。：訳者注）

服従の気持ちがあり、心と魂の両方で礼拝を行なっている。しかし、ただ形だけのサラーでは、本来要求されている礼拝とは言えないのである[1]。ドーサリー師も言うように、正しい本当のサラーには精神的な要素が含まれる。

しかし、ただそれだけの違いではない。それは多くの学者が言っている中でも明らかになっている。例えば、高名な学者であるアッタバリー師は、クルアーンでの「サラーを行いなさい。」の中では、次のように告げられていると述べている。

「義務付けられている通り、サラーをしなさい。」

また続けて説明している中で、イブン・アッバース（彼にアッラーのご満悦あれ）の言葉を引用している。「ルクーウ（屈伸礼をすること）、サジダ（平伏し額を床につけること）、ティラーワ（クルアーンを朗誦すること）、フシューウ（アッラーを畏れ敬う気持ちを持つこと）、自発的に喜んでサラーをすることである。[2]」

カターダ師は、「正しい本当のサラーとは、定められた時間、ウドゥー（清め）、ルクーウ、サジダである」と述べている[3]。

---

[1] アブドゥッラハマーン　アルドーサリー著『サフワトゥ　アルアサール　ワ　アルマファーヒーム　ミン　タフスィール　アルクルアーン　アルアズィーム（「クルアーンの解釈における概念の粋(すい)」：訳者注）』Vol.2、ダール　アルアルカム出版、クウェート、1981 年、p.8。

[2] ムハンマド　イブン・ジャリール　アッタバリー著『ジャーミウ　アルバヤーン　アン　タアウィール　アルクルアーン（「クルアーンの明確な解釈の蒐集」：訳者注）』Vol.1、ダール　アルフィクル出版、ベイルート、レバノン、1988 年、p.104。

[3] イスマイール　イブン・カスィール著『タフスィール　アルクルアーン　アルアズィーム（「聖クルアーンの解釈」：訳者注）』Vol.1、ダール　アルアルカム出版、クウェート、1985 年、p.168。

以上のように、「イカーマトゥッサラー」の実現のため、ムスリムはクルアーンとスンナにあるように、正しく礼拝を行うことである。これは外面的な要素と内面的な要素も含む。片方の側面だけでは、正しいサラーとしては十分ではない。そしてムスリムがサラーをする前には、必ずウドゥーをして体を清めなくてはならない。またサラーの時間を守ることも重要である。もし可能であるならば、特に男性はマスジドでサラーをするべきである。そして規則と教え通りにサラーをすることである。その場合、体の動きには落ち着いた謙虚な態度が必要であり、フシューウ（畏れ敬う気持ち）が伴わなければならない。また、サラーの全ての行いはハディースにあるように預言者ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）を手本にしなければならない。これが正しい本当のサラーであり、イスラームにおける行為の基本である。アッラーが望んでいる礼拝は、些細で軽い行いという位置づけではない。正しい礼拝は、スンナに則って行うことが理想である。礼拝は、正しい意志表明と畏れる気持ちがなければならないのである。

シャリーア（イスラーム法）の通りに行なったとすればムスリムは恩恵をもらうことができるだろうが、アッラーが理想とするサラーのレベルとは言えないかもしれない。預言者ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）も、次のように言ったという。

「しもべはサラーをしたとしても、１０分の１、９分の１、８分の１、７分の１、６分の１、５分の１、４分の１、３分の１、２分の１つまり半分しか恩恵はもらえません。[1]」

サラーについて強調したのは、イスラームの五行の大きな柱の１つであり、体を使った動きではなく、心からアッラーに請い願うことが要であるからである。決まった時間に単に礼拝をするのではなく、より高い極みを目指す気持ちが大切なのである。アンナダウィー師はこう述べている。「サラーは単なる決まった体の動きではなく、木星などといった異星の儀式でもなく、軍隊のように規律正しいだけの人間の意志を無視した動きでもなく、物質（身体）と思考（精神）が統合された行為である。体と頭と心は理想的に協同して動いている。サジダ、ルクーウ、クルアーンを唱えることは口や体の動きである。精神を集中することは思考に関係し、畏れの気持ちや悔悟、希望を願うことは心の動きである。[2]」

イスラームにおけるサラーは重ねて言うまでもなく重要であり、シャハーダのすぐ後に位置づけられて、全ての人びとに課せられている。

ある男が預言者ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）に尋ねた。「一番善い行いというのはなんですか。」

---

[1]アブー・ダーウードとアハマドの伝承による。そしてアルバーニー師は「これは正しいハディースである。」と言っている。アルバーニー著　前掲『サヒーフ　アルジャーミャー』Vol.1、p.335。
[2] アブー・ハサン　アンナダウィー著『アルカーン　アルイスラーム　アルアルバア（「イスラームの行の４本の柱：訳者注」）』イスラミック　アカデミー　オブ　リサーチ出版、ラクノウ、インド、1976 年、pp.22～23。

男は同じ質問を３回した。３回とも、答えはサラーであった。４回目が、
「アッラーのためのジハードです。」であった。[1]
「審判の日に裁かれるときに一番にしもべに問われる行いは、サラーです。これが良ければ全ての行為は善いと見做され、これがだめであれば、全てがだめということになるでしょう[2]**。」**

サラーの重要性は、これらの預言者のハディースからも分かる通りである。

サラーにおける重要な点は、アッラーとの関係であろう。アッラーへのイーマーン（信仰）、アッラーへのタクワー（篤信）、アッラーへのイフラース（純粋な意志）、タウヒードつまり唯一なるアッラーに仕える意志が重要である。アッラーとの絆を結び、それをサラーによって一層強くしていくことである。サラーが良ければ、全ての行いが自然に良くなっていくのである。サラーを正しく終えた後、アッラーに気持ちよく助けを求めることができる。サラーをした後の人々には常に良い影響が表れてくる。サラーに際してのアッラーの言葉によって潤いが残っているからである。その後にアッラーに逆らうことは

---

[1] アハマドとイブン・ヒッバーンの伝承による。アルバーニー師は「良いハディースであろう。」と言っている 。アルバーニー著『サヒーフ　アッタルギーブ　ワッタルヒーブ（「奨励と懲罰―飴と鞭の喩え」：訳者注）』Vol.1、アルマクタブアルイスラーミー出版、ベイルート、レバノン、1982 年、p.150。

[2] タバラーニーの伝承による。アルバーニー師は「正しいハディースであろう。」と言っている。アルバーニー著　前掲書『サヒーフ　アルジャーミャー』Vol.1、p.503。

誰も望まないであろう。サラーの後の影響について、アッラーは次のように告げている。

・・・

本当に礼拝は、（人を）醜行（しゅうこう）と悪事から遠ざける。

・・・

【第２９章　蜘蛛（くも）章〔アル・アンカブート〕４５節】

アンナダウィー師は雄弁な言葉でこう説明している。「サラーの目的は人間の精神力を鍛えることである。これは自分の意志と、信仰の灯（ともしび）、アッラーの存在の確信を通してつくられる。精神力が強くなれば、全ての悪からの誘惑に対する抵抗力ができる。また困難な場面においても、安定した気持ちで臨める。自分の弱さ、欲望による誘惑から自分自身を守ることができるようになる。[1]」

来世では、アッラーの赦しは礼拝の行いと強く結びついている。預言者ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）は言った。

「アッラーは１日５回のサラーを課せられました。時間通りに、体を清め、ルクーウし、サジダをして、アッラーを畏れる気持ち[2]もあれば、アッラーの赦しの盟約ができます。しかし、それ

---

[1] アンナダウィー著　前掲書、p.24。

[2] 礼拝中の畏れの気持ちは、心が礼拝に夢中になったときに現れる。その畏れの気持ちは体全体に及び、落ち着いた気持ちで地を見ることができる。心が落ち着く

を守らない者はアッラーとの盟約もなく、アッラーが望まれるならば赦され、望まれないならば懲罰が与えられるでしょう。[1]」

　サラーは自我の浄化の１つの行為である。人間は毎日５回アッラーに向かう。毎日アッラーの前に立つことで、犯すかもしれない罪に対し「否」と忠告され遠ざけてくれる。サラーのときを悔悟の時間にすべきである。それは人間が犯した悪いことについての赦しを求める良い機会なのである。サラー自体が善い行為であり、人間の犯したいくつかの罪を洗い落としてくれる。次のハディースからも分かる通りである。

「自分の家の前に清流があって、その人はそこで毎日５回体を洗っている。汚れや垢がまだ残っているでしょうか。」と預言者が聞いた。彼らは「いいえ、何も残らないでしょう。」と答えた。預言者ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）は、「毎日のサラーもこれと同じです。アッラーの慈悲により、サラーは罪を洗い清めてくれます。[2]」

　別のハディースでも、預言者は次のように言っている。

と声にも現れる。詳しくは次の書を参考のこと。ムハンマド　アッシャービー著『アルフルーク　アッルガウィーヤ　ワ　アサラルハー　フィー　タフスィール　アルクルアーン　アルカリーム（「聖クルアーンにおける言葉の違いとその影響」：訳者注）』アルオバイカーン出版、1993 年、pp.240～254。またフシューウ（畏れの気持ち）とフドゥーウ（服従の気持ち）の相違についても、書かれているので参照のこと。

[1] マーリク、アハマド、アブー・ダーウード、ナサーイー、その他の伝承による。アルバーニー師は「正しいハディースである。」と言っている。アルバーニー著前掲書『サヒーフ　アルジャーミャー』Vol.1、p.616。

[2] ブハーリーとムスリムの伝承による。

「人間に大きな罪が避けられたならば、毎日５回のサラーとジュムア（金曜日）のサラーによって、金曜日と金曜日の間は、日常の小さい罪の償いとなるでしょう。[1]」

ムスリムの信仰における礼拝の重要性は、次のハディースにもある。

「シルク（多神崇拝）、またはクフル（不信仰）との差は、サラーをしているかしていないかです。[2]」

ここで預言者は、シルクとクフルの言葉を使って、ムスリムがサラーをしないことはイスラームの道から外れることで、不信仰の一種のようなものであると諭しているのである。他にもシルクとクフルには「サラーを止める（逆らうこと）」という別の意味合いがあり、これによってイスラームから脱落してしまうのである。

シッディーキー師は、上記のことをまとめて次のように述べている。「サラーは宗教の魂である。それがなければ、精神の浄化も失われる。サラーをしないムスリムは、魂のない人間のようなものである。世界からサラーという行為がなくなったら、宗教もなくなる。なぜならば、それによってアッラーの存在を意識するのであり、人類に対する誠実な愛情を感じ、人の内面の純粋さを感じるからである。サラーは重要かつ高貴な行いであり、宗教の存在を最も示すものである。[3]」

---

[1] ムスリムの伝承による。
[2] 同上。
[3] アブドゥルハミード　シッディーキー著『サヒーヒ　ムスリムの翻訳』Vol.1、ダール　アルアラビーヤ出版、ベイルート、レバノン、p.206。

預言者ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）は、イスラームにおけるサラーの役割についてこう言ったという。

「物事の頭はイスラーム、柱はサラーで、頂点はジハード[1]です。[2]」

（２）サラー（礼拝）での決まりについての重要なこと

ここはサラーについて詳しい決まりを述べるに相応しい場ではないが、いくつかの基本的なことを述べておこう。サラーは正気の大人[3]に課せられている。例外としては女性の生理期間、出産後の出血のある期間がある。これはタハーラ（清浄）の状態にないからである。このことに関しては後述する。女性はこの期間が終ったとしても、過ぎた分のサラーをしなくても良い。人はサラーの前に、清浄な状態でなければならない。それについてクルアーンではこう告げている。

信仰する者よ、あなたがたが礼拝に立つ時は、顔と、両手を肘（ひじ）まで洗い、頭を撫（な）で、両足を踝（くるぶし）まで（洗え）。

・・・

【第５章　食卓章〔アル・マーイダ〕６節】

---

[1]（クルアーン引用：訳者注）
アッラーのために限りを尽くして奮闘努力しなさい。
・・・
【第２２章　巡礼章〔アル・ハッジ〕７８節】

[2] アハマドとティルミズィー、その他の伝承による。

[3] 大人というのは思春期を過ぎた者。

預言者も言った。

「サラーは、清浄なしでは受け入れられません。[1]」

例えば、ムスリムが性交した後、夢精した後、または女性が生理や出産の出血のある時期が終わった後は、サラーの前には体を洗わなくてはならない。これをグスルという。また小便、大便、放屁の後や、深く寝た場合、意識を失った場合にも、礼拝の前にウドゥー（顔や両手を洗い、頭をなで、足を洗うこと）をしなくてはならない。このサラーのための条件（決まり）は、アッラーに仕えることとは、体全体を使って行うからである。それ以外のズィクル（唱念）の場合はしなくても良い。

上記の条件に加えて、ムスリムでサラーする人の服装も、清浄な状態でなければならない。言い換えれば小便、血などの汚れがない状態であること。要するにサラーという高貴な行為に入るには、人は全て清浄な状態になっていなければならないということである。

また、サラーの時間が決まっているということを、ムスリムは認識しなければならない。クルアーンではこう告げられている。

・・・

本当に礼拝には、信者に対し定められた時刻の掟がある。

【第４章　婦人章〔アン・ニサーア〕１０３節】

---

[1] ムスリムの伝承による。

その時刻に関して、預言者ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）のハディースがある。この時刻は大天使ジブリールが来たときに決まったのである。

大天使ジブリールは、預言者ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）に次のように言った。「起き上がれ。ズフルの礼拝をしなさい。」太陽がちょうど真上を過ぎた頃に、預言者はズフル（正午過ぎ）の礼拝をした。また大天使が午後にやって来て言った。「立ち上がれ、礼拝をしなさい。」預言者は、物の影がちょうどそのものと同じ長さになったときに、アスル（午後）の礼拝をした。また大天使が日没に来て、礼拝を命じた。預言者は、太陽が沈んだときにマグリブ（日没後）の礼拝をした。大天使は、また夜に来て礼拝を命じた。預言者は、夜の闇が覆ったときにイシャー（夜）の礼拝をした。また大天使は夜明けに来た。預言者は、夜明けの光がほんの少し差し込んだときにファジュル（暁）の礼拝をした。また翌日大天使は来て同じことを命じ、預言者は影が同じになったときに、ズフルの礼拝をした。午後、影が２倍になったときに、アスルの礼拝をした。マグリブには大天使はその時間にちょうど来た[1]。夜中に来たときは、夜の３分の１位が過ぎたときであり、大天使は（イシャーの）礼拝を命じた。そして空がほんの少し明るくなった頃に来たとき、預言者に「礼拝をしなさい。」と言った。

---

[1] （マグリブは短い時間帯で、ちょうどその時間に来たという解釈で訳した。：訳者注）

そこでファジュルの礼拝をした。「サラーは、この時間とこの時間の間である。」と大天使は言った[1]。

しかし残念ながら、多くのムスリムのうちのある者は忙しくて、夕方までサラーを延期したり、ズフルとアスルとマグリブの礼拝を家に帰ってまとめてしたりすることもある。新ムスリムは、仕事の合間にサラーの時間を見つけるが難しいときもあるだろう。また人前で難しいこと、サラーする場所を確保するのが難しいこともありうる。しかし、サラーを延期するのは好ましいことではないので、時間通りにやるように努めなければならない。ムスリムはその時間を軽視せず、サラーのための努力をしなければならない。仕事の中でもサラーをするための方法を見つけることである。どうしようもないときは、サラーを一緒にすることになるが、ズフルとアスルを合わせるときには、どちらかの時間に合わせてやるべきである。マグリブとイシャーも合わせてすることができるが、これは例外的な事である。怠けてしないとかするべきではない。サラーの時間を守るよう努力することが大切である。

次のことが、正しいムスリムのサラーの条件である。

① 礼拝の時間を守ること

② 体を清浄な状態にしておくこと

③ 自分の衣服も場所も清浄であること

[1] アハマドとナサーイー、ティルミズィーの伝承による。アルバーニー著『エルワーア　アルガリール　フィー　タフリージ　アハディース　マナール　アッサビール（「灯台の明かりのようなハディースの導き」：訳者注）』No.250。

④ 体で隠すべき所を隠すこと

（男性はへそからひざまでで、陰部が見えないようにすること。片方の肩も覆わなければならない。女性の場合は、顔と手以外の体全部を覆うこと）

⑤ キブラ（マッカの方角）に顔を向けること

⑥ ニーヤ（意志）を表明すること

ムスリムは、１日５回のサラーをできるならば集団で、あるいはマスジドでした方が良い。それを強調する多くのスンナがある。預言者ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）は次のように言っている。

「集団でのサラーは家や市場でするよりも功徳が多く、２５の徳があります。ある人がウドゥーをし、サラーをするためにマスジドに行けば、アッラーは彼が歩く足の一歩一歩に１つの報奨をくださり、犯した悪い行いの１つ分を差し引いてくださります。マスジドに入ってサラーをすれば、天使たちが祝福してくれます。天使たちはこう言うのです。『アッラーよ、赦してください。慈悲深く、見守ってください。・・・[1]』[2]」

多くの学者は、クルアーンにあるように男性の場合は集団ですべきであるとしている。集団での恩恵に加えて、筆者は自分の体験に基づいて、次の理由により、ムスリムたちは集団でサラーをした方が良いと考えている。

---

[1] （・・・の部分には、**「次のサラーまでマスジドから出なければ」、「人に害を与えない限り」、「ウドゥーが壊れない限り」、**などの諸論がある。：訳者注）

[2] ブハーリー、ムスリム、アブー・ダーウードの伝承による。

- 集団でのサラーでは、新ムスリムとして熱心な信者であることを自他共に示すことができる。なぜならば、自分が入った宗教の基本的な柱を実施するために、自分の情熱を見せることになるからだ。この行動は、周りのムスリムに肯定的な影響を与え、人々は彼を支援するための時間を惜しまないだろう。
- また、新ムスリムが模範とする新しい友人と出会う良い機会になる。新ムスリムは、非ムスリムの中で生活しているため、自分の人生をイスラームの価値に合うように急に変えるのは難しい。そのため、マスジドに行くことで、新しい友人を得る良い機会となるからである。
- イスラームについて、もっと学ぶ機会になるだろう。マスジドでは、知識のある人に出会うことも多いからである。彼を助け、指導してくれる誠実なムスリムに会うことにもなり、そうすれば迷いを感じたり寂しさを感じたりすることもない。これは、男性の場合にも女性の場合にも当てはまる。女性もその機会を得るために、集団でサラーする場に踏み出してみることも良いだろう。

聖クルアーンはアラビア語で授けられた[1]。クルアーンの一番最初の章は、アル＝ファーティハ（開端章）という。この章はサラーの基本となっている。サラーはそれぞれをラクアの単位

[1] クルアーンの翻訳されたものはクルアーンではない。クルアーンは、アラビア語で書かれたもののみを指す。

で回数を数える[1]。新ムスリムにとって、この章を読み、理解し、暗記するには、時間と努力が必要であろう。アル＝ファーティハ章が新ムスリムに身につくまで、次の預言者のハディースが当てはまるだろう。

ある男が預言者のところへやって来て聞いた。「私はクルアーンが全部読めません。だからクルアーンからは何も得られないのです。何か報われる言葉を教えてください。」　預言者は言った。

「スブハーナッラー（アッラーに栄光あれ）、ワルハムドゥリッラー（アッラーに称賛あれ）　ワラー　イラーハ　イッラッラー（アッラーの他に崇拝すべきものはなく）、ワッラーフアクバル（アッラーは偉大なり）、ワラー　ハウラ　ワラー　クウワタ　　イッラー　ビッラーヒルアリーイルアズィーム（至高で偉大なるアッラーの他に力も強大さもない）」

また男は聞いた。「アッラーの使徒よ。これはアッラーに対しての言葉です。それでは、私には、、」と男が聞いたので、預言者は答えて言った。

「こう言いなさい。アッラーフンマルハムニー（アッラーよ、私に慈悲をかけ）、ワルズクニー（私に恩恵を与え）、ワアーフィニー（私を守り）、ワハディニー（導いてください）。」

男は納得して立ち上がり、預言者はまた言った。

---

[1] （ラカアート（ラクアの複数形」：ファジュルは２回、ズフルとアスルは４回、マグリブは３回、イシャーは４回のラクアである.：訳者注。）

「この男は、もう自分の手を善でいっぱいにしました。」[1]

筆者は、新ムスリムはアラビア語が流暢な人にアラビア語を習うよう助言したい。音声付きの翻訳書に頼るのではなく、特にアラビア語に初めて触れるのであれば、翻訳書だけでは正しい発音は学べないからである。私の体験から言うと、人はクルアーンの読誦の言葉を間違って覚えてしまったなら、後で正しく訂正するのが難しいということをよく知っている。そのため、新ムスリムは一番最初から正しいアラビア語の話者から学ぶようにすべきであろう。

（３）サラー（礼拝）の方法についての簡単なまとめ

預言者は、カアバ（マッカにある聖殿）に向かって次のようにサラーをしたと言われている。

まず両の手を両肩まで上げて「アッラーフ　アクバル（アッラーは偉大なり）」と言う。右手を左手に重ね体の前に置き、サジダする場所に目を落とす。アッラーを讃美する言葉を唱えて、礼拝を始める。「アウーズ　ビッラーヒ　ミナッシャイターニッラジーム（私はアッラーに呪われし悪魔からのご加護を願います）」と唱える。「ビスミッラーヒッラハマーニッラヒーム（慈悲あまねく慈愛深きアッラーの御名において）」を唱える。後はアル＝ファーティハ章を唱える。そして終われば

[1] アブー・ダーウード、その他の伝承による。アルバーニー師は、良いと見なしている。

「アーミーン」と唱える。このあとは短いスーラ（章）または長い章を唱える。[1]

預言者ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）は、ファジュルの礼拝とマグリブとイシャーの礼拝の最初前半のラクアでは、アル＝ファーティハとクルアーンを声を出して唱えた。しかしズフルとアスルでは、声を出さなかった。ジュムア（金曜日）の礼拝のときと２つの大祭であるイード・アル＝フィトル（断食明けの祭り）とイード・アル＝アドハー（犠牲祭）の礼拝のとき、また雨乞いの礼拝や日食の礼拝のときなども、大きな声で唱えていたという。[2]

預言者ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）は、後半の２回のラクアの時間を最初の２回のラクアの半分の時間にしていた。[3]

立ってクルアーンを唱えることが終ったら少し息を整え、両手を上げて「アッラーフ　アクバル」と言う。両手を膝につけ、腰を曲げる（ルクーウ）。預言者は指は少し離すこともあり、きちんとつけるときもあったという。また体を起こし、背筋を

[1] （礼拝のやり方については、さまざまな考え、方法がある。礼拝の最初に手を上げる際に、顔まで上げる人もいるが、多くの人はへその上より上げている。唱念の「アウーズ　ビッラーヒ　ミナッシャイターニッラジーム」と「ビスミッラーヒッラハマーニッラヒーム」は、声に出さなくても良いという考え方もある。：訳者注）

[2] （声の大きさは、独りのときと集団のときでは異なる。独りの場合は、声を出しても出さなくても良い。集団のときは、イマームが唱えるので、他の人は声を出してはいけない。礼拝は、アッラーと個人との関係なので、声は出さなくても良い。他の人に迷惑がないようにすべきである。：訳者注）

[3] （最初の２回のラクアではアル＝ファーティハと他の章をよみ、後のラクアではアル＝ファーティハのみ唱える。：訳者注）

まっすぐに整える。ルクーの時には、「スブハーナ　ラッビヤルアズィーム（偉大なる我が主を讃美する。）」と３回唱える。願い事を言っても良い。ルクーウでもサジダでも、クルアーンを唱えてはいけない。

背筋を伸ばした時には、「サミアッラーフ　リマン　ハミダ（アッラーは讃美する者の声を聞きたもう）」と言いながら、両手を上げて下ろす。時には、「ラッバナー　ワ　ラカルハムドゥ（主よ、あなたにこそ称賛あれ。）」と言っても良い。[1]

サジダに入る前には、膝をつく前に両手は先に床につけなくてはいけない。指はつけておく。耳の横に両手を置き、その後、額と鼻を床につける。預言者ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）は、こう言ったと言われている。

「なぜならば私は７つの骨を使ってサラーをします。７つとは、額から鼻、両手、両膝、両足です。・・・またアッラーは床に鼻を付けない人のサラーは受け入れられません。」またサジダのとき、預言者は落ち着いて、

「スブハーナ　ラッビヤルアアラー（至高なる我が主を讃美する。）」を３回言った。そして願い事や唱念をしたりした。預言者はサラーする人に願い事はこの姿勢でするようにと勧めている。[2]

[1] （集団のときは、イマームが「サミアッラーフ　リマン　ハミダ」と唱えたら、他の人は「ラッバナー　ワ　ラカルハムドゥ」と唱える。：訳者注）

[2] （この部分のハディースは、参考文献には書いていない。：訳者注）

次に「アッラーフ アクバル」と言いながら頭を上げる。左足を崩して座り、右足の指先をキブラ（マッカの方角）に向ける。そこで、願い事を言う。「ラッビグフィルリー　ワルハムニー　ワジュブルニー　ワルファアニー　ワハディニー　ワアーフィニー　ワルズクニー（主よ、私を赦し、私に慈悲をかけ、私を正し、私の地位を上げ、私を導き、私を守り、私に恩恵を与えてください。）[1]」もう一度サジダをし、そこで最初のサジダで言ったのと同じ**「スブハーナ　ラッビヤルアアラー（至高なる我が主を讃美する。）」**を３回唱える。また願い事も唱える。

もう一度「アッラーフ　アクバル」と言いつつ、軽く座る姿勢に戻り、床から立ち上がる。2 回目のラクアでは１回目にしたことと同じことをするが、もう少し短くやる。そして、2 回目のラクアのサジダを２回行い、軽く座る。そこで、もしこの 2 回のラクアだけだったら、左足を上に膝を崩し、タシャッフドの言葉[2]を言う。最後が３回目や４回目で終わる礼拝のときも、

---

[1] （全部を願うのは理想であるが、一部でも許される。：訳者注）

[2] タシャッフドの言葉を次にあげる。

前半（第一）「アッタヒーヤートゥ　リッラーヒ、ワッサラワートゥ、ワッタイイバートゥ。アッサラーム　アライカ　アイユハンナビーユ　ワ　ラハマトゥッラーヒ　ワ　バラカートゥフ。アッサラーム　アライナー　ワ　アラー　イバーディッラーヒッサーリヒーン。アシュハドゥ　アッラー　イラーハ　イッラッラーフ　ワ　アシュハドゥ　アンナ　ムハンマダン　アブドゥフ　ワ　ラスールフ。」である。（意味はこうである。「全ての挨拶と祈りとよき言葉はアッラー、あなたに捧げられます。預言者よ、あなたの上に平安とアッラーの慈悲と祝福がありますように。私たち、そしてアッラーの敬虔なしもべたちに平安あれ。私はアッラーの他に崇拝すべきものはないことを証言します。そして私はムハンマドがアッラーのしもべであり、使徒であることを証言します。」：訳者注）

また膝を崩して座る。この場合の姿勢であるが、両手を両腿に置き、指先を合わせて、キブラに向ける。

２回目のラクアが終わると、タシャッフドの言葉を言う。**預言者は、自分でも第一と第二のタシャッフドの言葉を言い、皆も同じようにするように言った。預言者もサラーの中で願い事を言った。**[1]

最後はタスリーム（挨拶）する。右に「アッサラーム　アライクム　ワラハマトゥッラー（あなたたちの上に平安とアッラーの慈悲がありますように）」と言い、また左を向いて「アッサラーム　アライクム　ワラハマトゥッラー」と言う。場合によっては、それぞれで「ワバラカートゥフ（そしてアッラーの祝福も）」を追加して言うこともある。

後半（第二）「アッラーフンマ　サッリ　アラー　ムハンマディン　ワ　アラー　アーリ　ムハンマドゥ。カマー　サッライタ　アラー　イブラーヒーマ　ワ　アラー　アーリ　イブラーヒーマ、インナカ　ハミードゥン　マジードゥ。アッラーフンマ　バーリク　アラー　ムハンマディン　ワ　アラー　アーリ　ムハンマドゥ。カマー　バーラクタ　アラー　イブラーヒーマ　ワ　アラー　アーリ　イブラーヒーマ、インナカ　ハミードゥン　マジードゥ。」（アッラーよ、ムハンマドとその一族に栄光を与えて下さい。あなたがイブラーヒームとその一族に栄光を与えられたように。あなたは全ての讃美と栄光の主です。アッラーよ、ムハンマドとその一族を祝福して下さい。あなたがイブラーヒームとその一族を祝福されたように。あなたは全ての讃美と栄光の主です。」：訳者注）

[1] 礼拝が２回のラクアで終わりならば、タシャッフドを全部（前半・後半）言う。３回または４回のラクアの場合は、２回目のときに、半分（前半）を言い。最後には全部（前半・後半）のタシャッフドを言う。

３．ザカート（喜捨）

（１）ザカート（喜捨）の実践

ザカートの語源は「ザッカー　زَكَّا」という動詞からきている。ザッカーには「清浄化する、恵みを与える、潤す、繁盛する」などの意味がある。アッラーはクルアーンで次のように告げている。

だが自ら清めた者は必ず栄え、

【第８７章　至高者章〔アル・アアラー〕１４節】

クルアーンとハディースでは、ザカートの意味でサダカ（施し）も使っている[1]。「サダカ」の言葉は「正直であること」からきている。シッディーキー師は、言葉についての正確さの重要性について述べた際に、次のように述べた。「この２つ（サダカとザカート）は、共に高尚な良い言葉である。アッラーのためにお金を使うことは、人間の心を物質的な執着から清める働きがある。それを行なっている人は、アッラーに捧げるささやかな実践のつもりで行なっているだろう。アッラーへの敬愛よりも重要なものはないということを実践しているようなもの

[1] （ザカートは義務で決まっているが、サダカは自由意志に任される施しである。預言者は元々はアッラーに仕える者としてのサダカを勧めていた。：訳者注）

である。これは、全てのものはアッラーのために犠牲にする用意があるということを証明している。[1]」

ムスリムに一年の間に一定以上の所有物があるならば、イスラーム法でザカートを受け取る資格のある人々に拠出すべきである。ザカートは重要で、イスラームの五行の中ではサラーにつぐ位置にある。クルアーンではズィクル（アッラーの唱念）の後にはたいていザカートの記述があり、８２箇所で使われている。クルアーンを通して、来世でのアッラーの慈悲を獲得するための１つの鍵がザカートを行うことにある、と分かるのである。悔悟章を見てみよう。

男の信者も女の信者も、互いに仲間である。
かれらは正しいことをすすめ、邪悪を禁じる。
また礼拝の務めを守り、定めの喜捨をなし、
アッラーとその使徒に従う。
これらの者に、アッラーは慈悲を与える。
本当にアッラーは偉力ならびなく英明であられる。
【第９章　悔悟章〔アッ・タウバ〕７１節】

ザカートの財産は、自らの財産を清める働きがある。アッラーは、同章の別の節で告げている。

[1] シッディーキー著　前掲、Vol.2、p.465。

かれらの財産から施しを受け取らせるのは、あなたが、かれらをそれで清めて罪滅ぼしをさせ、またかれらのために祈るためである。

本当にあなたの祈りは、かれらへの安（やす）らぎである。

【第９章　悔悟章〔アッ・タウバ〕１０３節】

それに加えて、ザカートは人間の魂を吝嗇（りんしょく）という病から浄化する。そして人間の財産を清め、悪行を遠ざける。それについてのハディースもある。

ある人がザカートについて、預言者に尋ねた。預言者は答えて言った。「ザカートを払った人、その人は悪から遠ざかるでしょう。[1]」

またザカートは、社会全体に重要な役割を果たしている。ここで大切な点は、ザカートは社会の貧しい人々を助けることができる制度となっていることである。彼らが必要なお金を得ることになり、イスラーム社会の博愛の絆を強めるのに、大きな役割を果たす。貧者は富者がザカートの善い行いによって、救済してくれると知っている。中くらいの収入の人でも、アッラーの命令に従いザカートをしたことにより、それによって餓死をする様な状況に追い込まれる訳ではないことを知っている。何より裕福なムスリムは、自分が所有している財産はアッラー

[1] イブン・フザイマとタバラーニーの伝承による。アルバーニー師は「良いハディースである。」と言った。前掲　『サヒーフ　アッタルギーブ　ワッタルヒーブ』Vol.1、p.312。

からの恵みであると理解している。そのためザカートを果たすことにより、アッラーからの恩恵を正しい形で頂かなければならない。ムスリムは自分の責任を果たすこと、それがアッラーの恩恵を獲得するための最も良い手段であると知っている。

ムスリムでザカートをしない人びとは、自分に害を与えることになるだけでなく、他のムスリムたちにも害を与えることを知らなければならない。預言者ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）は、こう言ったと言われている。

「ザカートを払っていない民には、空からの雨も禁止されます。羊や家畜が一緒にその地にいなければ、雨には恵まれなかったでしょう。[1]」

ザカートを出さないことでアッラーからの戒めがあると、預言者は教えているのである。アッラーはザカートを払わない者に対して、次のように警告している。

アッラーの恩恵によって与えられたものを出すのを嫌う者に、自分のためにそれが有利であると思わせてはならない。いや、それはかれらのために有害である。

かれらの出すのを嫌ったそのものが、復活の日には、かれらの首にまつわるであろう。

天と地の遺産は、アッラーに属する。

アッラーはあなたがたのすることを熟知される。

【第３章　イムラーン家章〔アーリ・イムラーン〕１８０節】

[1] イブン・マージャの伝承による。アルバーニー師は「正しいハディースである。」と言っている。

ブハーリーの伝承によれば、預言者ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）は払わない者に対して、次のように言っている。

「ラクダを持っている人がザカートを払っていないのであれば、審判の日、彼らは勢い良くやって来て、その人を足で蹴ります。牛も角で突き、足で踏みます。羊も同じようにします。」

他にも、預言者は言う。

「審判の日には、彼らの首の周りにラクダや牛や羊が巻き付いています。助けてくださいと言われても、何もできません。私は既に伝えているのですから。」

預言者は、ザカートを払わない者の審判の日の有様について言う。

「（アッラーから授かった）お金を持っている金持ちの男が、ザカートを払いませんでした。審判の日、頭の禿げた目の黒い有毒な大蛇が巻き付いて、彼の首をしめ、頬を噛むのです。蛇は言います。『私はあなたのお金だ。』そして蛇はクルアーンの【第３章　イムラーン家章〔アーリ・イムラーン〕１８０節】を唱えるのです。[1]」

クルアーンの別の説では、ザカートを払わない人びとに対して、こう述べている。

[1] ブハーリーの伝承による。

あなたがた信仰する者たちよ、律法学者や修道士の多くは偽って人びとの財産を貪（むさぼ）り、（かれらを）アッラーの道から妨げている。
また金や銀を蓄えて、それをアッラーの道のために施さない者もいる。かれらに痛ましい懲罰を告げて喜ばせてやれ。

【第９章　悔悟章〔アッ・タウバ〕３４節】

その日、それら（の金銀）は地獄の火で熱せられて、かれらの額やわき腹や背に、焼印が押されるであろう。
「これはあなたがたが自分の魂のために、蓄積したものである。だからあなたがたが蓄積したものを味わえ。」

【同章　３５節】

（２）ザカート（喜捨）の量

ザカートは大地にある農作物、果物、家畜、財宝など全ての財産の種類から義務付けられている。現在、財産というのは、貨幣の形になっている。その財産を彼が所有したままで一年間が過ぎれば、その分のザカートを出さなければならない。その量は全体の財産の２．５％である。

ザカートを払わなければならない期間の分量は、ニサーブ（一年経過したという意味）と呼ぶ。金と銀に関しては、決まったニサーブの量がある。現在では金と銀の代わりに貨幣が使われているため、ニサーブについての意見がいろいろ分かれている。金や銀になおして換算されるのだろうか。もし金を基準

にするとしたら、決まったザカーは、２０のミスカール[1]という単位と、それに見合う貨幣で支払われることになる。ムスリムにそれぐらいのお金があるならば、そのお金の２．５％を一年分のザカートとして支払う義務がある。

　ザカートは、ある決まった人びとに配ることになる。アッラーは次のように告げている。

施し［サダカ］は、貧者、困窮者、これ（施しの事務）を管理する者、
および心が（真理に）傾いてきた者のため、
また身代金や負債の救済のため、
またアッラーの道のため（に率先して努力する者）、
また旅人（たびびと）のためのものである。
・・・
【第９章　悔悟章〔アッ・タウバ〕６０節】

　ザカートの管理のための特設委員会やそのための口座を持っている多くのマスジドやイスラーム団体がある。ムスリムはそこに行き、ザカートのお金として困っている人に配ってくれるように頼んでお金を渡せば、自分の義務を果たしたことになる。

[1] ２０ミスカールは、８５～９３．６ｇである。

４．サウム（断食）

サウム（断食）はラマダーン月の日中、食べ物と飲み物と性行為をずっと止めなくてはならない。サウムは欲望を抑えることを学ぶことになり、敬虔な気持ちにもなり、アッラーを畏れることを教えてくれる。預言者ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）以前の預言者にもサウムが課せられていた。次のように、ラマダーン月のサウムについて下された節には、目的が書かれている。

信仰する者よ、あなたがた以前の者に定めれられたようにあなたがたに斎戒が定められた。恐らくあなたがたは主を畏れるであろう。

【第２章　雌牛章〔アル・バカラ〕１８３節】

預言者ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）は、**「サウムは業火への予防であり、砦です。」と言われた**[1]。

加えて、サウムは審判の日に、取り成しともなってくれるという。

「サウムは業火からの予防であり、（に続けて）サウムとクルアーンは人間のために取り成しをしてくれるでしょう。」そして、サウムはこう言う[1]。

---

[1] アハマドとナサーイーの伝承による。アルバーニー師はハディースを少し添削した。アルバーニー著　前掲書『サヒーフ　アルジャーミャー』Vol.2、p.722。

「主よ、私は彼に日中の食物と性的な快楽を禁じました。ですので私を彼を取りなす者にお命じ下さい。」クルアーンはこう言った。「私は彼に夜の睡眠を禁じました。ですので私を彼を取りなす者にお命じ下さい。」と。それで両者は取りなすことを許されるでしょう[2]。

サウムは、信者がアッラーに対して純粋なことを示す行為である。アッラーだけが、それをしたかどうかはっきりと知っている。内緒で自分のサウムを止めたことは人には分からないが、アッラーだけは分かっているのである。アッラーはサウムした人には、特別な恩恵を用意している。それについて、預言者はアッラーの次のようなお言葉を伝えている。

「人は食べ物と飲み物と欲を私のために放棄した。そのため、サウムは私に対する行為であり、私はそれによって報奨を与える。１つの良いことは１０倍になろう。[3]」

また預言者は、その報奨について次のように言った。

「信仰と報奨を期待してラマダーン月のサウムをする者は、過去に犯した罪を赦されるでしょう。[4]」

イブン・カイイム師は、サウムの重要ないくつかの側面と益を次のように言った。「サウムは精神の欲望を抑える修行であり、家畜小屋のような世界から天使のいる世界へ運んでくれる。

---

[1] （審判の日、全てのものが話し出し証言すると言われる。：訳者注）

[2] アハマドの伝承による。アルバーニー師は「正しい」と言っている。アルバーニー著　同上。

[3] ブハーリーの伝承による。

[4] ブハーリーとムスリムの伝承による。

人間の精神が欲望に負けてしまえば、獣の世界に属してしまうことになる。もしアッラーのために本能の欲望を抑えることができたならば、シャイターン（悪魔）への道を狭め閉ざしてくれる。自分の欲を放棄することによって、アッラーに近くなり、敬愛の気持ちも深くなり、アッラーに受け入れられることを優先する気持ちになる。自分の好きな食べ物と飲み物と性行為を止めてそれを放棄しない限り、サウムの行いの真理は掴めないだろう。[1]

預言者ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）は、サウムをわざと中断した人に対しての懲罰について警鐘している。次のハディースである。

「私が寝ている間に、２人の男が来て私の腕をとって険しい山に連れて行き、『山に登れ。』と言いました。私が『登れません。』と答えると、『我々が手伝おう。』と言ったので登りました。山頂の近くでは、大きな叫び声が聞こえました。『この声は何ですか。』と聞くと、彼らは『業火の人びとの泣き声である。』と答えました。そして私をもっと進ませたので、業火の中の彼ら見ることができました。彼らの脚の腱はぶら下がっており、頬やあごの骨が割れ、血が出ていました。『サウムを

[1] アンナダウィー著　前掲書『アルカーン　アルイスラーム　アルアルバア（「イスラームの行の４本の柱：訳者注」）』p.173。

終える前の時間に、彼らはわざと食べた人びとである。』と男たちは言いました。[1]」

サウムは精神が正常で、体も健康であり、定住しているムスリムの人々に義務付けられている。女性の場合は、清浄な状態にあるのが条件である。旅人と病気の場合はサウムしない方がよいが、代わりにラマダーン月が終われば、その分を補う必要がある。もし彼らが自ら やりたいとサウムしたとしても、それも受け入れられる。女性の免除の期間の場合はサウムしてはいけないが、ラマダーン月が終わればその分をやる必要がある。

サウムには基本的な２つの側面がある。第一には、ムスリムはアッラーにそのニーヤ（意志）を持たなければならない。普通の習慣での断食では、サウムにはならない。預言者も次のように言っている。

「前日の夜からサウムをするという気持ちで次の日を迎えないと、サウムの意味はないでしょう。[2]」

第二に、ムスリムは暁から日没までサウムを妨害する次の全ての行為を止めなければならない。

● ラマダーン月の日中にわざと食べること。しかし忘れて飲んだり食べたりした場合は別で、その後にやり直す必要はない。預言者は次のように言っている。

---

[1] イブン・ヒッバーンとイブン・フザイマの伝承による。アルバーニー師はハディースを添削した。前掲『サヒーフ　アッタルギーブ　ワッタルヒーブ（奨励と警告）』Vol.1、p.420。

[2] アブー・ダーウード、ティルミズィー、ナサーイーの伝承による。アルバーニー著　前掲書『サヒーフ　アルジャーミャー』No.6、No.5、 No.3、No.8 を参照。

「忘れて食べた断食者は、サウムを完結すればよいのです。アッラーが食べさせ飲ませたのですから。[1]」

• わざと吐くこと。吐き気が強くなっただけなら、サウムをやり直す必要はない。

• 女性は日没の前に、生理や出産後の出血を確認したら、サウムは無効になる。

• 日中、自分の妻と性行為をした場合は、カッファーラ（罪滅ぼし）をしなければならない。預言者は次のように言ったと、アブー・フライラ（彼にアッラーのご満悦あれ）は伝えている。

ある男が預言者のところに来て「アッラーの使徒よ、私は破滅しました。」と言った。

預言者は「破滅したとはどういうことですか。」と聞かれた。

彼は「私はラマダーン月に妻と寝てしまったのです。」と言った。

預言者は「あなたに自由にしてやれる奴隷はありますか。」と言われた。彼は「いいえ。」と言った。

預言者は「では 2 ヵ月続けてサウムができますか」と言われた。

彼は「いいえ。」と言った。

預言者は更に「あなたは６０人の哀れな人に食事を用意できますか。」と言い、彼はまた「いいえ。」と言った。

預言者はしばらく黙っていた。そのとき預言者の前にナツメヤシの入っている籠が運ばれて来た。

預言者は彼に「これをサダカとして施しなさい。」と申された。

---

[1] ムスリムの伝承による。

すると彼は「私共より貧しい者がありますか。マディーナの２つの溶岩の間の谷に住む家族で、我々以上に何かを必要とする者はいないのです。」と言った。すると預言者は八重歯が見えるほど笑われて、
「それを持って行き、あなたの家族に食べさせなさい。」と申された。

ウサイミーン師は、「ラマダーン月の日中に入信した者は、サウムをするのですか。」という質問を受けたときにこう答えた。「イスラームに入信したのが、ラマダーン月の途中ならばそのときから食べることをやめるが、しかし前の分はラマダーン月が終わっても、やり直す必要はない。[1]」

５．ハッジ（巡礼）

ハディースに出ているイスラームの５本の柱の最後がハッジである。言語的には「アルハッジ　الحج」には、「正当性を立証する、行き先、やって来る」の意味がある。そしてアッラーに対しての尊崇、畏敬、敬愛の意味もある[2]　。シャリーア（イスラーム法）においては、特定の場所へ、特定の期間に旅をすること。つまり唯一神アッラーに仕えるために、決められた期間に聖地マッカへ赴く。

---

[1] アリー　アブー・ラウズ著　前掲書『アルアジュウィバ（「疑問とその解答」：訳者注）』p.24。
[2] E.W レーン著『アラビア語英語辞典』ケンブリッジ、イギリス、1984 年、Vol1。

ハッジはそれが可能なムスリムに義務付けられている。その根拠は、クルアーンやスンナにたくさんあるが、単なる義務というだけでなく、イスラームの５本の柱の１つである。ハッジの恩恵は実に大きい。預言者ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）は、次のように言った。

「誰でもアッラーのために、性的な快楽を求めず、下品なことをせず巡礼を果たした者は、母親が自分を産んでくれた日のようになるでしょう。[1]」

そしてまた、次のハディースもある。

「ウムラ（小巡礼[2]）とウムラの間は、その間の罪を消すことができます。アッラーに受け入れられる巡礼の報償は天国の他にはありません。[3]」

別のハディースには、こういう話がある。

ある男が預言者に聞いた。「一番良い行いとは何ですか。」

「アッラーとその使徒を信じることです。」と預言者は答えた。

男は聞いた。「まだ他にありますか。」

預言者は「ジハードです。」と答えた。男はまた聞いた。「アッラーの使徒よ。他にありますか。」

預言者は「アッラーに受け入れられるハッジです。」と答えた。[4]

---

[1] ブハーリーとムスリムの伝承による。

[2] ウムラは小巡礼と言われ、ハッジよりも少ない儀礼からなる巡礼である。そして一年中いつでも可能である。

[3] ブハーリーとムスリムの伝承による。

[4] 同上。

　別のハディースにはこう伝えられている。

「ハッジをすることは女性と年を取った人にとって、ジハードと同じくらいの恩恵があります。」

　また別のハディースがある。預言者がある人に聞かれたときの話である。

「女性にとってのジハードには何がありますか。」

預言者は「戦いのないジハードがあります。それはハッジとウムラです。」と答えた。[1]

　上に挙げた様々なハディースで言及されている恩恵の他にも別の恩恵もある。ハッジでは世界中から多くのムスリムたちが同じ場所に集う。その場に皆が同じように向い集り、お互い同士が近づき親しくなる大きな機会である。それに加えて、貧しい人も金持ちもイフラーム（縫い目のない白い２枚の布）を身に着けて同じような格好をし、同じようにアッラーの前に並び、同じ行いをする。その中で全ての人々の現世の差が少しずつ消えていく。

　シッディーキー師は、ハッジの重要性について次のような視点で述べている。「ハッジはイーマーンを完成させる柱である。なぜならば、しなければならない他の柱の特徴を併せ持っている行いだからだ。サラーも含まれており、ハッジの巡礼者はカアバで礼拝をする。自分の財産からアッラーのためにお金を出すというザカートの特徴も持っている。また巡礼者が、ハッジ

[1] アハマドとイブン・マージャの伝承をアルバーニー師は添削した。前掲書『エルワーア』Vol.4、p.151。

の旅を決めたならば、アッラーの恩恵のために自分の国、故郷や家、近しい人々から離れて、窮乏を耐え、旅の困難にも直面しなければならない。これはサウムとイアティカーフ[1]の特徴を現している。」

ハッジでは、ムスリムが物質的な欲望から解放されるための訓練の場でもある。物質的で贅沢な人生を忘れるための練習をするのである。ハッジでは岩地の上で寝ることもある[2]。ほとんどの巡礼者たちは、次のように過ごしている。カアバをタワーフ（周回）し、サファーとマルワーの丘を行き来し、そして昼間も夜も２枚の布からなるイフラームを着て過ごし、香水や香油を避け、髪や髭も切らないよう求められている。簡単にまとめると、アッラーのために全てを放棄し、アッラーの前に立ち、全てを捧げるというのは、ムスリムとして最も高貴な目的である。

ハッジの身体的な旅は、アッラーへ向かう精神的な準備でもある。人は現世の全てと別れ、「ラッバイカッラフンマ　ラッバイカ（アッラーよ、あなたの御前に参りました。「ワアナアブドゥカ」私はあなたのしもべです。）」と唱えながら、自分をアッラーの小さいしもべと見做して、謙虚な態度で臨むのである[3]。

---

[1] ムスリムがマスジドに籠り、信仰行為と思索だけを行うこと。
[2] これは義務付けられていない。
[3] シッディーキー著　前掲書、Vol.2、p.577。

ハッジは年に１回あり、可能な人だけに義務付けられている。それについて、アッラーは次のように告げている。

・・・

この家への巡礼は、そこに赴（おもむ）ける人びとに課せられたアッラーへの義務である。
背信者があっても、まことにアッラーは万有に（超越され）完全に自足されておられる方である。
【第３章　イムラーン家章〔アーリ・イムラーン〕９７節】

預言者ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）は、大天使ジブリールに尋ねたとき、「ハッジはできる人の義務である。」という答えをもらった。「できる」というのがどのような状態であるのか、学者たちの意見が分かれている。ハッジの狙いは、それ自体はただ困難なことをするという意味ではなく、重要なイバーダ（崇拝行為）であるということで、人びとはそれを実現するために、できるだけ一生懸命努力するべきである。ただ、それは可能な範囲の事である。体が健康であり、金銭的な裏付けもあり、ハッジの旅への必要な支援があることが条件である。何人かの学者は、ハッジの旅が巡礼者の命を脅かす危険性がないことも条件として書き加えている。また女性の場合は、保護してくれるマハラム（結婚の対象にならない親族）が一緒にいることも重要である。もしマハラムがいないとしても、旅の同行者として安心できる仲間（男女の集団）がい

れば、１人でも許されると言っている。このような条件が満たされなければ、ハッジはできない。このような条件が整うまで、ハッジに行くことを待たなければならない。

　またこの条件が整ったとき、すぐに行くべきか延期するべきか、学者の間では意見が分かれている。これは次の論点でもある。ハッジの延期の許可について、学者の意見が異なっている。今年にできる条件を満たしたのに将来に伸ばすことを決めた場合、その人は罪になるのかどうか、延期することが可能であるのか。条件が整えば、すぐに行くべきなのかどうなのか、といった議論である。次にあるように学派間に見解の相違いがある。

　マーリク師、アブー・ハニーファ師、イブン・ハンバル師とシャーフィイー学派の何人かの学者は条件を満たしたら、すぐに実行しなければならず、そうしない場合は、罪になるという意見である。次のハディースを根拠としている。

「もし骨折したり歩けなくなったらしなくてもいいです。また次の機会にすればいいです。」と預言者が言った[1]。

　このハディースから推測できることは、怠けてしないということではない。何も理由がないならば、預言者が次の年でも良いと言う筈はなかったであろう。別のハディースもある。

「マッカへ早めに赴きなさい。人は突然病気になるか問題に直面するか、分からないからです。」と預言者が言った[1]。

[1] アハマド、アブー・ダーウード、ナサーイーの伝承による。アルバーニー師は「正しい」と言っている。アルバーニー著　前掲書『サヒーフ　アルジャーミャー』Vol.2、p.112。

また第２代正統カリフのウマル・イブン・ハッターブ（彼にアッラーのご満悦があれ）は次のように語ったとされる。

「私は他国に使いを送った。それぞれの土地にムスリムの老女たちがいるかどうか確認させた。ある老女はハッジができる条件にあるのにまだ行なっていなかった。このような場合は、非ムスリムとみなしてジズヤ[2]を課すと使いに触れさせたいとまで、考えるくらいである。[3]」

反対の説もある。できるのに延期するのは可能であるという説の中で、最も根拠のあるものとしては、次の話が伝わっている。ハッジ自体はヒジュラ歴の６年に定められた。しかし預言者がハッジできたのは１０年のことであった。預言者とサハーバ（教友）たちには、戦いの戦利品で余裕があった。できない理由も特になかった。ある場合には遅れても仕方がないという例外的な状況を残したかったのではないかと、考えられている。

この説について、アシューカーニー師は次のように反論している。「ヒジュラ歴の６年にハッジについての正しい啓示が下されたというのも諸説あり、１０年という説もある。預言者との同時性を否定することは考えにくいと思われる。そしてヒジュラ歴６年に下されたとしても、預言者の巡礼は１０年にしか

---

[1] アハマドの伝承による。アルバーニー師は「正しい」と言っている。同前書 Vol.1、p.569。

[2] ジズヤは、イスラーム国家において、兵役を果たさない非ムスリムに対して課せられる税。

[3] サイード　イブン・マンスール　アルビヘーイキィー伝承による。ハジャル　アルヒテーミー師によれば、「正しい話である。」ハジャル　アルヒテーミー著『アルザワージル』Vol.1、p.198。

できなかったのであろう。ハッジの前に巡礼者が訪れるカアバを、汚れのある不信仰の者から浄化しなければならなかったからである。カアバの周囲を清めて、改めて神聖な場とする必要があったため、預言者のハッジが遅れてしまい、延期せざる得なかったとも考えられる。ここは預言者のハッジの時期を云々する場ではない。一般的に考えて、ハッジができるのに延期できるかどうかという問題である[1]。

ハッジの必要性を否定する者は不信仰者である。条件を満たしているけれど、死の目前までハッジを遅らせる者は罪を犯している者である。アッラーの怒りと懲罰を受けるように自分でしているからである。

ハッジの中には、定められた儀礼がいろいろとある。巡礼者は世界中からやって来る。特別な装いをし[2]、日によって決まった行いをする。例えば、ヒジュラ暦１２月のズー・アル＝ヒッジャの９日目にはアラファの地に立ち、アッラーに祈りを捧げ、赦しを求め願い事をする。

今日ではアッラーのお恵みで、世界中にハッジの旅を企画する幾多の組織ができている。中には新ムスリムを対象とした特

[1] ムハンマド　アリー　アシューカーニー著『ニール　アルアゥタール（訳者注：日本語訳ははっきりとした意味が不明）』Vol.4 、ダール　アルザムザム出版、リヤド、サウジアラビア、1993 年、pp.337～338。ウサイミーン師によれば、ハッジはヒジュラ歴７年に課せられたというが、預言者のいるマディーナに多くの使節団が来ていたため、彼自身のハッジが遅れた。イブン・ウサイミーン著『アッシャルフ　アルムムティウ（「喜ばれる説明」：訳者注）』Vol.7、ムアッササトゥイサーム出版、リヤド、サウジアラビア、1996 年、pp.17～18。

[2] （男性は、イフラーム〔縫い目のない白い二枚の布〕だけを身につける。：訳者注）

別な組織もある。筆者は多くの新ムスリムたちが、指導力のあるムスリムの学者たちと一緒にハッジできることを願っている。

第６章の終わりに

本書以外にもイスラームに関する著作は数多くあり、アラビア語話者以外のための英語の著作もたくさん出版されている。

次の文献を、筆者は勧めている。

●アブドゥルアルアズィーム　イブン・バダウィー著『タクディーム　ムージャズ　リフィクヒィ　アッスンナ　ワ　アルキターブル　カリーム（「聖クルアーンとスンナの紹介」：訳者注）』ダール　アンナシュル　アルイスラーミー　アルアーラミー出版、リヤド、サウジアラビア。

この本はイスラームの全分野にわたり、良くまとまっており、また簡潔な説明がされている。

●アブー・バクル　アルジャザーイリー著『ミンハージュ　アルムスリム（「ムスリムの道」：訳者注）』ダールッサラーム出版、リヤド、サウジアラビア。

２冊組のこの本は、イスラームのシャリーアの基本をほぼ全てにわたって取り扱っている。

●アッサイイド　サービク著『フィクヒ　スンナ（「スンナの注釈書」：訳者注）　』５冊組（出版社等の記述なし[1]）

新ムスリムにとっての詳しい注釈書であり、前々から大切な文献になっている。

この他にも宗教のイバーダに関する著作がある。

●アルバーニー著『シファートゥ　アッサラート　アンナビー「預言者の礼拝の性質」：訳者注）』

英語版は『Prophet’s prayer』で、礼拝の詳しい説明をしている。

また、次の有名な２冊の著作がある。

●Mamdouth Muhammad 著『Haji from A to Z』

●Mamdouth Muhammad 著『The salat from A to Z』

[1] （アラビア語の原本はダール　アットラース　アルアラビー出版、カイロ、エジプト、H.1360 年（1941 年位）である。：訳者注）

第７章　信者の倫理と社会的な相互作用

—イスラームにおける良いマナーと道徳の重要性—

アッラーは雌牛章で次のように告げている。

あなたがた信仰する者よ、心を込めてイスラーム（平安の境）に入れ。

・・・・

【第２章　雌牛章［アル・バカラ］　２０８節】

これまで述べてきたように、イスラームは総合的な宗教であり、人生の全ての局面に係わる物事を扱っている。なぜならば、ムスリムのそれぞれの人生はアッラーに仕えるという信念の中にあって、それ以外の行為はないと考えるからである。人生の様々な出来事が、宗教的信念の外にあってはならないのである。そのために、イスラームではイーマーン（信仰）を表すためのイバーダ（崇拝行為）だけでなく、もっと多くのことを人生に望んでいる。全てのムスリムが信じている「ラー　イラーハ　イッラッラー（アッラーの他に崇拝すべきものはない）」の信条を行動、習慣、道徳、マナーなどの社会生活の全般にわたって、反映しなければならないのである。人間がアッラーを信じて仕えるのであれば、他の人に害を与えたり、人を騙したりすることは考えられないことで、こういった行動をする人は、その信仰が偽物か、信仰自体が病んでいるようなものである。

新しく入信した人の場合、イスラームの総合性とはその人が誠実で完全なムスリムになるために自分のいろいろな習慣を変えていく必要があるということかもしれない。またもし彼らに、イスラームに入信する前の道徳的な問題があったとしたら、それを改善しなければならないということが総合性という意味でもある。その人には、自分の生き方を変更するしか選択肢はないであろう。なぜならば、この入信したばかりの段階では、信仰の基礎を作ろうとするときだからである。イーマーンが正しいならば、その教えを受け入れる用意があるという意味であり、全ての人生の必要とされる局面について実践的な努力をしなければならないからである。

新ムスリムのイスラームへの理解が深まれば深まるほど、自動的にその人の振る舞いや行動も変わってくる。なぜかといえば、新しい視点で人生を見るようになり、現実に対して正しい理解もできるからである。筆者は、入信したばかりの人がどのように劇的に変わっていくかの具体例をたくさん見ている。例えば、スポーツ大会に参加したのが非ムスリムであれば、風が自分の思い通りに吹かない場合や、戦っているライバルが特別に優遇をされたりすると、非常に怒りを感じるのが普通である。この怒りは、その人がスポーツを重要視していることの反映でもある。しかしイスラームに入信した人は、行動に根本的な変革を見せる。突然、スポーツは単なる楽しみの１つとなり、娯楽の１つとなる。長期的な視点に立てば、新ムスリムにとって、スポーツの価値は人間の精神的な価値より低いと感じられるよ

うになるからである。自動的にすぐにそういう心境になる場合もあるが、自分の視点が少しずつ変わっていくというときもある。物事への対応の仕方に変化がおきてくると、他の人をよく理解することの助けにもなる。生活する上での、そういった実際の変化が大切なことなのである。

預言者ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）の明確なハディースによれば、

「私は、良い道徳を完成させるために遣わされたのです。[1]」

とある。預言者が遣わされたのは人々に徳を広めるためであったと述べられていることが重要な点である。これは道徳や人の振る舞いもまたイスラームの教えに含まれるという明らかな根拠となる。この事実から目を背けず、道徳という名のコンパスを一層正しい方向に向けるべきである。それに関連する多くのハディースがある。全ては人が道徳を身につけることの重要性を示している。ここに焦点を当てるため、その中のハディースを紹介しよう。

「私は、良い道徳を持って生きてきた人のための天国の家での家長です。[2]」

このハディースで、人は良い徳やマナーを身につけたとしたら、大きな恩恵を授けられると約束されている。ある人々は、自分

---

[1] ハーキムの伝承による。アルバーニー師は「正しいハディースである。」と言っている。アルバーニー著　前掲書『サヒーフ　アルジャーミャー』ハディースNo.2349。

[2] アブー・ダーウードの伝承による。アルバーニー師は「良いハディース」と言っている。アルバーニー著　同上、ハディース No.1464。

の道徳の有り様は生まれつきのもので、それを変更することはできないと考えている。端的に言えば、これは正しくない。前述したように、人間の徳に関する原動力は、人間がアッラーや現世と来世についてどう信じているのかということと結びつきが強い。預言者もこう言ったといわれている。

「タクワー（篤信）とは、良い道徳です。[1]」

タクワーを身に着けるためには、日常でより多くの小さな努力をしなければならない。例えば、偽信者とは嘘をつく人であり、間違った信仰の者であるということである。預言者は彼らの振る舞いをマナーの視点から説明している。例えば、話の中で嘘をつく、お金を預けられたら裏切る、秘密にすべき話なのに他の人に漏らしてしまうといったこともマナーに反している。[2]

今一度、ムスリムの理想的な模範は預言者その人であり、その人柄であることを確認しよう。アッラーの慈悲で、預言者は遣わされたのである。預言者ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）自身は夫であり、親でもある一人の人間であったが、選ばれてアッラーから遣わされたのである。彼は社会の一員でもあった。そしてまた指導者でもあった。彼は人々にアッラーに受け入れられるにはどのようにすべきかを教え、多くの人々の模範であった。[3]

---

[1] ムスリムの伝承による。

[2] ブハーリーの伝承の中で、ブハーリー師自身がその意味を説明している。

[3] 筆者は別の所で書いている。「これを多くの人が軽視している。スンナに従うことについては、多くの意見がある。しかし、スンナはただムスリムが行なっているサラーの数や、月に何回サウムするとか、丈の短いトーブを着ることなどにつ

日常生活でどのようにクルアーンの教えを実践するのかということについては、預言者の妻であるアーイシャ（彼女にアッラーのご満悦あれ）が預言者について、こう言ったという話が伝わっている。

「彼の道徳は、クルアーンです。[1]」

預言者ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）は正直で誠実で、正しい道を常に歩んでいた。謙遜の心を持ち、辛抱強く、穏やかで落ち着いており、寛容な人であった。彼は嘘をついたり、悪口を言ったり、他人についてありもしない虚言を言ったりはしなかった。いつも幸せな気持ちで振る舞っており、社会の全ての階層の人に公正な態度で接していた。常に真の信者としての行いであった。

イスラームの視点から見れば、道徳やマナーは人の生活を全て覆うべきものである。人間は良い道徳を身につけ、創造主に対して良い行為をし、自分自身にも、周りの人々にも、周りの生き物にも、そのように振る舞うことが重要である。このことについて、この章で詳しく触れたいと思う。

この項目の中で最も重要なことは、創造主であるアッラーを心から敬う気持ちを持って行動することである。それによって、他のことにも良い影響が及んでいくからである。良い道徳と共

いての決まりではない。スンナというのは、もっと深い意味がある。預言者は、前述したように道徳を完成するために遣わされたので、良い道徳の部分は、非常に大切なメッセージであり、模範にすべき重要なスンナである。」この私の意見については、前掲書『シャルフ　アルアルバイーン　アンナワウィーヤ（「核になるハディースの４０の説明」：訳者注）』を参照のこと。

[1] ムスリムの伝承による。

にアッラーと良い関係を築き、アッラーに正しく純粋に帰依することが重要である。この側面については、本書でも既に触れてきた。

上記のこと以外の項目では、大地の生き物に対しても良いマナーで接することも大切であると言われている。この世の中の生き物や物に対しても、勝手な振る舞いをするべきではなく、人間にはそういう自由勝手な権利などはないのである。生き物や物に対しても、アッラーとの約束の責任を負わなければならないのである。この宇宙全てのものは、アッラーからの預かりものであるからだ。例えば、動物に対して、正しい扱い方を教えるハディースがたくさんある。人間が食べるために家畜を殺す場合にも、屠るマナーがある。預言者は次のように言ったといわれる。

「アッラーは、全てのものに対して気遣いをするように命じています。殺すならば、それをきちんと殺しなさい。屠るならば、きちんと屠りなさい。刃物は切れ味を鋭くして、屠られるものを楽にしてやりなさい。[1]」

こういった事項は、初期のムスリムの頭から離れたことはない。イブン・アイヤード師も次のように言っている。「おおアッラーよ、あなたに誓って、理由なく犬や豚にも害を与えてはいけない。人間やムスリムに対しては尚更である。[2]」

---

[1] ムスリムの伝承による。

[2] これは次に記述されている。ムハンマド　ザハビー著『スィヤル　アアラーム　アンヌバラー（「有名な高貴な人の伝記」：訳者注）』Vol.8、ムアッササトゥ出版、ベイルート、レバノン、1990 年、p.427。

さて、この章では人間のマナーや道徳の重要性について、次の項に沿って話を進めることにする。[1]

１．自分自身に対して

２．両親に対して

３．非ムスリムの親族に対して

４．配偶者に対して

（１）結婚してもよい人とは

（２）夫と妻の義務と権利

（３）離婚について

５．子供に対して

６．隣人に対して

７．他のムスリムに対して

８．非ムスリムに対して

９．社会全体に対して

10．財産に関して

11．商取引に関して

（１）バイウ・アル＝ガラル（リスクの高い商取引）の禁止

（２）リバー（利息）の禁止

（３）詐欺行為の禁止

（４）ハラームな事柄による収入の禁止[2]

第７章の終わりに

---

[1] （本書には段落で区切られた一連の文章であるが、日本語版のために番号をふり、内容に合わせ段落ごとに見出しをつけた。：訳者注）

[2] （本書には番号は振られていないが、分かりやすくするために（１）から（４）までの番号をつけて述べることにする。：訳者注）

１．自分自身に対して

預言者ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）は、人間は自分自身の体に対してもそれなりの権利があると明言している[1]。人間には自分に対して重要な責任があることは十分考えられることである。破滅から自分自身を守るために、自分に対しても善いことをしなければならない。その上で、自分というものは自分が創造したのではなく、自分の主でもないということも全て認識しなければならない。近頃では、自分自身を粗末に扱う人の話を聞いたりするが、それは慎まなければならないことである。全知全能で慈悲深いアッラーによって、人間は創られたとイスラームは教える。人間は自分のことであっても創造主であるアッラーに従わなければならないのである。そして、アッラーは人間は自分自身に対しても善いことを成すべきだと命じている。

創造主であるアッラーは、人間は自分で自分を救う道を開くことが可能であると教えている。アッラーが下されたことを受け入れ、命じられたことを実行し、なおかつ自分がした全てをアッラーに受け入れて頂くことで、それは実現するのである。アッラーが与えるヒダーヤ（導き）は、人間のために下されたイスラームの教えである。しもべたちのイバーダが、アッラー

[1] サルマーン（彼にアッラーのご満悦あれ）の長いハディースに記述されている。ブハーリー、ティルミズィーの伝承の記録に残っている。

にとって利益になることはない。反対に、アッラーのことを否定することによって、アッラーが害されることもない。クルアーンの中では、人間自身のためにこそ下されたのだと、明示されている。そのうちの１つが次の節である。

われは人びとのため、真理によってあなたに聖典をくだした。それでも誰でも、導きを受ける者は、自分を益し、また誰でも迷うものは、自分を損なうだけである。
あなたはかれらの後見人ではない。
【第３９章　集団章［アッ・ズマル］４１節】

同じことを他の節で確認してみよう。

誰でも導かれる者は、只自分の魂を益するために導かれ、また誰でも迷う者は、只自分を損うために迷う。
重荷を負う者は、他人の重荷を負うことは出来ない。
われは（警告のため）一人の使徒を遣わさない限り決して懲罰を下さない。
【第１７章　夜の旅章［アル・イスラーゥ］１５節】

また、別の章では次のように告げている。

・・・

その身（み）を清（きよ）める者は、唯（ただ）自分の魂のために清（きよ）める。

・・・

【第３５章　創造者章［ファーティル］１８節】

もっと詳しく知りたいならば、クルアーンの【第６章　家畜章［アル・アンアーム］１０４節】と【第４１章　フッスィラ章　４６節】を紐解いて欲しい[1]。

本書は新ムスリムに向けて書かれたものであり、新ムスリムが自分自身のためにやるべきことをし、アッラーとの正しい関係を作れるようになることを目的としている。この章では、その一側面から説明していると考えてほしい。ここではムスリムの人生におけるヒダーヤ（導き）の重要性について述べていく。

アブドゥッラー・ビン・アムル（彼にアッラーのご満悦あれ）に、預言者は次のように言った。

「あなたの体はあなたに義務があり、あなたの目はあなたに義務があります。[2]」

---

[1]（本文にはないがより分かり易くするために、クルアーンを引用する。：訳者注）
本当に明証が、あなたの主から下ったのである。だから目を開く者は自分の魂を益し、目を閉ざす者は自分の魂を傷（きず）つける、**われ**はあなたがたが行（おこな）っていることの見張り人ではない。
【第６章　家畜章［アル・アンアーム］１０４節】
善行をなす者は自分を益し、悪行をなす者は自分を損（そこ）なう。
あなたがたの主は、そのしもべを不正に取り扱われない。
【第４１章　フッスィラ章　４６節】

[2] ブハーリーの伝承による。

預言者はタハーラ（清浄）や、人間の生まれついた本性に一致する行動も示している。言い換えれば、善い行為は人間の自然な心身に通じるものである。預言者は本性に一致するような行動、つまり生まれてからの行動について述べている。

「まず初めに割礼[1]。用を足したらその部分を清潔にしなさい。脇の毛も剃りなさい。口髭も剃りなさい。爪の汚れを取り除きなさい。[2]」

ムスアブ（彼にアッラーのご満悦あれ）によれば、別のハディースがあり、上の５つの行為と重なるところもあるが、１０個の内容になる次のハディースである。

「口髭を剃りなさい。顎髭は伸ばしなさい。スィワーク[3]を使いなさい。鼻に水を入れて洗いなさい。爪を切りなさい。指を関節まで洗いなさい。脇の毛を剃りなさい。陰部の毛を剃りなさい。用を足したらその部分を洗いなさい。」

ザカリヤ師は、ムスアブ（彼にアッラーのご満悦あれ）は１０番目を忘れたが、口をすすぐことではないかと付け加えている。[4]

こういったハディースの説に対して、多くのムスリムの中には異論もあるかもしれないが、要するに体の内と外を清潔に保ち、健康を守るよう勧めているのである。

---

[1] （生まれてすぐの割礼の話と受け取れる。一般的に男児の話である。：訳者注）
[2] ブハーリーとムスリムの伝承による。
[3] （スィワークは、木の枝でできた歯ブラシのようなもの。ここでは口の中を清潔に保つという意味がある。：訳者注）
[4] ムスリムの伝承による。

身体を清潔に保つことに加えて、食べ物や飲み物に対しての決まりもある。例えば、アッラーは次のクルアーンにあるように、アルコールに関しては禁止している。

あなたがた信仰する者よ、誠に酒と賭矢（かけや）、
偶像と占い矢は、忌（い）み嫌われる悪魔の業（わざ）である。
これを避けなさい。恐らくあなたがたは成功するであろう。
【第５章　食卓章［アル・マーイダ］９０節】

預言者も次のように言っている。
「人を酔わせるものは、ハラームです。[1]」

アッラーは食べてはいけないもの、また食べても良いものを告げている[2]。

かれがあなたがたに、（食べることを）禁じられるものは、
死肉、血、豚肉、
およびアッラー以外（の名）で供えられたものである。
だが故意に違反せず、また法（のり）を超えず必要に迫られた場合は罪にはならない。
【第２章　雌牛章［アル・バカラ］１７３節】

[1] ブハーリーとムスリムの伝承による。
[2] （「人間が食べても良いものを明らかにしている。」と筆者は書いている。：訳者注）

また別の章には、次にあげる節がある。

あなたがたに禁じられたものは、死肉、（流れる）血、豚肉、アッラー以外の名を唱え（殺され）たもの、絞め殺されたもの、打ち殺されたもの、墜死したもの、角で突き殺されたもの、野獣が食い残したもの、（ただしこの種のものでも）あなたがその止めを刺したものは別である。

また石段に生贄（いけにえ）とされたもの、籤（くじ）で分配されたものである。

これらは忌まわしいものである。今日、不信心な者たちはあなたがたの教え（を打破すること）を断念した。

・・・[1]

【第５章　食卓章［アル・マーイダ］３節】

言ってやるがいい。「わたしに啓示されたものには、食べ度（た）いのに食べることを禁じられたものはない。

只（ただ）死肉、流れ出る血、豚肉――それは不浄である――

とアッラー以外の名が唱えられたものは除かれる。

【第６章　家畜章［アル・アンアーム］１４５節】

ムスリムは他のムスリムやユダヤ教徒、キリスト教徒が屠った肉を食べてもよい。それから、宗教上の決まりに従って処理

[1] （・・・の最後には、次の句がある。：訳者注）
しかし罪を犯す意図なく、飢えに迫られた者には、
本当にアッラーは寛容にして慈悲深くあられる。

された物も食べても良いとされる。私は、西欧の市場で売られている肉は食べないほうが無難であると勧めたい（筆者はこれについて深入りしないが）。ムスリムによるハラールという種類の肉、もしくはキリスト教徒やユダヤ教徒が屠った肉を食べた方がよいであろう。

２．両親に対して

できる限りの最善の礼節で両親に接することを、アッラーはムスリムに命じている。アッラーに対しての感謝と共に、恩を受けた人に対する感謝の気持ちを持つのは当然のことである。アッラーへの感謝の後に続いて来るのが、両親への感謝である。クルアーンでも、両親への接し方について多く教えている。アッラーに正しく仕えることと、両親に対して良い振る舞いをすることが同じ文脈で述べられている説が多い。例えば次の節である。

アッラーに仕えなさい。何ものをも*かれ*に併置してはならない。
父母に親切を尽くし、また近親や孤児、
貧者や隣人や遠い縁者、
道連れの仲間や旅行者、
およびあなたの右手が所有する者（に親切であれ）。

アッラーは高慢な者、うぬぼれる者を御好(お)になられない。

【第４章　婦人章［アン・ニサーア］３６節】

　ここでは、アッラーのしもべである信者がしなければならないこと、そのお互いの関係について述べてみよう。人が多く接する機会を持つのは、次の人々である。

①　血縁関係にある人々、特に両親は最も身近である。

②　弱い人や困っている人

③　日常的に接する人、例えば近所の人

④　一時的に、また予期せずに知り合う人、例えば旅人

⑤　奴隷とそのような目下の立場の人々。（ここに飼っている家畜を含める学者もいる[1]。）

　クルアーンでは次のように告げている。

言ってやるがいい。「さて、わたしは主があなたがたに対し禁じられたことを、読誦しよう。

かれに何ものでも同位者を配してはならない。

両親に孝行であれ。

・・・

【第６章　家畜章［アル・アンアーム］１５１節】

[1] イブン・ラジャブ著『アルジャーミャー』Vol.1、pp.346～348。

　あなたの主は命じられる。**かれ**の外何者（ほかなにもの）をも崇拝してはならない。また両親に孝行しなさい。
もし両親かまたそのどちらかが、あなたと一緒にいて、
老齢（れい）に達しても、かれらに「ちぇっ」とか荒い言葉を使わず、
親切な言葉で話しなさい。
【第１７章　夜の旅章［アル・イスラーゥ］２３節】
　そして敬愛の情（じょう）を込め、両親に対し謙虚に翼を低く垂（た）れ
（優しくし）て、
「主よ、幼少の頃、わたしを愛育してくれたように、
２人の上に御（ご）慈悲を御（お）授け下さい。」と（祈りを）言うがいい。
【同章　２４節】
　主はあなたがたの心に抱くことを熟知なされる。
もしあなたがたが正しい行いをするならば、**かれ**は悔悟して
度々（たび）（主に）返る者に対し、本当に寛容である。
【同章　２５節】

　また別の節では次のように両親について書いている。

　われがイスラエルの子孫と、約束を結んだ時のことを思い起こせ。（その時われはいった。）
「あなたがたはアッラーの外（ほか）に、何ものも崇（あが）めてはならない。
父母に孝養（こうよう）をつくし、近親、孤児、品者を親切に扱い、

人びとに善い言葉ではなし、礼拝の務めを守り、定めの喜捨をしなさい。」

だが、あなたがたの中（うち）少数の者を除き、背き去った。

【第２章　雌牛章［アル・バカラ］８３節】

　預言者もまた両親に対する善い接し方について述べており、アッラーに好まれる行いの順番として、サラーの次に両親への態度を重視しなさいと説いている。それは次のハディースでも分かる通りである。

「最も良い行動は、何でしょうか。」とある人が預言者ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）に尋ねた。預言者はこう答えた。

「時間通りのサラーです。」

「次は何ですか」とその人は聞いた。

「親孝行をすることです。」と答え、

「その次は、ジハードです。」と答えた。[1]

　アッラーは信者たちに両親への恩をいつも思い起こさせている。子育てに苦労した母親に対しては、特に孝行しなさいと告げている。両親への愛情、敬愛、感謝をおいて他に、同等のものはないのである。前にも掲載したが、アッラーは次のように告げている。

[1] ブハーリーとムスリムの伝承による。

さてルクマーンが、自分の息子を戒めてこう言った時を思い起こしなさい。「息子よ、アッラーに（他の神を）同等に配してはならない。それを配するのは、大変な不義である。」

【第３１章　ルクマーン章　１３節】

われは両親への態度を人間に指示した。

人間の母親は、苦労に窶れてその（子）を胎内で養い、更に離乳まで２年かかる。

「**われ**とあなたの父母に感謝しなさい。**われ**に（最後の）帰り所はあるのである。

【同章　１４節】

母親への感謝には限りがないと、【第４６章　砂丘章［アル・アハカーフ］１５節】でも、次のように告げられている。

われは、両親に対し優しくするよう人間に命じた。

母は懐胎に苦しみ、その分娩に苦しむ。

懐胎してから離乳させるまで３０ヶ月かかる。

それからかれらが十分な力をそなえる年配に達し、

それから４０歳にもなると、「主よ、私と両親に対して、あなたが御恵み下された恩恵に感謝させて下さい。

またあなたの御喜びにあずかるよう、わたしが、善行に勤しむようにして下さい。また子孫も幸福にして下さい。

私は悔悟してあなたの御許に帰ります。本当にわたしは、服従、帰依する者です。」と言うようになる。

　特に母親は子供にとって最も親愛の情を抱く存在である。ハディースでは次のように言われている。

ある男が預言者に聞いた。

「私が最も良く親愛の情を表さなければならない人は誰ですか。」

「あなたの母親です。」と預言者は答えた。その後、また男は聞いた。

「次は誰ですか。」

「あなたの母親です。」そして、また聞いた。次の答えも母親だった。男がまた次の人は誰かと聞くと、

「それは父親です。」と答えた。[1]

３．非ムスリムの親族に対して

　新ムスリムと非ムスリムの同じ家族との関係については、入信したことで難しくなることもありうる。多くの場合は、入信に反対する意見がもたらされる。これは入信したばかりの人にとって、大きな試練となる。なぜなら彼らは、今までの恩義が

---

[1] ムスリムの伝承による。（これはよく知られた有名なハディースである。：訳者注）

あるその人々に対して、親しみと親愛の情をまだ持ち続けているからである。そのときに参考にすべきは、イスラームの初期の時代に入信したマッカの人々の先例である。初期の彼らの状況と、今の新ムスリムの状況がよく似ているからである。当時は大きな反対だけでなく、ひどい拷問も受け、自分の信条を守るために仕方なく移住しなければならなかった彼らは、辛抱強く耐えてアッラーの恩恵を授かる道を選んだ。他の人との関係よりもアッラーとの関係を優先すべきだと考えたからである。審判の日には各人が自分一人で臨み、自分の意志や行った行動に対して、自分自身だけが責任を負うのである。何人かの家族や親戚が心理的に宗教イスラームを嫌っているからイスラームを諦めるというのは言い訳にはならない。またアッラーに対する信仰に関しては、譲歩したり放棄したりしてはならない。アッラーが受け入れてくださるのであれば、イスラームの初期の時代に拷問されて自分の土地から追放された人々は、別の選択をしたであろう。そのようなひどい仕打ちにあった人々にとっても、アッラーへの信仰を諦めるという選択肢はなかったのである。どのような理由であれ、自分勝手な解釈が許されれば宗教はだめになってしまい、また真理を否定する人も出てくるであろう。

現代の新ムスリムの実情のほとんどは、上記のような初期の頃の困難な状況にはないだろう。イスラームに入信することに対しては、常に周りからいろいろな反響がある。その中には多くはないかもしれないが、新ムスリムの選択を尊重する人もい

る。新ムスリムの周りの人々がはっきりと反対しない状況においても、新たに入信した者は彼らとの関係のあり方を常に考えていかなければならない。

　血縁者に対しては、新ムスリムになっても同じように義務がある。ブハーリーとムスリムの伝承による次のハディースがある。

アスマー・ビント・アビー・バクル（彼女にアッラーのご満悦あれ）は、預言者のところへやって来て尋ねた。
「私の母親は多神教徒ですが、マッカから我が家にやってきました。母とのよい関係を続けることはできるでしょうか。」預言者は、
「母親との絆は大切で、親孝行をしっかりとしなさい。」と答えた。

　またクルアーンには次のような節がある。

　アッラーは、宗教上のことであなたがたに戦いを仕掛けたり、またあなたがたを家から追放しなかった者たちに親切を尽くし、公正に待遇することを禁じられない。

本当にアッラーは公正な者を御(お)好みになられる。

【第６０章　諮問される女章［アル・ムンタヒナ］８節】[1]

---

[1] アルアダウィー師は、次のクルアーンの節から、多くの人が親族との関係を考えていると述べている。
　あなたは、アッラーと終末の日を信じる民が、
アッラーと使徒に反抗するような者と親交を結ぶところを見ないであろう。仮令かれらがかれらの父や、子、兄弟や親族であっても。

アッラーは特に両親に対して次のような節を用意している。

だがもし、あなたの知らない者を、われに（同等に）配することを、かれら（両親）があなたに強いても、かれらに従ってはならない。

・・・
かれはこれらの者の心の中に信仰を書き留められ、親しく精霊によって強められる。
【第５８章　抗弁する女章［アル・ムジャーダラ］２２節】
信仰するものよ、もしあなたがたの父または兄弟が、信仰よりも不信仰を好むならば、彼らを親しい友としてはならない。
もしあなたがたの中、かれらを親しい友とする者があれば、それらは不義の徒である。
【第９章　悔悟章［アッ・タウバ］２３節】
アルアダウィー師は、５つの言葉の意味を区別している。「ビッル（孝行）、スィラ（人との絆を守ること）、イフサーン（他の人に対しての善い行い）、タハッブブ（愛情）、タワッドゥド（敬愛）である。先の３つは推奨できる。自然な愛情は、宗教上の愛と純粋とは異なる。例えばムスリムの夫はキリスト教の妻を非常に愛していても、同時に彼女の教義を嫌うこともある。彼女に対しての愛情は、善い接し方で行われる。良い生活を与え、彼女の洋服にも必要なだけお金を払う。一方、彼女の宗教に対しては、同じ愛情は持てない。そうなると、彼女に対してのイフサーンと、彼女の宗教に対しての嫌な気持ちとは矛盾する。言い換えれば、ムスリムによる同じムスリムの人々に対しての思いも、アッラーへの敬愛は同じであるが、罪や間違いを犯せばそのせいで嫌う場合もあるということである。」
一方、シャーフィー師の説はこうである。「人との交際はイフサーンや、正義、良い言葉などでその関係を守ることであり、上記の注のクルアーンの節に出てきた禁じられていることの目的ではない。」
イブン・ハジャル師によれば、次の通りである。「親孝行やイフサーンで現れる良いマナーは父や子、兄弟と親交を結ばないという意味ではない。２２節は全体として、戦争をしている状況下にある人とそうではない人への節であったからである。一般的な状況下と、戦時下の状況とは異なるのが普通である。」
もっと詳しく読むためには、ムスタファ　アルアダウィー著の次の冊子を参照のこと。『フィクフ　アッタアームル　マア　アルワーリダイン（「両親に接する方法」：訳者注）』ダール　バランスィア出版、リヤド、サウジアラビア、2002 年、pp.61～64。

だが現世では懇切（こんせつ）にかれらに仕え、悔悟してわれの許（もと）に帰る者に従え。やがてあなたがたはわれに帰り、われはあなたがたの行（おこな）ったことを告げ知らせるのである。」

【第３１章　ルクマーン章　１５節】

　上の議論は、人が自分の信仰を守るためには当然で自然なことだろう。両親が宗教のことで圧力をかけた場合、どうしても縁を切らねばならないとしたならば、息子や娘からも両親との関係を切る権利もあるが、仮にもしそうするにしても、彼らの名誉を守り、潔く決別しなければならないだろう。ムスリムは、誰に対しても感謝の気持ちを持たなければならないからである。

　預言者ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）も次のように言っている。

「人々に感謝しない人が、アッラーに感謝できるはずがないのです。[1]」

　つまり、両親に対しても彼の両親が彼に対してずっとしてくれたように、自然に湧いてくる感謝の気持ちを持って、愛情深く接するのである。新ムスリムは、両親の宗教行為に対して未練を持つことはないだろう（それはできないことでもある）。これは宗教上の視点から考えると、誰の息子であろうとも新ムスリムは、預言者の導きに背くようなことはしないのである。

---

[1] アハマドとティルミズィーの伝承による。

両親の宗教であっても同意せず、いい加減に追随しないことである。両親への自然な愛情は持ち続けながらも、宗教的な事柄に関しては譲歩せず、もし彼らと対立があった場合は、宗教を優先することが肝要なのである。アッラーは、これについて次のように告げている。

信仰する者よ、もしあなたがたの父[1]または兄弟が、信仰より不信心を好むならば、かれらを親しい友としてはならない。
もしあなたがたの中（うち）、かれらを親しい友とする者があれば、それは不義の徒である。
【第９章　悔悟章［アッ・タウバ］２３節】

言ってやるがいい。「あなたがたの父、子、兄弟、あなたがたの妻、近親、あなたがたの手に入れた財産、
あなたがたが不景気になるのを恐れる商売、意にかなった住まいが、
アッラーと使徒とかれの道のために奮闘努力するよりもあなたがたにとり好ましいならば、
アッラーが命令を下されるまで待て。
アッラーは掟に背いた民を導かれない。」
【同９章　２４節】

クルアーンの上記にあるように[1]、ムスリムは他のまやかしの宗教的信条に同調してはいけない。アッラーは彼を真理の道へ

[1] （ここでは父であるが、両親という解釈が一般的である。：訳者注）

と導いたのである。むしろ自分の親族が真理の宗教に入信することを願うべきである。親族の皆と良い関係を持ちつつも、自分の考えをしっかりと保持し、まやかしの宗教に同意しないことをはっきりと表明した方がいいであろう。例えば、ムスリムはクリスマスを祝ってはいけないであろう[2]。なぜならば、この祭りはアッラーの息子と位置づけられた預言者イーサー（彼にアッラーからの平安あれ）の誕生に基づいているからである。これはムスリムが信じているタウヒードに違反するものである。その意味でムスリムは、この宗教的行事に参加すべきではないということである。グリーティングカードを贈ったり、プレゼントを交換したりなどということも慎んだ方がよい。祝っている人々を尊重しつつ、自分は自らの宗教の教義に矛盾するので参加しないと、自分自身の立場をはっきりさせることが大切である。自分の信仰を毅然とした態度で穏やかに説明することで、周りの人々が彼の考えを尊重してくれるようにもなり、彼の決意も受け容れてもらえるようになる。

---

[1] 今日、非ムスリムの多くは、イスラームについては知らない。イスラームについての知識は誤解が多い。新ムスリムは、時間をかけて彼らに真実を説明しなければならない。

[2] 非ムスリムのある人々は、自分の宗教に関しての威厳を持っていない。彼らは、自分の教義の根本を崩すような行事に参加してもよいと考えている。例えば、西洋のキリスト教徒は、インドを訪問した際にヒンドゥー教の神々に祈るのに抵抗感がない。旅の思い出の一つとして、ヒンドゥー教の神々に願い事をするのも躊躇しない。彼らには、自分の宗教に対して明瞭なムスリムが、クリスマスの行事に参加したくないという立場や信条が分からないであろう。これは自分自身の宗教に対して、どこまで真摯であるのかということと関連する。ムスリムは、他の宗教に属している人が反対したとしても、自分の宗教に対して真摯に向き合うべきである。要するに、ムスリムは不信仰に相当することや、イスラーム法に違反するような行事に参加することは避けなくてはいけないだろう。

非ムスリムの自分の親族と良い関係を保つために、ムスリムはまず彼らを訪問することである。この訪問の目的として、イスラームに対して彼らの理解を得ることが大切である。イスラームについての良い理解につながるのであれば、訪問することは全く問題ないであろう。預言者のハディースにも次のような話がある。

預言者ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）は、彼の伯父アブー・ターリブが多神教徒であったが、彼が病床にあるときには訪問し見舞った[1]。また、ユダヤ教徒の青年が死の床にあったときも、彼を訪問してお見舞いの言葉を述べたと言われている[2]。

また預言者は、非ムスリムからの食事の招待にも応じていた。アブドゥッラー・　イブン・ウバイが亡くなる直前にも見舞いに訪れた。彼が偽信者たちの指導者でもあり、預言者に対するしつこい敵であったにも関わらずである[3]。

ムスリムが参加できる行事には制限がある。新ムスリムが直面する問題としては、同じ家族の葬儀や追悼式などがある。初期のムスリムの歴史を振り返れば、彼らは家族へのお悔やみの気持ちから葬儀にも出席していた。儀礼が伴う場合は、なるべ

[1] ブハーリーとムスリムの伝承による。
[2] ブハーリーの伝承による。
[3] アブー・ダーウード、ハーキム、その他の伝承による。次の本を参照のこと。イブン・アルカイイム著『アハカーム　アハル　アッズィンマ（「啓典を受けた人の決まり：訳者注）」』Vol.1、pp.430～431。

く遠ざかった。信仰と矛盾する行事については、そこから離れるのが良い。

預言者の伯父アブー・ターリブは多神教徒であったが、彼が亡くなり埋葬されるとき、アブー・ターリブの息子であるアリー（彼にアッラーのご満悦あれ）はムスリムだったが、預言者は彼に父親を埋葬するよう命じた。息子である彼はそれに従った。[1]

また教友のイブン・アッバース（彼にアッラーのご満悦あれ）によると、預言者ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）は次のハディースを残している。

「キリスト教徒を父親に持つムスリムの息子は、彼の父親が亡くなったらどうすべきですかと、ある人に聞かれたときに、『しっかりと埋葬するように。』と預言者は答えた。」[2]

非ムスリムの葬式に行った場合、ムスリムは亡くなった人の家族に、善への祈りをし、もっと悪いことがおきないように、そして辛い今を耐え忍ぶよう声をかける。しかし、多神教徒として亡くなった人について、アッラーのお赦しを求めることはしてはいけないだろう。こういったことの禁止については、クルアーンの次の節から明瞭である。

---

[1] 同上書、pp.435～436。

[2] イブン・アルカイイム著、前掲書、Vol.1、p.437。イブン・アビー・シャイバ師の説によれば、キリスト教徒のウンム・アルハーリスが亡くなったときの葬式に、預言者の教友たちが出席したと言われているが、これは弱い説ではないか。イブン・アルカイイム師の本書を参照のこと。pp.432～433。またこの課題については、同上書、pp.432～437 を閲覧のこと。

多神教徒のために御(お)赦しを求めて祈ることは、仮令(たとえ)近親であっても、
かれらが業火の住人であることが明らかになった後は、預言者にとり、
また信仰する者にとり妥当(だとう)ではない。

【第９章　悔悟章［アッ・タウバ］１１３節】

４．配偶者に対して

イスラームにおける結婚生活[1]は、二人で営む非常に重要な小さい組織のようなものであると例えてよいのではないか。社会の核は家族であり、家族がしっかりとした基盤となれば、社会によい影響が反映されるのである。アッラーは、次のように告げている。

われはあなた以前にも使徒たちを遣(つか)わし、妻と子孫をかれらに授けた。

【第１３章　雷電章［アッ・ラアド］３８節】

---

[1] イスラームにおける結婚の決まりの詳細については、筆者の次の文献を参照のこと。ジャマール　ザラボーゾ著 『家族法、結婚と離婚』アメリカ・オープン大学、1997 年

上の節の意味は、預言者ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）の生き方が、人類の手本となるということである。預言者ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）は、結婚は人生の正しい道につながることだと考え、ハディースで次の様に述べている。

「私はアッラーを最も畏れるものです。しかし断食をすれば食事もし、礼拝をすれば眠りもし、結婚もしています。私のこのような慣行を厭う人もいるでしょう。それらの人びとは、私に従うものたちではありません。[1]」

クルアーンの多くの箇所で、アッラーは、男と女の関係についてもはっきりと告げている。人間は皆同じ元始の人間（アーダム）から生まれ出た。それにより、人間はみなこのつながりで結ばれているのだ。全ての人には権利と義務があり、婦人章には次の一節がある。

人びとよ、あなたがたの主を畏れなさい。
かれは一人の者（アーダム）からあなたがたを創り、またその者（の一部）から配偶者を創り、
両人から、無数の男と女を増やし広められた方であられる。
あなたがたはアッラーを畏（おそ）れなさい。**かれ**の御名（みな）において互いに頼みごとをする御方（おかた）であられる。また近親の絆（きずな）を（尊重しなさい）。

---

[1] ブハーリーとムスリムの伝承による。

本当にアッラーはあなたがたを絶えず見守られる。

【第４章　婦人章［アン・ニサーア］１節】

　アッラーの素晴らしい徴として、人々の始まりとともに、アッラーは両性の心の中に愛情と人情を授けた。アッラーのその徴を理解できるのであれば、人々はそこにアッラーの秀逸で完璧な創造性や彼の慈悲の恩恵を見出すことができるであろう。

　ビザンチン章には次のようにある。

悔悟してかれに返り、かれを畏れなさい。
礼拝の勤めを守り、偶像信者の仲間にはなってはならない。

【第３０章　ビザンチン章［アッ・ローム］３１節】

　また高壁章でも次のように告げられている。

かれこそは、一個の魂（アーダム）からあなたがたを創り、互いに慰安を得るため、その妻を創られた御方であられる。かれがかの女と交わると、かの女は体内に軽い荷を負ったがそれでもかの女は（安易に）往来していた。
そのうち重さが加わるようになると、彼らは両人の主、アッラーに祈って（言う）。
「もしあなたが良い子をわたしたちに御授けになれば、わたしたちはきっと感謝を捧げます。」
・・・その妻を創られたお方であられる。

【第７章　高壁章　［アル・アアラーフ］１８９節】

　このように、クルアーンには男性とその妻（夫婦）は、人情や思いやり、相互理解に基づいた関係を築くべきであり、夫婦がお互いに良い関係を保つよう、アッラーは次のように告げている。

・・・仲良く、かの女らと暮らしなさい。
あなたがたが、かの女を嫌っても（忍耐しなさい）。
そのうち（嫌っている点）にアッラーからよいことを授かるであろう。
【第４章　婦人章［アン・ニサーア］１９節】

　ここでは、イスラームの結婚の目的についても述べてみよう。なぜなら多くの人々は結婚を望み、そして結婚の契約をするものの、結婚それ本来の目的や役割については知らないという場合もある。つまり、自分が結婚に臨んで、どのような責任を担うのか、しっかりとは分かっていない場合もあるのである。もし人々が結婚の真の目的とそれに付随する責任を理解することができたならば、その結婚は成功への道を進むことになろう。そこで、人は彼に求められた義務を知ることになるのである。

　結婚の目的は、単なる歓びや本能的な快楽だけではない。結婚はそれよりももっと深い意味を持っている。結婚にはいくつかの目的がある。子孫の繁栄、正当性のある肉体的な歓びを享受すること、完全な成人としての証、社会が彼らの人生に要求

することを成就するためにお互いを助け合うことなどである。加えて、お互いが物質的・精神的な利益を得るための方法であり、道徳的な社会を形成する基礎ともなる。そしてそれは、道徳的で健全な次世代を養成することにもつながる。結婚はまた、夫と妻それぞれの家族同士の結びつきをより強くすることでもある。[1]

（1）結婚してもよい人とは

婦人章では次のように告げられている。

　あなたがたの父が結婚したことのある女と、結婚してはならない。
過ぎ去った昔のことは問わないが。
それは、恥ずべき憎むべきこと。忌まわしい道である。
【第４章　婦人章［アン・ニサーア］２２節】
　またあなたがたに（禁じられている者は）、夫のある女である。ただしあなたがたの右手の所有する者（奴隷の女）は別である。
これはあなたがたに対するアッラーの掟である。
これら以外は、すべてあなたがたに合法であるから、あなたがたの財資をもって、（良縁を）探し求め、面目を恥ずかしめず、

[1] アブドゥッラハマーン　アブドゥルハーリク著『アッザワージュ　フィー　アル　イスラーム（「イスラームにおける結婚」：訳者注）』アルダール　アルサラフィーヤ、1988 年

私通（のよう）でなく（結婚しなさい）。

【同章　２４節】[1]

クルアーンでは結婚についても詳（つまび）らかにされている。ここで述べるのは、新ムスリムにとって特に重要な点についてである。非ムスリムの国に住んでいる人の場合を考え、特記する必要があるであろう。（非ムスリムとの結婚については、すでに前述したとおりであるが。）

これから述べる問題は、貞淑ではない女性（男性も同様）との結婚の場合である。ムスリムの学者の中では、姦通した女性との結婚の是非について、さまざまな議論がされてきた[2]。一部の学者はタブー視しており、マーリキー学派、シャーフィイー学派とハナフィー学派も含めてほとんどの学者は、こういった結婚が可能ではあるが、望ましくはないと見ている。クルアーンの解釈としては次の節がある。

姦夫は、姦婦かまたは多神教徒以外（の女）とは、結婚することは出来ない。

姦婦もまた、姦夫かまたは多神教徒以外（の男）とは、結婚することは出来ない。

このことは信者に対し禁じられる。

【第２４章　御光（みひかり）章［アン・ヌール］３節】

---

[1] （本文では一部引用であるが、参考のために全文引用した。：訳者注）

[2] ここで同じく、女性が姦夫と結婚してもいいのかという場合でも、同じ議論が考えられる。

クルアーンには上のようにあるが、ハディースでは、姦夫と姦婦の結婚は望ましくはないが、まったく禁止とされてはいないという解釈もある。それが次のハディースである。

ある男が預言者のところにやって来て、尋ねた。

「私の妻は、他の男の手を防がない性質です[1]。」

預言者ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）は言った。

「あなたは彼女と離婚しなさい。」

しかし、彼はこう答えた。

「私はそれでも妻を愛しています。」

預言者は言った。

「仕方がない、彼女と楽しみなさい。[2]」

あるハディースでは、姦婦が悔悟するまでは結婚すべきではないとされている。これはイブン・ハンバル師を初め他の学者たちの意見である。こちらの方が先にあげたハディースよりも、もっと信憑性のあるハディースであろう。しかし師は、これもまた「弱いハディースである。」と結論付けている。もしある学者が上のハディースが正しいと認めたとしても、その女性が姦通の罪を犯したとはっきりと証明することは難しいからである。しかし、彼女はふしだらな女性であったというのは間違いないだろう。つまり、男たちの前での大っぴらな振る舞いがあったとしても、姦通の罪とまでは言えないが、しかし、もしこ

---

[1] （誘惑に弱いという意味であろう：訳者注）

[2] （この出典の記述はない：訳者注）

ういう妻であったならば、離婚するのが無難である。そしてそういう女性であれば、実際には結婚できないという意味にもなろう。

特に新ムスリムにとっては、この問題については十分に注意する必要がある。なぜならば、彼は新しくイスラームに入信した人であり、一般に自分の信仰を深くするため、あるいはアッラーを正しく崇拝するという目的のために、より適した伴侶を見つけた方が良いのは当然だからである。貞淑でない妻は、心から信仰深い生活を望んでいる人にとって、最も相応しくない女性である。そして、まだ信仰が弱く新しいムスリムにとっては、かなり危険な女性ともなろう。

この他にもう１つ重要な問題がある。それはユダヤ教徒やキリスト教徒との結婚が可能であるかどうかの議論である。これまで各学者たちの間でも、意見の相違があったが、一般的な見解としては、クルアーンの次の節から許されるとされている。

・・・

また信者の貞節な女、

あなたがた以前に、啓典を授けられた民の中の貞節な女も。

もしあなたがたが（貞節な）女に姦通や密通をせずに、きちんと婚資を与え妻に迎えるならば許される。

・・・

【第５章　食卓章［アル・マーイダ］５節】[1]

[1] （著者は引用を省略しているが、参考のため一部を引用：訳者注）

この他、少数の学者の間では禁止すべきという見解もあり、また別の少数派は厳しい条件をつけるべきとしている[1]。新ムスリムは入信したばかりなので、自分の置かれた状況をしっかりと冷静に認識すべきである。あえて信仰を妨げる方の扉を開く必要はないのである。非ムスリムの女性は、ムスリムの女性のように、彼の信仰を支えてくれず、宗教の向上を助ける存在とはならない。こういった理由により、非ムスリムの女性との結婚は勧められない。

一方、イスラームに入信したばかりのムスリム女性の場合、非ムスリムの男性との結婚については、アルグマーリー師が次のように言っている。

「不信仰の男性とムスリム女性が結婚するのは禁止されていると、クルアーンにも明解にある。にも関わらず、可能と考える者は彼もまた不信仰者と同様である[2]。とにかく、男は一家の長

---

[1] このような結婚の種類は可能であるとしても、彼らは満足はしておらず、次のような条件を付している。

① イスラームの教えに従っている女性であること。

② ムスリムの国と戦争中ではないこと。イブン・アビー・シャイバ師は、「イブン・アッバース師が『戦時下ならば、啓典の民の女性とは結婚してはいけない。』と言っている。」と述べている。イブン・アッバース師と同じ意見の初期の学者もいる。
ムスリムの国に住んでいる非ムスリムの女性と、非ムスリムの国に住む女性との違いは明らかである。例えば米国の法律では、子供の宗教とは関係なく、養育権について母権の方が強い。これはムスリムの国には当てはまらない。

③ 結婚する女性が貞淑で、姦通を罪と認識していること。

[2] アブドゥッラー　イブン・アルグマーリー著『ラフウッシュ　アッシャック　ワアルイルティヤーブ　アン　タハリーミィ　ニサー　アハル　アルキターブ（「啓典の女性との結婚の疑いを解くこと」：訳者注）』タンジャ、モロッコ、1989 年、p.25。

であるので、非ムスリムとの結婚はムスリム女性にとって大きな危険を孕んでいる。」

（2）夫と妻の権利と義務

結婚している人が認識するのは、二人が共にムスリムであるということが、まるで兄弟と姉妹のような絆が生まれるもとになっていることである。そのために、片方にある権利はもう一方にも存在する。ムスリムのマナーや愛情や誠実さについて著された本がある。結婚している人にもまた、基本的なことは当てはまる。なぜならば、相手もムスリムの社会の一員であるからである。預言者ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）はこの点について強調している。

「自分の好むところのことを相手のためにも望む気持ちがなければ、信仰心があるとはいえません。[1]」

二人の間に結ばれた結婚の契約によっては、夫婦のどちらかがもう片方に対して、より多くのことを望める権利があると決められた事柄もある[2]。結婚した夫と妻の権利について言及するのは、単なる法律的な見解を優先するからではない。もっと重要な意味がある。それぞれの関係は大きな意味での愛情と助けあいの精神に基づいていなければならないということである。

---

[1] ブハーリーとムスリムの伝承による。

[2] あなたがたは、どうしてそれを取り戻すことが出来ようか。既（すで）に互いに深い関係もあり、かの女らは堅（かた）い誓約をあなたがたから得ているのである。
【第４章　婦人章［アル・ニサーア］２１節】

夫婦はお互いに、それぞれの要望を満たし合う気持ちを持つことが大切である。ときには自分が多少譲歩しても、相手の満足のために尽くさなければならない。決められた権利を主張するだけに終わってはいけない。一般的に多くの夫婦の間で、片方の愛情が偏るということはありうるであろう。それでも二人は共に、相手に至らないことがあることを認めつつ、ときには、それを受け入れることも必要である。

預言者は夫たちに妻と良い関係を築くように男たちに忠言した。これは夫のほうが妻よりも力がある場合が多いからであろう。次のハディースではこれについて述べている。

「あなたがたにとって一番良いことは、自分の家族にとって、あなたが最も善い人であることです。私もまた自分の家族に対して、最善を尽くしてきました。[1]」

預言者ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）は次のように忠告している。

「アッラーと来世を信じている者とは、隣人に害を与えない者です。そして、女性たちの面倒をよくみなさい。なぜならば、女性たちは、（アーダムの）肋骨から創られたのであるから。その肋骨の最も曲がっている箇所は上部にあり、まっすぐにしようとすれば折れてしまうし、そのままにしておけば曲がった

---

[1] ティルミズィーとイブン・マージャの伝承による。アルバーニー師は「正しい」と言っている。アルバーニー著　前掲書「サヒーフ　アルジャーミャー」ハディース No.3315。

ままです。だからこそ、女性の面倒をしっかりとみなければならない[1]。」

実際のところ、たいていの夫婦はお互いの要望に十分に応えているとはいえない。相手を批判する前に、または荒っぽい非難の言葉を投げつける前に、まず自分自身を振り返り、自分の不足するところを認めるべきである。

同時にシャリーアでは、夫婦の間での相互の務めと権利をはっきりと定めている。敬虔な夫婦になるように、定めているのである。これについてアッラーは次のように告げている。

・・・

女は、公平な状態の下に、かれらに対して対等な権利をもつ。

・・・

【第２章　雌牛章［アル・バカラ］２２８節】

●妻の権利と夫の義務を簡単に述べる。

①女性に相応しいマハル（婚資）を払うこと。

そして（結婚にさいしては）女にマハルを贈り物として与えなさい。

だがかの女らが自らその一部を戻すことを願うならば、喜んでこれを納めなさい。

【第４章　婦人章［アン・ニサーア］４節】

[1] ブハーリーの伝承による。

②男性は妻を経済的に扶養すること。

男は女の擁護者（家長）である。
・・・経費を出すためである。
【同章　３４節】

また、ムスリムとブハーリーの伝承によるハディースもある。
ヒンド・ビント・ウトゥバ（彼女にアッラーのご満悦あれ）は預言者に聞いた。
「預言者よ、夫のアブー・スフィヤーンはけちな男です。私は彼が知らぬうちに、無理矢理にそっと盗らない限り、私と子どもたちは生活費を得られないのです。」
「問題を大きくせずに、十分に取りなさい。そのように貰う権利があります。」

③夫は妻に優しく接すること。

・・・仲良く、かの女らと暮らしなさい。
あなたがたが、かの女を嫌っても（忍耐しなさい）。
そのうち（嫌っている点）にアッラーからよいことを授かるであろう。
【第４章　婦人章［アン・ニサーア］１９節】

④夫婦の交わりをすること（これは妻の権利でもある。）

イブン・ヒッバーンの伝承による次のハディースがある。

ウスマーン・イブン・マズウーンの妻は、預言者に夫の不満をもらして言った。

「夫は女性との行為を好みません。昼間は断食し、夜も祈ったり、クルアーンを読んだりしてずっと起きているのです。」

預言者は夫を呼んで尋ねた。

「私はあなたの手本でしょうか。」

「はい、そうです。」と夫は答えた。

「あなたは昼も夜も祈っているが、あなたの妻にも権利があるし、あなたの体にも休息が必要です。あなたは祈りそして眠りなさい。また断食をし食べなさい。普通の生活をすることです。」

⑤プライバシーの権利

預言者は男性たちに向かって尋ねた。

「あなたたちの中に妻と二人きりになり、扉を閉め、隠れて夫婦の生活をする。その後、友人に何をしたかを話す。そういう人がいますか。」

女性にも顔を向けて尋ねた。

「あなたたちにも、扉を閉めて夫婦の生活をした後に、友人に何があったかを話す。そういうことがありますか。」

頬の明るい若い女性がそこにやって来て言った。

「男性も女性もそういう話をよくしています。」

預言者は言った。

「そういうことを話してはいけません。男と女の悪魔が道端で交わり、そして別れた。それと同じです。[1]」

⑥教育の権利

女性もまた教育を受け、宗教について教わる権利もある。

●夫の権利と妻の義務を述べる。

①男は家長であること。

アッラーは婦人章で告げている。

男は女の擁護者（家長）である。

・・・経費を出すためである。

【第４章　婦人章［アン・ニサーア］３４節】

一般的には夫の権利をここでは表しているが、同時にそこに大きな責任が潜んでいる。それは自分の家族を導く責任や正しい生き方を保つ責任である。

③ 夫は家庭の物事を決定する権利がある。

これは一番目の権利と等しい意味でもある。家長であるからこそ、家庭の物事を決定する権利があるのである。

[1] アブー・ダーウードの伝承による。アルバーニー師は「正しい」と言っている。ハディース No.7037。

④ 夫が妻を夜招いたときには、彼女は従わなくてはならないこと。

次のようなハディースがある。

男は自分の妻を床に誘ったが、妻は断りました。そして男は一人で寝ました。天使たちは妻の耳に朝まで非難の言葉を囁き続けました[1]。

④夫の許可なしに、妻は家に他の男を招かない。

ブハーリーとムスリムの伝承のハディースによれば、預言者は女性たちに対し、次のように言ったという。

「家には、主人が許さない男を入れてはいけません。」

夫婦は結婚してお互いに満足し、アッラーの祝福を受けて、両肩に責任と義務が乗っていることを意識し、そのうえでイスラームの礼儀正しさを保つことができたならば、二人の結婚は、現世から来世までずっと続く祝福されたものとなるだろう。

（３）離婚について

結婚の話にあったように、イスラームは現実的な宗教である。人生におけるあらゆる事態を想定する。男性と女性は、善意で結婚するが、ときにお互いの性格によっては、一致しない場合も出てくる。結婚の不成功は、お互いを不幸に陥れる。こうい

[1] ブハーリーの伝承による。

った場合、シャリーアでは、その不幸な結婚に区切りをつける[1]。結婚は仲良く慈しみ合って暮らすか、さっぱりと別れるかである。クルアーンには次のようにある。

あなたがたが妻を離婚して定められた期間が満了したならば、公平な待遇で同居させるか、または親切にして別れなさい。

・・・

【第２章　雌牛章［アル・バカラ］　２３１節】

またアッラーは離婚章で次のように告げている。

その期限が満了した時は、立派に留めるか、
または立派に別れなさい。

・・・

【第６５章　離婚章［アッ・タラーク］２節】

シャリーアには、夫婦が別れるには３つの方法があるとしている。

- タラーク

タラーク（離婚）は、夫から言う言葉である。これを夫が言い渡し、女性は３ヶ月を待って（イッダの期間）から離婚できるが、元の夫婦関係に戻ることもできる。しかしタラークの３

[1] 今日でもムスリムの社会では、離婚は恥ずかしいこと、恥をかくことであるとされている。家族皆が苦しみ続けることになり、シャリーアの目的とは反するのである。

回目で離婚した場合は、イッダの間に一緒になることはなく、二人は完全に別れなければならない。

- アルホラア

　この場合は、妻が自分の夫に満足しなかった結婚では、それを解消し結婚に終止符を打つために、夫に何かを拠出することになる。例えば、結婚に際して夫からもらった自分のマハル（婚資）を戻すことなどであり、それがだめな場合は妻が裁判に持ち込み、その判定を待つことになる。

- 裁判所を通す方法

　夫がやるべきことをやっていないときに、妻は結婚の解消のために、裁判所に行き、訴訟を起こすことができる。

　離婚は望むような目的ではなく、豊かで恵まれた理想的な社会においても、軽視する問題でもない。しかし、ときには相手にとって最善な選択となる場合もあるだろう。

５．子供に対して

　子供を持つことには立派な責任も付随する、それはありがたく、大きな恵みである。それについてクルアーンから以下の節を引用しよう。

あなたがたの富や子女は一つの試みに過ぎない。アッラー、かれの御許に（だけ）偉大な報奨はある。

【第６４章　騙し合い章［アッ・タガーブン］１５節】[1]

またアッラーは次のように告げている。

あなたがた信仰するものよ、人間と石を燃料とする火獄からあなたがた自身とあなたがたの家族を守れ。
そこには痛烈な天使たちが（任命されて）いて、かれらはアッラーの命じられたことに違犯せず、言い付けられたことを実行する。

【第６６章　禁止章［アッ・タハリーム］６節】

この節の意味は別のハディースでも解説されている。
あなたたちは皆羊飼いであるから、自分自身が管理しているものに責任を持ちます。男たちは、自分の家族に責任を持ち、妻たちは夫の家の責任者であり、主人に仕える者には、主人のお金を守る責任があります。全ての者はそれぞれの仕事の責任者なのです。[2]

ある学者は、子供は生まれる前から、責任ある者によって守られ世話を受ける権利を持っていると考えている。それは良い妻（夫）を選択することから始まる。つまり、良い妻（夫）を

[1] （この試みとは、試練のことであろう。：訳者注）
[2] ブハーリーとムスリムの伝承による。

迎えることがムスリムの家庭をつくる第一歩であり、子供にとっての良い環境を用意する第一歩なのである。子供の権利としては、次のことが挙げられる。

① 健康的な食事をし、清潔な衣服を着る権利

② 宗教の教えを学ぶ権利

③ 慈悲と愛情のある関係の中におかれること

④ 子供の間で公平に扱われること

⑤ 子供の手本となるような親を持つこと

６．隣人に対して

隣人との関係について、クルアーンでアッラーは次のように告げている。

アッラーに仕えなさい。何ものをもかれに併置してはならない。
父母に懇切を尽くし、また近隣や孤児、
貧者や隣人や遠い縁者、
道づれの仲間や旅行者、
およびあなたがたの右手が所有する者（に親切であれ）。
アッラーは高慢な者、うぬぼれる者を御好になられない。

【第４章　婦人章［アル・ニサーア］　３６節】

　また預言者ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）も次のように言っている。

「アッラーを信じ終末の日を信じる者は、良い事を言うか、沈黙するかです。

またアッラーを信じ終末の日を信じる者は、隣人に害を与えません。

またアッラーを信じ終末の日を信じる者は、自分の客人に対して寛大でなければなりません。[1]」

　また次のようなハディースもある。

「大天使ジブリールは、私に何度も言いました。『隣人を大切にせよ。』　私が隣人を相続人にさせてもよいと考えるに至るまで、説得し続けました。[2]」

　別のハディースがある。

ある人が預言者に尋ねた。

「『信者ではない』というのは誰のことでしょうか。アッラーの使徒よ。」

「隣人の難儀を助けない者です。」と預言者は答えた。

　加えて、以下のようなハディースもある。

「アッラーの使徒よ。ある女は礼拝と施しと断食をよくするが、口では近所の悪口を言ったり、隣人に向かって罵倒する。」

預言者は、

「地獄に入ります。」と答えた。

---

[1] ブハーリーとムスリムの伝承による。

[2] 同上。

「またある女は断食と礼拝は少なく、そして課せられた以上の施しはしない。しかし、隣人には迷惑をかけない。」

「かの女は、天国に入ります。[1]」

また預言者は常にムスリムの手本であった。隣人に対しての良いマナーと寛大さを示しているのが、次のハディースである。

アブー・ザッル（彼にアッラーのご満悦あれ）に預言者は次のように言ったという。

「もしスープを作ったときには、それをちょうど良い味にして、あなたの隣人にも分け与えなさい。[2]」

これら数多くのハディースにあるように、ムスリムは隣人に対して寛大でなければならない。助けを求められたときには助け、病気のときには見舞い、日常の一般的なマナーにもよく気をつけることである。

アルジャザーイリー師は、次のように書いている。「ムスリムは隣人に善くすることが大事である。助けが必要なときは助け、病気のときは看病し、良い出来事は一緒に祝い、不幸があればお悔みを言う。そして手助けをし、また率先して挨拶の言

---

[1] アハマド、イブン・マージャ、ハーキムの伝承による。またアリー　ハサン　アルハルビー師は「それは正しい。」と言った。アリー　ハサン　アブドゥルハミード著『フクーク　アルジャール　フィー　サヒーヒ　アルスンナティ　ワルアサール（「スンナにおける隣人の権利について」：訳者注）』アルマクタバ　アルイスラミーヤ、アンマン、ヨルダン、1933 年、p.31。

このハディースが時折、相応しくない場で引用されることがある。二番目の女については、かの女は課せられた礼拝や断食はするが、それ以上のことをしない。今日では５回の礼拝をしない人々もおり、彼らは礼拝をしている人よりも隣人に良い行いをするので、自分の方が優れていると言う。これは、このハディースには当てはまらない事例である。

[2] ムスリムの伝承による。

葉を交わし、柔らかい口調で話し、近所の子供にも優しく話しかけ、日常生活のことでも宗教的なことでも善い話をする。もし何か問題があれば彼らを守り、隣人が起こした間違いは寛大な心で赦し、そしてアウラ[1]を見ない。改築や通路を作ることが近所に迷惑をかけるならば、止めることである。樋のことでも面倒をかけない。ゴミを近所に捨てない。アッラーが命じたように、こういった諸々のことを守ることは隣人に対するマナーである。[2]」隣人に関するクルアーンの節については、後で触れることにする。

非ムスリムの国で暮らす場合、学者たちは隣人を３種類に分けた。１つ目は、隣人が親族でムスリムの場合である。２つ目は、隣人が親族ではないがムスリムである場合。３つ目は、隣人が親族でもムスリムでもない場合である。３つの全ての人々と、良い関係を持たなければならない[3]。

ある人が、サウジアラビアのファトワー（シャリーアによる見解）に関する委員会に次のような質問をした。「非ムスリムの隣人からのお土産を受け取っていいのかどうか。」委員会の見解は「あなた方に善いことをしてくれた人には、善いことで

---

[1] （隠されているところや見てはいけないもの、欠点も入る。：訳者注）

[2] アブー・バクル　アルジャザーイリー著『ミンハージュ　アルムスリム（「ムスリムの道」：訳者注』）』ダール　アルフィクル、ベイルート、レバノン、1990年、p.107。

[3] ムハンマド　イブン・ウサイミーン著『シャルフ　アッリヤード　アッサーリヒーン（「敬虔な人のための説明書」：訳者注）』ダール　アルワタン、リヤド、サウジアラビア、1995年、p.205。

返しなさい。他の宗教の人であろうと、彼らがあなだ方に善いことをしてくれたら、それに報いるべきである。」であった。

預言者ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）も、ビザンツ帝国の支配者からの贈り物を受け入れ、ユダヤ教徒からの贈り物も、気持よく受け取ったといわれる。

アッラーはクルアーンで次のように告げている。

アッラーはあなたがたとあなたがたが（今）敵意を持（も）つ者たちとの間に、あるいは友情を起こさせることもあろう。
本当にアッラーは全能であられ、またアッラーは寛容にして慈悲深くあられる。

【第６０章　試問される女章［アル・ムンタヒナ］７節】

アッラーは宗教上のことであなたがたに戦いを仕掛けたり、あなたがたを家から追放しなかった者たちに親切を尽し、公正に待遇することを禁じられない。
本当にアッラーは公正な者を御（お）好になられる。

【同上　８節】

上にあげた内容は、委員会がクルアーンを基に立証して答えたものである[1]。
ウサイミーン師は「宗教上の禁じられたことでない限り、非ムスリムの要望に応えるのは、悪いことではない。隣人はお互い

---

[1] アリー　アブー・ラウズ著　前掲書『アルアジュウィバ（「疑問とその解答」：訳者注）』、p.32～33。

にそれぞれ権利があるからである。あなた方が正しい行動をすることで、隣人がイスラームに改宗するきっかけになるかもしれないからである。」と語っている。[1]

　またイブン・バーズ師は、次のように述べている。「隣人が害を与えず、あなたに良くしてくれたならば、貧しい人の場合には施し、金持ちならば贈り物をし、彼のために相談に乗ることは、人々の尊敬を得ることであり、彼らの入信のきっかけになるかもしれない。隣人同士はお互いを尊重する権利がある。[2]」

　今日の現代社会では、そこで営まれている各人の生活はあわただしく、多くの社会で隣人を大切にする精神がなくなりつつある。イスラームが勧めるように、新しく入信した人も隣人への大切なマナーを実行すれば、ムスリムとして優れた行いとなるであろう。

７．他のムスリムに対して

　人々の間の最も強い絆は何かと尋ねたら、多くの人は血縁、民族、地縁あるいは国籍などと考えるだろう。実際にはこのような種類の絆にそれほどの強さはなく、意外と脆弱な基礎に上に成り立っているのではないか。

[1] 同上書、p.32。
[2] 同上書、pp.30～31。

アッラーはクルアーンで、カービールとハービール[1]の話を例えとして示した。彼らは兄弟であったが、片方が片方を殺してしまった。もう１つの例は、預言者ユースフ（彼にアッラーからの平安あれ）と他の兄弟の話である。彼の兄弟は彼を深い井戸の底に投げ込んだ。こういった例は人生が己の欲望に支配されてしまっている血縁の間の悲劇である。今日でもこれはよくあることである。自らがこの世の生で何かを追い求め、またその希求するものや興味関心を最優先にした場合に、こういった悲劇が生まれるのである。つまり自分の人生を優先させ、自己の利益だけを追求することに邁進して、大切な血縁の関係を打ち捨てることで、自分の人生をその欲望ですり替えてしまうのである。

これは１つのことを示している。それは人々の関係が己の欲に基づいて成り立つ場合には、元々そこに血縁の関係があったとしても、その利益のためならば、人はその関係をいとも簡単に切り捨てることができるということである。そう考えれば、血縁もまた人々の間の強い絆とは言えないだろう。

人々の間の最も強い絆というのは、イスラームにおける正しい信仰という結びつきである。人々が信仰という絆で結ばれ、強い信頼関係が成り立つのはアッラーの許での人々の信仰や敬愛が基準になっているからである。アッラーはこれについて、次のように告げる。

---

[1] （カインとアベル：訳者注）

　また**かれ**は、かれら（信者）の心を一つに結ばれる。あなたが仮令（たとえ）地上の一切のものを費やしても、あなたはかれらの心を一つに結ぶことはできない。
だがアッラーはかれらを結合させる。
本当にアッラーは偉力ならびなき英明な御（お）方であられる。
【第８章　戦利品章［アル・アンファール］　６３節】

　また次の章でも絆に関しての記述がある。

　あなたがたはアッラーの絆（きずな）に皆（みな）でしっかりと縋（すが）り、分裂してはならない。
そしてあなたがたに対するアッラーの恩恵を心に銘（めい）じなさい。
初（はじ）めあなたがたが（互いに）敵であった時（とき）、
かれはあなたがたの心を（愛情）で結びつけ、その御恵みによりあなたがたは兄弟となったのである。
あなたがたが火獄の穴の辺りにいたのを、**かれ**がそこから救い出されたのである。
このようにアッラーは、あなたがたのために印（しるし）を明示される。
きっとあなたがたは正しく導かれるであろう。
【第３章　イムラーン家章［アーリ・イムラーン］１０３節】

　このようにクルアーンでは、信仰こそが最も強い絆であると明言している。それはアッラーに仕えるという共通の目的のために結束すること、それによって世界中の人々をつなぐということを意味する。慈悲と人情でお互いに協力することは、ムスリムの社会のためでもある。クルアーンとハディースには、ムスリムたちが一丸となって世界的な同胞愛を築くべしと強調している箇所がたくさんある[1]。ここでは紙面の都合で、一例だけあげておこう。

**　男の信者も女の信者も、互いに仲間である。**
かれらは正しいことをすすめ、邪悪を禁じる。
また礼拝の勤めを守り、定めの喜捨をなし、

---

[1] 同胞愛が共通の教義に基づくことを知るのは、大切なことである。教義が異なれば、このつながりは終わってしまう。そこでアッラーは預言者ヌーフ（彼にアッラーからの平安あれ）とその息子について、次のように言った。

**　ヌーフはかれの主を呼んで申し上げた。「主よ、わたしの息子は（わが）家の一員です。**
あなたの約束は本当に真実で、あなたは裁決にもっとも優(すぐ)れた御方あられます。」
【第１１章　フード章　４５節】
**　かれは仰せられた。「ヌーフよ。かれは本当にあなたの家族ではない。**
かれの行いは正しくない。あなたの知らないことに就いて、われに求めてはならない。
われはあなたが無知な者とならないように戒める。
【同章　４６節】

　非ムスリムはこの大きな同胞愛の世界の外にあるが、イスラームに入ればその中で歓迎されるだろう。なぜならばイスラームの同胞愛は血縁、民族、国籍などに基づいたものではないからである。信仰の有無によって、この同胞愛を得られるかどうかが決まるのである。ムスリムに対しての非ムスリムの権利については後述する。

アッラーとその使徒に従う。

これらの者に、アッラーは慈悲を与える。

本当にアッラーは偉力並びなく英明であられる。

【第９章悔悟章［アッ・タウバ］７１節】

　また同じ記述が別の節に出ている。

　信者たちは兄弟である。・・・

【第４９章　部屋章［アル・フジュラート］１０節】

　そして、勝利章にも次のようにある。

　ムハンマドはアッラーの使徒である。

かれと共にいる者は不信心者の者に対しては強く、挫（くじ）けず、お互いの間では優しく優（やさ）しく親切である。

・・・

【第４８章　勝利章［アル・ファトフ］２９節】

　また、預言者も次のように言ったというハディースがある。

「信者と信者の関係を建物に例えるとすれば、お互いに支えあって（一戸の家を構成して：訳者注）**います[1]。」**

　別のハディースも伝わっている。

---

1 ブハーリーとムスリムの伝承による。

「信者たちはお互いの親切、愛情、慈悲でできた一体の身体のようです。体の一部が痛みを感じたら、身体全体は不眠と熱で反応します。[1]」

イスラームの素晴らしい同胞愛は、単なる理論上のことではなく、実際に明瞭で決まった基本的な要素があるとされている。そこでは定められた権利と義務が保持されている。クルアーンとスンナによって決められ、どの時代、どの場所においても全てのムスリムはそれに沿った生き方をすべきである。

イスラームの同胞愛の絆の１つは愛情である。これはムスリム同士がお互いに好意をもって接するということである。これについて預言者は次のように言った。

「人は自分の好むところのことを、人にもするべきであり、これが実行できないならば、信者とは言えません。[2]」

２つ目の側面はお互いの援助、協力、助け合いである。ムスリムの誰かが不遇な境遇にあった場合、物心両面で助けの手を差しのべるべきである。この同胞愛についてクルアーンでも告げられている。

あなたがたはどうして、アッラーの道のために戦わないのか。また弱い男や女や子供たちのためにも。
かれらは（祈って）言う。「主よ、この不義をなす（メッカ）の住民の町から、わたしたちを救い出して下さい。

---

[1] ムスリムの伝承による。
[2] ブハーリーとムスリムの伝承による。

そしてわたしたちに、あなたの御許(みもと)から一人の保護者を立てて下さい。
またわたしたちに、あなたの御許から一人の援助者を立てて下さい。
【第４章　婦人章〔アン・ニサーア〕７５節】

３つ目は慈悲と優しさである。これはお互いが感じるちょっとした好意を超えた深い愛情である。ムスリムが心に感じるということは、お互いに通じあっているということである。預言者ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）は、前述した同じハディースで説明している。

「信者たちはお互いの親切、愛情、慈悲でできた一体の身体のようです。体の一部が痛みを感じたら、身体全体は不眠と熱で反応します。[1]」

４つ目には、人々の間には常識的な人間としての礼儀正しさが必要であるとされている。本当の同胞愛にも単なる口先だけでなく、実践的な行動が伴わなければならない。イスラームの素晴らしい側面は、物事を観念の段階だけで終わらせないことである。つまりムスリムであるならば、具体的にどのように実現すればよいかその方法を探るべきだと考えられている。預言者もまた、するべきことを示唆している。これはムスリムが他のムスリムに期待できる権利でもある。そして自分の立場になれば、人に対してしなければならない義務となる。

[1] ムスリムの伝承による。

ハディースにもある通り、礼儀正しさには６つの段階がある。

「ムスリムには、６つの権利と義務があります。」と預言者は言った。

「それはなんですか。」と皆が聞いた。

「誰かに会ったら挨拶をしなさい。招待されたら受けなさい。助言を求められたら与えなさい。くしゃみ[1]をしたら『アッラーの慈悲があるように。』と祈りなさい。病気のときはお見舞いに行きなさい。人が亡くなったら葬式に行きなさい。[2]」

シャリーアはその目的とする人々の間の愛情を広め、そして信者間の親近感を増すために、多くの行為についてムスリムを指導している。例えば、ムスリムが自分の兄弟のように接している友人が好きなのであれば、その人にその好意を伝えるようにすべきである。預言者は次のハディースでこのことを述べている。

「誰かが兄弟であるムスリムに好意を持つならば、彼にそれを示すことにより、ますます親しみを増し、愛情も深くなるでしょう。[3]」

また次のハディースがある。

「あなたがたは信じるまで、天国へは入れません。お互いに好意を持つまでは、信じているとは言えません。好意を持つため

---

[1] （アラブでは、くしゃみの瞬間に身体の機能が全て止まると考えられている。：訳者注）

[2] ムスリムの伝承による。

[3] イブン・アビー・アッドゥンヤーの伝承による。アルバーニー師は正しいとみている。アルバーニー著　前掲書『サヒーフ　アルジャーミャー　アッサギール』参照、ハディース No.280

の初めの一歩は、挨拶『アッサラーム　アライクム』を広めることです。[1]」

　このハディースは、サラーム（平和）を広め、サラームの下でムスリムの平和と統一を実現することを意味している。

　預言者はまた、贈り物の徳についてもこう説いている。

「贈り物は、人と人を結びます。[2]」

　またアッラーの使徒ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）は、ムスリムたちにお互いを訪問し合うように言った。そこでは以下のように教えられている。

「訪問し合いなさい、互いに贈り物をしなさい。訪問は親しみを増し、贈り物は、憎しみを消します。[3]」

　以上の積極的な行動と共に、例えば陰口、悪口、嘘、ごまかし、覗き見など、イスラームで禁止されている行為を避けたならば、人間関係はさらに良いものとなるであろう。イスラームを正しく実践すれば、世界中のムスリムたちは同胞愛で結ばれる。人が善い振る舞いをすれば、相手からも善いことしか返ってこないだろう。つまり善いこと以外は起こらないのである。

---

[1] ムスリムの伝承による。

[2] アルバーニー師によると、良いハディースだと見ている。同上書参照、ハディース No.3004

[3] タバラーニーの伝承による。アルバーニー師は「正しい」と見ている。同上書参照、ハディース No.2583

８．非ムスリムに対して

ムスリムと非ムスリムとは、異なった人生の軌跡を歩んでいる。ムスリムの人生では、アッラーを正しく信じることがその中心にあり、結果としてその周りを巡る軌道にいる。人がアッラーに対してどのような立場をとっているかで、その人に対する自分の立ち位置が決まってくる。アッラーに背中を向け、アッラーへの帰依を拒み、アッラーへの信仰をからかった人に対して、ムスリムは完全な愛情や親近感を感じることはない。その人との間に完全な愛情があるというのは、自然ではない[1]。

相手に対し否定的な感情が沸き起こったとしても、ムスリムは正義という信念をもって、相手と接しなければならない。多くの非ムスリムは、ムスリムに対して敵対心は持っていない。ただ一部には憎しみの気持ちがあり、ムスリムへの軽視、嫌悪感を見せることもある[2]。

懐疑的な非ムスリムの人々と付き合うにあたっての第一の信念である正義は、次の節に出ている。

---

[1] この事実は、非宗教的な世俗主義者にも存在している。左派の政治家は、右派の政治家への嫌悪感と憎しみを持っているものである。その逆もまた正しい。

[2] 事情によりムスリムの国が信仰を拒んでいる国に対して宣戦布告をすることもある。歴史上こういったことも多かったが、相手国と戦ったからといって、将来まで交流がなくなるということではない。ヨーロッパでも、数百年にわたり争い、国交がなかった国々であっても、今では欧州連合として団結している。戦争の背景には、ムスリムと非ムスリムという事情もあるが、今日ではそれだけが原因ではない。この議論は本書の目的ではないが。

アッラーは、宗教上のことであなたがたに戦いを仕掛けたり、またあなたがたを家から追放しなかった者たちに親切を尽し、公正に待遇することを禁じられない。
本当にアッラーは公正な者を御好みになられる。

【第６０章　諮問される女章［アル・ムンタヒナ］８節】

加えて、ムスリムには非ムスリムに対しての明らかな責任もある。彼らをアッラーへの信仰へと呼びかけることである。これは全ての人々のためにも善となり、全世界の人々を善へと誘うことも意味する。つまり世界をイスラームの道へと誘うこと[1]でもある。ムスリムの正しい心理として、非ムスリムの人がイスラームに入り、アッラーへの信仰を抱いて欲しいという願望がある。それに関する預言者のスンナは最も相応しい例であろう。クルアーンのいくつかの節には、預言者ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）は当時、多くの人々が信仰を拒否した事態に直面し、どんなに悲しんだかということが伝っている。次にそのクルアーンとハディースを挙げる。

[1] これは現代人が描いているように、ムスリムに悪気があっての行為ではない。ムスリムは非ムスリムに宗教を強制しない。キリスト教徒は、ムスリムの国でのキリスト教の宣教を全く引け目を感じないで行なっている。今日では、多くの人々が民主主義を広めようとしているが、人間にとって善でしかないと信じているからであろう。しかしアッラーにだけは本当の真実が分かっている。もしムスリムの中で、イスラームを民主主義と同じように広めようと試みた人がいたら、世界はどんな反応をするであろうか。

　もしかれらがこの消息（クルアーン）を信じないならば、恐らくあなたはかれらの所行のために苦悩して、自分の身を滅ぼすであろう。

【第１８章　洞窟章［アル・カハフ］６節】

預言者ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）は、マッカで不信仰者のために多くの犠牲を強いられた。にも拘らず天使が彼らの上に

「マッカの山を落とす。」と言ったとき、それに同意せずこう答えたと言われている。

「いやそれよりも、アッラーが彼らの子孫を、アッラーのみ信じ、アッラーにのみ仕える子孫として生まれるようにしてください。[1]」

　人々に対するアッラーへの信仰の呼びかけは、預言者ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）の道であり方法でもあった。また彼に従う人々の道でもあった。

　言ってやるがいい。「これこそわたしの道。わたしも、わたしに従う者たちも明瞭な証拠の上に立って、アッラーに呼びかける。アッラーに讃えあれ。私たちは多神を信じるものではない。」

【第１２章　ユースフ章　１０８節】

[1] ブハーリーとムスリムの伝承による。

アッラーへの信仰に呼びかけることは立派な仕事の１つであり、人が身近な人に対して行う最も善いことであろう。

非ムスリムと接する際の第二の信念としては、適切で公平であることだ。

イブン・バーズ師は、これについて次のように説明している。ムスリムは非ムスリムに対して彼ら自身にも、その家族にも、彼らの金銭にも不公平があってはならないと述べている。また非ムスリムの誇りを傷つけてもいけないとされている。ムスリムの国の住民でも、条約を結んでいる国に対してもそうである。彼らに対し盗みをしてもいけない、裏切ってもいけない、騙してもいけないのである。また身体を傷つけることもいけないことである。ムスリムは、非ムスリムの安定した生活を守るべきである[1]。

ムスリムは、非ムスリムと共存し暮らすことも可能である。物を買ったり売ったり、借りたりすることもできる[2]。社会的な事柄においても、交流することができる。同じ食卓に集うこともできる。それでもこのような交流は、普通は限られたものとなるだろう。なぜならばムスリムと非ムスリムの意見の相違は、簡単に対立関係に陥りやすいからである。宗教の事柄でももちろん、他の宗教に属している人に対して、嫌な気持ちや落胆し

[1] アリー　アブー・ラウズ著　前掲書『アルアジュウィバ（「疑問とその解答」：訳者注）』p.30。
[2] 非ムスリムの親族や隣人ついては、すでに前述した。

た気持ちを持つこともあるだろう[1]。宗教上の両者の意見や行動の相違が、実際の交流の妨げになることもある。例えば、ムスリムは酒を飲まず、できれば酒席には参加したくないであろう。もちろん麻薬の場合も同じである。ムスリムは他の人々との交流の際には、注意深くなければならない。同じ出自の民族の間でも、社会的なルールが必要となってくる。そして相手に対して相応しくない話や失礼で無礼な話をしてはいけない。今日の社会ではこういったマナーが乱れていることが往々にしてあるが。

ムスリムと非ムスリムとの関係において、ムスリムの主な目的はイスラームへの道案内であるということができる。それがゆくゆくは同胞愛や愛情のある完全な関係を築くことにつながるからである。もし相手が問題ばかり起こす、無礼な非ムスリ

---

[1] アッラーは次のように告げている。

あなたがた信仰する者よ、われの敵であり、またあなたがたの敵であるものを、友としてはならない。

あなたがたに与えられた真理を拒否しているにも拘らず、密かに好意を寄せるのか。

・・・

【第６０章　諮問される女章［アル・ムンタヒナ］１節】

筆者は非ムスリムの家庭の出身である。（訳者注：筆者は非ムスリムの国で生まれた。）そのため、ある宗教の人々が、それに属していない人々を軽視しているのは特別なことではない、ということを知っている。そのうち裏表のない唯一の存在がイスラームである。イスラームでは、こういった人々との付き合い方について、きちんとした方法を示している。一方、他の宗教に属する人は、相手に自分の嫌な気持ちを隠しつつ、「愛情」といったスローガンで、接するのである。その例外としては、『「神の下での一つの国」訳者注』を著したロス・ワルトンがいる。「我々の救世主は、汝の敵を愛せよ、と命じている。しかし、敵を好きになり敵と仲良くするということは、聖書のどこにも書いていない。」この記述は、以下参照のこと。アンドリュー　バセビッチ著『新しいアメリカの軍国主義』オックスフォード大学、イギリス 、2005 年、p. 130.

ムであったとしても、ムスリムはその人の悪に染まってはいけない。その悪に巻き込まれないことが大切である。アッラーは次のように告げている。

善と悪は同じではない。
（人が悪をしかけても）一層善行（いっそうぜんこう）で悪を追い払え。
そうすれば、互いの間に敵意のある者でも、
親しい友のようになる。
【第４１章　フッスィラ章　３４節】

イブン・バーズ師はこう書いている[1]。「ムスリムは信仰を拒否している人たちとは戦争状態になければ、彼らにイスラーム的な礼節で接しなければならない。約束は守り、騙したり裏切ったりしない。そして嘘もつかない。そして彼らとの間の争い事は善い方法で解決する。正義を忘れてはいけない。」アッラーはこれについて、次のように告げている。

また啓典の民と議論するさいには、立派な（態度で）望め。
・・・かれらの中（うち）不義を行うものたちしては別である。・・・
【第２９章　蜘蛛章［アル・アンカブート］４６節】

---

[1] アブー・ライズ前掲書、p.42。

ムスリムは善へ呼びかけ、またそれに向かうような助言をするよう命じられている。隣人との良い付き合い、また良い話をすることも、アッラーが次の節で告げる通りである。

英知と良い話し方で、（凡（すべ）ての者を）あなたの主の道に招け。最善の態度でかれらと議論しなさい。あなたの主は、かれの道から迷う者と、また導かれる者を最もよく知っておられる。
【第１６章　蜜蜂章［アン・ナハル］１２５節】

雌牛章にも次のようにある。

・・・人びとに善い言葉で話し、・・・
【第２章　雌牛章［アル・バカラ］８３節】

ムスリムは非ムスリムに、施しをしてもよいとされている。サウジアラビアのファトワーに関する委員会は、ムスリムは非ムスリムまたは信仰を拒否している隣人にも、犠牲祭の食べ物を分けてもよいとしている。それは親しさを増すため、隣人としての義務を果たすためである。また条約を結んでいる不信仰者にも、または捕虜にも、屠った肉を分けてもよい。彼らが貧しく困っていたり、近さや親しみを増すためにとの理由で行なってもよいのである。しかし戦時下にある場合には、分ける必要はない。なぜなら、施しによって敵を強くしてはいけないか

らである。ただし、奉仕や慈善の精神は勧めている。前述した節であるが、アッラーは次のように告げている。

アッラーは、宗教上のことであなたがたに戦いを仕掛けたり、またあなたがたを家から追放しなかった者たちに親切を尽し、公正に待遇することを禁じられない。
本当にアッラーは公正な者を御好みになられる。

【第６０章　諮問される女章［アル・ムンタヒナ］８節】

預言者ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）もアスマー・ビント・アビー・バクル（彼女にアッラーのご満悦あれ）に、彼女自身の母は多神教徒であったが、「サダカとしてお金を渡して孝行しなさい。」と命じたと言われている[1]。

９．社会全体に対して

ムスリムがある社会で暮らそうと思ったからには、（イスラームの教えに反しない限り）そこの法律や慣習を忠実に守るという約束をしたようなものである。彼がムスリムであり、暮す土地が非ムスリムの国だからといって、彼にその決まりを破る

[1] アブー・ライズ前掲書、pp.47～48。

権利や資格はない。どこに住もうとも、彼は常識的に振る舞わなければならないのである。

イスラームで禁止されていること（アルコール等：訳者注）が、多くの国では法律上許されている。ムスリムはそれを賢く避けるしかない。またイスラームで禁止されていることがムスリムに強制されることがないように、そこの法律で守られることを望む。とにかく、その国の法律を順守し尊重することである。

ムスリムは彼が暮らしているどこの社会でも、社会に対して寄与する存在にならなければならない。多くの面で理想的な人間とならなければならない。すでに触れたように、隣人との関係も良くしなければならない。どこで暮らそうとも、善いものを選び、悪しきものを避けることである。また悪しきこと、例えば殺人、盗み、強盗などの重い犯罪に対しては強く抗議すべきである。酒や麻薬の類から遠ざかり、そういった問題で社会に迷惑をかけてはいけない。ムスリムは公正さと公平さを体現しつつ、全ての取引や交流をこなすべきである。ムスリムは、どこの社会でも積極的な貢献を果たすべきであるが、昨今では西洋の国々におけるムスリムの忠誠心や帰属意識が問われている。

ムスリムは明らかに、宗教から離れた世俗的な国では、ムスリムの国とは異なり違った印象を持たれるであろう。しかし暮らしている国で害になるような行動をする人はいない。ユダヤ教徒のある人々は、自分たちが住んでいる国よりも、イスラエ

ルに対して強い忠誠心を抱いているに違いないと考えられることがある。また他にも近頃は、例えばアメリカで最近行われた議論に関して、多くのキリスト教の団体が政府に反対したという事実がある。また最高裁判所に反対の意見を表明したということも取り上げられた。民主党の人々は、共和党の政府に完全な忠誠心を持っているとは言えないが、アメリカという国に対する愛国心や帰属意識は失わないだろう。愛国心とは、政府に従いそれを支持しているという意味であれば盲目的という意味も含まれる。そうなると真に賢い人には愛国心はないということも言えるのではないか。なぜならば、ほとんど全ての政府は欺瞞に満ちているからである。一方、愛国心を自分の国に最善を望む態度という意味で考えれば、何かの問題があれば全ての人は自分の国に対して口々に提案をするだろう。一部の人々は自分たちが皆の代表で、発言する権利があると思い込んでいるが、この権利が正しいかどうかは、議論の余地があるところだ。

イスラームでも、自分の祖国を愛するのは自然であると見なしている。自分が生まれ育った故郷に対して、懐かしく思うのも当然のことである。かつて多くのサハーバ（教友）たちもまた、多神教に支配されていたマッカから去らなければならなかったときに、マッカに対して惜別の念を抱いたことであろう。自分たちが生まれた祖国に対する愛情がますます大きくなっていくのは、当然のことである。その祖国がムスリムの国でなかったとしてもである。全ての人々に支持される意見ではないか

もしれないが、愛する祖国に関することでも最善の方法で全員が一致するのは、なかなかありえないことである。

ムスリムは売春、賭博、猥褻などの行為との決別を願っているが、それはムスリムだけでなく非ムスリムにとっても、それが善いことであると信じているからである。非ムスリムの人々は、ムスリムが悪行と認識していることを、そのまま認めているわけではない。ここに二つの間の本質的な相違が潜んでいる。現代のように自由奔放な時代には、それが問題になることはない。ムスリムは自分の価値観、習慣をしっかりと守りつつも、周りの人々に迷惑をかけない生き方が求められている。一部のムスリムは、非ムスリムの一般的な文化に適応しながら生きている。自由な国では、ムスリムが望む政策を実践される用意がなければ、ムスリムが望む理想的な社会を達成する土壌にはないとみなすべきである。ムスリムは周りの人々に害を及ぼそうとしているのではなく、ただ単に善い文化と周りとは違った生き方を採用しているだけである[1]。

---

[1] 戦争に関しても、ムスリムは平和に寄与する存在となるべきである。ムスリムの国を味方して戦うこと、あるいは自己防衛のための戦い、この二つの条件下にない場合は、ムスリムから宣戦布告をしてはならない。

筆者はテロについて触れてはいないが、多くの学者たちはテロを批判し、それはムスリムの道徳に合致するものではないと非難している。しかし残念ながら、非ムスリムのメディアでは、ムスリムの一般的な論理を紹介したくないようである。むしろ「（イスラームは：訳者注）テロを十分には非難していない。」とメディアでムスリムを非難している。

筆者は２００４年４月２０日から２２日にかけてサウジアラビアのリヤドで行われた「テロ・暴力・過激派に対するイスラームの立場」というシンポジウムに出席した。国外からの出席者が多かったが、海外のメディアの間では十分に報道されていなかった。もしこの議論が、例えばバチカンで行われたとしたら、シン

１０．財産に関して

イスラームにおいては、富をもつことは悪いことではない。財産はアッラーからの恩恵であり、しもべたちが望む通りに分け与えられる。つまり悪ではないが、他の宗教の教えにもあるが、仮にもし悪であったとしても、必要悪なのである。財産を守るのは、シャーリアの目的の１つであり、人々は暮らしていくためにお金を稼ぎ、富を蓄えるために仕事に勤しんでいる。

他の善い物事と同様に、財産には限りがある。善人が財産を持つとそれはアッラーに仕えるための良い手段となる。反対に人間が自分自身を破壊する手段にもなりうる。財産はアッラーからの試練の一種であると言えよう。

あなたがたの富や子女はひとつの試みに過（す）ぎない。
アッラー、かれの御許（みもと）に（だけ）偉大な報奨はある。
【第６４章　騙（だま）し合（あ）い章［アル・タガーブン］１５節】

預言者の次のハディースにも、同様のことが伝えられている。
「審判の日、次の４つのことに答えるまであなたがたの足は動きません。
それは人生をどう使い終わらせたか。

ポジウムでの決議について、数年にわたる国際的な良い評価がもらえたことであろう。

知識をどう役立てたか。

お金をどのように稼いだか。

そしてどのように使ったか[1]。」

　ムスリムが宗教の教えを守ることよりも、富を蓄えることを優先することはないであろう。人生における唯一の目的が、お金や財産だということも。加えて、財産はハラール（許されたもの）でなければならない。また使い道もハラールでなければならない。またその財産に恵みがあるように、そしてアッラーからの祝福があるように、イスラームの道徳上の決まり、つまりシャリーアが誠実に守らなければならない。そうであれば現世でも来世でも、その財産は役立つものとなるだろう。

　善良な人は自分の手許にある財産が、アッラーの所有物であることを知っている。財産に対する人間の所有権というのは、さながら一時預かりのようなものである。別の言い方をすれば、人間はアッラーが証明してくださった方法で、富や財産を有効に使わなければならないのである。

　お金は人間が好き勝手に使うべきものではないと、理解しなければならない。なぜなら、その使用が禁止とされているものがあるからだ。例えば、賄賂として使ってはいけない。人を傷つけるためにも使ってはいけない。これらは正義の論理に違反するからである。アッラーは次のように忠告している。

[1] ティルミズィーとダーリミーの伝承による。

　あなたがたの間で、無駄にあなたがたの財産を浪費してはならない。
またそれを贈って裁判官に近付（ちかづ）き、
他人の財産の一部を、不当であると知りながら貪（むさぼ）ってはならない。
【第２章　雌牛章［アル・バカラ］　１８８節】

１１．商取引に関して

　イスラームにおける商取引は、過当競争下における経済活動のように厳しいものではない。イスラームの道徳的な基礎の上に成り立っているからである。一刻を争う競争でもなく、人を利用して利益をあげることでもない。真のムスリムであれば、商取引はイスラームの原則と道徳的理念の上に成り立っていることを認識しているであろう。商取引はどんなに発展した社会でも、人間の基礎的な営みの１つである。後で述べるように、預言者ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）は商取引に関して人々に多くの示唆を与えている。ムスリムはその指導に従うべきである。イスラームに相応しくない不公正な取引は、憎しみや多くの問題を生む。アッラーが望むならば預言者による教えに従うことで、そういった問題を取り除くことができるだろう。

ムスリムが行う全ての商取引には、『自分が望むことを人にも成せ』という博愛の精神が底流としてある。人々が真に博愛の心で結ばれているのであれば、たった１ドルのためにお互いを騙しあったり、嘘をついたりはしないであろう。そのために預言者はハディースで、どのようにすれば公正な商取引ができ、そして博愛の関係が築けるのかということを述べている。

「お互いに妬まないようにすべきです。また必要以上に値を吊り上げない。お互いに取引を巡って憎しみ合わない。お互いに取引内容を撤回しない。無理な安売りもしない。

しもべたちよ、兄弟の関係になりなさい、なぜならムスリムはお互いに兄弟だからです。不公平をやめ、裏切りをやめ、相手を軽んずることをやめなさい。」

預言者は、自分の胸を示しながらこう言った。

「篤信と献身は、ここにあります。ムスリムが他のムスリムを軽視するのは、悪です。ムスリムが他のムスリムの生命、財産、名誉を傷つけることは、ハラームであす。」[1]

また預言者ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）のこのような言葉もある。

「アッラーよ、赦してください。寛大な男が物を売ったり買ったするときに、自分の権利を穏やかに主張した場合は、アッラーが赦してくださるでしょう。[2]」

---

[1] ブハーリーとムスリムの伝承による。

[2] 同上。

誠実で正直なことは、アッラーに受け入れられる祝福ある商取引への鍵である。預言者ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）のハディースから、それが分かる。

「売り手と買い手は、対立しなければ選択する権利があります。正直に行えば、自分たちの取引には恵みがあります。何かを隠したり、嘘があれば恵みは消えます。[1]」

道徳的でしっかりとした人であるならば、商取引の際にも、現世より来世の方を優先して生きている正しい人の一例となる。僅かな利益を得るために、アッラーの怒りや罰を招くという大きな危険を冒すことはないであろう。正しく生きることはムスリム同士の信頼を増すことになり、アッラーの御許での善い恩恵を得ることにつながるのである。

取引に関しては一般的な原則がある。取引の契約に際しては、お互いの満足と同意があることである。

アッラーは次の節で告げている。

信仰する者よ、あなたがたの財産を、不正にあなたがたの間で浪費してはならない。
お互いの善意による、商売上の場合は別である。
またあなたがた自身を、殺し（たり害し）てはならない。
誠にアッラーはあなたがたに慈悲深くあられる。

【第４章　婦人章〔アン・ニサーア〕２９節】

---

[1] ヤフヤー　アンナワウィー著　前掲書『ミンハージュ　シャルフ　サヒーフ　ムスリム（「注釈のガイドブック」：訳者注）』ダール　アルマーリファ、ベイルート、レバノン、1999 年、No.10、p.424

最後の「別れの巡礼」で、預言者は次のように言った。

「ムスリムのお金のやり取りは、お互いが同意していなければ、ハラールにはなりません。[1]」

言い換えれば、イスラームにおける財産の管理や商取引には、無理やりに成される行為はない。正当性のない無理強いはその契約を無効にする。もちろん、ムスリムはシャリーアに違反しない取引をしなければならない。その範囲で自分自身のお金や財産に自由な裁量がある。国家や権力者にもこれを侵すことは許されない。この意味で、イスラームの経済制度は資本主義と共通の特徴を持っている。

もう１つの原則がある。繰り返しになるがシャリーアではっきりと禁止されていなければ、どんな取引も許されている。このようにシャリーアは、禁じられたことの概要をはっきりとさせており、原則的なことにも言及している。リスクの高い取引や利息、賭博や詐欺は禁止されているのである。こういった行為があれば、程度にもよるが取引は無効で、許されないと考えてよい。ムスリムは彼自身が得た所得が清純で、正当性のあるものになるための条件についても知識を持つべきである。

今まで述べた商取引におけるハラームの概要については、次のような項目を立て詳しく述べておきたい。

---

[1] （出典はない。：訳者注）

（１）バイウ・アル＝ガラル（リスクの高い商取引）の禁止

（２）リバー（利息）の禁止

（３）詐欺行為の禁止

（４）ハラームな事柄による収入の禁止[1]

（１）バイウ・アル＝ガラル（高いリスクのある商取引）の禁止

取引上のガラルというのは、商取引上で予測されない高いリスクのことである。アブー・フライラ（彼にアッラーのご満悦あれ）によれば、預言者ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）がこう言ったと伝えられている。

「高いリスクのある売り買いを禁止した。」

ブハーリーとムスリムの伝承によれば、イブン・ウマル（彼にアッラーのご満悦あれ）は次のように言っている。

「預言者はこう述べた。

『果物や植物の実はちゃんと熟すまで、売り手も買い手も、取り引きをしない。』

ナワウィー師は別のハディースについて、次のように意見を述べている。「このハディースでは、売り手にも買い手にも禁忌がある。売り手の場合は、不正にお金を儲けようとしている。買い手はその売り手の行為に同意して、自分のお金を無駄にしているからである。」

[1] （本書には番号は振られていないが、分かりやすくするために（１）から（４）までの番号をつけて述べることにする。：訳者注）

上に挙げたハディースなどから、高いリスクのある契約は、弁解できない取引であり、契約によって何が得られるかが確実に言い切れない場合は、その契約自体が望ましくなく、また契約自体も無効である、とムスリムの学者の多数が同意している。このような取引では、両者のうち片方が不利益を被る恐れがあるからである。

一方、ガラルに関しては、ライナー氏が次のように説明している。「イスラームでは、公正な取引を実現するために、契約上の公平で道徳的な原則をシャリーアによって決めている。弁明できないような必要以上の儲けはハラームとなる。この原則下では、不透明な状況やそれに伴う高いリスクを回避することができる。ムスリムの学者たちは原則を守るよう説いている。契約の条項を軽視したり、無視するような不正な契約は、多分に危険性を含んでおり、高いリスクのある取引である。こういった不正な商取引は、イスラームでのハラームである。[1]」

シャリーアでは禁止されているにも関わらず、このような不正な取引による儲けは、ある人々にとって魅力的である[2]。イブン・アルアスィール師も、このガラルを語源的に説明している。「ガラルは、表面的には魅力的であるが、実際は隠れた裏側が

---

[1] ライナー著『イスラーム法における契約理論』ロンドン、グラハム出版社、1991年、p.289

[2] こういった契約の両方の当事者が自分の意志で臨み、お互いが了承しているからといって、シャリーアに準拠した正しい契約であると明言することはできない。

あるという意味である。表の魅力的な外観が買い手を惑わせる。魅力的な表に隠れて、裏の薄暗い部分が隠されてしまう。[1]」

イブン・アルジャザーイ師の話によれば、ガラルの含まれる取り引きは４つある。１つ目は定価が分からず、売り物が明瞭でない場合[2]。２つ目は値段と物についての無知がある場合。例えば生地を売っているときに、値段も質も決めずに売っていること[3]。３つ目は受け取りの時期が不明瞭な場合[4]。４つ目は売買する品物の出所についての曖昧さがある場合[5]。例えば、病気の動物を売り買いすることなどである。

（２）リバー（利息）の禁止

宗教で禁止されているよく知られた罪の１つが、利息を設けたり支払ったりすることである[6]。もちろん、リバーに関することを知っているムスリムはそれを避けるようにするであろう。それについてアッラーはクルアーンのいくつかの節で次のように告げている。

---

[1] ムバーラク　イブン・アスィール著『ジャーミャー　アルウスール　フィー　アハディース　アッラスール（「使徒のハディースのオリジナルの蒐集」：訳者注）』マクタブティ　アルヒルワーニー、1971 年、Vol.1 p.527～528

[2] ナイラ　コマイル　オベイド著『中東のビジネス契約における法律』1996 年。p.58

[3] 同上書、同ページ。

[4] 同上書、同ページ。

[5] 同上書、同ページ。

[6] リバーには高利で貸す（Usury）という正しくない英語の翻訳がある。考えられない正当性のない高い利子という意味合いである。しかしシャリーアでは、資金にはどんなズィヤーダ（上前（うわまえ））でもハラームとされている。リバーはどんなに額が少なくてもハラームである。過剰な上前が余りにも多いからである。シャリーアでのリバー（利息）の訳は、Interest がより近い。

利息を貪るものは、悪魔にとりつかれて倒れたものがするような起き方しか出来ないであろう。
それはかれらが「商売は利息をとるようなものだ。」と言うからである。
しかし、アッラーは、商売を許し、利息（高利）を禁じておられる。それで主から訓戒が下った後、止める者は、過去のことは許されよう。
かれのことは、アッラー（の御手の中）にある。
だが（その非）を繰り返す者は、業火の住人で、かれらは永遠にその中に住むのである。
【第２章　雌牛章［アル・バカラ］２７５節】

アッラーは、利息（への恩恵）を消滅し、施し［サダカ］には（恩恵を）増加して下される。
アッラーは忘恩な罪深い者を愛されない。
【同章２７６節】

本当に信仰して善行に励み、礼拝の務めを守り、定めの喜捨をなす者は、主の報奨を与えられ、恐れもなく、憂いもない。
【同章２７７節】

あなたがた信仰する者よ、（真の）信者ならばアッラーを畏れ、利息の残額を帳消しにしなさい。
【同章２７８節　】

もしあなたがたがそれを（放棄）しないならば、アッラーとその使徒から、戦いが宣告されよう。
だがあなたがたが悔い改めるならば、あなたがたの元金は収得できる。
（人びとを）不当に扱わないなければ、あなたがたも不当に扱われない。
【同章２７９節】

リバーに関してのハディースには、よく知られたジャービル（彼にアッラーのご満悦あれ）のものがある。

「リバーを貪る者とそれを提供する者、またリバーを書き留めた者とそれの2人の証人は、皆一生呪われたものになるでしょう。[1]」

この重要なハディースでは、リバーを払う人と受け取る人、こういった取り引きに関係する両者は罪を犯しているので、その一生が呪われてしまうと説かれている。

このようにリバーについては、支払いまたそれを得ることも禁止されており、銀行の全ての種類の口座にかかるリバーも含んでいる。どうしてもお金を必要としている困った人にお金を貸す場合は、その行為は博愛の精神に基づくべきである。そこから利益をとるつもりで貸してはいけない。一方、商売や新しい事業への投資をして儲けを期待する場合は、お金を出す人も

[1] ムスリムの伝承による。

リスクを負担する用意がなければならない。またそれに対する決まった保障の額も期待してはいけない。お金を借りた人がリスクを背負い、一方で貸す人が全くリスクを負わないというのは公平ではない。イスラームでは多くの商取引の機会が認められている。人は平等に投資し事業に参加することができ、それに参加した人は平等に利益を共有することができる。

（３）詐欺行為の禁止

　イスラームでは、商売における騙しや詐欺の行いを禁止している。これらには品物または仕事の欠陥を隠すことも含まれる。それについての預言者のハディースがある。

アッラーの使徒ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）が、穀物を売っていた人のところへ立ち寄り、そこに手を入れた。そして中が湿気ていることに気がつき、商人に聞いた。

「これは何ですか」

「これは空から雨が降ったためです。」

「これを上にして、人びとに見せなさい。騙す者は我々の仲間ではありません。[1]」

　イブン・マージャ師もイスラームは博愛の精神に基づく商取引の実践を強調していると、次のハディースを引用している。

「ムスリムはムスリムの兄弟です。ムスリムは、問題のある品物を見せて売り買いします。[1]」

---

[1] ムスリムの伝承による。

（４）ハラームな事柄による収入の禁止

　富を得るための方法にも、いくつか禁止事項がある。盗みによるもの、賄賂によるもの、賭博によるもの、高いリスクを含んだ取引によるもの、自分自身がそれの消費者でなくてもイスラームで禁止されている商品で商売すること。例えば酒、猥褻なもの、麻薬などである。

第７章の終わりに

　この章では、信者と他の人々との関係について触れた。

　ムスリムは生活の隅々にまで信仰に基づいた行動をしなければならず、特にアッラーの被造物全てとの関係において、そうであるべきだということを述べた。人間はアッラーの被造物の１つとして、アッラーが受け入れてくださるような方法で、自分自身を規律することである。アッラーは人間の振る舞いを、正しい道へと導いている。

　これまでに述べてきたように、アッラーに創造された人間は他の人々に接するときに、勝手気儘にしてはいけないというこ

[1] イブン・マージャ、アハマド、ハーキムの伝承による。アルバーニー師は「正しい」と言っている。アルバーニー著　前掲書『サヒーフ　アルジャーミャー』Vol.2、p.1136。

とは明らかである。またアッラーは両親、子供、隣人、社会の人々に関することでも教えをくだされた。動物に関してでさえ、あるいは財産といったものに関しても、人間の正しい信仰を反映するマナーがあり信者であるならば、これに沿った適切な行動規範を守るべきであると説いている。ムスリムはそれらのマナーを守りながら力の限り生きていくのである。

第８章　信仰をより強く深くすること

この章では信仰はどのように強化すればよいのか、その方法について述べてみよう。前にも触れたが、ムスリムは信仰心に関して怠惰であってはいけない。信仰心は、強くなったり弱くなったりするからである。預言者ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）はこう言ったといわれている。

「ある人々は天国に入るための行いをしています。しかし、もうすぐで天国に手が届きそうなときに、地獄の人々と同じような行動をとってしまい、結局は地獄に入ってしまうこともあります。[1]」

ムスリムは自分の人生で明確な目標を持たなければならない。目標が明確であれば、その実現のための手段や対策を講じることができる。目標について考える際には、自分に害を与えるような側面または障害や問題点を把握することが大切である。うまく達成できないような悪い場合には、自分の進路を正す手段や方法を採る必要がある。

１．自我の浄化

筆者は別の冊子で、自我の浄化の概念について次のように定義した。自我の浄化とは健全なる精神の要素の維持と発展のための手法であり、何か良い要素を加えたり、精神の歪みを取り

[1] ブハーリーとムスリムの伝承による。

除いたり抑えたりする課程を経ることで、純粋な精神を構築することである。純粋な心でアッラーに仕え、自分の人生の目的も実現する。その最高の段階とは、イフサーン[1]の境地に入ることを意味する。

自我の浄化はそこに至るまでの過程であり、静的で固定された状態ではない。実際には躍動的な動きのある変化にあふれた状態である。人間は自分の能力次第で自我の浄化へ向かったり、そこから離れたりする。浄化の目的は、人間がアッラーの誠実で完全なしもべとなることである。アッラーは、その目標を次のクルアーンの節で明らかにしている。

ジンと人間を創ったのはわれに仕えさせるため。

【第５１章　撒き散らすもの章〔アッ・ザーリヤート〕５６節】

人生の目的とは、唯一なるアッラーに仕えることで、それをアッラーに受け入れてもらうことである。人間にとってアッラーに仕えることより他に高貴なことはないであろう。ムスリムはこの目的に向かって一生懸命努力し、その段階に達することで、本当の幸福感が得られると確信しなければならない。なぜならアッラーに帰依していると心から感じられるからである。マクリージィー師はイバーダ（崇拝行為）には、４つの段階が

---

[1] イフサーンとは、アッラーに帰依する際の最高の状態である。この段階に達すると、目の前にアッラーがまるで見えるような感覚を持って、仕えることができるといわれる。預言者はその段階について、次のハディースで述べている。（ムスリムの伝承による。）

「アッラーが見えるような気持ちでアッラーに仕えなさい。あなたには見えなくても、アッラーには見えているのです。」

あるとしている。１つ目は、どのようにしたらアッラーが受け入れてくださるかを意識し探求すること。２つ目は、それを心から行うこと。３つ目は、それを声に出して表明すること。４つ目は、体の中の有機的な組織全体をその方向に向けることであると述べている[1]。

アッラーに正しく仕えることを実現するには、４つの段階がそれぞれ重要となる。人間がアッラーに仕えることは、個人的な興味や哲学的なことや本能的なことに基くものではないと認識しなければならない。何よりアッラーが下された教えに基づくことである。アッラーだけが、どのように仕えるべきかを伝えることができる。第一の段階では、アッラーが何を要求しているのかを確認しなければならない。それはクルアーンとハディース（スンナ）にある正しい知識を学ぶことで実現できる。次に心に定着した知識を実践しようとする気持ちを芽生えさせることである。愛情の気持ちを持って、これが何より最良のことであると認識しなけばならない。これに伴い、アッラーへの信仰の受け入れを人々に告白する。自然な態度で善を実践することこそが、信仰の告白ともなる。

イブン・タイミーヤ師は、イバーダの意味を次のように説明した。イバーダの語源は、従属でありまた服従の意味も含む。道は人々が踏みしめて歩くことで「タリーク　ムアッバド

[1] マクリージィー著『タウヒード　アルムフィード（「唯一アッラーを信じることの抽象化」：訳者注）p.29。これは、イブン・タイミーヤ著『リサーラトゥ　アルウブーディーヤ（「アッラーに仕えるメッセージ：訳者注」）』の翻訳の一部を引用した。

（طريق معبَّد　踏み固められた道）」となる。信仰の道もこれと同じである。またアッラーに仕えることとは、命じられたイバーダだけでなく愛情の意味も含まれている。つまりアッラーへの服従とは、彼への最高の敬愛と言えるものである。

アラビア語では愛情のレベル[1]にはいくつかあるが、通常の段階ではアブドゥッラー（アッラーのしもべ）という言葉で表現される。最高の段階ではその人はアッラーが心から好きで全てに惹きつけられて至福の状態にあるということである。人が嫌悪の気持ちで服従したならば、仕えることにはならず、好きではあるが服従しなければ、これもまた仕えることにならない。アッラーとは自分にとって、自分の子どもや友人よりも大事な存在でなければならない。完全なる敬愛と服従に値するものは、アッラー以外にないのである。[2]

自我の浄化については、もうひとつ重要な点がある。それはイバーダにおける行動や宗教的、精神的な行動に関係しているだけではないと頭に入れなければならない[3]。前に触れたように、

---

[1] （本文には他に４つの愛情のレベルがある。アルイラーカالعلاقة：関係、アッサバーバالصبابة：心が注がれる、アルガラームالغرام：恋愛の感情、アルイシュクالعشْق：熱愛すること、アッタタイユムالتتيم：最高の愛情のレベルの五つである。：訳者注）

[2] アハマド　イブン・タイミーヤ著『リサーラトゥ　イブンタイミーヤ　フィーアルウブーディーヤ　（「アッラーに仕えることにおけるイブン・タイミーヤのメッセージ」：訳者注）』pp.37～38。

[3] 歴史を紐解けば、ある種の信心深い人々は間違った生き方をしてきた。人々の悩みに覆われた人生を見て、篤信の人は極端な決断をすることもある。彼らの中には世俗と縁を切った人もいる。世俗は悩ましく汚れており、それで人の魂が傷つくと考えているからである。そして社会の発展に寄与せず、宗教的に何もしなくなる。このような偏った方向性は宗教的にも間違っている。人は来世と現世のバランスのとれた生活を送るべきである。世俗のことで極端な行動に走らず、自分

自我の浄化は可能な限り人間がアッラーのしもべとなることである。イバーダは全ての生活を総括的に覆うものである。これについてはイブン・タイミーヤ師の説が一般的によく知られていて、受け入れられやすい。つまり、アッラーが受け入れてくださる内的、外的な行為や言論の総合的な概念と考えてよい。サラー（礼拝）、ザカート（喜捨）、サウム（断食）、ハッジ（巡礼）、正直に話すこと、預かり物を誠実に管理すること、親孝行をすること、親族とのつながりを大切にすること、約束を守ること、善きものを選び、悪しきものを避けること、偽信者たちや信仰を拒否した人々に対して屈することなく努力すること、隣人や孤児、困っている人、あなたの右手が所有するもの、家畜にも親切にすること、アッラーに祈願すること、クルアーンを読誦すること、これらのことはイバーダである。また、アッラーとその使徒への敬愛、アッラーを畏れること、アッラーに悔悟すること、アッラーのご満悦のためにイスラームの道に勤しむこと、アッラーの天命である決められた罰を受け入れること、アッラーからの恵みへ感謝すること、アッラーからの

の世俗も味わい、そして自身の使命も忘れてはいけない。正しい道は聖クルアーンと預言者のスンナそして模範的な教友たちの生活に示されている。人は次の節から学べるであろう。

アッラーがあなたに与えられたもので、来世の住まいを請い求め、この世におけるあなたの（務むべき）部分を忘れてはなりません。
そしてアッラーがあなたに善いものを与えられているように、あなたも善行をなし、地上において悪事に励んではなりません。
本当にアッラーは悪事を行う者を御好になりません。」
【第２８章　物語章〔アル・カサス〕７７節】

天命へ満足すること、アッラーに身を委ねること、アッラーの慈悲を願うこと、アッラーの罰を畏れること、これらもまたイバーダである[1]。

要するに、自我の浄化は内的にも外的にも人の生活の隅々にまで関係しているといえる。イスラーヒ師が言うように、それは我々の考え方や気持ちの持ち方、精神の性向、精神の動き、人生の目的の動向など全てに関係する。また飲み食いなどの生活全般そして約束、趣味、利害など自分の人生全てに関係する[2]。

ムラード師はここで重要な点を示している。それは自我の浄化から得られる１つの教訓であり、同時に人生の総合的な１つの目的も示している。人生を全体的な過程として見ないならば、人生のそれぞれの側面が別々の部分に分かれていると感じるだろう。それはお互いに矛盾し、不満や対立を人生にもたらす。一方それを全体的なものと捉えれば、部分は全体の１つとして有機的に機能し、幸せな人生の完成に向かって補完し合うもの

[1] アハマド　イブン・タイミーヤ著『マジュムーア　アルファターワー（「イスラーム法に従った判決」訳者注：）』p.449。学者はイバーダの言葉を使うときには、２つの意味を意図している。そのため時折、誤解を招くときがある。イブン・タイミーヤ師は、ここではイバーダードを総括的な行為として使っているが、ときにはイバーダの行為のみ指すこともある。イスラーム法の解釈書には、イバーダードの章があり、体を清めることや礼拝、喜捨などを指す。またムアーマラート（社会的な人間関係、商業取引、マナー、道徳、礼儀）の章がある。ここの本文の意味は、行為の全てを含むイバーダードのことである。

[2] アミーン　アハサン　イスラーヒ著『タズキヤトゥ　アンナフス（「自我の浄化」：訳者注）』アーダム出版、インド、デリー、2000 年、p.21。

となる。インシャーアッラー、これは天国へ入るための恵みにあふれた至福の道への易しい方法である[1]。

２．信仰の強弱の波

　次にあげたクルアーンからも分かるように、人間の信仰心は深まったり弱くなったりするものである。

・・・かれらに印（しるし）が読誦されるのを聞いて信心を深め、・・・

【第８章　戦利品章〔アル・アンファール〕２節】

　　勝利章にも次の記述がある。

　かれこそは、信者たちの心に安（やす）らぎを与え、
かれらの信心の上に信心を加えられる方である。
・・・

【第４８章　勝利章〔アル・ファトフ〕４節】

　人びとが、かれらに向かって言った。
「見なさい、あなたがたに対して大軍が集結している。かれらを恐れるべきである。」

[1] ホラーム　ムラード著『フィー　サーアートゥ　アッサバーハ（「精神浄化についての早朝の熟考」：訳者注）』イギリス、2000 年、p.16。

だがこのことが却（かえ）ってかれらの信仰を深めた。そして「わたしたちには、アッラーがいれば万全である。かれは最も優れた管理者であられる。」と言った。

【第３章　イムラーン家章〔アーリ・イムラーン〕１７３節】

人間の行動の外的な表れ方には、様々な相違があるのは当然である。これは信仰の揺れとも考えられるが、信仰の揺れがただ１つの原因だと考えてはいけない。信仰の全ての局面には大小の起伏がある。特に心の持ち方、信仰心、確信の状態は人生の中で変わることはありうる。人それぞれなのである。アッラーへの敬愛、畏れ、信頼についても、人の心は変わりやすく、不安定である可能性は高いといえる。

人間には上のクルアーンの節にあったような、理想的なときがあっただろう。あるとき人は十分にアッラーへの畏れを意識している。強い気持ちのときは安らいで落ち着きがあり、暖かさに包まれていると感じることができる。それが人間を罪の行為から遠ざける。人はアッラーのご満悦のために一生懸命努力したり、夜中に起きて礼拝したり、貧者や必要な人に施しをするという行動をとる。

人生のあるときには世俗のことに忙しく、慌ただしくなればなるほど、アッラーへの気持ちは弱くなっていく。心の中に崇高な信仰から来る心情を感じなくなっていく。そうなれば、その人の振る舞いは信仰の深いときには及ばないものとなる。この期間は夜中の祈りを忘れ、施しもしなくなる。自分の魂が重

くなっていくような感じである。アッラーに自分の心を捧げる気持ちも減っていく。

つまり、人間の心とは振り子のようなものであるといえる。アッラーへの信仰と讃美の心に満ち溢れたときもあるが、ときには家族や友人との世俗的な出来事に紛れ、この心持ちを守り切れない場合もあるだろう。このような状況はアブー・バクル（彼にアッラーのご満悦あれ）[1]でさえあったといわれている。

あるときハンザラー（彼にアッラーのご満悦あれ）は嘆きながら、アブー・バクル（彼にアッラーのご満悦あれ）の所を通りかかった。彼は聞いた。

「どうしたのですか。」

「我々は預言者様が地獄と天国の話をするのを聞いていると、まるでそれらが見えるようになってきます。しかし家族の住処に戻れば、すっかりと忘れてしまうのです。」

「私も同じです。」とアブー・バクル（彼にアッラーのご満悦あれ）は答えた。

人間はそういった弱くなるときのことを予測し、信仰の深いときの揺るぎない気持ちを記憶し続けるように気を配るべきである。人間の心の確信、明証、知識などは、人によって時期によって異なるものだからである。

イブン・タイミーヤ師は「預言者の教えを知っている人の信じる心と、教えの詳細について無知な人とは、もちろん違っている。またアッラーの名前や属性について、または来世につい

[1] （初代正統カリフ。このハディースの出典の記述はない。：訳者注）

て学んだことのある人は、学ばない人々とは同じ意識の状態にはない。[1]」と書いており、「信仰の徴を知っており、教義の違いを知識として理解する人の信仰は、そうではない人に比べて、もっともっと深くなるであろう。[2]」とも述べている。

また師は、「信仰に対する人間の心ほど、変わりやすいものはない。人々は信仰の要素を考えるとき、この事実を知るべきである。信仰の要素の１つである愛情について考えるときにも、様々な段階があることを意識しておく。愛情とは、時折自分の好きな恋人と一緒になりたいという種のものがある。ただ一緒にいたいだけという段階もある。ときには離れられないという段階に達することもある。」と結論づけている。[3]　アッラーへの信仰もこれと同じである。

信仰心の強弱は、学者の理論の相違だけではない。人は自分の信仰はしっかりしていると思い込んでしまったならば、より深くするための努力をしなくなる。弱くなっても気付かない。これは非常に危ない状況である。信仰とは、弱くなったり強くなったりする流動的な存在であることを自覚しておかなければならないのである。特に弱くなっていくときの兆候に注意しなければならない。そして信仰が強くなる道に戻るよう努めなければならない。こういった際の模範は、預言者のサハーバ（教友）たちの行動である。

---

[1] イブン・タイミーヤ著　前掲書『アルマジュムーア』p.564。
[2] 同上書、pp.565～566。
[3] 同上書、pp.566～567。

教友の１人は、別の教友に次のように呼びかけたという。

「一緒に信仰の道を深めよう。」[1]

　クルアーンを一緒に読誦するとか、アッラーを讃美しようと呼びかけることが、他のムスリムに対して信仰の復活を助け、イーマーンの道へと誘う行動なのである。

３．信仰を深めること

　誰かがイスラームのシャハーダ（入信告白）をすると、真のムスリムになるための正しい道を辿り始める。シルク（多神崇拝）には、いろいろな形態がある。そういったことから自分を浄化するのが、真のムスリムになるための第一歩である。この歩みは非常に重要で、それなしには他の善い行動をしたとしても無意味である。これは一度にできることでもなく、その確実さに変動がないということでもない。

　ムラード師は、新しくムスリムになった人の意識について、次のように言っている。「あなたには重要な使命がある。それは信者になってアッラーのご満悦のために努力することである。その初めには、イスラームの知識が限られていると感じ、または他の人が期待し望んでいる段階には達していないと感じることもあるだろう。しかしこれは当然のことである。あなたのその惨めな気持ちがイスラームの努力を削ぐことにならないように、また引け目のある気持ちを強まることがないように、結果

[1] ブハーリーの伝承による。

としてイスラームの教えの実りを阻害しないように気をつけたほうがよい。イスラームというのは、より良く最善に近づけるように努力し続けることを勧めている宗教である。日夜自分を改善する努力を続ければ、それがいつか実るようになる。一旦アッラーに帰依すれば、アッラーに近づくために、あなたの全てのものを惜しまないことである。これは最高の目標であるが、理想というものはたいていの場合実現しにくいもので、それを意識しつつ現実を受け入れるしかない。理想とはそれを目指す人の目標であり、簡単に実現できたらそこで留まってしまい、最高の理想を目指すようにはならないであろう。クルアーンの【第９章　１１１節】[1]からその意味が読み取れる。約束を守るということは、あなたが守るべき理想的な行為である。アッラーのご満悦のために、我々の持つ力を惜しまず、一生懸命努力していくことがジハードということなのである。それが自我の浄化というべきものである[2]。

---

[1] **本当にアッラーは、信者たちからその生命と財産を贖（あがな）われた。**
かれらのため（の代償（だいしょう））は、楽園である。
かれらはアッラーの道のために戦い、殺し、また殺される。
それは律法と福音とクルアーンとを通じて、かれが結ばれる真実な約束である。
誰（だれ）がアッラー以上に、約束に忠実であろうか。
だからあなたがたが結んだ契約を喜べ。
それこそは至上の幸福の成就である。
【第９章　悔悟章［アッ・タウバ］１１１節】

[2] ムラード師は同じ著書の別の箇所（p.13）で「望みはあなたの努力や成功の中心であり、アッラーが受け入れてくださるための行動は、必ずや成功を導き、望みの実現に寄与すると信じなければならない。なぜならば、優越感はそれ以上前へ進む妨げとなる。またその反対に劣等感を持つことも、自分自身への自信とアッラーへの信頼も失っていく。自分自身が求められたことを実現できないと諦めてもいけないし、アッラーの慈悲も諦めてはいけない。自信と望みは、成功のため

人は初めてイスラームに入った時点で、自分の心がシルクから明確に疎遠になっていると信じていても、純粋なるタウヒードの教えを完全に全て理解したことにはなっていない。自分の心の中には、依然として多神教や無神論の考えが潜んでいることもある。アッラーはこのことについて、ベドウィンたちの例えを引いて告げている。

砂漠のアラブたちは、「わたしたちは信仰します。」と言う。言ってやるがいい。「あなたがたは信じてはいない。
只（ただ）『わたしたちは帰依します。』と言っているだけで、
信仰はまだあなたがたの心の中に入ってはいない。
もしあなたがたが、アッラーとその使徒に従うなら、かれはその行いに就（つ）いて、少しも（報奨を）軽減されることはない。
本当にアッラーは寛容にして慈悲深くあられる。
【第４９章　部屋（へや）章〔アル・フジュラート〕１４節】

預言者ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）の時代の新ムスリムたちは、アラビア語を流暢に話し、クルアーンの意味について十分な理解ができたにもかかわらず、純粋なタウヒードの教えに関しての誤解もあったという。啓示の時代にも同じようなことがあった。次のハディースを読んで、この

の重要な要素である。」と自信と希望を持って努力することの価値について書いている。

ことについて考えてみよう。アブー・ワーキド　アッライスィー の伝承によれば、次のような話が伝えられている。

　預言者ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）がフナインの戦いに出かけたときに、多神教徒たちがいつも利用しているザートゥ　アヌワートと呼ばれる樹のそばを通った。彼らはそこで休んだり、枝に武器を吊り下げたりしていた。
ムスリムたちは預言者に言った。
「彼ら（多神教徒）と同じようなザートゥ　アヌワートの樹をお願いします。」
「スブハーナッラー！」と嘆じながら、預言者は言った。
「ムーサーの民も同じことをしたのです。彼らは『わたしたちにも、偶像をください。』とお願いしたのです。[1]
我が身を御手に委ねられたお方に誓って言うが、あなたたちもまた前の慣行と同じように従っていくのでしょう。[2]」

　ムスリムの信仰への視野が広がれば、視界はもっと明らかになってくる。この視野に入る事柄は、既知のことかもしれないし、まだ体験したことがないことかもしれないが、新しい信仰

---

[1] （クルアーンより関係の深い節を引用した。：訳者注）
　われはイスラエルの子孫に海を渡らせたが、
かれらはある偶像に仕えているある民族のところに来た。かれらは言った。「ムーサーよ、かれらが持っている神々のような一柱の神を、わたしたちに置いてくれ。」
かれは言った。「本当にあなたがたは無知の民である。
【第７章　高壁章〔アル・アアラーフ〕１３８節】
[2] アハマドとティルミズィーの伝承による。アルバーニー師は「正しい」と言っている。アルバーニー著　前掲書『サヒーフ　スナン　アッティルミーズィー（「ティルミーズィーの集めた正しいスンナ」：訳者注）』Vol.2、マクタブ　アッタルビーヤ　アルアラビア出版、リヤド、サウジアラビア、1998 年、p.235。

とそれにつながる理解によって、ムスリムの自我の浄化を進め、人々が今まで触れにくいとされた問題に関しての、自分自身の精神的な成長を促すことになるだろう。

イブン・カイイム師の次の話は、イスラームに入ったときや教えを守るときに直面する教義のある側面に焦点を当てている。「イスラームに入信し教えを実践していく中で、彼らの中に今まで存在しなかった心の側面が表れてくるかもしれない[1]。信仰が深くなればなるほど、その側面は少しずつ強くなり、期待された成果が実り始める。例えを出して説明するならば、新しく入信したばかりのムスリムであれば、雨が降っているのを見たとき、彼の頭に浮かんでくるのは、前日の天気予報かもしれない。雨が降りやすい状況だから雨が降ったのだと考え、単純に受け取るだろう。一方、アッラーについて知識の深い信者ならば、アッラーが雨を降らせてくださり、雨も偶然には降らないと認識しているので、この雨がアッラーからの慈悲になるかもしれないし、アッラーから罰の１つになるかもしれないと考えるのである。」

同じく師は、また次のように書いている。「アッラーに仕える人は、アッラーの唯一性を知っている。唯一性というのは、害も益もアッラーからのものであると信じることである。与えること、与えずにおくこと、創造と分配、生命を与えること、死なせることなどの全てがアッラーの御許にあることを知って

---

[1] （つまり、今までそのように考えることのなかった意識、そういう側面が掘り起こされてくるということである。：訳者注）

いる。人間は全てのことをアッラーに任せるしかないこと、外的（表面的）なこと、その必然性を受け容れること、それらの実りについても知っている。アッラーがそれら全てについて見、聞き、知るということも理解している。アッラーは空と大地の一微塵の重さのことも、つまりほんの些細なことも知っているのである。そして内的なこと、隠されたこと、例えば瞳の中、胸の中に隠されたことも知っている。それを理解することが自分の口、体を守ることにつながるということも[1]。アッラーは、ご自身が受け入れられないような心の思いつきまでも知っておられる。そのため、人は身体ごと全てが、アッラーに惹かれるように生きるべきである。そこから、恥ずかしさの気持ちが生じてくる。その恥の気持ちが人を禁止された行いから遠ざけるのである。アッラーの価値、アッラーの恵み、アッラーの慈悲を確信することで、人間はアッラーに対する望みを大きくすることができる。人間の知識いかんで、真に仕えるための方法が見えてくる。内的にも外的にも、アッラーに仕える方法が分かってくるのである。そしてアッラーの偉大さも分かり、アッラーに帰依することや敬愛の気持ちが心に芽生えてくる。アッラーの完璧さ、その属性、仕えること自体に喜びを見出すようになるなど、特別な敬愛を持つことができるようになるのである。[2]

[1] （自分の体を悪いことには使わないということである。：訳者注）
[2] イブン・アルカイイム著『ミフターフ　ダール　アッサアダ（「幸せの家の鍵」：訳者注）』Vol.2、p.90。

アッラーのしもべになるための自我の浄化の手段については、クルアーンとスンナに例が示されており、その道はまるで太陽が輝くほどの明るさである。人の志が正しければ、それに従うことは容易なことである。クルアーンとスンナを守りたいと希求している人の手の届くところに、その方法は存在する。

自我の浄化と信仰が深くなるための道は、３つの基本的要素から成り立っている。１つ目は、教義に沿って自分自身を修正していくこと。２つ目は、やらなければならない行いを実行することでアッラーに近づくこと。３つ目は、スンナと決められた行いに加えて自発的に追加の行為をすることで、アッラーへますます近づくことである。

４．アッラーに対しての正しい信仰

正しい信仰は、自我の浄化への第一歩である。現世と来世の真の成功への鍵でもある。アッラーは次のように告げている。

だが自ら清めた者は必ず栄え、

【第８７章　至高者章〔アル・アアラー〕１４節】

クルアーンの解説者はこの節を指して、人はシルクとクフルから逃れ清められると述べている[1]。イブン・アッバース（彼に

[1] この節の解釈、クフルとシルクが指すことについて、次の書を参照のこと。ファハル　アッラーズィー著『アッタフスィール　アルカビール（「詳しい解釈」：

アッラーのご満悦あれ）も、この節は自分自身をシルクから清めることであると説明している[1]。

アッラーの正しい教義からのずれが、人間を惑わせる原因になっている。

別の言い方をすれば、今日の大部分の人々はアッラーへの信仰を拒否してはいない。しかし、彼らの信仰は個人の気まぐれな思い込みや欲望の上に成り立っている。または闇雲に単に模倣する道を選んでしまっている。これらの考え方は歪められており、神の源泉にさかのぼるものではない。人柄が良いならば、また人に害を与えなければアッラーは彼らを拒まず、容易に天国に入ることが可能であると、今日では多くの人が考えている[2]。彼らは人が穏やかな行動をとってさえいれば、アッラーへの正しい信仰を求めたりすることはどちらでもよく、シャイターン（悪魔）に仕えようが、百体の偶像を信仰しようが、大して重要な問題とはならないと考えている節（ふし）がある。こういった発言を良く耳にはするが、実のところただ人間が考え付いたことで、全てが絵空事でそれを証明する根拠はないのである。

訳者注）』Vol.31、ダール　ヤフヤー　イヒヤー　アットラース　アルアラビー出版、ベイルート、レバノン、pp.146～147。

　またもう一つの文献がある。ジャラール　アッディーン　アッスユーティー著『アッドゥッル　フィー　タフスィール　アルマスウール（「格言や民間伝承の解釈の真髄」：訳者注）』Vol.6、ダール　アルクトブ　アルイルミーヤ出版、ベイルート、レバノン、1990 年、pp.567～568。

[1] アッタバリー師の解釈による。前掲書、Vol.15、p.156。

[2] 筆者はこの文章をキリスト教やユダヤ教の人々から聞いたことがあり、またムスリムからも聞き、興味深く感じた。

信仰告白の「アッラーの他に崇拝すべきものはなく、ムハンマドはアッラーの使徒である」の２句のうち、前の句「アッラーの他に崇拝すべきものはなく、」はイスラームへ向かう人間の旅の始まりであると言ってもよい。それは自我の浄化や正しい教義、そして全てのシルクから心を解放することにつながるアッラーへの道である。

シルクは罪である。特に人間自身に対する尊厳に対する重荷である。人間が仕えるに値しないものに服従しているからである。アッラーはクルアーンで次のように告げている。

さてルクマーンが、自分の息子を戒（いまし）めてこう言った時（とき）を思い起しなさい。「息子よ、アッラーに（外の神を）同等に配してはならない。それを配するのは、大変な不義（ふぎ）である。」

【第３１章　ルクマーン章　１３節】

一方、今日では他の宗教のある一部の教義にも、シルクの側面がある。イスラーム以前の宗教であるユダヤ教とキリスト教にも、シルクに堕ちるような部分がある。一般的に、それを信じる人の中には意味のない極端な行動に走ることもある。彼らの中ではシルクは納得できないと潜在的に意識しているにも関わらず、自分の欲望を叶えるために安易なそれに堕ちたりもする。アッラーは次のようにお望みならば、シルク以外の全ての罪を赦すとも言っている。

本当にアッラーは、（何ものをも）**かれ**に配することを赦されない。
それ以外のことに就いては、御心に適う者を赦される。アッラーに（何ものかを）配する者は、まさに大罪を犯す者である。
【第４章　婦人章〔アン・ニサーア〕４８節】

また【同章　１１６節】でも、繰り返している。

誠にアッラーは、（何ものをも）**かれ**に配することを御赦しになられない。だがその外のことは、御心に適えば御赦し下される。
凡そアッラーに同位の者をあげる者は、確かに遠く（正道から）迷い去った者である。

アッラーと同等に他の何かを並べることは、地獄に入ることを意味し、間違った道を辿ろうとすることである。アッラーも彼らのことを受け入れられないであろう。これについては次のクルアーンの章がある。

・・・
凡そアッラーに何ものかを配する者には、アッラーは楽園（に入ること）を禁じられ、かれの住まいは業火である。不義を行う者には援助者はないのである。
【第５章　食卓章〔アル・マーイダ〕７２節】

　繰り返すが自我の浄化の過程では信義が大切であるが、まずはシルクではないということが重要であり、絶対条件である。前へと進む前に、まずタウヒードの上に立って己が心を清めることが不可欠である。これなしでは、後の行いは無意味なものになる。そして純粋にアッラーのご満悦のために行動する意志がなければ、アッラーに受け入れられないであろう。これについては次のハディースがある。

「アッラーはこう言われた。われはシルクから最も遠くにいる。何かの行動を起こすとき、われと同等に他の偶像を入れるならば、われは彼を見放すだろう。[1]」

５．預言者に対するムスリムのマナー

　預言者ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）に対するマナーは、神の唯一性や自我の浄化と直接に関係している。人がムスリムになって自我を浄化する道を辿り始めるのは、シャハーダ（信仰告白）をしてからである。

　信仰告白は、よく知られているように異なった２句でできている。内容は違うがどちらも宗教イスラームの基本である。「アッラーの他に崇拝すべきものはなく、ムハンマドはアッラーの使徒である。」この２句を信じると告白することが、アッラーに帰依することを表し、預言者ムハンマド（彼にアッラー

[1] ムスリムの伝承による。

からの祝福と平安あれ）を通してもたらされたシャリーアを受け入れることになる。２つの意味するところを信じるということは、預言者の教え通りにアッラーに仕えるということである。

　全ての人は預言者がどんな人で、どんな行動をしたのか、自我の浄化における彼の役割とは何かを理解する必要がある。端的に言えば、預言者の役割は人間の模範になることであった。全てのムスリムは預言者の行動を見習わなければならない。アッラーの手引きの通りに実践された預言者の人生、その「振る舞い」及び「マナー」は人々に良い模範を示してくれている。礼拝のやり方にしても、断食のやり方にしても、正しく善いもの選択するに際しても、預言者の辛抱強さにしても、アッラーに対する敬愛の仕方にしても、篤信の信者になるために精進する方法にしても家族、親族、友人、孤児との交流の仕方においても、いかなるときにも模範となるのである。

　イブン・カイイム師は自我の浄化の際に、人々が預言者を指導者として捉えず、精進できなかった場合について次のように語った。「自我の浄化は預言者たちに委ねられている。アッラーは人々の浄化を進めるための担い手になるように、それぞれの預言者を遣わしたのである。また彼らはその正しい道へと人々を引き戻すためにも遣わされた。クルアーンにもそれは明解である。

かれこそは文盲（もんもう）の者の間に、かれらの中（うち）から使徒を遣わし、印（しるし）を読み聞かせてかれらを清め、啓典と英知を教えられた方である。
本当にかれらは、以前は明らかに邪道にあった。

【第６２章　合同礼拝章［アル・ジュムア］２節】

自我の浄化は、体の治療よりも難しいものがある。自分だけでそれをしようとしている人は、まるで自分勝手な方法や根拠のない隔離によって自分で病を治そうとしている病人のようなものである。使徒は心の医者とも言うべき存在であり、体の治療に関しては病人よりも医者の方が詳しいにも関わらず、これまでの使徒はこのための指導はしてこなかった。浄化は病人が医者に従うように、使徒や預言者の教えに従うことによって実現することができるのである[1]。

預言者ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）は、アッラーに近づきたい人のため、また来世の天国を手にしたい人のために、人々の模範としてアッラーから遣わされたのであるとクルアーンには書かれている。

本当にアッラーの使徒は、アッラーと終末の日を熱望する者、アッラーを多く唱念する者にとって、立派な模範であった。

【第３３章　部族連合章〔アル・アハザーブ〕２１節】

---

[1] イブン・アルカイイム著　前掲書『マダーリジュ　アッサーリキーン（「アッラーへの道」：訳者注）』Vol.2、p.302。

　正しい信仰を持っている信者は、自らの生活をシャリーアに照らし合わせて行い、預言者ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）を模範にして、一生懸命励むことである。

　イスラーヒ師が述べているように、模範とは預言者に従い彼の行為を遂行することなのである。遂行するとは従うことよりも意味は広い。イスラーヒ師はこう説明している。「従うことが意味するのは正に服従である。守るべき戒律や確実なスンナや禁忌が基本にある。人は命令に対しては誠実さや敬愛を持たずに従えるかもしれないが、本当の意味での模範的な行動の遂行には、畏れの気持ちや肯定の気持ちが基調になっているはずである。教友たちが一生懸命に熱意を持って預言者に従った背景には、アッラーへの畏怖と敬愛の気持ちに裏打ちされていたからである。生活の全てにおいて預言者に従うことが、そのままアッラーへの帰依につながったのである。預言者ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）は、アッラーが望むことの体現者であり、預言者の振る舞いの全てが、その事実を示す証明ともなっている。アッラーを敬愛する人は、アッラーの使徒をもまた愛するであろう。アッラーの存在を生活の中で手本として示した預言者の人生は、人々にとって得難い存在となった。人はアッラーへの道を良く知ることになり、預言者がアッラーの好む行いをすることで、それを見習うことができたからである。我々の行動全てがアッラーのご満悦のために行われ

るのであれば、アッラーの報奨は必ず与えられるだろう。それは次のクルアーンにも明らかである。

言ってやるがいい。「あなたがたがもしアッラーを敬愛するならば、わたしに従え。そうすればアッラーもあなたがたを愛でられ、・・・」

【第３章　イムラーン家章〔アーリ・イムラーン〕３１節】

ここで特筆すべきもう１つの重要な事柄は、預言者ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）を信じることである。預言者は規範そのものの存在であるということである。預言者の暮らし方や日常のあり方が重要で、信仰について預言者を超える模範はいないといえる。預言者よりもアッラーに近づき親愛の情を示した者は、他にはいないのである[1]。預言者への強く深い愛情と敬愛は、ムスリムのイーマーンの条件の１つである。言い換えれば、信仰はそれなしには成り立たないものである。そして自分自身の浄化もできないのである。この事実を自分のものにし、それに沿うように行動するべきである。預言者への敬愛については、次のようなハディースもある。

---

[1] 預言者ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）はこう言った。（ムスリムの伝承による。）
「アッラーはイブラーヒームと同じく私を近しい者にしました。もし私がウンマの中から自分における同様な者を選ぶとしたら、アブー・バクルを選ぶでしょう。」

「人々は、親や自分の子供も含めた全ての人よりも、預言者のことが好きにならなければ、真の信者とは言えないでしょう。[1]」

　預言者に対する真の敬愛について、イスラーヒ師の素晴らしい指摘がある。「人間は、信念や教義を深めそれに邁進する際、それを守り進めるためには、他の信念や暮らしのあり方を犠牲にしてもよいと考えるものである。他の事柄はおろそかになってもいいと思えるようになる。人は自分が心から信じる信念を曲げることは決してできないのである。例えば、自分の中で相矛盾するものがあり、心の葛藤があったとしても、最も大切な核は切り捨てることはできない。それを妨げる者がいたとしたら、彼らと戦うであろう。家族への愛情を捨ててまで守るべき信念を持ったならば、妻や子供、親族が自分の信念に対して反対したとしても、それを切り捨てることはできないのである。それが家族や民族の要望に沿わず国とも相容れないことになったとしても。[2]」

　真の敬愛が人間の心に定着したときに人は自分が好きなものを模範にし、それに追随することになる。これは人生の全ての面に及ぶ。例えばある俳優やスポーツ選手、芸能人が好きなファンは、彼らの行動を真似しようともっと詳しく知りたいと思うだろう。信者であればこのファンの行動も理解できるというものである。預言者を手本におく人々の預言者への献身的な愛

---

[1] ブハーリーとムスリムの伝承による。
[2] イスラーヒ前掲書、pp.95～96。

情は、そのようなファンの心境よりもずっと強く純粋なものである。

理想的な形で自我の浄化を実現するためには、預言者ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）に対する人間の気持ちを確認する必要があるだろう。預言者を信じスンナに従い、彼の生き方を敬愛できるような方向に進むべきである。人はこれらの条件を満たすことによって、魂の浄化をもたらす約束された道を歩み始めることになる。これが預言者ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）の伝えるメッセージの主な目的の１つである。

ここでムラード師は、自我の浄化についての興味深い話を紹介している。彼は、西洋社会における物質主義的な傾向について語っている。西欧社会では見えない世界を軽視もしくは否定しており、物質的なことから全てを測ることが基準になっている。これ自体がイスラームに矛盾することであるが、その西欧社会の風潮がイスラーム世界に忍び寄ってきていることについての懸念も述べた後、自分の経験を語っている。

「私は西欧の社会で暮らすと決めたときに、光の源へ向かうにはアッラーの道の他にはないと確信していた。そして預言者も同じような状況に直面したということに想いを馳せた。私の状況は預言者ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）が啓示を受けたのちに、神のメッセージと共にヒラーの洞窟から降りたときの状況と同じであったと思い至ったのである。預言者は混乱した世の中で人々の人生をアッラーと結びつけるこ

と、神のメッセージを人々に伝えることを自分の使命として行ったのである。そう考えることが私にとっての出発点だった。また科学や文明の中心にも、アッラーの存在が必要であると考えるべきであろう。このイメージはこれから生きる西欧の社会では少し奇妙に思えるメッセージかもしれない。重ねて言うが、西欧の社会の暮らしの中でイスラームを実践していくことは、預言者のスンナに沿って生きることである。そうすることで、我々のイスラームのアイデンティティーを守ることができるのである。ムスリムは理性的で論理的な行動をとるだけでなく、人情のある社交的な人として振る舞うことも大切である。預言者のスンナがそのモデルとなるだろう。預言者のスンナに従うことがアイデンティティーを守り、それを維持し発展させて前へと進むことができると確信している。[1]」

６．善行をすること

　クルアーンの多くの箇所で、アッラーは次のことを明示している。信仰告白だけ、あるいは実りのない形だけの信仰によって、救いの鍵を得ることはできない。鍵は善行の原動力となる真の信仰にこそ存在する。学者たちは心（教義）のみならず、口（言葉で唱えること）や体（実践すること）のレベルでも信仰へ向かうことが大切であると説く。従って善行の実践なしに

[1] ムラード前掲書、pp.91～93。（ページ数は英文より引用。：訳者注）

は、信仰の完成の道へと踏み出すことにはならないのである。アッラーは善行と信仰とを結びつけ、次のような節を用意している。

誰でも善行に励(はげ)み、信仰している者は、決してその努力を虚(むな)しくされることはない。われはかれらのために、必ず（それを）記録している。

【第２１章　預言者章　〔アル・アンビヤーゥ〕９４節】

救いの唯一の道、地獄から救われる道とは、真の信仰と善行である。それは次の各節でもアッラーから告げられている。

時間にかけて（誓う）。

【第１０３章　時間章〔アル・アスル〕１節】

本当に人間は、喪失(そうしつ)の中にいる。

【同章　２節】

信仰して善行に勤(いそ)しみ、互いに真理を勧(すす)めあい、また忍耐を勧(すす)めあう者たちの外は。

【同章　３節】

別の箇所ではアッラーが、それぞれの人を信仰と善行により、天国あるいは地獄に振り分けると告げている。

いや悪い行いを重ね、自分の罪で身動きが出来なくなるような者は皆、業火（ごうか）の住人である。その中に永遠に住むのである。

【第２章　雌牛章〔アル・バカラ〕８１節】

だが信仰して善行に勤（いそ）しむ者は楽園の住人である。その中に永遠に住むのである。

【同章　８２節】[1]

自我の浄化を成し遂げ、アッラーから好かれる存在となるための第二の方法[2]は、アッラーが信者に課した行いを実行することである。（善行もまたアッラーへの信仰と共に、行わなければならない。信仰と善行の２つの間には動的な関係があり、ある人々には意識されず理解もされないが、善行を積み重ねた経験者にはその関係は明快である。）以上の点については、すでに前述したことであるが、次のハディースでも、同じようにそれを指摘する話が伝わっている。

アッラーはこう告げたと、預言者ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）は言う。

---

[1] 人は最も善い行いをしても、天国に必ず入れるというわけではない。善行によってアッラーはその人間に慈悲と恩恵を与える。それによって天国へ入ることになる。善行をしなければ、アッラーの慈悲も恩恵も頂けない。預言者ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）もハディースによってそれを再確認している。

「天国にアッラーの慈悲なしに入る人はだれもいません。」と彼は言った。
「あなたもそうですか。」と人々は聞いた。
「もちろん、私もそうです。アッラーの慈悲なしには入れません。」
（ブハーリーの伝承による。）

[2] （第一の方法は、真の信仰と結びついた善行であろう。：訳者注）

「アッラーが最も好む行いは、アッラーが課した行いである。・・・[1]」

ここでは、課せられた行いにまず焦点が当てられていると気が付くであろう。それは非常に重要な点である。人は自発的に追加の行為をする前に、まず課せられた行いを果たしてからと考えるべきである。

アットゥーフィー師は「課せられた行いは決められている。それをしなければ罰が下される。その点で自発的な追加の行為とは異なっている。恩恵を得る点では共通しているが、課せられた行いをまずは優先しなければならない。アッラーによって第一に好まれる課せられた行為とは、宗教の土台のようなものであり、追加の行為は、その土台の上に立つものである。課せられた行為をすることは、アッラーに帰依と敬愛の心を持つことと相等しい。それによってアッラーの性質の素晴らしさを感じるのである。[2]」

課せられた行為は地に張る根のようなもので、自発的な追加の行為は、枝のようである。土台の部分をしっかりと守り、アッラーへ懇願する気持ちを表すことが、アッラーに受け入れてもらう最も良い手段となる[3]。

---

[1] ブハーリーの伝承による。
[2] アハマド　ファリード著『アッタズキヤ　バイナ　アハル　アルスンナ　ワ　アッスーフィーヤ（「精神浄化　スンナの人々とスーフィズムの人々との間(はざま)で」：訳者注）』（出版年はなし）、p.22。（出版社の記述はない。：訳者注）
[3] 参照：アハマド　イブン・ハジャル著『ファトフ　アルバーリ　ビ　シャルヒ　サヒーヒ　アルブハーリー（「サヒーフ　アルブハーリーの解釈による主の開

つまり人間は課せられた行為なしには、懇願や従う気持ちを証明することはできないのである。言い換えれば、浄化の道へと向かう素晴らしくもあり重要でもある課せられた行いをまず実行するのである。

課せられた行いは４つに分類される。

・課せられた心の行い

・イスラームの戒律と関係ある行い

・その他の課せられた行い

・アッラーが禁止したことから離れる行い

人は正しい方法で課せられた行いをすれば、自我の浄化のある一定の段階に到達したことにもなる。そこに至ってもその過程は、その段階に留まるものではなくなる。なぜならば、課せられた行いをする中で、人は浄化を実現するための行い自体が好きになってくるのであり、その段階にある人はアッラーにもっと近づくために、また更なる善行をしようと考える。従って浄化の第三の方法としては、課せられた行いに加えて自発的な善行を進んですることである。称賛に値する行為とは、はっきりと課せられた行い以外の全ての善行である。それには道徳的な美徳に満ちた様々なレベルのものがある。行為のあるものは預言者ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）も推奨している。預言者と同じレベルのことを人々に勧めてはいないが、言い換えれば、自発的な追加の善行の中には、重要なも

示」：訳者注）』Vol.13、マクタバ　アッティジャーリーヤ出版、マッカ、サウジアラビア、1993 年、p.145。

のとそうでないものがあるということである。善行の重要性次第でアッラーに近づく度合いが変わってくる。重要な行為ではより恩恵も増しアッラーにも近くなる。ここで再確認のために前述したハディースを再び思い出してみよう。アッラーが好むのはまずは定められた行為である。その上に立っての善行であることは、言うまでもないことである。

最後になるが、この道程は必ずしも長い期間を必要とはしない。この道程は決まった段階を踏むということもない。だれでも正直でアッラーに忠実であれば、短い期間であっても、純粋で清廉な信者となることが可能である。純粋さや誠実さという徳は、ちょっとした善行をすることで実現できるかもしれない。というのは決められた行いはすでに完遂されているからである。その行程を辿ることで、アッラーへと向かう道は連綿と続いていくのである。ここで純粋な信者であった先達たちの道を同じように辿ることも心に命じておいたほうが良い。この道はアッラーの慈悲の１つの現れでもあるからである。[1]

先のハディースから１つの結論を導き出すことができる。ある信者たちは課せられた行いをすることによってだけでなく、自発的な追加の善行を更に加えることで、アッラーに近づこうとしている。それはまたアッラーの罰から自分自身を守るためでもある。課せられた行いに追加の行為を加えることで、アッ

[1] 参照：イブラーヒーム　アルヒラール著『ムカッダマトゥ　イラー　ムハンマド　イブン・アリー　アッシャウカーニー（意訳「ムハンマド　ビンアリー　アッシャウカーニーへのイントロダクション」：訳者注）』ダール　イヒヤー　アットラース　アルアラビー出版、ベイルート、レバノン、p.149。

ラーへの純粋な気持ちや帰依を更に現すことになるのである。この段階に入れば罪や罰から自分を守るだけでなく、自発的な善行それ自体が喜びとなり、その実践を楽しむこともできるようになる。

　多くの自発的な追加の行為は同時に、望ましくない行動から離れることも意味する。これについては、前述したブハーリーの伝承によるハディースを今一度引用し、全文を挙げて詳しく述べてみよう。預言者ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）は言った。

「アッラーが最も好む行いは、アッラーが課した行いです。人は自発的な追加の善行によって、アッラーが彼のことを好ましく思うようになるまで、ずっと努力することになります。そうなれば『我は彼が聞く耳となり、彼が見る目となり、彼が叩く手となり、彼が歩く足になる。我によって見、聞き、使い、動く。我に尋ねたら我は与え、助けを求められたら助けるのである。』[1]」

　ここでアッラーの恩恵を獲得した人々について触れている。このハディースは非常に重要である。なぜならば、真の信者の最終的な目的を示しているからである。その目的とはアッラーに正しく仕えることによって、自分たちの自我の浄化を成就させ、アッラーの慈愛、慈悲、承認、赦しを得ることに他ならない。言い換えれば、目的はアッラーのワリー（近い人）になること、つまりアッラーの純粋なしもべになることである。すで

[1] ブハーリーの伝承による。

に何度も述べてきたことだが、これが信者にとって最も立派な成し遂げるべき到達点である。これは誰にも奪うことができない。なぜならば人の現世で得た持ちものは壊れたりだめになったりするが、その人の宗教（心の中で最も優先されるもの）に触れることは誰にもできない。アッラーとの関係も、同じく誰にも触れることはできないのである。

アッラーは人間を創造し形づくった。そして特定の行為を課した。この行為は自分自身の浄化を切に望んでいる人々のためである。課せられた行為の後ろ側に、アッラーは大きな入口を与えてくださる。そこでは人間は最も重要な行為に集中することができるようになる。例えば、人が自発的な追加の善行をやり続けることができるのは、それによって信仰が深まったと感じることができるからである。もしそれが中断された場合には、悲しむことになるだろう。そのために自分自身でするべきことを続けたくなるであろう。断食、喜捨、巡礼などに心を傾け、課せられた行いを実践し、その上で自発的な追加の善行を重ねることが、アッラーにより近づくための方法である。これにより天国に入る鍵を人は手に入れられるのかもしれない。

他のために善きことを望む人々は、アッラーから課せられた行為をした上で、相手の要望に沿うように、それ以上の助けをしようとするであろう。こういった行為によってアッラーとの距離は縮まり、アッラーの慈愛も増してくるであろう。一方、非ムスリムにイスラームを勧めるといった行為を選ぶ人もいるだろう。これによってもアッラーへと近付き、天国へと至るか

もしれない。また、ある人は全ての課せられた行為をしつつ、自発的に追加の善行をまんべんなく行い、アッラーに好まれる存在となるのである[1]。

全てがアッラーの慈悲の下にある。課せられた行為の上に、人間には自分の興味に沿って善行が選択できる自由がある。様々な分野において、自発的な善い行いができるであろう。ある人が私は何かそれ以上の善行を見つけられないというのは、考えられないことである。天国へと至るイスラームの道は、全ての人々の自発的な動機や興味を吸収できる程の広さがある。まずは課せられた行為を誠実に守って進むのである。繰り返しになるが、基礎の行為をしないで進むならば、正しくない道に立っているのではないかと考えてみることである。

７．信仰の道へと人を助ける手段

行程を決めるのが、その道を実際に進んでいくよりずっと簡単なのは疑いがないことである。自我の浄化の道を歩もうとするとき、人はそのためを実現するための助けと対策を考えなくてはならないだろう。手段と対策は簡単にいえば、本質的には浄化の方法と同じである。いわゆる義務的な行為にしても、自発的な行為にしても、まずは行動を起こすことである。

[1] ファリード前掲書、pp.30～31。ファリード師も次の書を参考にした。ムハンマド　イブン・アルカイイム著『タリーク　アルヒジュラタイン（「２つのヒジュラの 道」：訳者注）』p.179。

その浄化を実現し、そこから利益を得るためにはまだ大切な行為がある。ここではそれについて述べる。その行為とは次のようなものである。

① アッラーに対して助けや導きを懇願すること。

普通は知識を得る前にこの段階に入る。人間は全ての導きについて、アッラーにお願いするべきである。そしてアッラーに受け入れて頂くための正しい道を知ることである。

② 正しい知識を得るための方法を選択すること。

知識を得るための手段を選びつつ、全てがうまくいくようにアッラーに祈ることもまた大切である。自我の浄化を得るための手段として、クルアーンとハディースを学ばなければならないだろう。

③ 正しいアズカール[1]を唱えること。

知識の後には、ズィクル（唱念）が来る。それは知識を守るためにもある。このズィクルなしには、知識を実践に生かせないであろう。

④ 熟考すること。

熟考は人を高いレベルの信仰に押し上げる。またアッラーの唱念に基づいて生きることで、信仰はなお深くなる。また得た知識に対しても、深い理解の助けとなる。宗教の知識と周りの事項の結びつきに関する知恵が与えられ、もっと深く理解することにつながる。それにより唱念の精神もまた深くなる。

---

[1] （アズカールは「唱念」で、ズィクルはその単数形である：訳者注）

⑤ 現世の存在の本質を意識すること。

　これを意識することは、熟慮や精神的な成長の直接的な結果になる。来世こそが本当の人生であり、現世は人間が永遠に留まれるところではないという理解につながる。この事実の重要性を知っていることで、人生に溢れている強い誘惑に流されない精神を持つことができる。

⑥ 自分の心にある悪と戦うこと。

　心の中の戦いあるいは精神のジハードと呼ぶべきものは、これまで①～⑤で挙げた行為をすることで、ずっと楽に乗り超えることができるようになっているであろう。人の精神は、ときに誘惑や心の闇や脆弱(ぜいじゃく)さに遭遇することがある。これらに打ち勝つために、正しい手段で立ち向かわなくてはならない。

⑦ 良い仲間と交流を持つこと。

　この目的は、一人より仲間同士の方がお互いに助け合えるからである。特に篤信の友がいれば、アッラーへのズィクルの心が強くなる。仲間同士で助言し合い、弱気になったときには支えあい、お互いに助け合うことができる。また問題が生じたときには、解決のための知識を補い合うこともできる。

⑧ マスジドへ行くこと。

　マスジドで他のムスリムたちとの絆を強くすることができる。自我の浄化の鍵の１つである礼拝の改善にもつながり、いろいろな情報源にも触れ、正しい知識を得ることが

できるからである。また人生における人間の目的を思い出させてくれるのは、マスジドに行くことで篤信の模範的な人々と会う機会が増えるからである。それにより、浄化のためにもっと努力しようと考えるようになる。

⑨ 自分を振り返ること。

自分を省みることは自己を磨くことであり、それなしにはどんな計画もうまく行かない。人間はいつも自分が選んだ方法や手順について常に振り返ってみる必要がある。自分の間違いや改善すべき点を見直すことが大切なのである。それをしないで進めば、深い裂け目に落ちてしまうであろう。何が起こっているかを把握しなければ、誤りを防げず、また同じ間違いを犯してしまうこともある。

８．魂を損なう事柄と悔悟

ムスリムは自分自身を守るために、自我の浄化を損なう障害や危機をしっかり見極め、注意を払わなくてはならない。これに関して、以下のように箇条書きでまとめてみた。

① 強い欲望や情念

強過ぎる欲望は、アッラーに受け入れられない行動に人を走らせてしまう。人は欲望をしっかり制御しなければ、浄化において悲惨な結果をもたらすことになる。自己の欲望のままに振り回され、それがまるで神に変わる

存在になってしまい、人はそれに仕えることになるのである。

② 無知や誤解

人は無知により道が分からなくなる。自らの無知に気が付かないとき、何かを正しいと勘違いして行動を起こしてしまう。その行動が自分への害になるにも関わらず進んでしまう。そこに疑惑や不安の心が生まれる。これは浄化の道の歩みにも影響する。

③ 教えに合わない目新しいことや迷信

自我の浄化にとって最も危険なことである。本人は真理と思い込んでいるが、間違った道に迷い込むことになるからである。大きな落とし穴を避けるには、正しい宗教の知識と預言者のスンナに従うしかない。

④ 罪

人間はやらなければならない行いによってアッラーに近付き、罪を犯すことによりアッラーから離れていく。罪の大小に関わらず罪を犯すこと自体が、自我の浄化から逆行する行為なのである。

⑤ 現世の虚飾

この誘惑は大きく最も危険である。今の時代には、人は世俗の刺激と快楽による現世の虚飾に晒(さら)されている。人生の目的への集中力を失わせ、来世に心を傾けるよりも世俗の虚飾に心を奪われてしまう。来世の代わりに、今の人生を優先してしまうのである。そうなると自我の

浄化への努力は、決定的な敗北を喫することになるのである。

⑥ 悪い仲間や劣悪な環境

周りの仲間の影響は非常に強い。悪い友人がアッラーが受け入れられないような行動を提案することもある。そしてアッラーが嫌う行動を取ってしまう。悪い仲間や劣悪な環境が、自我の浄化への道を妨害することもあろう。

⑦ シャイターン（悪魔）とその手先

アッラーは人間を創造したときに敵も創った。それはその人間の誠実さや勇気を試すためにである。シャイターンに身を委ねさせ、人間を業火に突き落とすのが彼らの目的である。人間は自我の浄化の道から外れないように、また自分自身を守るために悪魔について、また彼らのやり方を知っておく必要がある。

⑧ アッラーの敵（アッラーの怒りを受けて踏み迷う人々）

彼らが意図せずにやったかどうかは関係なく、自我の浄化から脱落した人々である。人はそういう人たちに注意しなければならない。彼らは人を正しい道から遠く外れさせる。また正しい道から外れるよう人に囁くのである。

人は己の浄化のための手段を実施するために、一生懸命務めたとしても、ときにはうまくいかないこともある。それは自然で自明のことである。預言者もこう言っている。

「アーダムの子供たちは、皆間違いを犯します。その中でも最も良いのは、悔悟する人です。[1]」

人間が罪を犯したとしても、それでおしまいではない。とにかく死が訪れていない限り、タウバ（悔悟）という手段が残されている。従ってアッラーの方に帰り、自分の罪を清めるまで諦めてはいけない。自分が犯した罪や過ちのことで、アッラーに悔悟するべきである。アッラーは次のように告げている。

自分の魂に背いて過ちを犯したわがしもべたちに言え、
「それでもアッラーの慈悲に対して絶望してはならない」
アッラーは、本当に凡（すべ）ての罪を赦される。
かれは寛容にして慈悲深くあられる。
【第３９章　集団章〔アッ・ズマル〕５３節】

本当の悔悟には、次の３つのことが含まれている。

①自分が犯した罪に二度と近づかない。（二度としないようにする。）

②後悔の念を感じること。

---

[1] アハマドとティルミズィーの伝承とイブン・マージャとハキームの伝承による。アルバーニー師も「良いハディースである。」と言っている。前掲書『サヒーフアルジャーミャー』Vol.2、p.831。

③二度と罪を犯さないとはっきりしたニーヤ（意志表明）をする[1]。

本質的にはアッラーに回帰することが、人生での人間の目標である。このことなしには、アッラーに完全に悔悟したことにはならない。

イブン・タイミーヤ師はこう述べている。「宗教上の迷いあるいは間違いに対しての心からの悔悟は、悪いことを犯したときの悔悟よりも大切である。」

この論理の背景と理由を、彼は次のように説明している。「課せられた行動をしないで、悪いことをしてしまう。本来は課せられたことをし、悪いことから離れなければならなかったのである。２つの間のつながりは、固定的ではない。相反するときもある。流動的なのである。この場合、人の心の中にはせめぎ合う相反する心がある。課せられた行いをしたりやめたり、悪行をしたりしなかったり、心の揺れと葛藤がある。彼らには信仰心も部分的には残っている。本能的な欲望が、課せられた行為をさせず、悪く歪んだ行動に走らせているのである。一方、課せられた行為は決められているのでやり、悪いことは禁止されているからやめる。そういう人は固定観念に縛られているが、課せられた行為もせず悪いことをするより、まだましである。

まず何よりも悔悟し、ずれている信条を修正することから始めるべきである。悪行を直すほうが、むしろ簡単なのである。

[1] その罪が他の人の権利を奪うことであれば、まず相手に与えた害を取り除くことである。

なぜならば、課せられた行為を知りつつやらないということは、信じていることがずれていても、直すという考えは出てこない。気が付かないからである。つまり悪行の場合は、それがいけないことだともう既に知っているから、直すことも容易であるが、信条が微妙にずれている場合は、気が付かないまま信じて突き進むために、修正はより一層難しくなるからである。[1]」

前述したハディース（アッラーに課せられた行為と、自発的な行為をすることでアッラーに近づく）にあるように、人間は、罪を犯すたびにアッラーから離れていく。ならば信者は罪による害を早めに取り除くべきである。犯した罪に二度と戻らず、悔悟し誠実になりアッラーの御許に戻り赦しを求めることである。ここでもアッラーは「罪（恥ずべき行為）を犯し、自分自身に害を与えた信者ではあるが『天国の者』である」と告げている。これを唱える度に私の心は感動に震える。なぜならば彼らは罪を犯しはしたものの、心からの悔悟をすることでアッラーからの赦しを得たからである。

また醜悪な行いをしたり、過失を犯した時、

アッラーを念じてその罪過の御（お）赦しを請（こ）い、

「アッラーの外（ほか）に、誰が罪を赦すことが出来ましょう。」（と祈る者）、またその犯したことを、故意に繰り返さない者。

【第３章　イムラーン家章〔アーリ・イムラーン〕１３５節】

---

[1] イブン・タイミーヤ著『リサーラ　フィー　アッタウバ（「悔悟についてのメッセージ」：訳者注）』Vol.1、pp.237～238。

　これらの者への報奨は、主からの寛大な御赦（おゆる）しと、
川が下を流れる楽園であり、かれらはその中に永遠に住むであろう。
奮闘努力する者への恩恵は何（なん）とよいことであろう。
【同章　１３６節】

　上のクルアーンにあるように、人は悔悟することによって、アッラーの祝福が約束されている。そうする信者は、アッラーは赦してくださる存在であり慈悲である、と心から信じているからこそ、真の悔悟をすることができたのである。その意味するところは、信者がアッラーに逆らう気持ちはなく、またアッラーが受け入れられないことは二度としないと、悔悟で証明することである。預言者ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）は次のように言ったという。
「アッラーがどれくらい祝福するかといえば、次の男の喜びよりも大きいのです。
ある男が水のない砂漠に迷い込み、ラクダの上に食べ物と飲み物を置いて寝てしまった。起きたときにそのラクダはいなくなっていた。ずっとラクダを探し回ったが見つからなかった。既にのどはカラカラに乾いており、仕方がないと諦めて独り言を言った。『自分の元の場所に戻り、じっとして死を待つしかない。』彼は元の場所で腕枕をして寝入ってしまった。起きたときにラクダが戻っており、飲み物も食べ物も同じようにあった。彼は大喜びした。

人が悔悟することはアッラーの喜びであり、この男の喜びよりもずっと大きいのです。[1]」

悔悟している人にとって、アッラーからの祝福は特別な報酬である。信者がこの事実を意識すればするほど、犯した罪や過ちに対してできるだけ早く悔悟をしなければならないという動機も強くなるであろう。

自我の浄化における悔悟の重要性と役割とは、人間が天国に入る準備のようなものである。心に残っている古い傷や汚れの全てを取り除くことは、人間がアッラーの御許に歩み寄るための、最終の行いのようなものである。人間は篤信の段階がどんなに上がろうとも、アッラーからの望みを期待する気持ちにまだ不十分なところが残っていると考えるべきである。

熟慮と悔悟の気持ちには強い関係がある。心の傷や汚れとは、次のようなことを意味している。

A. アッラーに仕え従うための人間の行為は、たいてい不十分なところを含んでいるものだ。人がその行為を完全にしていると過信することは、逆に危ういことでもある。アッラーと人間との関係をよく知り抜いた人々こそが、何かの行動を終えるたびに、アッラーに赦しを乞うのである。アッラーに仕える行為には、人間の過ちが含まれていると認識しているからである。例えば礼拝の中で、十分にアッラーを畏れる真摯な気持ちがなければ、これ

---

[1] ムスリムの伝承による。（悔悟に関して、著者の記述をそのまま翻訳した。：訳者注）

も１つの過ちである。そのため預言者ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）は信者たちに「礼拝が終わってから３回、アッラーに赦しを求める言葉を唱えなさい。」と教えている。よく知られたこのスンナは、人間がアッラーに仕える際には、自覚しない不注意がありうるということを示しているのである。

B. 信者はアッラーからの全ての恵みに対して、いくら感謝しても感謝しきれないであろう。例えば、まず第一に生命そのものを与えてくださったことに対して、いくら従い服しているといっても、アッラーへの感謝は十分ではないのである。従って人は、この世に自分が存在することに対してアッラーに十分に感謝できていないことも、悔悟の理由の１つであると認識するべきなのである。

C. 人間は何かを行なっているときには、リヤー（見栄）に陥ることもある。もしその行為が純粋な心からの行為ではないとしたら、人はアッラーに悔悟をしなければならないだろう。

つまりどんなに篤信の人でも、人間は常にアッラーに帰依し赦しを求めるようにしなければならない。イブン・タイミーヤ師は次のように述べている。「人間は感謝の必要なアッラーの恵みと、アッラーの赦しが必要な罪の間を、行ったり来たりしている。どちらも人間にとって、不可避の逃れられないものなのである。悔悟と赦しは常に必要である。人類の指導者であり、

篤信の模範であった預言者は全ての状況においてアッラーに赦しを求めていたと言われている。[1]」

ムスリムの伝承では、預言者ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）は、一日に１００回も赦しを求める言葉を唱えていたそうである。悔悟は人間の罪を取り除くことであり、それに加えて純粋な悔悟は、自我の浄化のためにそれとは別に重要な役割を果たす。例えば、アッラーに対して完全に従い服することを助ける意味もあるのである。信者は自分の欠点や罪を意識すればするほど、アッラーからの救済を受ける。そしてアッラーに帰すことより大切なことは他にはないという気持ちになるものである。アッラーに自分が犯した罪について赦しを求めるようになり、それによってアッラーにより近づくことになる。過ちを犯したにしても同様である。（このようにアッラーの慈悲と恩恵には素晴らしい。）

つまり、自分の犯した過ちを意識すればするほど、罪の清めを行うことができ、悔悟の心は深まるものである。そして正しい道からどこまで外れていたかを自覚するようになり、できる限り誠実にアッラーに全てを委ねようとする心が芽生える。悔悟の扉は道を正そうとしている人々のために、いつも開いている。人間の罪がどんなに重く、どんな罪を犯したとしても、自分の生き方を直すのは難しいと思い込むことはないのである。つまり、自分自身を浄化しない言い訳とすることはできないのである。もし過去に多くの罪を犯したとしても、悔悟すること

[1] イブン・タイミーヤ前掲書『アルマジュムーア』Vol.10、p.88。

もできないと絶望すべきではなし、それを諦めてしまう言い訳にはならないのである。このことについてのアッラーからの忠告は次のクルアーンからも伺える。

本当に信仰する男と女を迫害して、
それから悔悟(かいご)しなかった者には地獄の懲罰があり、
またかれらには炎火の懲罰があろう。
【第８５章　星座章〔アル・ブルージュ〕１０節

悔悟しなかった者が業火で焼かれる、とここで明らかにされている。その扉は罪を犯した人々にも開いているので決して諦めてはいけない。

人間は正しい道に足を入れたとしても、ときには過去のことに囚われて、悔悟をしないこともあるだろう。過去の行為をアッラーに近づかない理由にしてはいけない。何度も繰り返すがアッラーに近づくことは、善行をして生きることに他ならないのである。

悔悟した後の生活は、それ以前の生活に比べてより良いものになると、何人かの学者たちは説いている。なぜならば自分の罪を意識し、罪を悔い改め、自分の行いを正していくと誓うことで、ますます純粋な心でアッラーに向かうからである。人間は自我の浄化の実現のため、自分の行動を直し続けている限り、前に犯した過ちに囚われることはない。つまり、悔悟によって

過去の重荷を肩から下ろすようなつもりで生きていくことができるということである。

人は自分の生き方を正す過程で、立派な教訓を得ているとも言える。悔悟する必要があると感じなければ、自分の生き方を正そうとはしなかったであろうし、また教訓を得たことで、より正しい道に入ることに拍車をかけたとも言えるからである。悔悟とは正しい道に戻ることである。その喜びによって魂はますます高みに上り、純粋になっていくであろう。

第８章の終わりに

アッラーの慈悲のおかげで、信仰心を浄化しその深みへと進む道は複雑ではなく、希求する人には明快であろう。自己の宗教的な考えを修正しつつ、それに従って実践的な行いも変えていくことである。浄化の道はもともと人間本来に備わっている自然の流れに沿っているが、人間はますます熱心にそれに向かう努力を積み重ねなければならない。道を歩み始めた頃には、考え方が揺れており道から外れそうになることもある。何者かがその道から人をつき落とすこともあるので油断してはいけない。信仰にいつも意識を向け、健全な精神をずっと保つように心がけなければならない。自分の信仰を支えてくれる手段や方法を確保するようにしなければならない。加えて、避けなければならないことも意識するべきで、信仰を害することや正しい

道を妨害するものを排除し、もし間違った場合は常にアッラーに導きを求め、直ちに悔悟しアッラーの御許に戻るべきである。再び信仰と浄化の道に立ち戻らせてくれるよう赦しを求め、導いてくださるようアッラーに祈ることである。[1]

[1] この章では、本書の中で繰り返し述べてきた『タズキヤトゥ　アンナフス（「自我の浄化」：訳者注）』を参考にしてほしい。

新ムスリムの皆さんへ、結びの一言

新ムスリムのあなたは、間違いなく新しく素晴らしい境地にたどり着いたのです。あなたがイスラームを保持していくことで、現世の善と来世の善の両方を獲得することができるのです。新しくイスラームに入信された方の中には、今も多くの問題に直面している人もいるかもしれません。それは新ムスリムのあなたを元の生活に戻そうとする多くの働きがあるかもしれないからです。また入信したことにより周囲から不満を寄せられているかもしれません。それは新しい選択に同意していない両親や友人からの不満かもしれません。新ムスリムのあなたは、真理や正しい導きの道をやっと見つけられたと感じています。しかしその真理からあなたを離そうとする、他の人々の試みはまだ強く存在しています。実際に新ムスリムのあなたにとって難しい問題もあり、心に強い痛みを伴うような選択が待っているかもしれません。

心を悩ますようなこの状況に立ち向かうために、ムスリムとしてイスラームの最終的な目標を、常に頭に置いておかなければならないのです。それはアッラーに受け入れられることです。この世は儚いけれど、ちょっとした楽しみは溢れるほどにありますが、人の精神が心から満足するのはアッラーに仕えること以外にはないと、自分自身を奮い立たさなければならないのです。つまらない欲望に負けないために、自分自身を高める努力を続けることが大切です。アッラーに正しく仕えるという高貴

な名誉を自分の手にすることです。集団での礼拝に参加することや、クルアーンを読誦すること、イスラームについての新たな知識を増すことなどを通して、アッラーに受け入れられるという最終的な目標を、新たに肝に命じることがとても大切なことなのです。

新ムスリムのあなたは、新しい問題や数多くの誘惑にたった一人で対抗しようと思い込んではいけません。あなたは新しく入信したばかりでイスラームに入って日も浅いので、宗教の理解の進み具合やイスラームに対してどれだけの熱意があるのか、まだ分からないのではないでしょうか。気持ちを維持していくのには大きな助けが必要です。新ムスリムのあなたは、その地域に住むムスリムたちと親しくなって、地元のマスジドとつながりを持たなければならないでしょう。それらを苦しいときや困難なときの拠り所にするべきです。他のムスリムの助けがあれば、新ムスリムとしての信仰の強化も易しくなるでしょう。イスラームについてもっと学ぶようになりますし、どのように実践すればよいか分かるようになってくると思います。

そうはいっても新ムスリムのあなたには、ムスリムの社会やマスジドのつながりに完璧さを期待してはいけないということも言っておかねばなりません。イスラームにおけるマスジドは他の宗教にあるような格式による序列がなく、確固とした組織として運営されているわけでもありません。たいていのマスジドはボランティアの好意で運営されています。そこに携わるムスリムたちは、マスジド以外にも仕事や趣味を持っているので

す。もしできるならばマスジドに新ムスリムを指導できる教養のある人がいればよいと、私は思います。しかし、残念ながらこれは上の事情からいつも可能であるとは言えないでしょう。

　ムスリムの社会では、その人が新ムスリムであろうとその地域に移ってきたムスリムであろうと、新しい同胞が増えることをみな喜びます。そこに住む人々には、彼を助けたい気持ちが芽生えてくることでしょう。新ムスリムのあなたが少し辛抱すれば、自分の道を歩むのを助けてくれるムスリムの友人を見つけることができると信じています、インシャーアッラー。

　新ムスリムのあなたは、ムスリムの社会の全ての人が良いイスラームのマナーを身につけていると期待してはいけません。残念ですがムスリムの中には、篤信の人もいれば、低いレベルの人もいます。教養のあるムスリムもいれば、無知な人もいるのです[1]。この点を理解しつつ、新ムスリムのあなたは広い世界の多くのムスリムたちと接しなければならないでしょう。新ムスリムは時折、イスラームに対して急いたように切羽詰まった気持ちから、他のムスリムに博愛の気持ちを表したいと強く思うこともあるものです。しかしムスリムの中には、マスジドでイスラームの挨拶をしても、新ムスリムのあなたに対して馴染みがないからといって、非常にそっけない態度しか見せてくれない人もいます。イスラームでは挨拶をするのが義務とされているのに、挨拶を返さないことさえあるのだと思ったとき、新

[1] 全ての人間にはそれぞれ短所があるので、他のムスリムにもあるということを認めないといけない。人間が自分の短所を無視することがあるならば、他の人の短所にも目をつぶらなければならない。

ムスリムがどれほど落胆するかは想像するに難くありません。熱意と喜びを抱いてマスジドに行ったのに、同胞であるムスリムからこのように冷たい対応をされるというのは至極残念なことです。そこにいるムスリムは悪意からそうしたのではないのでしょうが、新ムスリムにとっては絶望的な結果になるのです。

全てのムスリムが、新ムスリムの期待通りとはいかないことは明白です。しかし同時に新ムスリムも、他のムスリムとの触れ合いを試みたときに、相手の心情を害してしまったということがあったかもしれません。新ムスリムのあなた自身にも良いムスリムになるための長い道程があるのです。まだイスラーム以前の間違った心があるのかもしれません。無意識の内に他のムスリムに対してぶしつけな態度をとってはいないでしょうか。例えば、新ムスリムのあなたが男性ならば女性に対して、その反対でも失礼なやり方で話してはいないでしょうか。また他のムスリムがふざけて冗談を言っていることもあるでしょう。さらに他のムスリムも新ムスリムも同じように、機嫌が悪いときだってあるでしょう。

あなたが新ムスリムとして生きていくには、確かに辛抱と忍耐を必要とするでしょうが、自分が今までとは違う新しい世界に入っているということを思い起こしてください。そこには自分まだ理解していない信仰の側面があり、正しい実践が伴っていないのかもしれないと考えてください。またムスリムも他の人々と同じように、短所も持つ人間であると思い起こしてみてください。

何よりも大切なことは、アッラーに受け入れられるということがムスリムの最終的な目的であると、常に信じることです。この人生で起こる些細な問題や直面している課題は、それに耐えることによっていつか報われる価値があることなのだと考え、それが人生の障害であると考えてはいけないのです。

新ムスリムのあなたは、人生には誘惑や困難があることを予期しなければならないでしょう。しかし自分の目指す目標はアッラーに受け入れられることであり、来世で天国を獲得することにあると信じることです。これはとても大切で重要なことですから、全く何もせずにアッラーからの報酬を受け取ることができると思ってはいけないのです。次の節にあるように、力を尽くすことなく、また辛抱や犠牲を払うことなしに、アッラーの恩恵を得ることはできないのです。

人びとは、「わたしたちは信じます。」と言いさえすれば、試みられることはなく、放って置(お)かれると考えるのか。

【第２９章　蜘蛛(くも)章〔アル・アンカブート〕２節】

本当に**われ**は、かれら以前の者も試みている。
アッラーは、誠実な者を必ず知り、また虚言の徒をも必ず知っておられる。

【同章　３節】

それともあなたがたは、先に過ぎ去った者たちが出会ったような（試みが）まだ訪れない先に（至上の幸福の）園に入ろうと考えるのか。
かれらは災難や困窮に見舞われ、（不安の中に）動揺させられて、
使徒も、一緒の信者たちも、「アッラーの御助けは、何時（来る）だろう。」と叫んだ程であった。
ああ、本当にアッラーの御助けは近付いている。
【第２章　雌牛章〔アル・バカラ〕２１４節】

新ムスリムを含む全てのムスリムは、アッラーの道を遮るどんな誘惑も避け、知識を深め、精神面でも努力しなければなりません。ムスリムは自己を変革するためのあらゆる方法を使うべきなのです。その方法とは前に述べたようにマスジドへ行き、クルアーンやスンナに従い生活している善いムスリムと交流することです。そこにはイスラームについての知識を深めるための努力も含まれています。マスジドでの宗教の講義に出席すること、本を読むことも含まれます。

今の時代は、知識を得るために英語で書かれた文献をはじめ、様々な情報源に触れることができます。例えば、新ムスリムのための多くのウェブサイトも有効ですが残念ながら、善いものと悪いものを細かくふるいにかけるのは無理があるでしょう。イスラームについて書かれたものが、いつでも質においても信用においても好ましいレベルにあるとは限りません。

いくつかのしっかりした出版社では、その取り扱っている本を選別しています。また次のようなイスラームについての良い文章を載せているウェブサイトがあります。ダールッサラーム出版社のサイト（www.darussalam.com）や、アルバシール出版社のサイト（www.al-basheer.com）などを参考にしてほしいと思います。加えて、次のような良いウェブサイトもあります。

www.whyislam.org

www.islamway.com

www.usc.edu/dept/MSA

最後にもう一度繰り返しますが、全てのムスリムはいつもアッラーに向かって進まなければならないのです。導きと正しい道から外れないようにしなくてはなりません。またムスリムは少なくとも毎日の礼拝の中で、アル＝ファーティハ章を１７回唱えることが求められています。皆さんはその章の中でアッラーに対して次のように唱えているはずです。

わたしたちを正しい道に導きたまえ、

【第１章　開端章〔アル・ファーティハ〕６節】

この節は正しい道への導きの言葉であり、その正しい道の上に留まることができるよう救済を求めることも含まれています。預言者ムハンマド（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）は、ムスリムのウンマ（イスラーム共同体）に対し、次のような言葉を残しました。アナス（彼にアッラーのご満悦あれ）によれ

ば、預言者は常にこのドゥアー（祈願）を唱えていたと言われます。

「ヤー　ムカッリバルクルーブ　サッビトゥ　カルビー　アラー　ディーニカ」

(يَا مُقَلِّب الْقُلُوب ثَبِّتْ قَلْبِي عَلَى دِينك)

「心を動かすお方よ、私の心をあなたの宗教の上に確固たるものとしてください。」

参考文献

❖参考文献-アラビア語リスト❖

❖ قائمة المراجع باللغة العربية ❖

1. إبراهيم الهلال، مقدمة إلى محمد بن علي الشوكاني: قطر الوالي على حديث الوالي، دار إحياء التراث العربي، بيروت.
2. ابن أبي العز شرح العقيدة الطحاوية، ، ترجمة/ محمد عبد الحق أنصاري، وزارة التعليم العالي، الرياض، 2000م.
3. ابن القيم الجوزية ، أحكام أهل الذمة، زمادي للنشر، الدمام- السعودية، 1997م.
4. ابن القيم الجوزية، شفاء العليل في مسائل القضاء والقدر والحكمة والتعليل، دار المعرفة، بيروت.
5. ابن القيم الجوزية، الطرق الحكمية في السياسة الشرعية، دار الكتب العلمية، بيروت.
6. ابن القيم الجوزية ، الجواب الكافي لمن سأل عن الدواء الشافي، دار الكتب العلمية، بيروت.
7. ابن القيم الجوزية ، الوابل الصيب من الكلم الطيب، دار البحار، بيروت، 1986م.
8. ابن القيم الجوزية ، مدارج السالكين بين منازل إياك نعبد وإياك نستعين، دار الكتاب العربي، بيروت، 1973م.
9. أبو الأعلى المودودي، معاني القرآن، المطبعة الإسلامية، لاهور- باكستان، 1982م.
10. أبو البكر البيهقي، الاعتقاد على مذهب السلف أهل السنة والجماعة، دار الكتاب العربي، 1984م.
11. أبو الحسن الندوي، أركان الإسلام الأربعة، أكاديمية البحوث والطباعة الإسلامية، لكنو- الهند، 1976م.
12. أبو بكر الجزائري، منهاج المسلم، دار الفكر، بيروت، 1992م.
13. أحمد ابن تيمية، ترجمة رسالة ابن تيمية في العبودية، الهداية للنشر والتوزيع، برميهام- المملكة المتحدة، 1999م.
14. أحمد ابن تيمية، مجموع فتاوى شيخ الإسلام ابن تيمية، م7، بدون تاريخ طبع.
15. أحمد ابن حجر، فتح الباري بشرح صحيح البخاري، المكتبة التجارية، مكة- السعودية، 1993م.
16. أحمد سلام، مقدمة في فقه أصول الدعوة، دار ابن حزم، بيروت، 1990م.
17. أحمد فريد، التزكية بين أهل السنة والصوفية، بدون تاريخ الطبع.
18. إسماعيل بن كثير، البداية والنهاية، دار الكتب الإسلامية، م7، بيروت.
19. إسماعيل بن كثير، تفسير القرآن العظيم، دار الأرقم، الكويت، 1985م.

20. الحافظ ابن أحمد، معارج القبول بشرح سلم الوصول إلى علم الأصول في التوحيد، دار الكتب العلمية، بيروت، 1983م.
21. الراغب الأصفهاني، معجم مفردات ألفاظ القرآن، دار الفكر، بيروت.
22. أمين أحسن إصلاحي، تزكية النفس وتتطيرها ، آدم للنشروالتوزيع ، دلهي، 2000م.
23. أندرو جي بسيفتش، العسكرة الأمريكية الجديدة: كيف تُخضع الأمريكين للحرب؟، أكسفورد- إنجلترا، 2005م.
24. أنس كرزون، منهاج الإسلام في تزكية النفس، دار نور المكتبات، جدة، 1997م.
25. إي و.وين: القاموس العربي الإنجليزي، جمعية النصوص الإسلامية، م1، 1984م.
26. بدر الدين العيني، عمدة القاري، دار إحياء التراث، بيروت.
27. بلال فيليبس، أسس التوحيد، دار التوحيد للنشر، الرياض، 1990م.
28. تفسير ابن كثير (مختصر)، دار السلام، الرياض، 2000م.
29. تفسير ابن كثير، م 4، دار طيبة.
30. جعفر الشيخ إدريس، دعائم الإيمان، رئاسة البحوث الإسلامية والإفتاء والدعوة، 1984م.
31. جلال الدين السيوطي، الدر في تفسير المأثور، دار الكتب العلمية، بيروت، 1990م.
32. جمال البادي، الأثار الواردة عن أئمة السنة في أبواب الاعتقاد،م1، دار الوطن، الرياض، 1416هـ.
33. جمال الدين زرابوزو، أتاكم ليعلمكم دينكم، شركة البشير للنشر والترجمة، دنفر، 1997م.
34. جمال الدين زرابوزو، أسئلة وأجوبة، م2، رقم 1 مايو-يونيو 1988م.
35. جمال الدين زرابوزو، تزكية النفس: الفكرة والإجراء والوسيلة، شركة البشير للنشر والترجمة، دنفر، 1997م.
36. جمال الدين زرابوزو، حجة وأهمية السنة، شركة البشير للنشر والترجمة، 2000م.
37. جمال الدين زرابوزو، شرح الأربعين النووية، شركة البشير للنشر والترجمة، 1999م.
38. جمال الدين زرابوزو، صلاة الجمعة، الجزء الثاني: الخطب (1)، الجزء الثالث (2).
39. جمال الدين زرابوزو، فقه الأسرة: الزواج والطلاق، الجامعة الأمريكية المفتوحة، 1997م.
40. جمال الدين زرابوزو، ما هو الإسلام، وزارة الشؤون الإسلامية، الرياض، 2006م.
41. حمزة مصطفى نجوزي، مصادر القرآن: مراجعة نقدية للآراء حول مؤلفه، الندوة العالمية للشباب الإسلامي، الرياض، المملكة العربية السعودية، 1991م.
42. خرام مراد، في ساعات الصباح : التأملات على تزكية الروح والنفس، دار البعث للنشر، ماكفيلد، المملكة المتحدة، 2000م.
43. دبيان الدبيان، أحكام الطهارة: الغسل، مكتبة الرشد، الرياض، 2004م.

44. ديبان الدبيان، أحكام الطهارة: سنن الفطرة، مكتبة الرشد، الرياض، 2004م.
45. روي يونغ محمد كوتس، التحليل الصحيح للنصوص الإسلامية القديمة: تحليل مقدمة ابن كثير على تفسير القرآن العظيم (رسالة دكتوراة بجامعة مشيغان، 1989م).
46. س. إي. راينا، نظرية العقود في الشريعة الإسلامية، غراهام وتروتمان، لندن، 1991م.
47. سيد قطب، خصائص التصور الإسلامي ومقوماته، أمريك تروست للنشر، 1991م.
48. شعيب الأرنؤوط ، أقاويل الثقات في تأويل الأسماء والصفات والآيات المحكمات والمتشابهات، مؤسسة الرسالة، بيروت، 1985م.
49. صالح العليوي، مباحث في النية (تاريخ الطبع غير معروف).
50. صحيح العالمية للنشر، القرآن: النصوص العربية مع ما يقابلها باللغة الإنجليزية، دار أبو القاسم للنشر، لندن، 1997م.
51. صدر الدين أبو العز الحنفي، شرح الطحاوية في العقيدة السلفية، المعهد الإسلامي العلمي في أمريكا(تحت الطبع).
52. صلاح أحمد، دعوة الشيخ ابن تيمية وأثرها على الحركة الإسلامية المعاصرة، دار ابن الأثير، الكويت، 1996م.
53. عباس آل باز، أحكام المال الحرام، دار النفائس، عمان – الأردن، 1999م.
54. عبد الحميد صديقي، ترجمة صحيح مسلم، شيخ محمد أشرف للنشر والتوزيع، لاهور-باكستان.
55. عبد الرحمن ابن رجب، جامع العلوم والحكمة، مؤسسة الرسالة، بيروت، 1991م.
56. عبد الرحمن السعدي: الفتاوى السعدية، منشورات المؤسسة السعدية، الرياض.
57. عبد الرحمن عبد الخالق، الحدود العامة للإيمان بالقرآن والسنة، جمعية دار المجلس الحق للنشر، 1986م.
58. عبد الحميد صديقي، ترجمة صحيح مسلم، شيخ محمد أشرف للنشر والتوزيع، لاهور-باكستان.
59. عبد الرحمن بن رجب، جامع العلوم والحكمة، مؤسسة الرسالة، بيروت، 1991م.
60. عبد الرحمن الدوسري، صفوة الآثار والمفاهيم من تفسير القرآن العظيم، دار الأرقم، الكويت، 1981م.
61. عبد الرحمن السعدي: الفتاوى السعدية، منشورات المؤسسة السعدية، الرياض.
62. عبد الرحمن بن رجب جامع العلوم والحكم، مؤسسة الرسالة، بيروت، 1991م.
63. عبد الرحمن عبد الخالق، الزواج في ظل الإسلام، الدار السلفية، الكويت، 1988م.
64. عبد العزيز الرشيد، التنبيهات السنية على العقيدة الواسطية، دار الرشيد للنشر والتوزيع، السعودية.
65. علي أبو لوز، أجوبة على أسئلة من مسلمين جدد.
66. علي الصالحي، الضوء المنير على التفسير، م4، مؤسسة النور، الرياض.

67. عبد العظيم بن بدوي، تقديم موجز لفقه السنة والقرآن الكريم، دار العالمية للنشر، الرياض (في طور الطباعة).
68. عبد الله ابن قدامة ، المغني، دار الفكر، بيروت، 1405هـ.
69. عبد الله بن الغماري، رفع الشك والارتياب عن تحريم نساء أهل الكتاب، طنجة- المغرب، 1989م.
70. عبد الله جار الله، بهجة الناظرين فيما يصلح الدنيا والدين، 1984م.
71. عبد الله المصلح ، صلاح الصاوي، ما لايسع المسلم جهله، المؤسسة الإسلامية بأمريكا، 1995م.
72. عمر الأشقر، الحكمة من خلق الشيطان، البشير(م2 رقم 3، سبتمبر- أكتوبر 1988م).
73. ف. ولين، قاموس عربي- إنجليزي، جمعية النصوص الإسلامية، كامبردج، إنجلترا، 1984م.
74. فخر الرازي، التفسير الكبير، دار إحياء التراث العربي، بيروت.
75. فوز بنت عبد اللطيف الكردي، تحقيق العبودية بمعرفة الأسماء والصفات، رسالة ماجستير، http://alfowz.com/library.php?action=library&id=2
76. مبارك بن الأثير، جامع الأصول في أحاديث الرسول، مكتبة الحلواني، 1971م.
77. محمد ابن القيم، مفتاح دار السعادة، دار الفكر، بيروت.
78. محمد الحسن البربحاري، شرح العقيدة، دار الحنيف للنشر، بريمنغهام- المملكة المتحدة، 1995م.
79. محمد الحماد، توحيد الألوهية، دار ابن خزيمة،الرياض، 1414هـ.
80. محمد الزهبي، سير أعلام النبلاء، مؤسسة الرسالة، بيروت، 1990م.
81. محمد الشابي، الفروق اللغوية وأثرها في تفسير القرآن الكريم، مكتبة العبيكان، الرياض، 1993م.
82. محمد الهلالي ، محمد حسن خان، ترجمة معاني القرآن الكريم مع تعليقات، مجمع الملك فهد لطباعة المصحف الشريف، المدينة المنورة- السعودية.
83. محمد بن جرير الطبري، جامع البيان عن تأويل القرآن، دار الفكر، بيروت، 1988م.
84. محمد بن عبد الرحمن المباركفوري أبو العلا، تحفة الأحوذي شرح جامع الترمذي، دار الكتب العلمية، بيروت.
85. محمد بن عثيمين، شرح العقيدة الواسطية، دار ابن الجوزي، الدمام- السعودية، 1415هـ.
86. محمد بن عثيمين، الشرح الممتع على زاد المستنقع، م7، مؤسسة عصام، الرياض.
87. محمد بن عثيمين، مجموع فتاوى ورسائل فضيلة الشيخ محمد بن صالح العثيمين، دار الوطن، الرياض، 1413هـ.
88. محمد بن عثيمين، شرح أصول الإيمان، معهد الدراسات الإسلامية والعلوم بأمريكا، 1410هـ.

89. محمد بن عثيمين، شرح رياض الصالحين، دار الوطن، الرياض، 1995م.
90. محمد بن علي الشوكاني، نيل الأوطار، دار زمزم، 1993م.
91. محمد بن منظور نعماني، معنى ورسالة الأحاديث، أكاديمية البحوث الإسلامية والنشر، م1، لكنو، الهند، 1975م.
92. محمد بن ناصر الألباني، إرواء الغليل في تخريج أحاديث منار السبيل، الجزء 6، المكتب الإسلامي – بيروت، 1985.
93. محمد بن ناصر الألباني، صحيح الجامع الصغير، المكتبة الإسلامية، بيروت، 1986م.
94. محمد بن ناصر الألباني، صحيح سنن الترمذي ،م2، مكتب التربية العربي لدول الخليج، 1988م.
95. محمد بن ناصر الدين الألباني، سلسلة الأحاديث الصحيحة، المكتب الإسلامي، بيروت، 1979م.
96. محمد بن عثيمين، شرح حديث جبريل، دار الثريا، 1415هـ.
97. محمد حسين الذهبي، التفسير والمفسرون، دار الكتب الحديثة، م1، 1976م.
98. محمد شمس الحق أبادي، عون المعبود شرح سنن ابي داود، دار الكتب العالمية، 1995م.
99. محمد عبد الله القرطبي، تفسير القرطبي، دار إحياء التراث العربي، بيروت، م2.
100. محمد عبد الله دراز، القرآن الكريم: المعجزة الخالدة(أو التحدي الخالد)، المؤسسة الإسلامية، ليساستا، المملكة المتحدة، 2001م.
101. محمد قطب، دراسة قرآنية، دار الشروق، بيروت، 1982م.
102. محمد ناصر الدين الألباني، صحيح الترغيب والترهيب، المكتب الإسلامي، بيروت، 1982م.
103. مروان القيسي، معالم التوحيد، المكتب الإسلامي، بيروت، 1990م.
104. مصطفى بن العدوي، فقه التعامل مع الوالدين، دار بلنسية، الرياض، 2002م.
105. نيلي- كومير عبيد، قوانين عقود الأعمال في الشرق الاوسط، خلويل العالمية، 1996م.
106. يحيى النووي، المجموع شرح المهذب، دار الفكرن بيروت، 1997م.
107. يحيي النووي، المنهاج شرح صحيح مسلم ابن الحجاج، دار المعرفة، بيروت، 1999م.

❖参考文献-カタカナ表記リスト❖

<u>まえがき</u>

ジャマール　ザラボーゾ著『フジャトゥ　アハンミーヤトゥ　アッスンナ「スンナの権威とその重要性」：訳者注）』アルバシール出版社、2000 年。

<u>第１章</u>

1. E.W レーン著『アラビア語英語辞典』ケンブリッジ、イギリス 1984 年。 p. 1413.

2. ムハンマド　イブン・マンズール　ヌウマーニー著『マアナー　ワ　リサーラトゥ　アルアハディース　　（「ハディースの意味とメッセージ」：訳者注）』イスラーム研究アカデミー、インド、1975 年。

3. ジャマール　ザラボーゾ著『マ　フワ　アルイスラーム（「イスラームとは何か」：訳者注）』イス ラーム省発行、リヤド、サウジアラビア 2006 年。

4. 『聖書』講談社

5. ニサール　アハマド編『クルアーンとハディースの根本教義《巻１》』イスラミックセンタージャパ ン、1977 年。

6. アルバーニー著『エルワーア　アルガリール　フィー　タフリージ　アハディース　マナール　アッサビール（「灯台の明かりのようなハディースの導き」：訳者注）』

<u>第２章</u>

1. ハムザ　ムスタファ　ナジュージー著『マサーディル　アルクルアーン（「クルアーンの源」：訳者注）』イスラーム青年国際シンポジウム、1991 年。

2. ムハンマド　アブドゥッラー　ダラーズ著『クルアーン―永遠の奇跡―』イスラミック　ファンデーション、レスター、イギリス 2001 年。

3. ムハンマド　ナーセル　アッディーン　アルバーニー著『サヒーフ　アルジャーミア　アッサギール（「正しいハディースの蒐集－抜粋－）」：訳者注）』アルマクタブ　アルイスラミーヤ、ベイルート、レバノン、1986 年。

4. ムハンマド　アルヒラーリとムハンマド　ハサン　ハーン著『タルジャマトゥ　マアーニー　アルクルアーン　アルカリーム「聖クルアーンの意味の翻訳」：訳者注）』キング　ファハド　クルアーン出版センター、マディーナ、サウジアラビア。

5. サヒーフ　インターナショナル編『アルクルアーン-アラビア語と英語の対訳-』、アブー・アルカースィム出版、ロンドン、イギリス 1997 年。

6. イブン・カスィール著『タフスィール　イブン　カスィール「イブン・カスィール解釈書（短縮版）」』ダールッサラーム出版社、リヤド、サウジアラビ、2000 年。

7. ムハンマド　ホセイン　アッザハビー著『アッタフスィール　ワ　ムファッスィルーン「解釈と解釈者」：訳者注）』ダール　アルクトブ　アルハディーサ、1976 年。

8. ロイ　ヨング　ムハンマド　カーティス著『古いイスラーム文書購読の正しい分析―イブン・カスィールのクルアーン解釈書の序文分析を中心に―』ミシガン大学の博士論文、1989 年。

9. アブー・アルアーラー　アルマウドゥーディー著『マアーニー　アルクルアーン「クルアーンの意味」：訳者注）』イスラーム印刷所、ラホール、パキスタン、1982 年。

10. アブドゥルハミード　シッディーキー著『タルジャマトゥ　サヒーフ　ムスリム（「サヒーフ　ムスリムの翻訳」：訳者注）』アッシャイフ　ムハンマド　アシュラフ出版社、ラホール、パキスタン。

11. イスマイール　イブン・カシィール著『アルビダーヤ　ワ　アンニハーヤ（「初めと終わり」：訳者注）』ダール　クトブ　アルイスラミーヤ出版、ベイルート、レバノン。

12. アハマド　イブン・タイミーヤ著『リサーラ　フィー　アルウブーディーヤ「アッラーに仕えることの概念について』：訳者注）』アルヒダーヤ出版社、バーミンガム、イギリス 1999 年。

13. イブン・アルカイイム　アルジャウジィーヤ著『（アットルク　アルヒカミーヤ　フィー　アッスィヤーサ　アッシャライーヤ「シャリーア法における判決法」：訳者注）』ダール　アルクトブ　アルイルミーヤ出版社、ベイルート、レバノン。

14. サドル　アッディーン　アビー・アルイズ著『シャルフ　アッタハウィーヤ　フィー　アルアキーダティ　アッサラフィーヤ（「原始信条におけるタハウィー師の注釈」：訳者注）』アメリカ科学イスラーム学院、未出版。

第３章

1. イブン・カスィール著『タフスィール　イブン　カスィール（「イブン・カスィールのクルアーン解釈書」：訳者注）』ダール　アッタイバ出版社。

2. サイイド　クトブ著『ハサーエス　アッタサウリィル　アルイスラーミーワ　ムカッフィマーティヒ「イスラームのコンセプトとその特徴」：訳者注）』アメリカントラスト出版、1991 年。

3. サーリフ　アルアラウィー著『マバーヒス　フィー　アンニーヤ（「意志表明の考察」：訳者注）』

4. ムハンマド　クトブ著『ディラーサトゥ　アルクルアーニーヤ（「クルアーン研究」：訳者注）』ダール　アルシュルーク出版、ベイルート、レバノン、1982 年。

第４章

1. イブン・アビー・アルイズ著、ムハンマド　アブドゥルハック　アルアンサーリー翻訳『シャルフル　アルアキ—ダ　アッタハウィーヤ「タハウィー師信条の説明」：訳者注）』サウジ高等教育省出版、リヤド、サウジアラビア、2000 年。

2. ジャマール　ザラボーゾ著『サラートゥ　アルジュムア（「集団礼拝」：訳者注）』第２巻スピーチ１、及び第３巻スピーチ２。

3. ディバーン　アッディバーン著『グスル（「清めることの決まり」：訳者注）』

4. ヤフヤー　アンナワウィー著『マジュムーア　シャルフ　アルムハッザブ（意訳「全体の説明」：訳者注）』

5. イブン・クダーマ著『アルムグニー（意訳「助けるもの」：訳者注）』

6. アルバーニー著『ミシカート　アルマサビーハ（「塔の窪み」：訳者注）』

7. アルバーニー著『サヒーフ　アルジャーミャー（「正しいハディース蒐集」：訳者注）』

8. ムハンマド　シャムスルハック著『アウヌ　アルマアブードゥ　シャルフスナニ　アビーダーウード（「人間の助け－アブーダーウードの解釈」：訳者注）』ダール　アルクトブ　アルアーラミーヤ出版、ベイルート、レバノン、1995 年。

9. ムハンマド　アブドゥッラハマーン　アルムバーラクフーリー著『トッファウ　アルアハワズィー（「ティルミズィー伝承の説明の一つの本」：訳者注）』ダール　アルクトブ　アルアーラミーヤ出版、ベイルート、レバノン。

10. ディバーン　アルディバーン著『アハカーム　アッタハーラ（「浄化の決まり」：訳者注）』。

11. イブン・ハジャル著『ファトフ　ルバーリー（「サヒーフ　ブハーリーの明瞭な解釈」：訳者注）』ダール　アルマリーダ出版、ベイルート、レバノン。

12. バドルッディーン　アルアイニー著『オムダットゥ　アルカーリー（意訳「ブハーリーの正しい解釈」：訳者注）』ダール　イヒヤー　アルトラーフ出版、ベルート、レバノン。

13. イブン・アルカイイム著『アハカーム　アハル　アッズィンマ（「啓典を受けた人の決まり：訳者注）」』

14. アリー　アブー・ラウズ蒐集『アジュウィーバ　アラー　アスイラティミン　ムスリミーン　ジャッダドゥ「新ムスリムの質問の答え」：訳者注)』

15. ムハンマド　イブン・アルカイイム著『ミフターフ　ダール　アッサアーダ（「幸福の家への鍵」：訳者注）』

16. イブン・タイミーヤ著『マジュムーア　アルファターワー（「イスラーム法に従った判決」訳者注：）』（未出版）。

17. フォーズ　ビント　アブドゥルラティーフ　アルクルディー著『タハキーク　アルウブーディーヤ　ビマアリファトゥ　アルアスマー　ワ　アッスィファート（「特性と名前を知ることによるアッラーへの崇拝」：訳者注）』

18. ムハンマド　ハサン　ハーンの翻訳書『サヒーフ　アルブハーリー「ブハーリーの正しいハディース」』

19. イブン・アルカイイム著『アルワービル　アルサイエブ　ミン　アルカリム　アッタイイブ（「ハディースの解釈と生活の唱念の言葉」：訳者注）』ダール　アルビハール出版、ベイルート、レバノン、1986 年。

20. アナス　カルゾーン著『ミンハージュ　アルイスラーム　フィー　タズキヤトゥ　アンナフス（「精神の清浄に関するイスラームの手順」：訳者注）』ダール　アンヌール　アルマクタバーツ、1997 年。

第５章

1. アハマド　イブン・タイミーヤ著『マジュムーア　ファターワー　シャイフ　アルイスラーム　イブン　タイミーヤ（「イスラームの長老タイミーヤ師のファトワ蒐集―アブドゥッラハマーン　アルカーシムとその息子ムハンマドの蒐集による―」：訳者注）』。

2. ムハンマド　イブン・ウサイミーン著『シャルフ　ウスール　アルイーマーン（「信仰の基本の説明」：訳者注）』イスラーム研究所、H.1410（1989 年位）。

3. マルワーン　アルカイスィー著『マァーリム　アッタウヒード（「タウヒードのスポット」：訳者注）』アルマクタブ　アルイスラミー出版、1990 年。

4. アブドゥッラハマーン　アルサアディー著『アルファターワー　アッサアディーヤ（「サアディーのイスラーム法の解釈」：訳者注）』マンシュラートゥ　アルムアッササ　アッサーディーヤ出版、リヤド、サウジアラビア。

5. ムハンマド　アルハンマード著『タウヒード　アルウルーヒーヤ』ダール　イブン・フザイマ出版、H.1414 年（1993 年位）。

6. ジャーファル　イドリース著『ダアーイム　アルイーマーン（「イーマーンの柱」：訳者注）』リアーサット　アルブフース　アルイスラミーヤ、1984 年。

7. シュアイブ　アンナウート著『ムカッディマトゥ　ザイヌッディーン　アルマクディシィ（「アッディーン　アルマクディシィのイントロダクション」：訳者注）』ムアッサッサトゥ　アルリサーラ出版社、ベイルート、レバノン、1985 年。

8. ジャマール　アルバーディ著『アルアサール　アルワーリダ　アン　アインマティ　アッスンナ　フィー　アブワービ　アルイアティカーディ（意訳「信条についての著作：訳者注」）』ダール　アルワタン出版、リヤド、サウジアラビア、H.1416（1995 年位）。

9. アブドゥッラー　ジャールッラー著『バハジャットゥ　アンナーゼリーン（「見る人々の喜び」：訳者注）』1984 年。

10. サラーハ　アハマド著『ダアワトゥ　アッシャイフ　イブン・タイミーヤワ　アッサーラハ　アラー　アルハラカティ　アルイスラミーヤ　アルムアッスィラ（「タイミーヤの主張と現代イスラーム運動における影響」：訳者注）』ダール　イブン・アルアシィール出版、クウェート、1996 年。

11. アハマド　サラーム著『ムカッディマトゥ　フィー　フィクフ　ウスール　アッダアワ（「アッラーを勧めることの方法における序文」：訳者注）』ダール　イブン・ハズム出版、ベイルート、1990 年。

12. ジャマール　ザラボーゾ著『アスイラ　ワ　アジュウィバ「質問と解答」』No.1、アルバシール出版、1988 年 5 月号・6 月号。

13. アブドゥッラー　アルムスィリフと、サラーフ　アッサーウィ著『マアラー　ヤサーウ　アルムスリム　ジャハルフ　（「ムスリムは無知ではいられない」：訳者注）』イスラミック　ファウンデーション　オブ　アメリカ、1995 年。

14. ムハンマド　アルハサン　アルベルバハーリ著『信仰箇条の説明』：バーミンガム、イギリス 1995 年。

15. アブドゥルアジーズ　アッラシード著『アッタンビィハートゥ　アッスンニーヤ　アラー　アルアキーダ　アルワースィティーヤ（「中庸の信条においてのスンナの注意事項」：訳者注）』ダール　アッラシード出版社。

16. ムハンマド　イブン・ウサイミーン著『シャルフ　アルアキーダ　アルワースィティーヤ（「中庸信仰の説明」：訳者注）』ダール　イブン・アルジューズィー出版、ダンマーム、サウジアラビア、H.1415 年：1994 年位。

17. ウマル　アルアシュカル著『アルヒクマトゥ　ミン　ハルキィ　アッシャイターン（「悪魔が創造された目的：訳者注」）』アルバシール出版、1998 年。

<u>第 6 章</u>

1. アリー　アッサーリヒー著『アラッダウ　ウルムニール　アラー　アッタフスィール（「解釈に明るい光を！」：訳者注）』ムアッサッサトゥ　アンヌール出版、リヤド、1991 年。

2. アブドゥルラハマーン　イブン・ラジャブ著『ジャーミャー　アルウルーム　ワ　アルヒカム（「知識と知恵の蒐集」：訳者注）』ムアッサッサトゥ　アルリサーラ出版、ベイルート、p.1991。

3. アッラーギブ　アルアスファハーニー著『ムアジャム　ムフラダートゥ　アルファーズ　アルクルアーン（「クルアーンの言葉事典」：訳者注）』ダール　アルフィクル出版、ベイルート。

4. アブドゥッラハマーン　アルドーサリー著『サフワトゥ　アルアサール　ワ　アルマファーヒーム　ミン　タフスィール　アルクルアーン　アルア

ズィーム（「クルアーンの解釈における概念の粋」：訳者注）』ダールアルアルカム出版、クウェート、1981 年。

5. ムハンマド　イブン・ジャリール　アッタバリー著『ジャーミウ　アルバヤーン　アン　タアウィール　アルクルアーン（「クルアーンの明確な解釈の蒐集」：訳者注）』ダール　アルフィクル出版、ベイルート、レバノン、1988 年。

6. イスマイール　イブン・カスィール著『タフスィール　アルクルアーン　アルアズィーム（「聖クルアーンの解釈」：訳者注）』ダール　アルアルカム出版、クウェート、1985 年。

7. アブー・ハサン　アンナダウィー著『アルカーン　アルイスラーム　アルアルバア（「イスラームの行の４本の柱：訳者注」）』イスラミック　アカデミー　オブ　リサーチ出版、ラクノウ、インド、1976 年。

8. アルバーニー著『サヒーフ　アッタルギーブ　ワッタルヒーブ（「奨励と懲罰―飴と鞭の喩え」：訳者注）』アルマクタブ　アルイスラーミー出版、ベイルート、レバノン、1982 年。

9. ムハンマド　アッシャービー著『アルフルーク　アッルガウィーヤ　ワアサラルハー　フィー　タフスィール　アルクルアーン　アルカリーム（「聖クルアーンにおける言葉の違いとその影響」：訳者注）』アルオバイカーン出版、1993 年。

10. アブドゥルハミード　シッディーキー著『サヒーヒ　ムスリムの翻訳』ダール　アルアラビーヤ出版、ベイルート、レバノン。

11. アルバーニー著『サヒーフ　アッタルギィーブ　ワッタルヒーブ（「奨励と懲罰―飴と鞭」：訳者注）』Vol.1、アルマクタブ　アルイスラーミー出版、ベイルート、レバノン、1982 年、p.150。

12. E.W　レーン著『アラビア語英語辞典』ケンブリッジ、イギリス 1984 年。

13. イブン・ウサイミーン著『アッシャルフ　アルムムティウ（「喜ばれる説明」：訳者注）』ムアッサッサトゥ　イサーム出版、リヤド、サウジアラビア、1996 年、
（アラビア語の原本は、ダール　アットラース　アルアラビー出版、カイロ、エジプト、H.1360（1941 年位）。

<u>第 7 章</u>

1. 『シャルフ　アルアルバイーン　アンナワウィーヤ（「核になるハディースの４０の説明」：訳者注）』

ムハンマド　ザハビー著『スィヤル　アアラーム　アンヌバラー（「有名な高貴な人の伝記」：訳者注）』ムアッサッサトゥ出版、ベイルート、レバノン、1990 年。

2. イブン・ラジャブ著『アルジャーミャー』

3. ムスタファ　アルアダウィー著『フィクフ　アッタアームル　マア　アルワーリダイン（「両親に接する方法」：訳者注）』ダール　バランスィア出版、リヤド、サウジアラビア、2002 年。

4. イブン・アルカイイム著『アハカーム　アハル　アッズィンマ（「啓典を受けた人の決まり：訳者注）」』

5. ジャマール　ザラボーゾ著 『家族法、結婚と離婚』アメリカ・オープン大学、1997 年

6. アブドゥッラハマーン　アブドゥルハーリク著『アッザワージュ　フィーアルイスラーム（「イスラームにおける結婚」：訳者注）』アルダールアルサラフィーヤ、1988、

7. アブドゥッラー　イブン・アルグマーリー著『ラフウッシュ　アッシャック　ワ　アルイルティヤーブ　アン　タハリーミィ　ニサー　アハル　アルキターブ（「啓典の女性との結婚の疑いを解くこと」：訳者注）』タンジャ、モロッコ、1989 年。

8. アリー　ハサン　アブドゥルハミード著『フクーク　アルジャール　フィー　サヒーヒ　アルスンナティ　ワル　アサール（「スンナにおける隣人の権利について」：訳者注）』アルマクタバ　アルイスラミーヤ、アンマン、ヨルダン、1933 年。

9. アブー・バクル　アルジャザーイリ著『ミンハージュ　アルムスリム（「ムスリムの道」：訳者注』）』ダール　アルフィクル、ベイルート、レバノン、1990 年。

10 ムハンマド　イブン・ウサイミーン著『シャルフ　アッリヤード　アッサーリヒーン（「敬虔な人のための 説明書」：訳者注）』ダール　アルワタン、リヤド、サウジアラビア、1995 年。

11. アリー　アブー・ラウズ著　前掲書『アルアジュウィバ（「疑問とその解答」：訳者注）』

12. アンドリュー　バセビッチ『新しいアメリカの軍国主義』オックスフォード大学、イギリス 2005 年。

13. ヤフヤー　アンナワウィー著　前掲書『ミンハージュ　シャルフ　サヒーフ　ムスリム（「灯台の 光のように導くもの」：訳者注）』ダール　アルマーリファ、ベイルート、レバノン 1999 年。

14. ライナー著『イスラーム法における契約理論』ロンドン、グラハム、1991 年。p.289

15. ムバーラク　イブン・アスィール著『ジャーミャー　アルウスール　フィー　アハディース　アッラスール　（「使徒のハディースのオリジナルの蒐集」：訳者注）』マクタブティ　アルヒルワーニー1971 年。

16. ナイラ　コマイル　オベイド著『中東のビジネス契約における法律』1996 年。p.58

第８章

1. マクリージィー著『タウヒード　アルムフィード（「唯一アッラーを信じることの抽象化」：訳者注）。

2. イブン・タイミーヤ著『リサーラトゥ　アルウブーディーヤ（「アッラーに仕えるメッセージ」：訳者注）』

3. アハマド　イブン・タイミーヤ著『リサーラトゥ　イブンタイミーヤ　フィー　アルウブーディーヤ　（「アッラーに仕えることにおけるイブン・タイミーヤのメッセージ」：訳者注）』

4. アミーン　アハサン　イスラーヒ著『タズキヤトゥ　アンナフス（「自我の浄化」：訳者注）』アーダム出版、デリー、インド 2000 年。

5. ホラーム　ムラード著『フィー　サーアートゥ　アッサバーハ（「精神浄化についての早朝の熟考」：訳者注）』イギリス、2000 年、

6. アルバーニー著　前掲書『サヒーフ　スナン　アッティルミズィー（「ティルミズィーの集めた正しいスンナ」：訳者注）』マクタブ　アルタルビーヤ　アルアラビー出版、リヤド、サウジアラビア、1998 年。

7. ファハル　アッラーズィー著『アッタフスィール　アルカビール（「詳しい解釈」：訳者注）』ダール　ヤフヤー　イヒヤー　アットラース　アルアラビー出版、ベイルート、レバノン。

8. ジャラール　アッディーン　アッスユーティー著『アッドゥッル　フィータフスィール　アルマスウール（「格言や民間伝承の解釈の真髄」：訳者注）』

ダール　アルクトブ　アルイルミーヤ出版、ベイルート、レバノン、1990 年。

9. アハマド　ファリード著『アッタズキヤ　バイナ　アハル　アルスンナワ　アッスーフィーヤ（「精神浄化　スンナの人々とスーフィズムの人々との間（はざま）で」：訳者注）』。

10. アハマド　イブン・ハジャル著『ファトフ　アルバーリ　ビ　シャルヒサヒーヒ　アルブハーリー（「サヒーフ　アルブハーリーの解釈による主の開示」：訳者注）』
マクタバ　アッティジャーリーヤ出版、メッカ、サウジアラビア、1993 年。

11. イブラヒーム　アルヒラール著『ムカッダマトゥ　イラー　ムハンマドイブン・アリー　アッシャウカーニー（意 訳「ムハンマド　ビンアリーアッシャウカーニーへのイントロダクション」：訳者注）』ダール　イヒヤー　アットラース　アルアラビー出版、ベイルート、レバノン。

12. ムハンマド　イブン・アルカイイム著『タリーク　アルヒジュラタイン（「２つのヒジュラの 道」： 訳者注）』

13. イブン・タイミーヤ著『リサーラ　フィー　アッタウバ（「懺悔についてのメッセージ」：訳者注）』

（※本書の参考文献に出版社や出版年がない場合があり、調べて判明したものはアラビア語参考文献リストに載せている。）

❖参考文献-ローマ字表記リスト❖

1. Abdul Hameed, Ali Hasan. *Huqooq al-Jaar fi Saheeh al-Sunnah wa al-Athaar*. Amman, Jordan: al-Maktaba al-Islaamiya. 1993.
2. Abdul Khaaliq, Abdul Rahmaan. *Al-Zawaaj fi Dhill al-Islaam*. Kuwait: al-Daar al-Salafiyyah. 1988.
3. -----*The General Prescripts of Belief in the Quran and Sunnah*. The Majliss of al-Haqq Publication Society. 1986.
4. Abu Lauz, Ali, compiler. *Answers to Common Questions from New Muslims*. Ann Arbor, MI: IANA. 1995.
5. Al-Adawi, Mustafa ibn. *Fiqh al-Taamul ma al-Waalidain*. Riyadh: Daar Balansiyah. 2002.
6. Al-Adheemabaadi, Muhammad Shams al-Haqq. *Aun al-Mabood Sharh Sunan Abi Dawood*. Beirut: Dar al-Kutub al-Ilmiyyah. 1995.
7. Ahmad, Salaah. *Dawah Shaikh al-Islaam ibn Taimiya wa Atharuhaa ala al-Harakaat al-Islaamiyah al-Muasirah*. Kuwait: Dar ibn al-Atheer. 1996.
8. Al-Aini, Badr al-Deen. *Umdah al-Qaari*. Beirut: Daar Ihyaa al-Turaath. N.d.
9. Al-Alayuwi, Saalih. *Mabaahith fi al-Niyyah*. No publication information given.
10. Al-Albani, Muhammad Nasir al-Din. *Irwa al-Ghaleel fi Takhreej Ahadith Manar al-Sabeel*. Beirut: al-Maktab al-Islami. 1979.
11. -----*Saheeh al-Jaami al-Sagheer*. Beirut: al-Maktab al-Islaami. 1986.
12. -----*Saheeh Sunan al-Tirmidhi*. Riyadh: Maktab al-Tarbiyah al-Arabi li-Duwal al-Khaleej. 1988.
13. -----*Silsilat al-Ahaadeeth al-Saheehah*. Riyadh: Maktabah al-Maarif.

14. Al-Ansari, Muhammad Abdul Haq, trans. *Commentary on the Creed of at-Tahawi by ibn Abi al-Izz.* Riyadh: Ministry of Higher Education. 2000.
15. Al-Arnaut, Shuaib. Introduction to Zain al-Din al-Maqdisi. *Aqaweel al-Thiqaat fi Taweel al-Asma wa al-Sifaat wa al-Ayaat al-Muhkamaat wa al-Mushtabihaat.* Beirut: Muassassat al-Risalah. 1985.
16. Al-Ashqar, Umar. "The Wisdom behind the Creation of Satan." *al-Basheer.* Vol. 2, No. 3, Sept.-Oct. 1988.
17. Baadi, Jamaal. *Al-Athaar al-Waarada an Aimmat al-Sunnah fi Abwaab al-Itiqaad.* Riyadh: Dar al-Want. 1416 A.H.
18. Al-Baaz, Abbaas. *Ahkaam al-Maal al-Haraam.* Amman, Jordan: Daar al-Nafaa`is. 1999.
19. Al-Baihaqi, Abu Bakr. *al-Itiqaad ala Madhhab al-Salaf Ahl al-Sunnah wa al-Jamaah* Beirut: Dar al-Kutub al-Arabi. 1984.
20. Al-Barbahaaree, Abu Muhammad al-Hasan. *Explanation of the Creed.* Birmingham, UK: Al-Haneef Publications. 1995.
21. Comair-Obeid, Nayla. *The Law of Business Contracts in the Arab Middle East.* London: Kluwer Law International. 1996.
22. *Commentary on the Creed of at-Tahawi by ibn Abi al-Izz.* Muhammad Abdul-Haqq Ansari, trans. Riyadh: Ministry of Higher Education. 2000.
23. Curtis, Roy Young Muhammad. "Authentic Interpretation of Classical Islamic Texts: An Analysis of the Introduction of Ibn Kathir's '*Tafseer* al-Quran al-Azim.'" Ph.D. Dissertation. University of Michigan. 1989.
24. Al-Dausiri, Abdul Rahman. *Safwat al-Athaar wa al-Mafaheem min Tafseer al-Quran al-Adheem.* Kuwait: Dar al-Arqam. 1981.
25. Al-Dhahabi, Muhammad Hussein. *al-Tafseer wa al-Mufasirun.* Dar al-Kutub al-Haditha. 1976.
26. Al-Dhahabi, Muhammad. *Siyar Alaam al-Nubala.* Beirut: Muassasah al-Risaalah. 1990.

27. Al-Draz, Muhammad Abdullah. *The Quran: An Eternal Challenge.* Leicester, United Kingdom: The Islamic Foundation. 2001.
28. Al-Dubyaan, Dubyaan. *Ahkaam al-Tahaarah: al-Ghusl* Riyadh: Maktabah al-Rushd. 2004.
29. Fareed, Ahmad. *Al-Tazkiyah baina Ahl al-Sunnah wa al-Soofiyah.* No publication information given.
30. Al-Ghumaari, Abdullah. *Rafu al-Shakk wa al-Irtiyaab an Tahreem Nisaa Ahl al-Kitaab*. Tanjah, Morocco: 1989.
31. Hakimi, Haafidh ibn Ahmad. *Maarij al-Qubool bi-Sharh Sullim al-Wusool ila Ilm al-Usool fi al-Tauheed.* Beirut: Dar al-Kutub al-Ilmiyah. 1983.
32. Al-Hammad, Muhammad. *Tauheed al-Uloohiyah.* Dar ibn Khuzaima. 1414 A.H.
33. Hilaal, Ibraaheem. Introduction to Muhammad ibn Ali al-Shaukaani. *Qatr al-Wali ala Hadeeth al-Wali.* Beirut: Daar Ihyaa al-Turaath al-Arabi. n.d.
34. Al-Hilali, Muhammad al-Hilali and Muhammad Muhsin Khan, trans. *The Noble Quran: English Translation of the Meanings and Commentary.* Madinah, Saudi Arabia: King Fahd Complex for the Printing of the Holy Quran. n.d.
35. ibn al-Atheer, Mubaarak. *Jaami al-Usool fi Ahaadeeth al-Rasool.* Maktaba al-Hilwaani. 1971.
36. ibn al-Qayyim, Muhammad ibn Abu Bakr. *Ahkaam Ahl al-Dhimmah.* Damam, Saudi Arabia: Zamaadi li-l-Nashr. 1997.
37. -----*al-Waabil al-Sayyib min al-Kalim al-Tayyib.* Beirut: Daar al-Bihaar. 1986.
38. -----*Madaarij al-Saalikeen bain Manaazil Iyyaaka Nabudu wa Iyyaaka Nastaeen.* Beirut: Daar al-Kitaab al-Arabi. n.d.
39. -----*Miftaah Daar al-Saadah.* Beirut: Daar al-Fikr. n.d.
40. -----*Shifa al-Aleel fi Masa`il al-Qadha wa al-Qadar wa al-Hikma wa al-Taleel.* Beirut: Dar al-Marifah. n.d.

41. ibn Hajar, Ahmad. *Fath al-Baari bi-Sharh Saheeh al-Bukhaari*. Beirut: Daar al-Marifah.
42. -----*Fath al-Baari bi-Sharh Saheeh al-Bukhaari*. Makkah: al-Maktaba al-Tijaariyyah. 1993.
43. Ibn Jibreen, Abdullah. *al-Shahadataan.* No city or publisher given. 1990.
44. Ibn Katheer, Ismaaeel. *Al-Bidaayah wa al-Nihaayah.* Beirut: Dar al-Kutub al-Ilmiyya. n.d.
45. -----*Tafseer al-Quran al-Adheem.* Kuwait: Dar al-Arqam. 1985.
46. -----*Tafsir ibn Kathir (Abridged).* Riyadh: Darussalam. 2000.
47. Ibn Qudaamah, Abdullah. *al-Mughni*. Beirut: Daar al-Fikr. 1405 A.H.
48. ibn Rajab, Abdul Rahman. *Jaami al-Uloom wa al-Hikm*. Beirut: Muassasat al-Risaalah. 1991.
49. ibn Taimiyyah, Ahmad. *Ibn Taymiyyah's Essay on Servitude.* Birmingham, United Kingdom: al-Hidaayah Publishing and Distribution. 1999.
50. -----*Majmoo Fatawaa Shaikh al-Islaam ibn Taimiyyah.* Collected by Abdul Rahmaan Qaasim and his son Muhammad. No publication information given.
51. ibn Uthaimeen, Muhammad. *Majmooat Fataawa wa Rasaail Fadheelat al-Shaikh Muhammad ibn Saalih al-Uthaimeen.* Riyadh: Dar al-Want. 1413 A.H.
52. -----*Sharh al-Aqeedah al-Waasitiyah.* al-Damaam, Saudi Arabia: Dar ibn al-Jauzi. 1415 A.H.
53. -----*Sharh Hadith Jibreel Alaihi al-Salaam.* Dar al-Thuraya. 1415 A.H.
54. -----*Sharh Riyaadh al-Saaliheen.* Riyadh: Daar al-Want. 1995.
55. -----*Sharh Usool al-Imaan.* Fairfax, VA: Institute of Islamic and Arabic Sciences in America. 1410 A.H.
56. Idris, Jaafar Sheikh. *The Pillars of Faith.* Riyadh: Presidency of Islamic Research, Ifta and Propagation. 1984.

57. Al-Isfahaani, Al-Raaghib. *Mu'jam Mufradaat Alfaadh al-Quran.* Beirut: Dar al-Fikr. n.d.
58. Islahi, Amin Ahsan. *Self-Purification and Development.* Delhi: Adam Publishers and Distributors. 2000.
59. Al-Jarullah, Abdullah. *Bahjah al-Naadhireen fima Yuslih al-Dunya wa al-Deen.* 1984.
60. Al-Jazaairi, Abu Bakr. *Minhaaj al-Muslim.* Beirut: Daar al-Fikr. 1992.
61. Al-Karzoon, Anas. *Manhaj al-Islaam fi Tazkiyah al-Nafs.* Jeddah: Daar Noor al-Maktabaat. 1997.
62. Khan, Muhammad Muhsin, trans. *Sahih al-Bukhari.* Riyadh, Saudi Arabia: Darussalam Publishers and Distributors. 1997.
63. Al-Kurdi, Fauz bint Abdul Lateef. *Tahqeeq al-Uboodiyyah bi-Marifah al-Asmaa wa al-Sifaat.* Riyadh: Daar Taibah. 1421 A.H.
64. Lane, E. W. *Arabic-English Lexicon.* Cambridge, England: The Islamic Texts Society. 1984.
65. Maudoodi, Abul Ala. *The Meaning of the Quran.* Lahore, Pakistan: Islamic Publications. 1982.
66. Al-Mubaarakfoori, Muhammad. *Tuhfah al-Ahwadhi.* Beirut: Daar al-Kutub al-Ilmiyyah. n.d.
67. Murad, Khurram. *In the Early Hours: Reflections on Spiritual and Self Development.* Markfield, United Kingdom: Revival Publications. 2000.
68. Al-Muslih, Abdullah and Salaah al-Saawi. *Ma La Yasa'u al-Muslim Jahla.* Islamic Foundation of America. 1995.
69. Nadwi, Abul Hasan Ali. *The Four Pillars of Islam.* Lucknow, India: Academy of Islamic Research and Publications. 1976.
70. al-Nawawi, Yahya. *Al-Majmoo Sharh al-Muhadhib.* Beirut: Daar al-Fikr. 1997.
71. -----*al-Minhaaj Sharh Saheeh Muslim ibn a-Hajjaaj.* Beirut: Daar al-Marifah. 1999.

72. Njozi, Hamza Mustafa. *The Sources of the Quran: A Critical Review of the Authorship Theories.* Riyadh, Saudi Arabia: World Assembly of Muslim Youth. 1991.
73. Nomani, Mohammad Manzoor. *Meaning and Message of the Traditions.* Lucknow, India: Academy of Islamic Research and Publications. 1975.
74. Philips, Bilal. *The Fundamentals of Tawheed.* Riyadh: Tawheed Publications. 1990.
75. -----*Tafseer of Soorah al-Hujuraat.* Riyadh: International Islamic Publishing House. 1988.
76. Al-Qaisi, Marwaan. *Maalim al-Tauheed.* Beirut: al-Maktab al-Islami. 1990.
77. Al-Qurtubi, Abu Abdullah Muhammad. *Tafseer al-Qurtubi.* Beirut: Daar Ihyaa al-Turaath al-Arabi. n.d.
78. Qutb, Muhammad. *Diraasaat Quraaniyyah.* Beirut: Dar al-Shurooq. 1982.
79. Qutb, Sayyid. *The Islamic Concept and Its Characteristics.* American Trust Publications. 1991.
80. Rayner, S. E. *The Theory of Contracts in Islamic Law.* London: Graham & Trotman. 1991.
81. Al-Saadi, Abdul Rahman. *Al-Fatawa al-Saadiyah.* Riyadh: Manshooraat al-Muassasat al-Saeediyah. n.d.
82. Al-Saalihi, Ali. *Al-Dhau al-Muneer ala al-Tafseer.* Riyadh: Muassasat al-Noor. n.d.
83. Saheeh International. *The Quran: Arabic Text with Corresponding English Meaning.* London: AbulQasim Publishing House. 1997.
84. Salaam, Ahmad. *Muqaddimah fi Fiqh Usool al-Dawah.* Beirut: Dar ibn Hazm. 1990.
85. Al-Shaayi, Muhammad. *Al-Furooq al-Laughawiyyah wa Atharahaa fi Tafseer al-Quran al-Kareem.* Riyadh: Maktabah al-Ubaikaan. 1993.

86. Siddiqi, Abdul Hameed, trans. *Sahih Muslim.* Beirut: Dar al-Arabia. n.d.
87. Siddiqi, Abdul Hamid, trans. *Sahih Muslim.* Lahore, Pakistan: Sh. Muhammad Ashraf Publishers & Booksellers. n.d.
88. Al-Tabari, Muhammad ibn Jareer. *Jami al-Bayaan an Taweel Ayi al-Quran.* Beirut: Dar al-Fikr. 1988.
89. *The Bible Library* [Software]. Oklahoma City, OK: Ellis Enterprises. 2001.
90. Zarabozo, Jamaal al-Din. *The Authority and Importance of the Sunnah*. Al-Basheer Company for Publications and Translations. Denver. 2000.
91. -----*Commentary on the Forty Hadith of al-Nawawi*. Al-Basheer Company for Publications and Translations. Denver. 1999.
92. -----*"He Came to Teach You Your Religion."* Al-Basheer Company for Publications and Translations. Denver. 1997.
93. -----*Purification of the Soul: Concept, Process and Means.* Denver, CO: Al-Basheer Publications and Translations. 2002.